

青山学院大学

# ジェンダー研究センター年報

第 3 号

2024年3月

## Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies at Aoyama Gakuin University

青山学院大学附置スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター

青山学院大学  
ジェンダー研究センター年報  
第3号 (2023)



## 目 次

ジェンダー研究センター 2023年度活動記録 .....	2
ジェンダー研究センターギャラリー 2023年度展示記録 .....	4
ジェンダー研究センター 2023年度研究プロジェクト .....	5
<b>ジェンダー研究センター指定型研究プロジェクト</b>	
<b>「青山学院における女子教育の検証 -オーラルヒストリー・プロジェクト-」</b>	
<b>(2021/4/1 - 2023/3/31)</b>	
プロジェクト概要.....	小林 瑞乃 8
青山学院女子短期大学同窓会北海道支部および中国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1952 (昭和27) 年から1964 (昭和39) 年卒まで .....	輪島 達郎 14
青山学院女子短期大学同窓会東北支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1952 (昭和27) 年から1964 (昭和39) 年卒まで .....	菅野 幸恵 34
青山学院女子短期大学同窓会東海支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1952 (昭和27) 年から1965 (昭和40) 年卒まで .....	趙 慶姫 56
青山学院女子短期大学同窓会関西支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1953 (昭和28) 年から1965 (昭和40) 年卒まで .....	西山 利佳 76
青山学院女子短期大学同窓会四国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1956 (昭和31) 年から1965 (昭和40) 年卒まで .....	河見 誠 88
青山学院女子短期大学同窓会九州支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1955 (昭和30) 年から1964 (昭和39) 年卒まで .....	後藤 千織 106
青山学院高等部出身短大卒業生 聞き取り調査のまとめ -1959 (昭和34) 年から1964 (昭和39) 年卒まで .....	山田 美穂子 128
総 論 第1期聞き取り調査 (1952-1965年卒) を終えて.....	小林 瑞乃 146

## ジェンダー研究センター 2023年度活動記録

<2023年>

- 4月1日 入学式にて性的同意ハンドブック「探検しよう！私とあなたの気持ちを守るには」を全新生に配布
- 4月8日 青山学院大学総合文化政策学会・2023年度第1回研究会「ポスト・マクルーハンのメディアとフェミニズム～カナダの文化研究を知る～」(共催)
- 4月13日～(月2回・定期開催)  
「コミュニティスペース」開始
- 4月22日・4月23日  
東京レインボープライド2023にて渋谷男女平等・ダイバーシティセンター<アイリス>・聖心女子大学グローバル共生研究所・津田塾大学との協働でブース出展
- 4月22日・5月13日・6月3日・6月17日・7月1日・7月8日  
エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現 [造形表現・織ワークショップ] (前期)
- 5月27日・7月22日  
エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現 [造形表現・版画ワークショップ] (前期)
- 6月3日 渋谷男女平等・ダイバーシティセンター<アイリス>出張開催 読書会「にじいろ読書カフェ」
- 6月19日～9月14日  
ジェンダー研究センター 公式ロゴマークコンペティション開催
- 6月24日 インプロワークショップ『ザ・ベクデルテスト』
- 6月28日 イベント「今こそ知ってほしい！トランスジェンダー当事者が解説するLGBTと社会で起きていること」
- 6月28日・7月8日  
ジェンダー×写真ワークショップ「思いを写す」
- 7月15日 講演会「ブーテ・ド・モンヴェル作『ジャンヌ・ダルク』に魅せられて」
- 9月～2024年1月  
青山スタンダード科目「いのち・女性・社会」企画及び実施
- 9月16日・9月30日・10月14日・11月11日・11月25日・12月9日  
エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現 [造形表現・織ワークショップ] (後期)
- 10月7日 エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現 [造形表現・版画ワークショップ] (後期)

---

10月14日～12月16日（土曜日全8回開催）

エンパワーメントプログラム「女性のためのマナーリテラシー講座 ～3級FP技能士を目指そう～」

10月20日 講演会「青学を起点とし『平和な未来づくり』を目指すNPOと会社経営をする一卒業生の話」

11月11日・11月18日・11月25日・12月2日・12月9日

青山学院大学青山キャンパス公開講座「ジェンダーと学問研究 II」開講

11月15日・11月29日

「性的同意ワークショップーより安全で充実したキャンパスライフのためにー」

12月2日 W I E（Women in Engineering）2023シンポジウム（共催）

12月8日 講演会「多様な時代のなかで自分らしさに気づく ～セクシュアリティやジェンダーの視点から～」（共催）

12月9日 エンパワーメントプログラム ジェンダーと表現 [言語表現・物語小説創作ワークショップ]

12月20日 公式ロゴマークコンペティション授賞式及び公式ロゴマーク公開

<2024年>

1月19日 学生企画「もやもやカフェ@相模原キャンパス」

1月22日 プチ学会：日本ジェンダー史 JAPAN GENDER HISTORY MINI-CONFERENCE（共催）

1月23日 第10回宗教センター・学生相談センター合同懇談会「学生支援を考えるー『性的同意』の観点から」（企画協力）

3月10日 大学教職員LGBTQネットワーク交流会 in 東京（協力）

3月 リーフレット「トランスジェンダー当事者学生への配慮のお願い」（日本語版・英語版）を作成、2024年度の全授業担当者に配布（予定）

ジェンダー研究センター年報 第3号 発行（予定）

## ジェンダー研究センターギャラリー 2023年度展示記録

4月1日～4月15日	ジェンダー関連科目紹介展
4月17日～5月20日	ジェンダー研究センター活動報告展
5月22日～6月17日	ジェンダーと表現 織・版画ワークショップ作品展
6月21日～7月5日	おーる あおやま あーと てん '23 *
7月10日～7月28日	図書館所蔵貴重図書「オーク・コレクション」展 -モーリス・ブーテ・ド・モンヴェルと同時代の作家たち-
9月15日～9月28日	ジェンダー関連科目紹介展
10月2日～10月21日	女性の日記展 戦時を生き抜いた女性たち
10月23日～11月11日	忘却への抵抗：イタリアにおけるアクティビスト・アーカイブズ
11月14日～12月1日	青山学院創立記念所蔵作品展 -大学新図書館に設置される作品の紹介-
12月5日～12月13日	Art クリスマス AOYAMA in Gallery *
12月15日～2024年1月26日	ジェンダーを知るためのブックレビュー展

(\*は、ジェンダー研究センターの企画以外による)

---

## ジェンダー研究センター 2023年度研究プロジェクト

### ■指定型研究プロジェクト

「青山学院大学におけるジェンダー教育カリキュラムの構築」

リーダー：菅野 美佐子

期 間：2022/4/1-2024/3/31

研究目的：青山学院大学のジェンダーに関わる教育カリキュラムおよび授業方法を確立し、学生のジェンダーに対する理解の向上を目指す。

プロジェクトメンバー：

菅野 美佐子	地球社会共生学部 助教
梅垣 千尋	コミュニティ人間科学部 教授
クープ・ステファニー	法学部 准教授
福嶋 裕子	理工学部 教授
森本 麻衣子	法学部 准教授
西山 千恵子	兼任講師

### ■指定型研究プロジェクト

「青山学院における女子教育の検証 ―オーラルヒストリー・プロジェクトII―」

リーダー：小林 瑞乃

期 間：2023/4/1-2025/3/31

研究目的：青山学院女子短期大学の来歴とそこに学んだ学生達の学びの総体について個人々の経験や思い出の中に探求し、学院における女子教育の歴史的意義を未来に向けた資産として継承・発展していくことを目指す。

プロジェクトメンバー：

小林 瑞乃	コミュニティ人間科学部 准教授
河見 誠	コミュニティ人間科学部 教授
後藤 千織	コミュニティ人間科学部 准教授
菅野 幸恵	コミュニティ人間科学部 教授
趙 慶姫	コミュニティ人間科学部 教授
西山 利佳	コミュニティ人間科学部 准教授
山田 美穂子	コミュニティ人間科学部 教授
吉岡 康子	コミュニティ人間科学部 准教授
輪島 達郎	コミュニティ人間科学部 准教授



■公募型研究プロジェクト

「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合的研究」

リーダー：福嶋 裕子

期 間：2023/4/1-2025/3/31

研究目的：贖罪信仰によってではなく、互いの関係性において神の愛を受け取るという経験によって引き起こされたさまざまな社会変革の軌跡を分析し、いのちと人間性を肯定するフェミニスト神学への理解を深めることを目指す。

プロジェクトメンバー：

福嶋 裕子 理工学部 教授

大森 秀子 教育人間科学部 教授

後藤 千織 コミュニティ人間科学部 准教授

堀 真理子 経済学部 教授

ジェンダー研究センター指定型研究プロジェクト  
青山学院における女子教育の検証  
ーオーラルヒストリー・プロジェクトー

(2021/4/1 - 2023/3/31)

プロジェクトメンバー

小林 瑞乃	コミュニティ人間科学部 准教授
河見 誠	コミュニティ人間科学部 教授
後藤 千織	コミュニティ人間科学部 准教授
菅野 幸恵	コミュニティ人間科学部 教授
趙 慶姫	コミュニティ人間科学部 教授
西山 利佳	コミュニティ人間科学部 准教授
山田美穂子	コミュニティ人間科学部 教授
吉岡 康子	コミュニティ人間科学部 准教授
輪島 達郎	コミュニティ人間科学部 准教授

# 青山学院における女子教育の検証

## －オーラルヒストリー・プロジェクト－

### プロジェクト概要

小林 瑞乃

#### はじめに

本研究プロジェクトは青山学院女子短期大学の来歴とそこに学んだ学生達の学びの総体について個々人の経験や思い出の中に探求し、学院における女子教育の歴史的意義を未来に向けた資産として継承・発展していくことを目指すものである。

研究方法としては、短大創成期の卒業生（女子専門学校の卒業生も含む）から段階的にインタビューを行い、個別の体験とともに各年代の特徴、学科や課外活動、および卒業後の進路などあらゆる角度から多面的に分析・検証することを試みる<sup>1</sup>。

また、卒業生の年代の幅広さに鑑み、本研究プロジェクトは3期（6年間）にわたり、継続することを視野に入れて構想された。本研究プロジェクトは第1期として2年間で完結したが、1950年入学の短大1期生をはじめ、1950～60年代前半に全国から女子短期大学に入学した卒業生を中心に、一部、高等部から短大に進学した同窓生についても合わせて調査を行った。第2期はそれに引き続き、1960年代後半～70年代前半の卒業生を中心に現在も調査を行っている。本稿は、この第1期の研究成果としてまとめられたものである<sup>2</sup>。

#### 1. 本研究の学術的意義

本研究は本学スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターの立ち上げと同時に進められたプロジェクトであり、青山学院女子短期大学の全国7か所の同窓会支部<sup>3</sup>の全面的な協力のもとに開校以来のあらゆる世代の卒業生を対象に対面での聞き取り調査を行うものである。日本の大学・短期大学においてはそれぞれオーラルヒストリー研究がなされているが、このように組織的・計画的に時間をかけて行われる卒業生聞き取り調査は、ほとんど他に類をみないものである<sup>4</sup>。

戦後直後の教育改革によって開設された青山学院女子短期大学は、社会の変化に対応しつつ日本の女子高等教育をリードし、その教育的貢献については広く認知されている。こうした社会的背景を踏まえ、卒業生の生の声を聞き取り、その社会・教育・文化的な資産

を明示し継承・発展させる事はジェンダー平等を自明とする今後の大学教育にとって少なからぬ貢献をすることになるだろう。

以上のように、「覚醒した自立的な心」「愛と奉仕に生きる人物」<sup>5</sup>の育成を教育の柱としてきた「青短」のジェンダー視点によるリベラルアーツ教育の実践と、学生（卒業生）にとっての学びの総体を多面的に検証する本研究プロジェクトの学術的意義は、日本の女子教育および本学院の果たした社会的役割を実証するという意味でも重要なものである。

## 2. 研究目的

本研究プロジェクトの目的は、青山学院における女子教育の歩みを検証し、日本社会に果たした歴史的意義を明示し、歴史的教育資産を可視化して、今後の全学的教育の発展に寄与することを目指すものである。進学の社会的背景、教育内容の検証、学生生活、卒業後の進路などについてこれまでの研究成果や時代状況を踏まえた分析を行って、学生にとっての「青短」、学びの場としての「青短」の意義を検証していく。

本研究の遂行にあたっては、「女子教育」の成果と今後の展望、卒業生のライフヒストリーの具体的事例とライフキャリアの実態把握、学生の特質、日本社会への影響や社会的貢献などを中心的課題として、ジェンダー平等への将来像の構築に努めるものである。

## 3. 研究方法と経過

本研究プロジェクトは、人選を依頼した短大同窓会7支部の全面的な協力のもとに個別インタビュー（他の同窓生等が同席の場合も含む）を行ってきたが、具体的には以下のような経過をたどった。

まず、2021年度はプロジェクトメンバーで分担して同窓会7支部の同窓生が相集う各支部総会の前後や夏季休暇等の期間に実施する計画を立てた。しかし、全国的なコロナ感染者の激増によって当初の予定を変更し、延期することとなった。その後収束をみた後に、コロナ禍での不安や負担のないよう配慮しつつ、それぞれの地域の実状や聞き取り調査の対象者本人の意思や希望等を確認して、調査が可能となった地域の対象者から随時聞き取り調査を開始した（2021年10月～2022年3月までに13回実施）。当然のことながら、インタビューに際してはコロナ感染予防対策を万全にして細心の注意をした上で行った。

続く2022年度もコロナ感染の状況を踏まえて柔軟に対応しつつ、調査対象者本人の意思や希望を確認の上、コロナ感染対策を万全に細心の注意をして行い、全体としてほぼ計画した通りに調査を終了することができた（2022年5月～10月まで11回、高等部出身短大卒業生については同年10月に3回実施）。

以上のような経緯を経て、主に1950年代の草創期卒業以降の同窓生へのインタビューを行い、結果として、当初の研究目的に沿って進展することができた（巻末の【本研究プロ

ジェクト調査一覧】参照)。

インタビューにあたっては2人1組を基本とし、インタビューの記録を確実にするため、メインインタビュアーと録音・記録の担当とで役割分担を行った。

聞き取り調査にあたっては事前に質問事項(進学の理由、入学後の変化、授業や礼拝、学校生活、寮、キリスト教教育などに関して記憶に残っていること、卒業後の進路選択、現在の生涯学習やボランティアに関する活動について、自身にとっての「青短」の意義など。詳細は下記【調査項目・内容等】参照)を示し、それについての応答を聞き、必要に応じてさらに質疑を加えて、相互に理解を深めながら進めることができた。

### 【調査項目・内容等】

主な質問項目は、下記の通りである。

- Q 1. なぜ「青短」に進学しましたか？(どのような理由で選択したのか等)
- Q 2. 青短に入学して何かご自分に変化はありましたか(あるとすればどんな所ですか)。何か影響があったとしたら、どんなことですか？
- Q 3. 特に記憶に残っていることについて教えてください(先生、友人、ゼミ、授業、礼拝※、学校生活、学生活動、寮、その他)  
※学生時代のキリスト教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響。
- Q 4. あなたにとって青短はどんな場でしたか？
- Q 5. 卒業後の進路について、どのように決めましたか？  
Q 5の関連で：同窓会は交流に加えて「生涯教育」「ボランティア」を柱にして発足した(同窓会報第1号)。この2点に関して、卒業後になさってきたことがあれば教えてください。
- Q 6. (今振り返って)ご自分の人生にとって「青短」とは？

また、プロジェクトメンバーは常に情報交換を行いながら調査を進め、担当地域のインタビューについて分担して個別に報告書として結果をまとめた。状況が可能になって以降は、聞き取り調査の報告会を行い、調査に関する分析や考察に関する検証などメンバー全員で議論を重ねてきた(2021年度2回、2022年度5回)。研究分野を異にするメンバーによって分析・考察がなされる場所に本研究の強みがある。

以上のように研究は深化し、地域的な差や入学時期による違い、時代状況など、様々な相違や共通点と共に、それぞれの個性的な違いが加わって、想像した以上に多様で貴重な経験・認識の総体としての「青短」論を収集することができた。

アンケート調査等の対象者数とは比較にならない程少ないが、本プロジェクトの採用した話し手と聞き手とが直接相対して聞き取り調査を行う手法は、多くの場合、本人の語り

口や表情、言葉に込めた思いなどが真っ直ぐに伝わってくる。それだけに、活字資料からだけでは認識できなかった様々な知見を得ることができたといえるだろう。その詳細については、この後に続く各支部の成果報告「聞き取り調査のまとめ」を見ていただきたい。

今回の第1期については、調査対象者の居住地を包括する支部ごとに北海道支部・中国支部を輪島達郎、東北支部を菅野幸恵、東海支部を趙慶姫、関西支部を西山利佳、四国支部を河見誠、九州支部を後藤千織、高等部出身短大卒業生を山田美穂子が分担執筆し、全体のまとめとして総論を小林が担当した。

#### 【注】

1. 本研究の開始と経過は、以下の通りである。2021年1月短大同窓会会長・各支部長宛に研究プロジェクトを説明する依頼状（メールと書簡）を送付し同意を得て、支部ごとに支部長・事務担当者等がインタビュー希望者を募集した。その結果、各支部において数名のインタビュー希望者が応募し、今回の調査対象者が決定された。同年3月、質問項目等を説明した依頼状を送付（メールと書簡）し、現在に至るまで各支部長・事務担当者等を通じて連絡を取り合っている（メール・書簡・電話）。

本研究を遂行するにあたっては聞き取り調査の対象となる本人の同意・協力を必要とし、またプライバシーに触れる問題が出てくる可能性もあり、個人情報の取扱いには十分に配慮した。このプロジェクトは本学「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に則り、研究の目的や意義、プライバシー・個人情報の保護、データ等取扱い、情報公開の内容や方法を十分に説明し、本人の希望や意思を確認した上でインタビューを行い、調査結果・研究成果の公表も含め、事前に本人の了解を得て行った（「人を対象とする研究に関する倫理審査」承認番号H21-020）。聞き取り調査に際しては、「同意に関わる研究説明書」とともに「同意書」「同意撤回書」を渡して口頭で説明し、同意を得た場合に「同意書」を取り交わし、「口頭によるインフォームド・コンセント記録表」に同意の内容（同意の日時、説明方法、説明者、同意事項等について記載）の記録を作成した。研究対象者及びその関係者等からの相談などへの対応としては、メールや電話などを含むできる限り早い方法で迅速に行えるようにした。

2. この研究計画構想に従って、第1期・第2期・第3期の聞き取り調査の成果は、聞き取り対象者の卒業年によってまとめることとした。今回は、1950～65年までの卒業生に関する調査報告となっている。また高等部から進学した同窓生については、第1期後半からインタビューを開始したがまだ十分に比較対照が可能となる調査結果には乏しい。そのため第2期以降もさらに調査を進め、進学先としての女子短大への認識や女子教育に対する意識が首都圏（特に東京）と地方によってどのように異なるかを自覚的に比較し、高度経済成長期における社会的背景をふまえて考察する予定である。
3. 8カ所目となる国外の台湾支部については具体的実施方法や時期など別途構想中である。
4. これに関連して、各校では卒業生へのアンケート調査等は多数行われており、青山学院女子



短期大学では過去7回の調査が行われた。また研究報告も多く、例えば菅野幸恵「『卒業生調査』報告—質問紙調査とグループインタビューから—」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第17号、2010年、67-95頁)、同じく菅野による「卒業生調査報告」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第29号、2021年、99-122頁)、宇田美江「青山学院女子短期大学卒業生のキャリア形成と自己啓発～卒業生へのアンケート調査およびインタビュー調査から～」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第29号、2021年、73～98頁)など数々の成果がある。また、オーラルヒストリーの先行研究としては、加納孝代「青山学院女子短期大学の歩み—卒業生の記憶の中にある風景—」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第19巻、2011年12月、67～86頁)、他校については小風秀雅「東京女子高等師範学校卒業生を対象としたオーラルヒストリー」(『お茶の水史学』51号、2008年)などがある。

5. 開学50周年の節目となる2000年を迎えるにあたり条文を見直し修正された、下記の学則第1章総則(目的)第1条参照(青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会編『青山学院女子短期大学 六十五年史—資料編』青山学院女子短期大学、2018年、259頁)。

青山学院女子短期大学は、青山学院にある幼稚園から大学に至る各学校と相たずさえ、キリスト教の精神にしたがって女子の教育に専念する。即ち「地の塩、世の光」として社会に貢献しうる覚醒した自立的な心を養うとともに、高度な教養と実際に役立つ専門の学芸とを授けて、愛と奉仕に生きる人物を育てることを目的とする。

### 【注記】

- ・短大同窓会では卒業年のカウントを年度でなく年で表しており、例えば、「昭和40年卒」は昭和38年4月に入学し40年3月に卒業ということになる。本稿の記述もこれに従っている。
- ・本学の当該期の学科構成については、1950年の開学以降1962年3月までは、文科国文専攻、文科英文専攻、家政科であり、1962年4月にはそれぞれ国文科、英文科、家政科と改組され、児童教育科が新規に開設された。今回の記述にあたっては煩雑さを避けるため、基本的に「国文科」「英文科」「家政科」「児童教育科」と表記することとした。
- ・青山学院女子短期大学の呼称について、インタビューの中では「青山」と呼ばれることが多かったが記述にあたっては青山学院大学や他の短大と区別するために基本的には「青短」の表記とした。
- ・各支部と高等部出身の「卒業生聞き取り調査のまとめ」および「総論」に関しては、調査結果や内容、記述のスタイル等に応じて構成その他全て各執筆担当者に一任した。





## 青山学院女子短期大学同窓会北海道支部および中国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ－1952(昭和27)年から1964(昭和39)年卒まで

輪島 達郎

### 聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	出身地	居住地
A	1952 (昭和27)	家政	東京都・横浜市	札幌市
B	1952 (昭和27)	家政	稚内市	旭川市
C	1953 (昭和28)	英文	旭川市	旭川市
D	1955 (昭和30)	国文	足利市	札幌市
E	1959 (昭和34)	家政	札幌市	札幌市
F	1961 (昭和36)	国文	浜田市	下関市
G	1962 (昭和37)	家政	旭川市	岡山市
H	1964 (昭和39)	児童教育	静内町	札幌市
I	1964 (昭和39)	国文	岡山市	東広島市
J	1964 (昭和39)	英文	大洲市	福山市

### はじめに

本稿の目的は、青山学院女子短期大学（以下「青短」）の1期生1952（昭和27）年卒から1964（昭和39）年卒、すなわち創立から昭和30年代にかけて青短で学生生活を送った北海道地区および中国地区に在住する10名の卒業生への聞き取りに基づき、青短が提供していた教育環境と教育内容が学生たちにどのように受け止められ、この学生たちが卒業後に歩んだ人生において、青短での学生生活がどのような影響をもたらしたかを考察することで、青短が担った「女子教育の伝統」の内実を明らかにすることにある。

その際、創立まもない青短が、その建学の理念—とくにキリスト教信仰に基づく教育理念—や、女子専門部（1946年に女子専門学校に改組、以下「女専」）時代から引き継いだ伝統的な校風が具体的な学生たちを通じてどのように体現されたかという視点だけではなく、一定の歴史的・社会的条件のもとでどのようなニーズをもった学生たちが集められ、青短は彼女らにどのように働きかけ、彼女らはそれにどのように応え、その結果どのような校風が形作られていくことになったかという観点で分析をすすめていきたい。別の言い方をすれば、青短と在学生、さらには親、教師、地域社会も含めた相互行為の中にこそ、

青短の歴史の出発点が形成された経緯を見ていきたいと考えるのである。というのも、青短がどのような教育理念のもと、個々の学科や教員がどのような教育を行ってきたかという点については、すでに『青山学院女子短期大学の歩み』(1975年)、『50年の歩み』(2000年)、および『青山学院女子短期大学六十五年史』(2016~2018年)<sup>1</sup>において十分に総括されていることでもあるし、卒業生たちがそれをどのように受け止め、それにたいしてどのように「感謝」しているかについても、『50年の歩み』と『青山学院女子短期大学六十五年史』に多くの卒業生が文章を寄せている。しかし、卒業生の在学当時および卒業後の生活実態の中から浮かび上がってくる青短の実際の姿は、かならずしも教員が意図した「建前」、あるいは『青山学院女子短期大学の歩み』などのような「正史」とは同じではないだろう。また卒業生の側からしても、短大時代がいかに充実した素晴らしいものであったかというような青春時代の美化にはとどまらない、そして年齢を重ねてようやく気づくことができ、言語化できるような短大生活の実態や意味もあることであろう。このように、卒業生への聞き取りに基づいて、青短が提供した教育環境および教育内容と、当時の在学学生およびその家族や教師など周辺の人々との相互行為を卒業生の証言から収集することによって、創成期に形成され、昭和40年代以降に受け継がれる青短の「女子教育の伝統」を明らかにすることができよう。

また、ここで青短と学生の相互行為と言った場合、それは対象者の学生時代のみにとどまらない。青短を志望するにいたった経緯はもちろん、卒業後のライフキャリア全体が青短との相互行為の観点から分析されることになるからである。

他方、本稿が対象とする卒業生は、北海道地区と中国地区に在住する10名のみである。そこには地域的な偏りもあり、サンプル数としてもきわめて少ない。(このプロジェクトの他の諸報告によってそれはある程度補うことができるかもしれない。)さらに、聞き取り対象となった卒業生たちにみられる階層的な不均衡も問題となりうるであろう。これについては当時における青短生全体の階層的な不均衡を反映している可能性はあるにしても、包括的な調査をふまえていない以上、この少ないサンプルで立証することは困難である。したがって、本稿で示すことのできる「女子教育の伝統」は部分的なものにとどまらざるをえない。

しかしまた、本稿が対象とするのは短大同窓会の北海道支部および中国支部によって推薦された卒業生たちであり、同窓会支部の運営において中心的に活躍してきただけでなく、母校との関わりを喜んで語るという特性を持つ。また、この時代に北海道、中国地方をはじめ地方から青短に入学するさいの本人の積極性やエネルギー、送り出す家族の教育への熱意も考慮する必要がある。

したがって、たとえ少数であっても、短大生活に積極的に関わり、学びを糧として成長することに貪欲な卒業生が対象者として選ばれていると考えるべきであろう。言い換えれば、聞き取り対象となった卒業生やその周囲の人々は、青短との相互行為に人一倍積極的であったのであり、その意味で本稿の対象者は、青短、在学学生、およびその周囲の人々の

相互行為のうちに「女子教育の伝統」を見ようとする本稿の目的に適合的であると考えられる。

以上の目的のため、本稿ではまず1950年から1964年に青短で学生生活を送った卒業生たちが、どのような歴史的・社会的条件のもとで、青短を選択するにいたったかという点から議論を始めていきたい。ここでいう歴史的・社会的条件とは、10人の対象者にとっての条件であり、マクロな歴史状況や東京との地理的關係はもちろん、家族、親戚、出身校の教員、知人なども含まれる。

ついで、10人の学生生活は、青短の教育環境や教育内容にたいしてどのように応答していったかが論じられる。各学科の特性や、教育寮である青山寮やシオン寮の伝統を含めた、青短の校風の形成がここでは中心的な主題となる。

最後に、10人の卒業後の歩みをたどりながら、卒業生が青短での経験にたいして、その後の人生においてどのように応答していったかを考察していく。当然のことながら、卒業後の人生は各人各様であるが、そこに共通に見いだすことのできる青短の影響があるかどうか、さらには青短での学生生活で蒔かれた種の育成にはどのようなバリエーションがあるかを検討したい。

本報告ではまた、教職員や在学生のみならず、卒業生の人生全体が青短の歴史を形作っているとの前提に立つ。卒業後のライフキャリアを青短との相互行為の観点から分析する理由はここにある。青短の女子教育の歴史的遺産を継承することは、この分析を必須のものとしているのである。

## 1. 青短入学の歴史的・社会的条件

本章においては、本稿が対象とする創立時（1950年）の入学者から1964年卒業生までの10名が、どのような歴史的・社会的条件のもとで青短に入学するにいたったかを検討したい。

歴史的・社会的条件というばあい、そこには第二次世界大戦、戦後の混乱、高度成長といったマクロな条件から、家庭や地域の期待、東京との距離、家計状況といった個人的なものまでさまざまある。しかしそれらは相互にリンクしながら、各人の進学動機や就学条件を形作っている。そこで本章では、マクロな歴史区分から始めるのではなく、各個人の進学動機と就学条件を形成した歴史的・社会的条件を個別に見ながら、それらの相関性と歴史的推移を明らかにしていきたい。

### (1) 旧制高等女学校出身者の入学経過

まず、旧制高等女学校（以下「高女」）出身者の青短入学までの特殊事情について見ておきたい。

Aは1952年卒、家政科の1期生である。Aは東京・淀橋で育ち、横浜に転居して、高女

へ入学した。高女では工場での勤労奉仕のため勉学に専念できなかったが、1945年女専に合格。しかし3月29日の横浜大空襲で被災し、北海道に疎開する。戦後、東京の混乱が落ち着きをみせた頃、青山学院から女専別科経由での短大への入学をすすめられ、それに従って上京した。

Aの青短への入学経過からわかることは、1950年の青短創立前から、青山学院が戦中戦後の学制の混乱状況に対応していた状況である。Aの場合、高等女学校卒業後1945年度に女専への入学が内定していたが、東京大空襲によって青山学院が被災し、またA自身も横浜大空襲によって北海道に疎開していたため、青山学院の方から創立予定である短大への入学をすすめられたという。Aのばあい、5年制高女卒業の資格だったため、短大への入学資格である新制高等学校卒の基準を満たすためには1年間女専別科を経由する必要がある。つまり、青山学院は1948年度中には1945年度の女専入学予定者であった札幌のAになんらかの形で連絡していたことになる。このような青山学院の対応は、1945年度女専入学予定者すべてにたいして行われたかどうかについては不明である。

BもAと同じ1952年卒、家政科の1期生であるが、青短への入学経過はAとはかなり異なる。Bは修業年限が4年に短縮された1943年の翌年、1944年に高女に入学し、高女3年生となった1946年に修業年限が5年に戻るといふ混乱を経験した。Bには1948年度をもって高女卒業資格が与えられたが、新制大学・短期大学に進学するためには、1949年度にもう1年新制高等学校に在籍する必要があった。そこでBは、1949年度は新制稚内高校に1年間通い、青短に入学した。したがってBは、Aと同じく旧制高等女学校に入学していたが、Aと異なり新制短期大学への入学要件を満たす新制高校の卒業資格を得ることができたため、青山学院側からの特別な対応を必要としなかったことになる。

その一方、文科英文専攻（以下「英文科」）2期生であるCは、1948年度に発足した新制高等学校に当初から入学しており、学制の混乱を経験していない。もちろん、この事例だけをもって2期生以降のすべての学生が新制高校しか経験していないことにはならないが、少なくとも満18歳で青短に入学してきた学生はすべて同様であった。したがって、本稿の対象者についてはAとB以外の卒業生はすべて、新制高校の入学・卒業者である。

## （2）志望動機の推移

つぎに、対象者たちの志望動機、あるいは主体的な志望動機でなかったとしても、少なくとも志望するにいたった経緯を抽出し、それが青短の歴史とどのように関わっているかという点について見ていきたい。

### ①創立期（1950～62）

まず、1950年の青短創立時に入学したAとBから、1960年に入学したGまでの10年間をひと区切りとして志望動機を検討しよう。

家政科1期生のAについては、幼少時に柏木教会の幼稚科に通っていたことに加え、5



歳上の姉が立教女学校に在籍しており、キリスト教に親しんでいた。Aの家族は熱心な仏教の信徒であったが、子どもたちにキリスト教教育を受けさせることには躊躇がなかった。また、Aの女学校に青山学院卒の若い家政科の教師が赴任し、この教師のもつ能力や品位が青山学院へのあこがれをかき立てた。まだ短大としての実績がなかった青短であったが、短大創立以前における青山学院の女子教育の成果が、青短の評価基準として参照されていたのである。

同じく家政科1期生のBについては、姉がすでに上京して日本女子専門学校（現・昭和女子大学）に通っていたこともあって、妹のBも東京の学校に進学させたいという希望を高女の教員に伝えたところ、実践女子大、昭和女子大とともに青短を勧められたという。ここでも、高女の担当教員が創立前の青短を勧めたところに、青山学院の既存の女子教育への信頼があったと推察される。

英文科2期生のCに関しては、東京に叔母が嫁いでいたことが上京を可能にする環境として作用したが、親からは進学するなら短大と言われ、東京の短大なら東京女子大学短期大学部（以下「東短」）か青短と考えていたという。Cは新制高校の1期生であるため、女子の中等教育が18歳で修了することが高校入学当初から前提とされていた最初の世代である。したがって、医専や女高師に進学する例外を除くと、専門学校や師範学校専攻科を20歳で卒業するのが女子にとっての最高学歴であったそれまでの通念からすれば、短大は高等教育の現実的な選択であった。四年制大学への道が開かれたばかりの時代にあって、それはまだ女性にとって費用面や婚期の遅れなど多くの犠牲をとまなう選択だった。そのようななかで、東短とともに青短が最有力の志望校となり、また共立、実践、昭和の各短大は「滑り止め」と位置づけられていたことから、短大創立以前から青山学院の女子教育の名声と信頼がすでに地方においても確立していたことがわかる。

続いて、文科国文専攻（以下「国文科」）4期生、1953年入学のDの場合を見てみよう。Dは結婚後北海道に移住したが、関東地方北部の伝統的工業都市、足利の公立女子高校出身である。Dは早稲田で文学を学びたいという夢を持っていたが、女子は短大に行くべきとの親の意向によって、東短と青短を見学した結果、青短のほうが「楽しそう」という理由で青短を受験した。Dの世代においてはすでにどちらの短大も1期生が卒業していたが、まだ卒業生の活躍や評判の形成には日が浅く、東短か青短に絞られた背景にはやはり両校の前身校あるいは青山学院全体の評判があったであろう。またDの場合、見学のために両校を訪問することができる地域に在住していたことも、最終的に青短を選択する結果につながった。Dの「楽しそう」という判断の具体的根拠はかならずしも明確ではないが、Dのアカデミックな指向性からすると、遊興や娯楽を意味していないことに間違いはない。

1957年入学、家政科8期生のEの場合、すでに青短は6期の卒業生を輩出しており、加えて2人の姉のうち長姉は女専卒、次姉は家政科1期生だったこともあって、東京で高等教育を受けるに際して青短を選択することに迷いはなかった。さらに、札幌教会牧師で

あった川尻正脩（札幌教会在任期間1923—1929）<sup>2</sup>の妻、川尻知恵がシオン第一寮の寮監であったこともEの進学を後押しした。全国的な大企業の創業者のひとりであり、また札幌キリスト教界に重きをなした父とその一族にとって、娘たちの青山学院への進学は安心を保証するものであったことであろう。

1959年入学、国文科10期生のFの場合は四年制大学への進学が選択肢として排除されていなかった。軍事保護院医官を務め、浜田市で開業していた医師の父をもち、経済的にはそれが可能であった。兄がすでに医学部に進学し、弟も医学部志望であったことも関係しているかもしれない。実際、父はFに薬学部への進学を勧めている。しかしFは4年も勉強したくない、そもそも自分は理数系ではない、という理由でこの勧めを断っている。受験時には親戚が教員をしていた共立女子大にも合格したが、本人自身は四年制には行きたくなかった。しかしここで、恵泉女学園普通部と津田塾専門学校を卒業した叔母たちが強力に青短を勧めた。新制大学になる以前の名門女子教育機関を卒業した叔母たちの目には、青短はFのような高校生が入学するにふさわしい短大として映っていたわけである。さらに、同じ高校出身である兄の同級生が青短の国文科に入学しており、彼女の話で自宅で聞く機会も青短国文科への志望をかきたてることになった。

1960年入学、家政科11期生のGもまた青短への進学は親の意向と東京在住の親戚の勧めであった。Gは北海道有数の肥料商社の末娘として「過保護」ではあったがのびのびと育てられ、高校までは親の言うことをよく聞く、素直な娘であった。進路に関しても、親が青短を選んだ。しかし親が自分を「手放し」で東京の青短を勧めることにG自身が驚くほど、親と親戚は青短を高く評価し、信頼を寄せていた。

以上、1950年～1960年における青短入学生の志望動機について総括するとすれば、①まだ社会的評価の定まっていない青短に関して、青短創立以前における青山学院の女子教育の成果を尺度とした志望や、親・教師・親戚などによる勧奨が行われていた。②あらかじめ東京に在住しているきょうだいや親戚の存在が、娘を送りだす親の安心感をもたらしていた。③戦前まで女子の最高学歴はほぼ20歳までという通念によって、女子が四年制大学に進学することは選択肢から除外されていたとまではいえないにせよ、まだ一般的ではなかった、ということが言えるであろう。

## ②第1回改組後（1962）

つぎに、青短の第1回改組<sup>3</sup>がおこなわれた1962年以降の入学生について志望動機を検討してみよう。

1962年に入学し、新設児童教育科1期生であるHの場合、中学高校をつうじて寄宿舎を併設した札幌の学校に在籍したが、寮規則や校則に窮屈さを感じ、同じ学園の大学に進学することには抵抗があった。従姉妹がすでに青山学院大学に進学していたこともあって、その父である父方の伯父を頼って青短に進学した。Hは本稿の対象者において唯一、青山学院大学に進学している女性の親戚の存在が進学動機のひとつになっている。1961年には

「女子学生亡国論」がメディアを賑わすほど、女子大学生が増加傾向にあった。それがどれほど地方にまで波及していたかについては別途検証されなければならないが、当時、地方在住の娘を親が「手放す」期間としては、まだ4年という期間は長すぎたのではないかと推測できる。

続いてHと同じ1962年に岡山から国文科に入学したIが進学にあたって親に提示された条件は、「神戸なら4年、東京なら2年」というものであった。神戸であれば岡山まで日帰りもでき、気軽に帰郷できる距離であるのにならして、東京はまだ新幹線も開通しておらず、親としてはやはり「手放す」感覚になったのではないだろうか。(Iの場合、複数の従姉妹が東短に進学していた。)注目すべきは、「自分はそれほど(東短に進学できるほど)学力がなかった」というIの述懐である。CやDの聞き取りにおいては、東短と青短の入学難易度の差は特段問題にされておらず、在京短大を代表する2校と捉えられていた。ところがIの世代では両校に明らかな差を見ていたのである。開学から12年が経過し、大学の大衆化や受験産業の隆盛もあいまって、歴史や伝統による大学の「格」とは別に、入試難易度の微妙な差によって大学をランク付ける趨勢がこの時代には一般化していたことがうかがえる。

最後に、やはり同じ1962年に愛媛県から英文科に入学したJもまた、兄2人が東京の大学に進学し、姉も東京に嫁いでいた。Jは幼少時から英語が好きであった。英語といえば青山、青山なら四大よりも短大のほうが人気がある、という理由でJは青短英文科を選ぶ。また、青短の英文科を卒業して活躍している高校の先輩への憧れもあった。「英語の青山」のブランド認知が、四大の英米文学科だけでなく青短にも及んでいたことをうかがわせる証言だが、戦前の女子専門部には英文科に相当する学科はごく短期間しか存在しなかった(1941-3年)<sup>4</sup>ことを考えれば、こうしたブランド力は1903年に認可され1920年に閉鎖された青山女学院英文専門家に由来するかもしれない。いずれにしても1960年代には、先述した大学の大衆化と受験産業による大学のランク付けとブランド化が進み、青短もその中で「英語の青山」ブランドを担う短大として認知されていたと言える。付け加えるならば、1962年に文科国文専攻と文科英文専攻が国文科と英文科に改組されたことも、このような文脈において意味づけることができよう。「青山なら四大よりも短大のほうが人気がある」というJの発言も、伝統や校風ではなく「人気」という市場価値が高等教育機関の価値を測る尺度として普及していたことを裏付ける。

以上見てきたように、1962年の改組後における青短への志望動機を形成した要因としては、1960年以前と同様、①地方の高校生にとってまだ四年制へのハードルが高かったこと、②きょうだいその他の親戚がすでに東京に進学あるいは在住していることに加え、この時期に特有な動機として、③大学の大衆化と受験産業の勃興によって、各大学が人気＝難易度によってランク付けされ、この競争の中でブランド化されていく過程で、青短もまた「英語の青山」はじめ、短大上位校としてのブランドを担う短大として認知され始めていた、という事実を挙げるができるであろう。

以上、本章では対象者の青短への入学経過と志望動機を見ながら、入学者の歴史的・社会的条件を探ってきた。青短は、当初は女専の後継校とみなされていたことから、女専（およびその前身である高等女学部専攻科）の卒業生の活躍や社会的評価によって志望されていたこと、そして親、親戚、教師、地域の先輩といった志望者の周囲の人々がこの評価によって対象者に志願を勧めていたことが明らかとなった。またこのような状況は、青短の卒業生が少なく、社会的評価の定まらない1950年代の間続くこととなったが、1960年前後を境として、大学の大衆化が進み、受験産業による大学のランク付けやそれにもなう大学のブランド化が始まると、「英語の青山」に代表される「青短」ブランドが普及し、それによって志願者が集まり始める。さらに、女子高等教育が20歳で修了する通念がまだ一般的であったことや、地方から東京への進学にたいする不安から、短大への進学を条件に娘を東京に送り出すという構図もこの時代までは根強いものがあったと言えるだろう。

## 2. 学生生活からみる青短の歴史

本章では、対象者10人の学生生活についての証言から、青短の提供した教育環境や教育内容を、彼女たちがどのように受け止め、それにどう対応していったかを検討することで、1950年の創立から1964年にかけて、青短がどのような校風—各学科・専攻の特性あるいはカラーも含む—の短大として形成されていったかを考察したい。ここで教育環境や教育内容というとき、授業はもちろん、寮生活、課外活動といった、正規のカリキュラム外のものも広く含めて考察したい。とくに青短の寮は教育寮として位置づけられており、地方から進学してきた学生にとって、キャンパスよりも長時間を過ごすきわめて重要な全人格的教育の場であった。そこで本章ではまず、シオン寮がどのような場として成立していったか、という点から対象者の証言を聞いてみることにしよう。

### (1) シオン寮の形成とその青短全体にとっての意義

#### ①シオン寮設立以前

シオン寮は1951年5月に設立される。したがって家政科の1期生、2期生であるAとB、および英文科の2期生であるCは入学当初からシオン寮に入寮したわけではなかった。Aのばあい、1949年に女専別科に入学すると同時に、別科のために設立された阿佐ヶ谷の青山寮に入った。一方Bは、短大の推薦で桜新町にある「元軍人宅」<sup>5</sup>に青短生5人で寄宿した。またCは、シオン寮開寮までの約1ヶ月、神保町の叔母の家で過ごした。

Aの入った青山寮では牧師の妻・白井ふさが寮監を務めており、シオン寮と同様に気賀重躬など、大学宗教主任が説教をした。青山寮にはさまざまな年齢や専攻の学生が同居していたとのことで、戦後の学制の混乱のなかで、多様な背景をもった学生たちが別科に集められていたことがうかがわれる。

Bは寄宿した元軍人宅での印象として東京の食糧事情の厳しさを挙げている。朝食は



コッペパンとサッカリン入りの紅茶だけだったことから、寄宿生たちはこの家を「コッペ寮」と名付けていた。この家には英文科1人、家政科2人、国文科2人の5人で暮らしていた。英文科の学生はよく勉強していたので、他の学生たちが騒ぐのをうるさがっていたが、早慶戦に行くなど、シオン寮に移る2年生の4月まで楽しく過ごした。

## ②寮生の経済的背景

シオン寮についてひとつ考慮に入れておかなければならないことは、1950年代～60年代当時における入寮動機についてである。まず、家庭の経済状況が比較的恵まれていたとしても、娘を入寮させている事実がある。本報告対象者の当時の経済状況をつぶさに確認したわけではないが、実家での暮らしぶりや、教育に割いている資源、あるいは父の社会経済的地位や家業などから、対象者の多くが比較的豊かな家庭に育っている。1980年代以降であれば、そのような学生はおそらく寮ではなくアパートやマンションでの一人暮らしを選択するであろう。80年代以降は、賃貸価格の上昇もあって寮のほうがはるかに安上がりだったのであり、集団生活の不自由さという代償を払ってでも安価な寮生活を選択したのである。しかし本稿の対象者にかんしては、1960年までの入学者7名全員が寮に入っている。それ以降の入学者3名についても1名は、かなわなかったけれども入寮を希望した。

その背景として、ひとつには当然のことながら、娘が寮で生活してくれれば親としては安心であるという心理が働いたであろう。それはもちろん、住居のセキュリティという面にとどまらず、厳しい門限や規律によって、都会の享楽や誘惑から娘を遠ざけるという観点によるものである。二つめに、川尻寮監を親または親戚が個人的に知っていて、娘を託したという側面もある（E、F）。川尻寮監は、後に述べるように高潔な人格ときめ細かい配慮によって、寮生や保護者の厚い信頼を得ていた。さらに付け加えるならば、本稿の対象者たちのような地方名士の子女が集っていた青短にあって、キリスト教信仰に基づく教育寮として設置されていたシオン寮が全人格的な教育の場として求められていたということも挙げられよう。地域の名士の子女にふさわしい教養と品位を寮生活で培い、また同じような階層に属する学生たちとの交わりのなかで成長することがシオン寮には期待されていたのである。

## ③シオン寮設置以降

さて、このような期待を担って1951年5月に開寮したシオン寮であったが、対象者10名のうち7名がこの寮で生活を送ったことは先に述べた。いずれも、1966年に猿楽町に移転する前、金王町時代のことである。

まず彼女たちから異口同音に発せられるのは、第一寮の川尻知恵寮監の働きと人柄にたいする尊敬と感謝である（Fだけは第二寮、飯久保澄寮監であった）。

Bは姉の結婚式と生物学の試験日程が重なってしまったが、川尻が担当教師にかけあった結果、別日程での追試が実現したという。

Cは川尻が耳鼻科に付き添ったことや、埼玉の友人を訪問するさいにお土産を持たせたこと、また就職活動を励まされたことへの感謝を口にした。

Eは寮が近代的な新築であったにもかかわらず、暖房の整った北海道の家屋に比べれば非常に寒かったという印象とともに、川尻のこまやかな配慮のもと、何不自由なく過ごすことができたと言った。

Fはシオン第二寮に入り、寮監の飯久保澄が希望者の寮生を歌舞伎座に連れて行ったことに驚いたという。「なんで寮でそんなことするのかな」と思ったということである。それがのちに実家の母と叔母、東京で働いていた娘の3人を歌舞伎座に招待したり、運営する施設でのリモートによる歌舞伎関係のイベントを開催したことにもつながった。そのような自分の指向性の原点に寮でのこの経験があったこと、またこのような精神的教育こそが青短の女子教育の本質であったのだと、今となってはよくわかるという。

Gは川尻がGの音楽的素養を見抜き、レコード係（夕食後に音楽をかける係）や夕拝のオルガニストとして起用したこと、サークル活動で夕食に間に合わなかった学生たちのために川尻がそっと夕食を用意したこと、前日のご飯が蒸しご飯として提供されることが苦手だったGを見てパンを居室まで持ってきたこと、Gが実家への電話で地震の恐怖を訴えるのを傍らで聞いていた川尻が、Gを比較的揺れの少ない居室に移動させる措置を講じたことなどを語った。また、川尻がある夜不意にGの居室を訪ね、川尻の自室に招き入れて月下美人の開花をゆっくりと眺めたことは忘れがたい思い出であるという。

シオン寮が川尻や飯久保の献身的な働きと、キリスト教信仰に裏づけられた類まれな人格的感化力によって教育寮としての機能を存分に発揮したことには疑いの余地がない<sup>6</sup>。しかしここで注目しておきたいことは、川尻や飯久保の献身に応答し、集団生活や寮行事での役割を積極的に担い、奉仕的に活動した寮生たちも、シオン寮の「寮風」を形作っていったということである。今日概念を使うならば、シオン寮はサービス・ラーニングの場として、なおかつキリスト教的な愛と奉仕を根底とした学びを实践する場として、学生たちとともに形成されたのである。このような場のあり方はシオン寮内にとどまらず、その後青短の教育実践全体に行き渡る精神となり、それが閉学まで継続した。例を挙げれば、宗教活動委員会の宗教活動や学生部主催の各種課外活動、東日本大震災で組織されたボランティア活動など（これらの中には2012年の改組時に正規課程に組み入れられたものも少なくない）、枚挙にいとまがない。この意味で、青短の歩みはシオン寮の「寮風」が青短全体の「校風」に昇華されていく歴史であったとさえ言えるだろう。

## (2) 家政科の特性の形成

つぎに、授業を中心とした青短の教育活動が、学生たちにどのように受け止められ、どのような反応を引き起こし、それによって各学科の特性がどのように形作られていったか、という点を検討してみたい。まず、本稿対象者の1期生が所属した家政科から見てみよう。

家政科1期生のAは調理実習や育児、栄養にかんする授業が楽しかったと述懐するが、もっとも高い関心をもって取り組んだのは女専別科における「住宅」の授業であり、この授業で引いた住宅の図面が激賞されたという。Aはこの図面をベースにして自宅の設計まで行った。

同じく家政科1期生のBは大西セチ、野村万千代の調理実習を挙げるが、とりわけ野村は、Bが寄宿していた桜新町に居住しており、Bを自宅に招いて調理実習の材料を自宅の庭で収穫させたという。家政科の修学旅行では、島崎通夫に引率されて唐招提寺や瀧八丁を訪ねた思い出がある。

家政科8期生のEは大西セチの西洋料理の授業に多大な影響を受けたという。とくに印象深い授業だったのは生きた鯛を丸揚げにするというもので、家庭ではできないまったく新しい経験だった。Eが見せてくれた当時の教科書、大西の『欧風料理の基礎』(1949)<sup>7</sup>には隅々にまで書き込みがあり、表紙は激しく損耗していた。Eはのちにみずからが担当した湘南白百合学園の家庭科の授業でもこのテキストを使用し、生徒たちにたいへん好評だったという。大西はクリスマスケーキの実習も行った。Eは札幌に戻ってから自宅で収穫したクルミを使い、それを応用したケーキを友人の喫茶店で販売したという。

家政科11期生のGはアドバイザーでもあった野村万千代から特別手厚い指導を受けた。そのきっかけとなったのは入学式の日、会場への道に迷ったGの母に、野村が声をかけて駅から青短まで案内したことであった。以来野村はGに目をかけ、研究室に招いてよく昼食をともにするようになり、Gが持参した寮の弁当と野村が調理実習で作った料理とを交換した。Gは「過保護で控えめ」な性格であったが、こうした野村との交流によって物怖じしない態度が身についたという。また、Gが38歳でニューヨーク州バッファローから大阪に帰国したとき、野村の求めによって大阪で食事をし、40歳になったらボランティアをするよう勧められた。そして実際に40歳から老人介護施設でのボランティアを始め、50歳のときには三年制の通信教育を受講し、ボランティア士の資格を取得するに至った。

以上、家政科卒の4人の証言を総合すると、とくに実習系の授業においては、家庭生活での実用的な技術の習得よりも、調理や被服の根底にある基礎的な技法や精神を体得させる教育に重きが置かれていたことがわかる。そのような教育はおのずと教員と学生の人格的な交流を要請することから、証言にみられるような親しい交流を成たせただけでなく、卒業後の人生に長く大きな影響を及ぼす結果をもたらしたのである。

### (3) 国文科の特性の形成

つぎに国文科について見てみよう。3人の対象者の証言からは、加藤楸邨、川瀬一馬、諸橋轍次の3人の名前が畏怖に近い尊敬の念をともなって聞かれる。

4期生のDは授業の内容よりも、3人の碩学たちの学者としての姿勢やたたくまいに感銘を受けたという。また、川瀬によって興味のないままたたきこまれた『花伝書』であったが、のちに謡曲をたしなむようになってからその意味することや川瀬の言葉がありあり

と理解できるようになったという。

10期生のFは3人の学者に加えて馬越宮の名前を挙げ、学生当時授業を担当された先生方がこれほど立派な方々だったとは知らなかった、もっと勉強しておけばよかった、もったいなかった、と述べている。またFは、学科で北陸に「おくのほそ道」の研究旅行に行ったときの印象も語った。川瀬が山道の奥深くに分け入って歌碑を案内したさい、その記憶力に圧倒されたという。

13期生のIもまた川瀬、加藤、馬越に言及し、今思えば幸せな青春だったと述懐する。言い方を変えれば、学生当時には気づいていなかった学的恩恵を、今となっては理解できるということであろう。

このように見てくるとき、国文科においては日本を代表する学者たちによる高度な授業が展開されていたにもかかわらず、その内容を学生たちはかならずしも十分には理解していなかった可能性がうかがえる。とはいっても学生たちが授業に退屈していたわけではない。Fは次のように言う。「そりゃあもう、まったく高等学校では聞いたこともない、どこでも聞いたことがないようなお話ですから、授業中は面白かったですよ」と。碩学たちの豊富で重厚な学識によって展開される講義は、二十歳前の学生たちにもそれなりに興味深いものだったにちがいない。しかし、その真意を理解するためには、やはり相当の年月を必要としたと言わなければならない。であったとしても、学生時代に受けた薫陶は無駄であるどころか、卒業後の積極的な学びへの姿勢をもたらし去った。Dは謡曲を通じて『花伝書』を読み直し、旅行に行くばあいも勉強を欠かさない。Fにとっては後述する福祉事業や社会活動を幅広く展開するにあたって、「普通の人」では実践しないことを試み、掘り下げる探究的な姿勢につながっている。また何よりも、短大同窓会国文学科会のいまなお続く旺盛な学習活動は、国文科の以上のような特性を象徴している。

#### (4) 英文科・児童教育科について

英文科と児童教育科については、対象者がそれぞれ2人、1人ときわめて少ないため、一般化できる結論を導き出すことは難しいが、かんたんにそれぞれの授業や課外活動にかんする発言を拾い集めておきたい。

まず英文科2期生のCは外国人教師によるオーラル・イングリッシュの授業が楽しかったと述べ、若い教師であったメアリ・ステアレスとの文通が彼女の死去まで続いたという。

英文科13期生のJも英会話が好きで、2年生になりルセッタ・ハークネスのアドバイザー・グループに参加した。自宅に招かれて、アメリカ料理など本場のアメリカの文化に触れてたいへんうれしかったという。また、Jの学生生活で大きな比重を占めていたのが短大ESSである。他大学や留学生との交流を楽しみ、積極的に活動した。

児童教育科1期生、1962年入学のHは「個性豊かな先生」として、高橋好子、掛井五郎、林三平、非常勤ではあったが瀬田貞二(児童文学)の名を挙げる。いずれも新設学科を立ち上げる意気込みに満ちた教員たちであった。Hは東京での事務職を終えて59歳で北海道



に戻ったあと、「児童文学を学ぶ会」を立ち上げて活動してきたが、このようなところに児童教育科における学びの影響を見ることができる。

本章では、青短創成期のシオン寮と各学科における授業を中心に、青短の校風の成立をみてきた。シオン寮では寮監たちの献身的な働きとそれに答える学生たちの積極的な奉仕が、家政科においては実習を担う教員たちの基礎を重んじる熱意と学生たちとの親しい交流が、国文科においては学究たちの圧倒的な学識とそこに憧憬の眼差しを向ける学生たちが、英文科においては外国人教員との豊かな交流が、児童教育科においては教員たちの豊かな個性と新設学科への意気込みが、それぞれ青短の校風を形作ってきた。この時代にこのような形で生み出されていった校風はその後の時代にも引き継がれ、形を変えながら閉学まで継承されたものと考えられる。

### 3. 卒業後のライフキャリア

本章では、10人の卒業後の人生に青短との関わりを見ていきたい。青短との関わりといっても、それは同窓会活動や恩師に関わることだけを意味しない。むしろ、短大時代に受けた影響、身につけた思考方法や習慣、交友関係などがどのように人生全体に影響を及ぼし、各人がそれらをどのように育てていったかという視点を本章では採用する。

また本章では、10人の卒業後の人生を検討するにあたって「ライフキャリア」という概念を使用する。ライフキャリアは継続的な職業経験を意味する狭義の「キャリア」とは異なり、職業、社会活動、家庭生活、育児、介護、再就学など、人生のさまざまな段階における活動や経験の積み重ねを意味する。本章では、短大が直接職業紹介に関わり、青短卒業生への社会的期待が反映されやすい卒業直後の進路選択と、20代半ば、すなわち当時一般的だった結婚年齢以降のライフキャリアとに分けて対象者の聞き取りを抽出していきたい。

#### (1) 卒業直後のライフキャリア

まず、青短卒業直後に取った進路について見てみよう。

家政科1期生のAは疎開先の札幌ですでに婚約しており、卒業後すぐに結婚して札幌に戻った。

同じく家政科1期生のBもまた卒業後は稚内に帰り、家業や家事を手伝った。翌年には結婚し、旭川に転居した。

英文科2期生のCは学校推薦で東京銀行に就職した。神保町の叔母の家から通うことができたため、応募資格を満たしていたのである。東京銀行では英語力で為替業務に貢献できると思ったが、配属されたのは新橋支店の窓口だった。父の病気のため1年半後に退職し、旭川に帰った。Cによると、英文科生の2～3割が就職したという。

国文科4期生のDは卒業後足利に戻ったが、事情があり、仏教系私立女子高校で4年間国語の教師をした。教師になろうとは思っていなかったため、能力の低さを感じて辛かった。1年後、昭和女子大でおこなわれた夏期研修に参加し、そこで夫となる北海道の教員と出会い、3年後に結婚、退職して北海道に渡った。

家政科8期生のEは実践女子大の食物科3年次に編入学した。大西セチの影響を受け、食物学をさらに学びたかったという。しかし2年間ということもあり、やや物足りなかった。実践女子大卒業後は札幌に戻り、以前広告モデルをしたことがある朝日広告の求人を新聞でみつけて応募し、採用された。すぐに朝日新聞社北海道支社の広告課に出向となり、コンサート、ファッションショー、調理実習など全道で行われるイベントの仕事をした。結婚を機に1年半で退職。結婚後は鎌倉に住み、湘南白百合学園で家庭科の教師を務める。4年後、祖父が起こした農場の継承のため札幌に戻った。

国文科10期生のFは朝日生命に就職した。幼少時こそ父は勤務医であったが、「会社勤め」という働き方を身近に経験していないため、ぜひ経験してみたいと思い、親に相談したところ自力で就職先を探しなさいといわれ、短大の求人の中から丸の内本社ビルが勤務地となる朝日生命を選んだ。朝日生命では文書管理課に配属され、住所録管理業務に従事した。朝日生命はクラブ活動が盛んで、合唱にハイキングにと楽しい会社員生活を送った。1年7ヶ月勤務した後退職し、医学生の兄と予備校生の弟と同居して家事を担当しながら、池坊学園と江上料理学院に通った。この生活を2年間続けた後、1963年10月、23歳で浜田の実家に戻り、翌年4月、24歳で結婚した。

家政科11期生のGは野村万千代から短大の研究室に残る誘いを受けたが、親が許さなかった。そこで旭川に帰り、子ども時代以来のお稽古ごとを再開したが、そのうちのひとつに外国語学校があった。生徒になるための英語の面接を受けたところ高い能力を発揮したため、校長に講師になるよう懇願され、講師として3年間務めた。結婚後も、家庭教師として約36年間受験英語や英会話を指導した。

児童教育科1期生のHは北海道に戻り、北海道電力に就職して札幌の母方の祖父母宅から通勤したが、多くの女子社員が22～3歳で退職するなか、職場に居づらくなり退職。その後は東京在住の父のきょうだいを頼って上京し、実家の援助を受けながらアルバイトをしていた。

国文科13期生のIは卒業後は岡山に帰郷し、家業のカメラ店や家事を手伝い、1965年、21歳で結婚した。

英文科13期生のJは愛媛県教員採用試験（中学英語）に合格し、1971年から愛媛県城川町（現西予市）で中学校教員として勤務。2年後、結婚を機に夫の勤務する広島県でも教員採用試験に合格し、その後定年直前まで中学校教員として勤務した。

ここまでHをのぞいて全員24歳以下で結婚し、職に就いていた者は教員のJをのぞいて退職しているが、これは1950年代～60年代当時の短大卒業生の一般的なライフキャリアであったと考えられる。また、A、B、D、G、Iと、対象者の半数は、新卒採用での就職

を経験していないが、これもCの「英文科の2、3割が就職した」との証言からも裏付けられるように、当時としては珍しいことではなかった。対象者の個性、さらにはいえば青短卒業生としての個性が顕著にあらわれるのは、次にみる結婚年齢以降のライフキャリアにおいてである。

## (2) 結婚年齢以降のライフキャリア

つぎにセカンドキャリア以降の職業や社会活動を見てみよう。ライフキャリアにおけるセカンドキャリアは就労とはかぎらず、家業経営の支援や、継続的に行っているボランティアなどの社会活動なども含む。家事、子育て、介護もライフキャリアにおける重要な要素であるが、とくに必要なばあいのみ触れることにする。

家政科1期生のAは結婚後、夫の勤務する北海道大学の官舎に8年間住んだ後、女専別科時代に担当教員に称賛された図面をもとにみずから設計した家を建築し、そこに移り住んだ。官舎時代に生まれた3人の子どもの養育とともに、夫の母を100歳近くまでこの家で介護した。夫もまた95歳で死去するまでこの家で生活し、本人も2023年に亡くなるまでここで暮らした。Aの人生は女専別科で指導を受けて設計した家とともにあったと言ってよいであろう。またAは、青山学院校友会札幌支部の副会長としても活動し、のちに短大同窓会を立ち上げ、その初代会長となっている。

同じく家政科1期生のBは嫁ぎ先が食品卸業を営んでおり、専業主婦として生活した。夫のふたりの妹は、Bの影響を受けていずれも青短に入学したという。また娘も青短を卒業している。Bもまた短大同窓会北海道支部の役員として長年にわたって奉仕し、旭川での総会も実現させた。

英文科2期生のCは1957年に結婚すると同時に姑と同居したが、姑を1970年に看取ったあと、1971年から30年間にわたって旭川歯科学院専門学校と幼稚園で英語講師を務めた。その後も英語サークルで活動している。また、女声コーラス「麦の会」のメンバーとしても活動してきた。(短大時代はK A Y合唱団に所属していた。)

国文科4期生のDは4人の子どもの小樽と札幌で育て、その後40代から50代は毎月1週間ほど足利の両親の介護のために札幌から通った。また、独身時代から始めていた謡曲を札幌でも続けている。加えて、夫の釧路赴任時には母の勧めで「友の会」に入会し、交友関係を広げた。

家政科8期生のEは子どもの服を作るために機械編み教室に通ったのを契機に、その教師となり自宅で教室を開くまでになった。生徒が全国コンクールで入賞したり、毎日新聞北海道支社主催のファッションショーに年2回20年間、4、5点ずつ出品したりと、この分野で成功を収めてきた。全日本編物教育教会の役員も務めている。Eはこのような働きについても、家政科で学んだことに基礎があるという。

国文科10期生のFは結婚後、山口日赤病院に勤務していた夫の開業準備のため、まだ乳児だった次女を抱えて2年間看護学校に通い、准看護婦の資格を取得して、1974年に夫の

母が開業していた菊川町（現・下関市）でその医院を承継、夫の母とは別の場所に診療所を開業した。地域のホームドクターとなり、開業25年後に特別養護老人ホームの設置を菊川町に要請され、さまざまな準備を経た後、1999年、59歳のときに夫が理事長となって社会福祉法人菊水会を設立した。以後Fは施設長、業務執行理事として、特養のみならず、デイサービスセンター、グループホーム障害福祉事業所、サービス付き高齢者向け住宅など多数の施設を運営している。また、フレンドシップフォース（ホームステイと国際交流を推進する団体）やスペシャルオリンピックス日本・山口（知的障害者のスポーツ活動を支援する団体）の活動にも意欲的に取り組んでいる。

家政科11期生のGは、1965年、24歳で大阪大学の無給医局員と結婚後、3人の子どもをもうけた。1975年、34歳のときに夫がニューヨーク州立大学バッファロー校にポストを得て、家族でバッファローに転居。この地でホームパーティー、教会、近隣住民、大学職員のウイメンズクラブなどにおけるさまざまな活動への参加を通じてアメリカのボランティア精神を学び、感銘を受ける。そしてみずからもウイメンズクラブでの「ジャパンナイト」をコーディネートし、地域の日本人会の協力も得て成功に導いた。2年後に帰国してからも、先述した野村万千代の助言もあって、老人福祉施設でのボランティアを皮切りに、パリ在住日本人音楽家の演奏会の主催、岡山シンフォニーホールへのパイプオルガン設置のための募金活動、I T C - J（Interactive Training in Communication Japan）の英語スピーチコンテストでの全国優勝、またこのコンテストの審査員や岡山支部長、さらに短大同窓会中国支部長など、精力的に社会活動を行っている。「過保護で控えめ」な性格だったGをこれほどまでに活動的な生活へと導いたのは、バッファローでの経験や、夫が世界中の学会にGを同伴したこともひじょうに大きい。短大で野村万千代に目をかけられ、寮生活では川尻知恵に能力を見込まれて、自己肯定感を高めていたことが原点となっているだろう。

児童教育科1期生のHは、4代になってから麴町にあるI B I（大企業の年次報告書の英訳を刊行する企業）の図書室で文書管理の業務に従事し、59歳まで働いた。東京在住時は出身校である札幌の中学・高校の同期会を組織し、札幌に転居してからは同校の同窓会事務局と青短同窓会北海道支部の役員を務めた。札幌では「児童文学を学ぶ会」の活動も続けてきたことは先述のとおりである。

国文科13期生のIは、1965年に岡山大学の勤務医と結婚し、1970年から夫のメルボルン・モナシュ大学への2年半の留学に同行した。1980年に夫は西条中央病院の院長に招かれ、さらに1994年、リウマチ・膠原病専門病院である東広島記念病院を設立し、現在では7箇所の医療・福祉施設を運営している。また、登録博物館「仙石庭園」を25年の歳月をかけて完成した。Iはこれらの事業の補佐に従事しているほか、短大同窓会中国支部長も務めた。

英文科13期生のJは、結婚後も広島県で中学英語教員を定年直前の58歳まで務めた。夫も教員だったためJの勤務継続に理解があり、子どもを3人もうけた。3人目のときによ



うやく育休制度ができて勤務から1年間離れることができたが、当時の育休は無給だったため、経済的には苦しかった。また、Jの教員生活は中学校が荒れた時代であり、生徒指導に追われるばかりで生徒の心に寄り添うことができていなかったことをいまなお後悔している。退職後は時間講師や、福山市国際交流協会の英会話サロン、外国人支援のボランティアなどを行っている。

以上見てきたように、対象者10人の結婚年齢後のライフキャリアは多様をきわめる。しかし多様ななかにも著しい偏りが見受けられる。それは、医師の妻となった卒業生が10人中4人をも占め、さらに医師となった子をもつ卒業生も同じく4人を数えることである(両者は同一人ではない)。母数が少数であることから定量的な結論を導き出すことはできないが、社会階層論的な考察を加える余地はあるであろう。

もうひとつ、多様性のなかに看取できる共通要素は、ボランティアという形であれ、事業の補佐という形であれ、あるいは職業という形であれ、対象者たちが社会奉仕的な活動に大きな時間とエネルギーを充当していることであろう。寮生活や学生生活で培った奉仕の精神が卒業後のライフキャリアにおいて発揮されたということもできるが、それ以前の段階において、今回の対象者はその多くが事業家、商店主、医師、教員の娘であったという事実注目しておかなければならないだろう。つまり、もともと社会貢献や社会奉仕への指向性や使命感を強くもっている家庭の娘が青短に送り込まれたということである。そのような学生たちが、青短の教育環境や教育理念に触れることで、青短の校風や卒業生の活動を作り出していったのではないだろうか。

## おわりに

本報告ではこれまで、青短創成期の10名の卒業生を対象とし、青短入学の経緯を検討しつつ入学者たちのおかれていた歴史的・社会的条件を探り(第1章)、寮生活や授業をつうじて、青短の教育環境と教育活動にたいする学生たちの応答がどのように青短の校風を形成していったかを論じ(第2章)、卒業後のライフキャリアを通して青短での学生生活が人生全体に何をもちたらし、言い換えれば対象者たちが人生を通して青短にどのように応答してきたかを検討してきた(第3章)。

ここであらためて青短の教育理念を引用しておこう。

青山学院のキリスト教の信仰にもとづき、「女子小学校」から「青山女学院」を経て現在に至る本学院の女子教育の伝統を継承し、女子の高等教育に専念する

「本学院の女子教育の伝統」とは何であり、それは1950年代から60年代前半にかけて、教職員、学生、保護者、社会にどのように意識され、実践されていたのか。本稿はこの問

題を当時の現役当事者に問いかけるのではなく卒業生に問いかけ、卒業生への聞き取りによって、卒業生自身の入学から現在までの状況と、卒業生たちをとりまく親族や知人を含めた歴史的・社会的状況を検討することによって一定の結論を導き出そうと努めてきた。

こうして得られた結論は、第一に、創成期の青短は、青山学院全体、とりわけ女専の評価に大きくよっていたことから、女専における女子教育の伝統を実質的に引き継いでいたことである。女専は青山女学院高等女学部専攻科以来の伝統を持ち、高女、新制中学・高校における家政科の教員を全国に多数輩出しており、対象者たちの出身女学校やその後継校である高校にも出身者が在籍したことであろう。入学者のみならず、出身学校の教員、保護者やその親戚も、そのような女専の評価によって志願を決定し、あるいは志願を勧めたことが今回の調査からもうかがい知れる。また新制短大の教員たちも、女専の教育水準を念頭におきながら高い教育水準の維持に努めた。寮においても、女専別科の寮として設置された青山寮において、キリスト教的な教育寮としての運営が行われていた事実がみられ、これをシオン寮が引き継いだ。

第二に、このように集められた学生たちが、女専から受け継いだ高い水準の教育と、青山学院のキリスト教的な高潔さや奉仕の精神を青短に期待するような社会階層に出自をもっていたがゆえに、青短がそれらを実際に提供することによって、青短と学生との間に相乗的な反応が起き、それが青短におけるキリスト教的な「女子教育の伝統」の継承を可能にしていたことである。このことはシオン寮における寮監の配慮と寮生の奉仕の相互関係や、高水準の授業とそれにたいする学生の驚嘆と尊敬、あるいは教員と学生の精神的な交流に見て取ることができる。

第三に、女性が20代前半で結婚し、その後は「家庭に入る」ことが当然視されていた時代にあって、どのような形であれ社会貢献あるいは社会奉仕を重視する生き方を青短が学生たちに期待していたことである。この点も、女専時代から家政科教員をはじめとする専門職や、高度な専門的知識と技能を持って社会に貢献する女性の育成に努めてきた「本学院の女子教育の伝統」に根ざすものにほかならない<sup>8</sup>。本稿の対象者たちはがみな、惜しみなく社会奉仕に励み、そこに喜びを見いだす生き方を貫いていることは、本論で見たとおりである。

こうした「女子教育の伝統」は、1960年代後半以降どのように受け継がれ、またどのように変化していくのか、次期プロジェクトの課題としたい。

- 1 青山学院女子短期大学編『青山学院女子短期大学の歩み』（青山学院女子短期大学、1975年）、青山学院女子短期大学編『50年の歩み—青山学院女子短期大学開学50周年記念誌』（青山学院女子短期大学、2000年）、青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会編『青山学院女子短期大学六十五年史』通史編、文集編、資料編（青山学院女子短期大学、2016-2018年）。
- 2 日本基督教団札幌教会『川畔の尖塔—札幌教会七十五年史』（日本基督教団札幌教会、1964年）、

pp.63-84。

- 3 文科国文専攻は国文科に、文科英文専攻は英文科に改組されたほか、児童教育科が新設された。
- 4 女子専門部は1941年の学則変更により文科が設置された後、翌年の学則変更により文科内の英文科に相当する課程は募集停止となった。青山学院一五〇年史編纂本部・編纂委員会他編『青山学院一五〇年史 資料編 I』（青山学院、2019年）、p.553, 555, 593。
- 5 当時の青短は青山女学院卒業生の家庭を下宿先として紹介していたことから、妻が青山女学院の卒業生であったと推測される。
- 6 この点に関しては、加納孝代「思い出の中のシオン寮—女子大学の教育寮での二年間」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』10、2002年）に詳しい。
- 7 中村勝三・大西セチ・金子きよ『欧風料理の基礎』（光生館、1949年）。
- 8 女子専門部にはこうした流れに属するものとは別に、家事労働の技術や裁縫・調理の実務を教授していた一年制の家事専修科があった（1944年に実務科に改組）。



## 青山学院女子短期大学同窓会東北支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1952 (昭和27) 年から1964年 (昭和39) 年卒まで

菅野 幸恵

### はじめに

本稿は東北支部の卒業生14名からの聞き取りのまとめとなる。東北支部では、2021年度については、福島県部会とりまとめによる調査を2021年11月に郡山市で、宮城、山形、秋田、青森各県部会とりまとめによる調査を2022年3月に、仙台市、山形県上山市、秋田市、青森市においてそれぞれ行った。2022年度については、2022年5月に秋田市および青森市で、同年7月に仙台市で行った。なお、岩手支部については、対象となる年齢の方がひとりでの外出が困難とのことで、調査を見送った。2021年度2022年度の2年間で14名の方のお話を伺うことができた。

14名の調査協力者を卒業年順にAからNのアルファベットをあてて区別することとする。卒業年と学科、現在の在住県は以下の通りである。

表1 聞き取り対象者一覧

記号	卒業年	学科 <sup>1</sup>	在住県
A	1952 (昭和27)	家政	秋田
B	1956 (昭和31)	英文	福島
C	1958 (昭和33)	家政	福島
D	1958 (昭和33)	国文	福島
E	1958 (昭和33)	国文	秋田
F	1960 (昭和35)	英文	青森
G	1961 (昭和36)	英文	山形
H	1961 (昭和36)	家政	宮城
I	1961 (昭和36)	国文	宮城
J	1961 (昭和36)	国文	宮城
K	1962 (昭和37)	家政	青森
L	1963 (昭和38)	家政	福島
M	1963 (昭和38)	国文	山形
N	1964 (昭和39)	国文	青森

## 1. 出身高校と女子の進路選択

各支部に共通することだが、調査協力者が、支部内の高校を卒業している場合と、短大卒業後に婚姻などにより他地域から転入したことがある。本節では、出身高校が支部内か、支部外かで分けて記述する。

### 1) 支部内高校出身者の場合

14名中11名が支部内の高校を卒業している。高校名は以下の通りである。青森県立八戸東高等学校 (K☆)、弘前学院聖愛高等学校 (F☆)、秋田県立秋田北高等学校 (A、E☆)、山形県立山形北高等学校 (G、H★)、山形県立山形西高等学校 (M★)、福島県立福島女子高等学校 (D☆)、福島県立須賀川高等学校 (C)、福島県立安積女子高等学校 (B☆)、福島県立白河女子高等学校 (L☆) である。★は現在も女子校、☆は当時は女子校であったが現在は共学となっている学校 (一部は名称変更も) である。1名以外はみな女子校である。当時、進学、就職とクラス編成されている高校もあったようである。例えば、4クラス中、2クラスが進学で残りは就職 (G)、5クラス中進学は1クラスで残りは結婚 (花嫁修業) か就職 (K) という具合である。進学するにしても、県内あるいは東北圏内の大学を目指す場合が多く、東京に進学する者は多くなかったということだった (E、I、K)。ただこれはあくまで協力者の記憶・印象であり、実際とは異なる可能性がある。

青短を選んだ理由としては、まず青山への憧れ (B、D、G)、知名度の高さ (C) が挙げられていた。なかでもGは「とにかく青短の英文に入りたかった。青山の英文は難しいと聞いていたが、挑戦したいと思った。」と述べており、強いあこがれを持っていたことが伺える。

青短出身の姉 (H) や従妹 (L)、先輩 (M) の影響を受けてという者もいた。Hは4つ上の姉が青短英文卒で、帰ってくるとずっとシオン寮の話をしていたり、休みのたびに寮の友だちを実家に連れてきていたりしたことから、「私も姉と同様に絶対青山に行きたい」と思っていたという。

ひとり私立高校出身のFは、英語の成績がよかったので、周囲から「青山学院がいいんじゃない」と言われ、ちょうど推薦入試が始まった<sup>2</sup>ことから短大にしたということだった。

寮の存在も決め手のひとつであったようだった。東京に出ることとして、寮があることが条件であったり (A)、学習院と両方受かったが寮がある青山にした (E) という者もいた。姉の影響を受けて青山への思いを強く持っていたHは、中学校の修学旅行で東京に来た際、青短に在学中の姉にシオン第二寮に連れて行ってもらい、当時の寮監飯久保澄先生に「あなたもいらっしゃいね」とやさしく言われ、「私も必ずシオン第二寮生になりたい」と思ったとしていた。

とにかく地元を出たかったという声もあった。1期生であるAは「戦後で息苦しく、と



にかく秋田から出たかった」と、またMは二人姉妹の長女で家を継ぐことを求められており、「その前に東京に出ておきたかった」としている。

本当は四年制大学に行きたかったという声も聞かれた（6名）。短大にしたのは、四年制大学が不合格だったり、推薦に切り替えたりという場合もあったが、四年制に行くとは婚期が遅れるから、女の子だし短大でよいと言われ短大にしたという声も複数出てきた。例えば、「四年制に行きたかったけれど、父が女の子だし2年くらいでいいんじゃないと」（K）などである。明確な四年制への希望はなくても、両親の意向で短大にしたという者もあり、11名のうち、短大をはじめから希望したと思われるのは3名であった（E、G、H）。

その他の理由として、Bは、「青山学院に入った以上は標準語を覚えようと思った」と語った。小さい時から「なぜ東北弁ってこんな言葉を使ってるんだらう」と不思議に思っており、それが東京の学校を選んだ理由のひとつであったという。標準語を覚えるために、「一番簡単なのはお友だちになることだと思ひ、まず東京の人と友達になって言葉を学ぼうと思った。ある先生がニュースを聞くとよいというので、ラジオも参考にした。東北弁は恥ずかしいと思っていたから方言は出さないようにしていた。」とのことであった。またEは、「はっきりとした目標もなかったし、高校も親元を離れて下宿生活をしていたので、2年で充分と自分で判断した。在学では青短は女子大の東大と言われていた」とした。

## 2) 支部外の高校出身の場合

2名は北海道、1名は東京の高校を卒業していた。北海道の2名は偶然にも函館市出身で北海道函館西高等学校（I）、遺愛女子高等学校（J）をそれぞれ卒業していた。もう1名（N）は千葉県出身で、東京の女子学院高等学校の卒業であった。

Iは、同じ先生からピアノを習っていた5歳年上の女性が青山学院に通っていて、中学生の頃から青山という名前が頭の片隅にあったことから青短にしたという。Jは高校の同級生には大学は東京に行く人が多かったこと、きょうだいも東京に行っていたし、姉が青短の1期生だったことなどから東京に行きたいと伝えたところ、青山ならいいと言われたということだった。遺愛と同じプロテスタントであったことも青山に決めた理由のひとつであるという。またJは当時の北海道の土地柄として、女子教育に対する考え方が新しかったのではないかと考えていた。Nの出身高校である女子学院からはほとんどが進学で自分も大学に行くのが当然と思っていたという。青山を選んだのは、キリスト教系の大学に行きたかったからとのことであった。

## 2. 学科の選択

大まかにみると、本人の選択（B、C、D、E、G、I、J、N）と、周囲（主に両親）

のすすめ (A、F、H、K、L) に分かれる (Mは学科志望の理由が不明)。学科別に見てみると、違いが見えてくる。

英文科の場合は、「英語が好きだった (B)」「とにかく青山の英文 (G)」というように積極的な選択と「英語の成績がよかったため周囲に進められた (F)」という理由であった。

国文科の場合、「本が好き (D、J、N)」という積極的な選択の一方で、「英語が苦手だった (I、N)」という場合や、「文系が嫌いで、女性として文学的素養があったほうがいいと思って (E)」という回答もあった。Eのように単純に好き嫌いだけで選んでいるわけではないところは興味深い。

家政科の場合、「家庭的なものが好きだった (C)」という積極的な選択がある一方で、周囲の勧めで家政を選択した者も多かった。例えばKは、本当は英文科に行きたかったが、父に「英文出て何をやるの?」と言われ、そういわれると自分も目標はなかったの、女の子は家政がよいのではということで家政にしたという。Aも本当は英文に行きたかったが家族の勧めで家政にしたと言っている。青山の家政科はいわゆる良妻賢母教育を謳っていたわけではないが、「家政科」は女子の進学先として周囲の理解が得やすい選択であったのかもしれない。またHは小学校の時の夏休みの研究で家庭科の研究をして、それが読売子供賞を取り新聞に載った。そこで母から「あなたは家政科にしなさいね」と言われたとしている。それは自分にとって「最高の選択」だったという。

### 3. 家族の影響

進路決定や就職、結婚 (後述) など人生の節目の選択に家族が関わることは多くの卒業生の回答に共通することであった。

#### 1) 両親の影響

高等学校の選択の時点から両親が関わっている場合もあった。Hの姉は、その上の姉が進学校である山形東高校 (共学) 出身であることから自分も行きたかったが、たまたま、その年に山形東校西校舎 (後の山形北高校) として女子校ができたことから、「女の子だから女子校がいい」と言われ山形北高校に行き、Hも妹もそれになったということである。Kは八戸高校にいくつもりだったが、締め切り日に八戸高等女学校 (八戸東高の前身) 出身の母が「東高に入れたかった」というので急遽変更したという話をしてくれた。

短大進学時に関する家族の影響は、東京に出る出ない、出る際の条件、学校、など多岐にわたった。

青短への進路選択に関して、父の影響についてまずまとめる。「3年以上はダメ」(A)、きょうだいとの関係から「お前は短大にしてくれ」(D) と言われたりしていた。Lの場合、父の「お気に入りの従妹」が青短で、父が従妹の学校でしか行ってはならないと言い青短



に行くことになった。Lは自分の実力的にはもっと上を狙えたと思ったが、どこを受けていいかわからなかったし、父が許さないので青短にしたと話していた。今回の協力者のなかには父に反発したような人はいなかった。父に「姉と同様に『青山短大が最高!』』」と言われ短大にしたHは、父の言うことには芯が通っていると述べ、父の選択への信頼も見受けられる。

母の影響がはっきり見られるのは、2ですすでに述べたHや高校受験の際、母の母校に急遽変更したKである。Kの母は、家庭科の教師をしており、「青短の家政科は日本一だから」と言っていたという。北海道出身のJの母は、姪が青山の高等部に通っていたことからか、東京なら青山が正しいと思っている人で、Jの姉が青山に行くことを母がまず賛成したということだった。Jの母は、これからの女性は手に職をつけるか、資格をもつべきだという考えの人だった。同じく北海道出身のIの両親はクリスチャンではないが、小さいころから教会に関わる機会があり、ミッションスクールによいイメージがあったとのことだった。

両親は青山が日本一いい学校だというHのように、親が青山を推している場合もあった。

1で述べたように、短大という選択にも家族（両親）の考えが影響していることが見られた。例えば、Iが短大を選択したのは、4人姉妹で上2人が行き遅れたら困るという親の意向があったようだった。当時は20代後半でオールドミスと言われたそうである。またCも四年制大学は婚期がおくれるからと家族が喜ばないと述べていた。

すべての親がそのような考えのわけでもなく、Dの家は男女順番関係なく、教育を受けさせたい主義で、当時は四年制に行くと言われ婚期が遅れると言われていたが、両親は言わなかったとしている（D自身は短大に行くことになったが）。

両親が積極的に東京に出そうとする場合もあった。例えば、Fの母は山梨出身で、東京で父と出会った。空襲に遭い、山梨に疎開していたが父の郷里の青森に来ることになった。母は東京に帰りたくて、娘が東京に行ったら自分も東京に戻れるのではないかと期待して東京行きを認めたのではないかと話している。北海道出身のIの場合、母は岐阜、父は仙台出身であった。父は戦時中の医師不足で大学からの命令で函館に来た。終戦後仙台に戻ることも考えたが患者さんが増えたこともあり、函館に残ることを決めたとのことである。両親は2人とも北海道の人ではないから、「学校は東京だね」ということになったそうである。

## 2) きょうだい構成

進路選択に、きょうだい構成や出生順位に関わったと思われるのは、C、I、Mである。

Cは勉強が好きで四年制大学に行きたかったが、女の子が3人続いていたから、あまり無理も言えないと短大を選んでいく。Iは兄、姉、妹2人というきょうだい構成の次女だが、上2人が行き遅れると困るということで短大にするようにと、Mはふたり姉妹の長女

で家を継ぐよう言われていた。

#### 4. 卒業後の進路

卒業後、東京に残ったのは、企業に就職した千葉出身のNと、家政科の副手になったLのみであった。それ以外の者はみな郷里に帰った。初めから短大の2年間だけという約束だったり、東京に残りたかったが当時は自宅からの通勤でないと勤められなかったためにあきらめたり、故郷に戻ってほしいという家族の希望や、東京で特にやりたいことがなかったという理由であった。Fは、東京で就職試験を受けたが、面接で一人娘だということがわかると「帰ったほうがいいんじゃない」と言われたそうである。Dはある週刊誌が創刊するときで、記者の募集があり、勤めたかったが、母親から就職しないで一緒に暮らしてほしいと言われた。母親には感謝していた（高校に越境入学するためしばらく親元を離れていたため）ので、親の一言は重く、就職は諦めて帰ったという。

郷里に帰ってからの状況は、就職した者（F、G、J）、洋裁学校に通ったりなどいわゆる花嫁修業（A、B、D、E、H、I、M）をした者に分かれた。例えば、Hは2人の姉と同様に、卒業後数々の花嫁修業（洋裁、和裁、料理、茶道、生花、琴など）をした。Cは母親にお願いして、半年間だけ東京に置いてもらい、美容学校に行ったが、その後は戻って「見合いをさせられた」とのことだった。Kは郷里に戻ってから小さい頃から習っていた、箏に打ち込み、社中を率いるまでになる（後述）。

Gは地元のテレビ局の女子不採用で就職が叶わず、習い事や代用教員をしたりしていたところに、大同生命が業務拡張のためアルバイトを募集していたため手伝った。社員にならないかと言われ、高卒しかとらない方針だったのに、特別扱いで社員となり2年間勤めた。

FとJは短大時代に取った教員免許を活かして、教職に就いた。Fは、1年遅れで教員採用試験を受けて中学校に勤めた。そこで夫と出会いすぐ結婚した。二人とも中学校勤務だったため、Fは子どもが生まれてから玉川大学の通信教育で小学校教員の免許を取り、小学校に移り定年の2年前まで勤め上げた。F以外はみな結婚を機に仕事を辞めていたので、唯一の「職業婦人」であった。Jは、卒業後郷里の函館に戻り、洋裁学校（Iと同じ函館ドレスメーカー女学院）に通っていたが、母校に欠員が出たので、ミッションスクール女子校の教員として2年ほど勤めた。

副手として短大に残ったLは、「田舎にだけは帰りたくなかった」という。専攻科に行きたかったが、父が嫁に行けなくなると許さなかったが、副手として残ることは父も文句をいえなかった。地方出身者で副手になったのは初めてだったそうである。当時の給与ではやっていけなかったと思うので、仕送りがあったのだと思うとしている。自分は東京に残れたのがうれしかった。大西先生の紹介で「外交官夫人にでもなれるのか」と思っていたそうだが、母が倒れて1年で退職することとなる。

Nは縁故で小松製作所に就職した。2年もしないで辞めたのは、仕事がつらかったから。

当時はコピーやお茶くみが主な仕事だった。ただし福利厚生はよく、会社でお稽古事ができたという。仕事を辞めた後は、お茶を習ったりしていた。「女の人がそんなに働くという感じでもなかったのだから」家族もお稽古事をしていればという感じだったという。

今回の協力者は全員結婚していた。Eが「卒業後すぐ結婚する人は珍しくなかった」というように、多くは卒業後1、2年で結婚していた。

Aは2年後に秋田赤十字病院に勤めていた人と結婚。盛岡、秋田、仙台に移り、最後は秋田に戻ってきた。

Bも2年後に結婚。大阪に移った。

半年だけ東京にいさせてもらったというCは、福島に戻ってお見合い、その年の12月に医師と結婚した。

Dは、福島に戻ると縁談がいっぱいあり、かなり抵抗したそうである。23歳で勤務医と結婚する。

Eは、卒業後修繕くらいはできるようにとの母の考えで、洋裁学校に行ったとのことである。姑になる人がEの母校である秋田北校に聞きに行き先生がEを紹介して、卒業した年の5月にお見合い、11月に結婚したそうだ（秋田の老舗造り酒屋）。

Fは、先に述べたように勤め先の中学校で夫と出会い結婚（正確な時期は不明だが、すぐ結婚したということだったので、卒業後2、3年以内と思われる）。夫となる人は長男だったが、弟がいたため、一人娘のFのところに来てくれたそうである。

Gは、2年勤めたのちに結婚（上山の老舗呉服屋、夫は別会社の社長）。

Hは、実家が海苔問屋で、商家は忙しいので出来ることなら商人とは結婚しないと思っていた。母親が多くの住み込みの番頭やお手伝いに特に気を遣っていたのが、子どもこころに寂しかったことがあるかもしれないとしている。

Iは、父の知り合いからの紹介で医師（の卵）と見合い、相手の人間性に惹かれ、1年余りの遠距離交際の後に結婚。見合い当時、夫は当時大学院生で、父が「未知数なのがよい」と言っていたそうである。

Jは、仙台の大学医学部を卒業し、研修医として勤務していた幼馴染と結婚。教員を辞めた。

箏に打ち込んでいたKは25歳で結婚。父がいい人がいるからと家に連れてきたときに、「この人なら」と思ったという。その理由のひとつが、Kが打ち込んでいた箏に対する反応だった。すでに進められている話もあったが、夫になった人は、「生の演奏を聴いたことがないから、聴いてみたい」と言い、うれしくて弾いたらとても感動してくれた。Kは母の実家を継ぐことになっていたのだから、父は家に入ってくれるかわからないからちょっと待てと慌てたが、夫になる人の両親は教師で本人に任せると言ってくれたためすぐに結婚が決まったそうである。

母が倒れたため、副手をやめて福島に戻ったLは、親の看病の息抜きに通った労音<sup>3</sup>で

同級生だった夫と再会して結婚。夫の家庭の状況から父に反対されたが、宗教主任の小田島先生の言葉が支えとなり、自分を信じていこうと決めた。

Mは、2年後に結婚。

Nは、遠距離恋愛をしていた男性（青森）と24歳で結婚。結婚を機に青森に移った。

いわゆる恋愛結婚と思われるのはFとL、Nであった。

## 5. 授業と行事

学科ごとにまとめる。

### 1) 国文科

国文科卒業生の語りによく出てくるのは、加藤楸邨（健雄1954-1974<sup>4</sup>）、諸橋轍次（1950-1966）、川瀬一馬（1950-1974）の各先生であった。それぞれの分野での大家と呼ばれる先生に学んだことは、忘れられないことであり、卒業してから「素晴らしい先生だったんだな（D）」「有名な先生に囲まれていたのにちゃんと勉強しないでもったいないことをした（N）」とその重みを改めて知ることでもあるようだった。

川瀬一馬先生について、Eは「羽織袴で授業にいらした。真面目に聞いていなかったから、もっと勉強しておけばよかった。」と述べている。Mは「花伝書を教えていただいた。能楽堂にも連れて行ってもらった。」としている。Nは川瀬先生の授業に遅れて入ってきた友だちが帽子をかぶっていたため、いつもは温和な先生が「帽子を取れー」と怒鳴ったことをよく覚えていると語った。

加藤楸邨先生について、Iは、授業のはじめに「僕の名前を知っているかな」と聞かれたこと、奥の細道を丁寧に説明してくれたことを印象的なこととしてあげた。Jは加藤先生がシベリア抑留のことを思い出してつくられた句「生きておれ北の星座の柄のもとに」を苦しいことがあるときに思い出すという。生きていることが大事だ。後を向いたり、将来のことを思い悩んだりしないで生きていることが一番大事と思うと、何かに悩んでいても、今すべきことをするということが示された。加藤先生がクラス担任だったという同級のIとJによると、卒業後毎年クラス会をしていたそうである。先生を慕い「青楸会」と名付けられたその会は今でも続き、自分たちの古稀や喜寿といった節目には冊子を出したりしたという。

Eは諸橋轍次先生について次のように語っている。「先生のごことは要綱で知って、受験したくらい。晩年は目を悪くされていて、授業中通路を回って学生の肩をたたいて指名する。たたかれたことは名誉で、寮で話題になった。先生が書いた『掌中論語の講義』『掌中老子の講義』の2冊（いずれも大修館書店）が教科書で、お嫁に行くときは余計なものは準備しなくていいからこの本を持っていくように言われ、守って持ってきた。」諸橋轍次先生が現天皇の名づけを行ったことを述べる者も複数いた。昭和36年卒のG、H、I、



Jが入学した年は、現上皇のご成婚があり、入学式が一日早まっていた。東宮仮御所が近くにあったこともこのようなエピソードが思い出に残ることと関連しているかもしれない。馬越宮先生の源氏物語を印象に残っている授業として挙げる者もいた(M)。

卒業論文(以下卒論)について述べる卒業生もいた。Eは万葉集を選んだ。当時卒論があるのは国文だけだった。Mも卒論は(先生は不明)万葉集について書いた。Iの卒論は中野博雄先生(1950-1989)であった。楽だと思って芥川龍之介で書いた。自分ではあまり出来が良くないと思ったが先生に図書館に残すと言われたそうである。Jは卒論担当の教員から送られた和歌を今でもそらんじていた。それは「我が背子が朝明けの姿よく見ず今日の間を恋ひ暮らすかも、万葉集2841」という歌で、あなたがたもこれから結婚して朝ご主人を見送ることがあるかもしれないけれど、交通事故とか何があるかわからないからちゃんとお見送りしてくださいねと言われた。それが印象に残っており、いまでも主人を門のところで見送っているということだった。

## 2) 英文科

英文卒は3名のみだったため、少し内容が少ないが以下にまとめてみる。

Bは、ディクテーションが得意だったので楽しかった。高等部から来た友だちが隣だったが、あまりできていないようで、「見せて見せて」と言われた。

英文科で複数の者から名前が挙げたのは、西島正(1950-1966,1970-1973)先生だった。担任だったためと思われるが、「授業の内容は覚えていない(F)」とのことだった。Gは荒牧鉄雄先生(1951-1969)の授業をあげた。受験のためラジオ放送を聴いたり、参考書も偶然にも担任となる荒牧先生のものであった。Gも「授業内容は覚えていない。」とのことだった。

## 3) 家政科

家政でよく話題になるのは調理や被服の実習である。Aは中華料理の野村万千代先生(1950-1975)の授業をあげた。「当時戦後で中華料理なんてラーメンくらいしかないから刺激的だった。」Kは実習でモヤシ炒めを作った際、一生懸命炒めすぎて糸のようになってしまった。それをみた野村先生に「あなた、もやしどこに隠しましたか」と言われたエピソードを思い出として語った。Cは大西セチ先生(1950-1977)の授業で作ったオムレツは今でも目に浮かぶと言った。

Hは中村ヨシ先生(1950-1963)の授業で浴衣を縫ったことをよく覚えていた。友だちは母親やおばさんに頼んだりしていたが、寮住まいの自分は頼めなかったので自分でやった。先生はそのことをわかっていて、あまりよくできていない作品にいい点数をつけてくださった。

「堅い感じ(C)」とのコメントのように、島崎通夫先生(1950-1992)の物理学に苦手意識をもっていた卒業生もいた。

学科以外の授業で出てきたのは、多和はる先生のダンスの授業（F）や心理学の授業（A）であった。心理学の授業は魅力的で、Aは友だちと先生の自宅（渋谷区猿楽町）にお邪魔したりしたという。

教職課程を履修した者は、10名いた（C、D、E、F、G、H、I、J、K、L）。Cはその動機として、結婚しても離婚するかもしれない、その場合資格を持っていた方がいいからと語った。実際に教職に就いたのは、FとJだったが、免許を活かして代用教員を短期間した者もいた。

いつの時代も同様であるだろうが、「授業内容は覚えていな」かったり、覚えていても「面白かった」「難しかった」という印象が残っていたりであった。その代わりに教員の人柄が感じられるようなエピソードが多く語られた。自宅にお邪魔するという教員との距離感は、当時の短大の特徴であるかもしれない。

#### 4) 行事

アッセンブリー・アワー<sup>5</sup>のことが印象に残っているという者もいた。Mは、その時間のことを「なんか違う環境にきた」感じがあったと話した。Fは串田孫一<sup>6</sup>氏のお話を聞いたことをあげていた。有名な方のお話を聴くことは東京でなければできないことで、それはよかったなと思ったという。Jは、犬養道子<sup>7</sup>氏をあげた。世界を歩いて、難民支援をした話と、聖書を結び付けた話で、弱い人や困っている人を援助する精神が印象に残ったとのことだった。

学科や学校主催で行われた旅行もよい思い出となっているようだった。Eは全学で行われた1年目の福島旅行、2年目の日光旅行、国文科の修学旅行で2年次に京都・奈良に行ったことを語った。京都・奈良の旅行は川瀬一馬先生の引率で修学院や桂離宮など特別な許可が得られないと見学できないところにも行った。忘れられないエピソードとして、京都の寂光院に行った際、川瀬先生が「ここは馬鹿な尼さんが建礼門院の像に化粧をしてしまったので、見る価値がない。庭を観てきなさい」と言ったのを尼さんに聞かれてしまい、「お帰り下さい」と言われ見るができなかったことを語った。

Gは英文科全クラスで出かけた北海道夏休み旅行をあげた。10日間から2週間の長旅で、晴天の摩周湖、釧路湿原、アイヌ部落などを尋ねたそうである。

Iは国文科で出かけた北陸旅行のことを覚えていた。東尋坊やいろいろなところを回って最後は永平寺の宿坊に泊まったことが印象的だったという。

家政科だったKは英文科の旅行に頼んで連れて行ってもらったという。それは2年生の時にあった卒業旅行のようなもので、友だちが担当だった松宮薫子先生（1954-1972）に聞いてくれたところ、一緒にいっていいということになり、英文科の方たちと一緒に九州一周旅行をしたそうである。

旅行にはあえて行かなかったという者もいた。国文卒のDは京都への修学旅行があった

が、やりたいことをやりすぎていた感じがあったので、親はお金の心配は要らないと言ったが、断るのがエチケットだと思って行かなかった。

## 6. 授業外の活動、経験

2年間という短い時間のなかで、部活動やサークルに打ち込んだり、趣味などに励んだ者もいた。

Dは、せっかく青山を選んだ以上は地方にはできないことをしたいと思って国劇研究班に入った。一番のめり込んだのは能で、「遊びだけど質の良い遊びをさせてもらった」と語った。学友会文化部の部長を務め、バイオリンコンサートも手伝った。

Iは、短大の部活ではなく、学院大学のフォークソングなどを歌う“うたう会”に入った。大阪のフェスティバルホールで関西学院大学のメンバーと合同で歌ったこともあったという。

Mは友達の影響で演劇部に入った。当時は学院大学との交流は少なく、男子がいないため東工大の演劇部と交流していたとのことだった。山形出身でアクセントが違うということで通行人の役をしたり、広告を取る仕事をして楽しんでいた。ブレヒトとかギリシャ悲劇を扱っていて、今まで自分の生活とは関係なかったものが身近になったという。

今回の協力者のなかで、もっとも課外活動にのめり込んでいたのは、馬術部に入ったGかもしれない。Gは寮の先輩に誘われて入った。当時青山の馬術部はオリンピックに出場する選手がいるくらい強かった。馬場は校内にあり、授業が終わるとすぐに馬場で練習をした。その後馬場が綱島に移ってからは、朝の始発電車で渋谷から乗り、朝練をこなし、朝の授業に間に合うように戻ってきたという。部費が高く、部活のためにアルバイトもした。府中、船橋競馬場で子ども相手のポニーの世話のアルバイトで、部のためであり個人収入はなかったという。

Lは青短出身の従妹のすすめで4大のサークルに入った。女子高で男を知らないから4大に行けと言われたそうだ。そのおかげで男性とも普通にお付き合いできるんだと思ったそうである。

趣味的活動としては、BやCは音楽会にでかけたという。当時は日比谷公会堂くらいしがなく、奥田耕天先生<sup>8</sup>の指揮のコンサートを見に行ったりしたという。Cは音大に行きたかったというくらい音楽が好きで、卒業後も音楽に支えられた人生を送っている（後述）。ただ、音楽会やコンサートに行くにはそれなりに費用がかかる。学生らしい楽しみを見出している者もいた。Fは「労音」に入り、芝居を観たり音楽を聴いたりした。あとは寮の図書館で本を読んだ。みんなに本が好きねと言われたが、嫌いではないけどお金がなかったからであった。お小遣いはなかったけど、楽しかったという。

## 7. 東京での住まいと寮生活

### 1) 東京での住まい

自宅から通っていたN以外はみな東京での住まいが必要なわけであるが、1期生のAが入学した当初は寮がなかった(金王寮、のちのシオン寮ができたのは1951年の5月)ため、Aは原宿にあった救世軍<sup>9</sup>の寮に入った。寮長は救世軍士官夫妻で、奥様の方が主に寮生の面倒をみてくれ、食糧難の時代に毎日お弁当をつくってくれた。寮には、青山以外にも東女の人もいた。アメリカ独立記念日に神宮球場でのアメリカ兵の集まりに連れて行っていただき、見たこともないクッキーやハンバーガーを食べた。

寮ができて、希望すれば必ず入れるわけではない。「大学に入るよりも難しい(E)」という声があるくらい寮に入るのは狭き門であった。今回の協力者でも、6名(B、C、D、I、K、M)は寮に入ることを希望するも入れなかったという。Dは「受験の時にシオン寮に泊まって、そのまま入寮できるものだと思っていた」ら入れず、入寮できなかった理由について面接のときに労働歌を歌ったのがよくなかったのか、よく訪ねてきた兄の存在を疑われたのかと考えていたようだ。

B、I、Kは2年目に寮に入ることができた。Iは一年間東長崎に下宿して通ったが、どうしてもシオン寮に入りたかったので、お友だちと一緒に加藤楸邨先生のご自宅にお願いしに行った。そのおかげなのか(真偽は不明)、2年目に入ることができたと言った。

それ以外の者は、親戚の家(から途中で教務課紹介の下宿に)(D)、川瀬先生の紹介の個人の寮(M)から通っていた。

入寮希望がなかったのは、祐天寺に親が買った家にきょうだいと住んでいたJ、青短出身で卒業後初等部に勤めていた従妹と住んだLであった。

シオン寮に入れたものの出てしまう者もいた。Cは3か月ほど高校の先生の知り合いのところにて、空きが出たということで寮に。でも門限などが厳しくて2年目は出て青短に入学した妹と一緒に住んだ。

### 2) シオン寮での生活

当時の寮は6時起床、朝食後に掃除があり、登校。門限は6時、夕食後に礼拝がある日もあり、9時消灯という生活。寮生活を厳しいと評したCも友だちとの出会いなどは楽しかったと述べていた。他の者にとってはもちろん、「青短=寮ぐらいに思っている(H)」「一番大きなポイント(G)」という者もいるくらい、2年間の短大生活のなかで大きな存在であったようだった。個別に寮生活についての思い出をあげていくことにする。

言葉に関心のあったBは、「全国という言葉聞いたことは大きな変化であった」と語る。特に九州と東北との差を感じたとのことだった。また考え方や生活習慣も九州と東北では違っていたという。当初は、日本地図の中で、北海道があって東北があって、九州がある、離れたところで暮らした人が交わるんだらうかと、それをちょっと心配したが、なんで



もなく交わることが出来たとしていた。宮崎県出身で現在も在住の寮仲間とは、今でも電話で交流する間柄であるという。

Eは、「(物事を)全部前向きに善意に解釈するのは、青短と寮生活を送ったから」と語る。遅くなると食事を残しておいてくれたり、グループで出かけるときは、みんなのお弁当を作ってくれたりと恵まれていた。行事もたくさんあり、クリスマスには有志で聖劇をしたり、日本橋の紅花からコックが来て調理してくれた。歌舞伎座観劇もあった。寮生活は楽しい思い出で溢れているようだった。

Fは、「大学の授業のことは残っていないが、寮生活のことは一番残っている」と語った。4人部屋に火鉢。朝火をもらいにいって、皆で火鉢を囲みお餅を焼いたりした。北は北海道から鹿児島までいろいろな土地の、いろいろなお土産を持ち寄って、自分はりんごをよく送ってもらった。

寮生活が「一番大きなポイント」だとしたGは、日曜日は教会に行ったり、時には聖書讚美歌をもったままエスケープもしたという。

Hは、「寮の友だちはきょうだい」と語る。今でも病気になるととても心配である。寮の思い出は、どれをとっても楽しい。紅茶の味を覚えたのは寮で、消灯後同室の4人で内緒で飲んでいたら見つかってしまったことも今となればよき思い出のようだった。

Iは、全国から集まっていたが、みんないろいろ(実家のこととか)詮索したりすることがないから、何のストレスもなかったと語った。5時過ぎに授業が終わって、門限は6時。食事、礼拝があり、消灯は9時と忙しかった。日曜だけ唯一自由だったが、教会に行きなさいと言われる。同室の4人で聖書と讚美歌をもって渋谷のレストランに行ったりしていた。

Kは、川尻知恵先生にいろんなことを教えていただいた。やさしいけれど厳しいところもあった。卒業後のお里帰りのときに、相談すると親のように接して下さった。家からの荷物が届いてホームシックになると慰めてくれたり、教育実習中にお弁当をもたせてくれたりしたことを話していた。

寮には、東京での親代わりとなる寮監がいる。今回の協力者から出てきたのは、飯久保先生と川尻先生であった。日曜の礼拝のエスケープは、GとIが指摘するように先生たちにはお見通しで、都度厳しく注意などもしなかったのだろう。同室の4人と紅茶を飲んでいるのを見つけたHは、今でも紅茶はシオン寮の匂いと香りがするという。またIは、結婚が決まったとき、夫となる人がIのことをシオン寮に聞きに来て、別の職員が「あのグループは・・・」と言いかけたところ、飯久保先生がうまくさえぎって話題を変えてくれたというエピソードを明かしてくれた。規律正しい寮生活を送るよう指導する一方で、夜に紅茶を飲んだり、隠れて何かを食べたりという小さな悪事を見てもみぬふりをするようなおおらかさがあったのだと想像する。

## 8. キリスト教

今回の協力者に、クリスチャンホーム出身の者はいなかった。入学前にキリスト教との接点があったのは、小さい頃教会の日曜学校に通っていたというD、教会付属の幼稚園に通い、小6まで日曜学校に通っていたH、高校がキリスト教系のFとJであった。短大で触れたキリスト教に対して強い違和感をもった者はいなかったが、Eは「アーメン」が言いくかかったが、同室のクリスチャンの友だちに「同意します」という意味だと教えられ、素直に言えるようになったと述べた。

「夏休みの宿題が聖書の一部を読んで自分の意見を書くというもので、青山はやはりキリスト教の学校だなと思った。(A)」「礼拝なんてしたことないから楽しみにしていた(C)」「(礼拝について)なんか厳粛な雰囲気これで青山かって思った(M)」というように、異文化体験的にとらえているものもいた。

Bは、キリスト教について特に意識していない。入学後に触れて、良いものだと思ったとしている。国文科のDは、キリスト教が裏付けとなっている小説と日本の小説はどう違うのだろうと思ったという。また授業の間の礼拝で讃美歌を歌うのは楽しかったと言った。

Eは、どんな人でも許しなさいという教えは板についている。宗教環境はすてきな人間性に関わっているのではないかと思うとしていた。

クリスチャンにならなくても熱心にキリスト教活動に参加したり、影響を受けたと思われるのは、HとLである。シオン寮に入っていたHは、日曜日は青山学院教会に通っていた。日曜日は礼拝に行くため、ほとんどの用事は土曜日に済ませていたという。野呂芳男先生<sup>10</sup>のお話は素晴らしかったと語る。寮監の飯久保先生に「あなたはちゃんと行ってるのね」と信頼され、礼拝の後は寮にいたため電話番号を任されたりした。あまりに熱心に教会に通っていたので飯久保先生に「あなた(洗礼を)受けないの?」と聞かれ「親に相談してみます」と答えた。結局受けなかったとのことだった。Hは寮で同室の2名が在学中に洗礼を受け、それにも強い影響を受けたという。うちひとり是在学中のつらい体験により洗礼を受けることとしたが、両親に反対されて、入院するほど体調を崩していた。Hは洗礼を受けるまでのプロセスの厳しさを目の当たりにして、洗礼を受けるには「ものすごい決心が必要」であると感じたようである。

Lは宗教主任であった小田島嘉久先生(1955-1973)の影響を強く受け、その言葉がその後の人生の支えとなっていると語った。Lは礼拝の時間に、ほんくらが青山の英文科でもないところに来ていいんだらうか、と自分のことを考えたそうである。小田島先生から「君たちは社会人になるけど、人生を生き活きと生きてほしい。」と言われた。さらに生き活きといきるのはどういうことかと問いかけられた。信じて生きることだよと言われ、信じるものがキリスト教かどうかは別として、とにかく人生を生き活きと生きてみたいと思ったという。結婚を反対されたときも小田島先生の言葉を支えにしたと言った。他にK

も小田島先生のキリスト教学の授業が興味深かったとしている。

今回の協力者で、受洗したのはJだけであった。Jは卒業後クリスチャンになった。これにはJの子育てが大きく影響している。後述するように、Jの3番目の子どもはダウン症であった。息子が幼稚園の時に誘われた家庭集会で、ヨハネによる福音書9章1-3節に出会う。盲人に対して、親の罪が現れたのかと問われたイエスが「神の栄光が現れるためである」と答える。この聖句にJは「この鼻たれ坊主が栄光を表す?」と感じ「どんなふうになるのだろうと、育てるのが楽しみになった」と語った。実際子育ては大変であったが、「この子を育てると神様が私を支えてくれるかもしれないと思った」という。それから教会に通い、自身、ふたりの娘、ダウン症の息子も洗礼（バプテスマ）を受けた。30代のときは、あの人はこれをしてくれないと言ってばかりの「くれない族」であったが、今は将来のことも、神様は全てご計画してらっしゃるから、私達は聖書のみことばに開き感謝して暮らしていたら神様は必ず最善に導いて下さるっていう確信があるという。遺愛のころからキリスト教に触れていたJは、キリスト教を知ってはいたが、信じるというところまでいったのは青山と息子のお陰であると語った。

## 9. 卒業後の社会的活動、ボランティア

短大同窓会では、卒業生の交流に加えて「生涯教育」「ボランティア」を活動の柱にしている。本プロジェクトでもそれに関わることを尋ねた。連れ合いの転勤が多くあった者、子育てに加え介護をしていた者もあり、活動の期間やきっかけ、内容はさまざまである。卒業後の歩みをライフコースと共に個別に紹介していく。

勤務医と結婚したAは、秋田のほか、盛岡、仙台を経て、秋田に戻ってきた。40歳くらいから点字図書館の朗読ボランティアをはじめ73歳まで続けていた。視覚障害の方とのつながりが楽しかったし、ボランティア精神は青山で知らず知らずのうちに養われたのかなと思うと述べた。犬が好きで、四国犬を3代飼っていた。最後の犬が亡くなった後、ラジオで盲導犬を育てるパピーウォーカーのことを知り、問い合わせた。パピーウォーカーは1年で手放さなければならず、それができるか確かめられたときに、自分にはできないと泣く泣くあきらめたという。

Bは、結婚を機に大阪に移った。東北と全く異なる大阪での生活は大変だったが、音大進学を考えたこともあるくらいBは、自分には音楽があると、コーラス部を作ったという。住んでいた団地で呼びかけてピアノができる方に伴奏をお願いした。コンクールには出なかったが、音楽祭に出るために練習した。その他大阪では良い音楽の先生に恵まれ、エレクトーンも習い、指導者の資格を得て教えるなどしていた。東京に移動してもコーラス部、合唱団を作ったりした。郡山でも日本キリスト教団が母体（郡山教会）の合唱団に関わっており、音楽と歩む人生であった。

Cは、謡をたしなんだが、医師である連れ合いが開業すると忙しくなってできなくなっ

たという。5人の子どもの世話もあり、患者さんから夜中でも電話がかかってきたり、赤ん坊を背負って病院の仕事を手伝ったりする生活で、自分の時間はあまり持てなかった。夫とゴルフやテニスをしたが、続かなかった。水泳は続けている。

Dは、勤務医だった夫が故郷で開業するために福島に移った。そこで舅と姑の介護をした。夫は姑との関係を心配したが、最後は「とっても仲良しになった」という。4人の子どもの世話と医院の仕事もあって忙しかったが、姑が寝たきりになって9年間、舅も枕を並べての 때가5年の介護は「私にとっての宝物」だとDは言う。辛いのは最初の半年で、半年たつとリズムができてくる。そうすると達成感の方が強くなって、今でも「奥さん、よく働いたね」と言われる。よく働いたと思うとしていた。宗教上の制約がある人が患者できたり、あらぬ理由で脅迫されたり、いろいろなことがあったようだ。Dは短大進学で東京に行ったことで、「いろんな経験をしたのは、いろんな人のことを理解できる様になったかなあ」と語っているが、さらに夫が開業したことで、「開業医でなかったら経験しないようなことをいっぱいさせて貰って、いろんなことが理解出来て、困った人のこともわかって、それは良かったと思っています」としていた。震災もあったが、手入れをしながら続け、今も2人とも医師である息子夫婦とともに事務長として手助けをしている。両親を見送った後、これまで介護に使ってきた時間をどう使うのかと思い、アートフラワーを始めた。夫を亡くした後、孫にしょんぼりしていると言われキルティングをした。いつも忙しくしていたので、何かしないとられない。時間が空くと落ち着かないとのことであった。

秋田の老舗造り酒屋に嫁いだEは、家にいることもないくらいボランティア活動をしていたという。婦人会活動（飯田川婦人会長、県地域婦人団体連絡協議会会長を歴任）を中心に、県結核予防婦人会長、赤十字奉仕団委員長としても活動した。ボランティアに関わるようになったのは、子育てがひと段落した頃、当時大学生だった長男に「積極的に社会参加したほうがよい」と背中を押されたのがきっかけだという。小さい頃の自分を知っている人から「〇〇ちゃん（Eの愛称）、あんた前からそんなだったけか？」と言われてたりするが、物怖じしないのでなんでもできるようになったのは青山の愛と奉仕の精神のお陰であるとも語った。2016年には、旭日双光章を叙勲している。

教員と連れ添い、小学校教員として勤めたFは、30代で両親が病気となり、引き取って介護をした。当時は専業主婦となる人も多かったが、自分は生活をしなければならぬし、親の面倒もみなければならぬので仕事を続けた。定年まであと2年という頃、母の具合がいよいよ悪くなり、退職した。夫は定年後すぐに病を得て亡くなってしまった。夫が亡くなり、どうしようと思っていたときに、「書道を教えたらいいいのでは」と言ってくれる人がいて、教えるようになった。書道は小学校で毛筆指導をするための講習会で面白いと思った。国語の教員だった夫がスラスラと書いているのをいいなと思い見ていた。始めてみると楽しかった。現在も続けている。生徒さんとの付き合いから元気をもらってきたという。子どもたちからは今の学校生活のことも聞けるし、高校生の様子もわかる。大人と



は料理の話をしたり。いろいろな意味で助けられている。

Gは、舅が骨折をきっかけとして、せん妄で100日間の入院治療を行った。高齢で体力の衰えがみられたこと、また看護状況の劣悪さを見かねて、自宅に連れて帰った。10年介護をした。厳しい人だったが、最後はありがとうと言われた。舅を送って自分の時間ができてから何をしようと思ひ、最初は木目込人形が面白そうだった。教材屋さんに、レカンフラワー（花の宝石箱）<sup>11</sup>というものを教えてもらひ、生け花はダメだったが、これならいいかなと思ひてはじめた。インストラクターの資格を取り、教室を開くまでになり、現在も続いている。時折「かみのやま寺子屋」と称する学童保育の子どもたちへの体験会も行っている。自分で作って作品展に出すというよりも、広めたり、教えたりするのがいいのかもしれない。新しいやり方が出てきたら、遠方まで講習を受けに行ったり勉強を続けている。

Hは希望かなってサラリーマンの夫と結婚。青森から新潟まで9回の転勤を経験した。後半は、子どもの受験などがあったので単身赴任だった。2週間に1回は掃除や洗濯などをしに行っていてとても忙しかった。生まれ育った旧家の商家は両親ともに忙しく、多くの従業員への気遣いをいつも感じて、自分はできることなら自分の子どもたちと多くの接点を持てる生活をとと思ひ、サラリーマンと結婚したが、転勤のたびに子どもの学校が変わったりしてサラリーマンも大変だった。自分のことをできるようになったのは、仙台に帰ってきてから、(夫の)上司に勧められて今まで経験したことのない謡と仕舞いのお稽古をした。花嫁修業として習ったお稽古は、ひとつも身に付かなかったような気がするが、結婚後忙しさのなかで興味をもってはじめたお稽古は真面目に頑張ったという。転勤をしても青山の友だちとはつながっていた。9年ぶりに仙台に帰ってきたときに東北支部の立ち上げの話があり、先輩や後輩5人で一生懸命関わった。大変だったが、とても楽しかった。

Iは勤務医の夫と結婚。数年後に夫の留学に伴ひ、米国サンフランシスコで2年間生活する。帰国後は東京に勤務となり、東京で暮らす。そこで短大卒業生による英会話の会、みどりの会に入る。50歳の時にインテリアコーディネーターの資格を取った。アメリカに住んでいたときにインテリアに興味をもったことがきっかけであった。住宅展示場の仕事に誘われ、仕事をしたことがないからしてみたかったが、誘われたのが土日の仕事で、土日は来客が多くて忙しくてできなかった。義母が93歳の時、同居することになり、9年間笑いの絶えない毎日を過ごした。仙台に戻ってきたのは、震災でめちゃくちゃになった仙台の自宅をリフォームしたこと、夫の仕事が落ち着いてきたことが重なったことだった。その後義母を102歳、実母を106歳で見送った。

Jは同郷の夫と仙台で結婚し、3人の子どもを授かったが、3番目の子どもはダウン症であった。当時は今のような情報がなく、障がいをもつ子どもの親は拝み屋に行ったり、注射を受けさせに行ったりと駆け回っていた。自分は夫が小児科医で障がいは薬では治らないと知っていたため、そのようなことをせずに済んだ。ダウン症の小さな子どもを育て

るのは、大変知恵と体力を使うことであった。勤務医の夫が開業してからは、病院の経理、教会、育成会<sup>12</sup>、と家事の4本柱の生活だった。息子のお陰で携わった育成会の活動では、県の代表を務めた。代表になるといろいろな会議に出なければならず、そのお陰で全国に知り合いや仲間ができた。Jは周囲に自分の子どもがダウン症であることを打ち明けるようにしているのだが、そうすると相手も悩みを打ち明けて相談されたりする。息子がいなかったらこの人とは知り合わなかっただろうなという人が大勢いる。息子のお陰で療育は人の何倍も苦勞したけれど、恵みも何十倍いただいたと語っている。息子は現在自立し、平日はグループホームと職場を往復していて、教会が大好きに育った。

Kは、卒業後八戸に戻り箏に打ち込む。茶道や華道もして免状はいただいたが、年数で免状をもらえることに疑問を感じてやめる。箏は試験があって受からなければ免状がもらえない。宮城流をやりたくて盛岡まで習いに行った。試験を受けるように進められていたが、ちょうど結婚が決まり、試験の時期が重なったため延ばしてもらおうと思ったら、試験官の先生に受けるように言われた。実家の父には反対されたが、夫の両親が応援してくれ、新婚旅行の4日後が試験だったが受けた。その試験は関東、関西、九州などの大都市が多いが、試験(4課題試験がある)で上位で合格。その後は社中を率いて海外でも(4度)演奏するなど箏で活躍。現在は社中代表を務めている。

Lは卒業後家政科の副手となり、大西先生のもとで働いた。夜は大西先生の紹介でお茶の先生のところに通った。大西先生は預かるからには、自分のことを育てようとしてくださったのだと思う。勤めて2,3か月経った頃、先生から「あなたはお嫁に行ったら姑さんに嫌われるよ。甘えないから。どうしたらいいか聞いてこない。自分でなんでもしようとしている」と言われたことがあった。それまで、叱られないよう、ミスをしないようにしていたが、その言葉で肩の力が抜けた。ありがたかった。家庭の都合で福島に戻り結婚。結婚後は代用教員をした。家庭科なのに国語ももたされた。50代で自彊術に出会う。習っていると身体が整っていくのがわかり、心も整う。インストラクターをするまでになり、それが生きがいになっている。手作りのお菓子を会員の方に食べていただくのも楽しみであるという。

Mは、夫の転勤で東京、北九州、名古屋に行ったりした。いろんなところで社宅に住んだが、青短の2年間でいろんな人であったことがプラスになっているような気がするという。転勤で山形に戻ってきたときに、子どもの進学の手しにと、手芸店でアルバイトをした。それは糸を買ってくれた人に、教えるというより、一緒にやりましょうというサークルのような感じだった。

Nは、結婚を機に青森に移った。付き合っていた彼が長男ではないから、「家」に嫁ぐわけではないからいいかと思っていた。ただ末っ子だった夫が家業を継ぐことになり大変だった。嫁ぎ先は老舗の書店。連れ合いは63歳で亡くなる。夫が存命中からひとりで、スポーツジム通いや登山などをしてきた。最近は読書会にも参加している。



## 10. 人生にとって青短とは

インタビューの最後に尋ねた質問である。

多くが語るのは、青短で過ごした2年間や、青短の存在は、人生のなかで特別な時間であり、場所であるということだった。

Bは、「ゴールデンエイジ！長い一生のなかでもたった2年間がゴールデンエイジ。」

Cは、「大切な大切なかけがえのない2年間」

Fは、「青春。あの時が一番輝いていた」

そして、Gは、「その2年間だけスポットライトが当たっている」と言った。だからこそ、「思い出すとふわっとしてこころの宝物」であるという。

Mは、「80年の人生のなかのたったの2年間だが、気持ちに占めるものが大きい」という。

Gの「宝物」という言葉によく表れているように、形あるものではないが、人生のなかで重要な位置を占めている時間、場所であることがわかる。

その後の自分の考え方や人生の土台となっているという回答もあった。

Aは、「無意識のなかで社会奉仕の精神が培われ身に付いた」と答えている。学校や寮生活がなかったら、一生キリスト教とも疎遠であったのではないかと語る。

Dは、「自分の考え方の基礎というか土台になっている気がする」。

Eは、「本当にありがたく思う短大での2年間で、諸橋轍次先生の『教え、ことば』の意味も年を重ねた今やっと理解が膨らんでいる」と語った。

Hは「心の支えのひとつ」であると語った。Hは、「たった2年なのに、ずっと心の中を占めている。今現在お付き合いしている人は不思議と短大の人が多く思う。思い出と言えば青短。転勤しても青短の方に電話したり年賀状出したりしてずっとつながってきた。「同じ釜の飯」と言うが、不思議だけれど、安心してなんでも話ができる。ものすごく頼りになる。」

Iは「自然に人を思いやる、優しくおおらかな精神が身に付いた」という。長い人生のなかでたった2年過ごただけなのに、その後も何かと縁があり、自分の生活を豊かにしてくれている。無意識の層に入っているさまざまなことが、「2年間のなかで聞いたことだと」この2年間はとても大きかったと語っている。

J「青山での2年間は、20歳の自分にとっては1/10だが、自分の人生の基礎となった大きな存在」

K 素晴らしい先生方とお友だちに恵まれて、自分の人生を確かなものにする場所だった。短大の他に大学の講義も受け、充実した2年間であり、それらはすべて生活のなかで活かされているという。

Lは、今までの人生を振り返って、とても幸せに過ごすことができた。その基盤となったのが青短だったと思うとした。人を信じ、いつも笑顔に出会えるように考えて行動したいと念じつつ、日々を過ごしてきた。

Nは、ものの見方が広がった。今まで知らなかった、地方のいろいろな人がいて、考え方も違って付き合ってみると面白かった。

HやKが言うように、青短での人の出会い特に友人との出会いはかけがえのないものである。先に紹介したIとJのほかにも、卒業してからもクラス会を年に1回くらいしていた(C)という声は複数あり、Mも「得難い友だちを得た。出席番号が近い人でなんとなく気があって、今でも続いている」としている。現在まで続く深い関係を語る者は多かった。Iは「たった2年間なのにここまで続くのは何なのだろう」という素朴な疑問をもっていた。もちろん青短生だけが生涯通じる学生時代の友人関係をもっているのではないだろう。〇〇だからという具体的な根拠があるわけではなく、青短は特別と思うこと自体に意味があるのだろう。

同窓生とのつながりが支えとなることもある。Dは、姑の介護で大変な時に、同窓会立ち上げのお知らせが新聞に載っていた。青山の人たちだったら息が抜けるかもしれないと思って参加するようになった。良い気分転換になり、「救われた」としている。

Hも青短の特別感について言及しているが、Hの場合は同じ釜の飯を食った仲間に対する信頼である。一方Dの場合は、会ったこともない青山の人、同じ場で学んだ(というだけの)人への信頼である。

この節の最後にEの言葉を紹介する。Eは青短は「人生の支え、基礎になっている」と語り、「エデンの園」と評した。さらにEは、婦人会の活動等で、学歴を書く時は必ず「青山学院女子短期大学」とフルネームで書くと語った。短大ではなく、「青山学院女子短期大学」を卒業したことに大きな意味があり、そこに信頼と誇りを持っていることの表れであろう。

## おわりに

本稿では、現在東北支部所属で、昭和20年、30年代の卒業生へのインタビューをまとめた。ある見方をすれば、その時代に短大とは言え、東京の大学に出してもらえるという環境は恵まれたものであるといえるかもしれない。しかし本稿で見てきたように、自分の希望通りに進学した者は多くはなく、その選択のなかにはいろいろな「あきらめ」が伴っていた。東北支部に限らず、卒業生の話を聴いて、惹きつけられるのは、与えられた限られた環境のなかでしなやかに生きるその姿である。自身の選択を「流されている」と評する卒業生もいたが、話を聴いているとただ流されているわけではなく、そのなかで楽しみや好きなことを見つけていくたくましさがあった。そのたくましさが、この時代の卒業生ならではのものなのか、以降の卒業生にもみられるのか、次回以降のまとめで再考したい。

- 1 1961（昭和26）年までは、文科国文専攻、英文専攻。翌年より、国文科、英文科となる。
- 2 キリスト教学校教育同盟加盟校の推薦入試は1958（昭和33）年から始まった。
- 3 全国勤労者音楽協議会の略称。全国各地に会員を有する音楽鑑賞団体で、1949年11月大阪で創立された。労音の特徴は、会員（聴き手）が中心となって企画・運営を行うところにあり、それまでは高嶺の花であった音楽会を、勤労者を中心とした一般市民のものにしてきた。  
<https://ro-on.tokyo/about> (2023.8.24)
- 4 教員名の後ろの括弧内は青山での在職年
- 5 アッセンブリー・アワーとは、1957年に新設されたもので、礼拝や宗教行事を正規の授業と同様に義務化し、キリスト教学の単位に加算するというものであった（65年史p93）。短大生の礼拝への出席率の悪さから生み出された苦肉の策であったようである。今回の協力者たちの記憶に残っているのは、1960年に始まった、学友会主催の講演会のことではないかと思われる。
- 6 詩人、哲学者、随筆家。1915年生まれ2005年没。
- 7 慈善家、環境活動家、小説家。首相を務めた犬養毅の孫。1921年生まれ2017年没。
- 8 オルガニスト。青山学院大学名誉教授。
- 9 世界で起きているさまざまな問題に苦しみ、救いを求めている人々のために社会福祉・教育・医療などの支援を行いながら、伝道事業を行なっているイギリスで生まれたキリスト教（プロテスタント）の団体。「軍」と名称がついてるように、軍隊式の組織編成で、メンバーは制服・制帽・階級章を身につけることになっている。救世軍HPより<https://www.salvationarmy.or.jp/about> (2023.8.24)
- 10 青山学院大学文学部神学科教授（当時）、ウェスレー研究の組織神学者。
- 11 特殊な乾燥剤を利用し、急速に乾燥させることにより、いつまでも残る新しいフラワーアレンジメントの表現方法。永遠に咲き続ける花の宝石のようだという事で命名。
- 12 一般社団法人宮城県手をつなぐ育成会。全国手をつなぐ育成会連合会の下部組織で、知的障害のある子を持つ親の会。



# 青山学院女子短期大学同窓会東海支部卒業生 聞き取り調査のまとめ

## - 1952 (昭和27) 年から1965 (昭和40) 年卒まで

趙 慶姫

### はじめに

本稿は東海支部の卒業生10名からの聞き取りのまとめになる。東海支部では2021、2022年の両年とも、静岡県部会の取りまとめによる調査を静岡市で行い、その他の地域（愛知、岐阜）の方については名古屋市で行った。

10名の内、静岡市で調査した卒業生4名をA～D、名古屋市で調査した卒業生をE～Jとする。卒業年、学科、在住県は次のとおりである（在住県は調査当時のもの）。

### <聞き取り対象者一覧>

	卒業年	学科	在住県
A	1952 (昭和27)	国文	静岡
B	1957 (昭和32)	英文	静岡
C	1964 (昭和39)	英文	静岡
D	1964 (昭和39)	児童教育	静岡
E	1953 (昭和28)	英文	愛知
F	1957 (昭和32)	国文	愛知
G	1957 (昭和32)	家政	愛知
H	1960 (昭和35)	家政	愛知
I	1963 (昭和38)	国文	愛知
J	1965 (昭和40)	家政	岐阜

## 1. 出身高校と女子の進路選択

どの支部にも共通するが、調査の対象者が支部内の高校を卒業しているケースと、短大卒業後に結婚等により他地域から転入したケースがある。本章では、出身高校が支部内か支部外かでグループに分けて比較してみる。

### 1) 支部内グループ

出身高校は支部内グループに特徴が見られる。6名の内B（S32卒）、F（S32卒）、D（S39卒）の3名が静岡英和女学院中学校・高等学校を卒業している。青山学院と同じメ

ソジスト系である静岡英和からはB、Fと同期では5人、青短に入学している。キリスト教学校教育同盟加盟校の推薦入試は1958（S33）年から始まっており<sup>1</sup>、Dは推薦入試で入学している。Fは青山出身の英和の先生に、Dは英和から青山に進学した教育実習生に、それぞれ憧れを感じたことも青山を選んだ理由と述べている。いずれも四大の卒業生、学生だったが、青山の雰囲気に関心をもちたということだろう。Fの調査に同席した支部長によると静岡県にはミッション系の中高一貫校が多く、そこから青短への進学者が多いという。

Bによると同期の進学者数は四年制7・8人、短大をあわせて20人近くいたものの、その前後の学年は一桁だったという。B自身、「高校から上の学校に進むことは思っていなかった」と述べている。Fは「進学以外は就職、花嫁修行、洋裁学校といった進路だった。6歳下の妹は県立高校から四年制に進学しているが自分の頃は短大が普通だった」と述べておりFの妹と学年が近いDは、四大に進むつもりだったが、短大に児童教育科ができたので変更したという。英和で同期の親友が東京の音大に進学しているというエピソードからも、Dの頃は四年制進学が増えていたことが窺える。

同じく支部内グループのI（S38卒／豊橋東高等学校）、C（S39卒／磐田南高等学校）、J（S40卒／大垣北高等学校）はそれぞれ共学の県立高校出身で、Dと同様にB、Fの6～8年後であり、「高卒就職は少なく女子は静岡大の教育学部が多かった。同期で青短は3人」（C）、「ほとんど進学で東京が多かった。女子は短大が多く四年制に行くのは教職志望者だった。青短は自分の他にも。父がお嫁に行ったら世間を見る機会がないからと言ってくれた」（J）と変化している。またIは進学組四大コースに入っていたが、2歳上の兄の大学進学が1年遅れたことで、二人が4年間では大変だから、青学に行きたいなら短大にして、シオン寮に入ると良いと父親に言われて、進路変更したと述べている。これらの聞き取りから、私立の中高一貫校、公立高校いずれも昭和30年代前半と後半で女子の進路選択に変化があることがわかる。

## 2) 支部外グループ

支部外グループは東京出身の2名、A（S27卒／青山学院女子高等部）、E（S28卒／小松川高等学校）と、他地域出身の2名、G（S32卒／木曾東高等学校）、H（S35卒／北海道・深川西高等学校）に分かれる。

東京出身のA、Eは青短草創期の入学者である。1期生のAは青山学院の四大に希望する国文科がなかったところに短大ができたので、迷わず短大・国文科を選んだという。戦後教育改革により原則として男性に限られていた大学進学が女性にも開かれ、青山学院にも1946年に女子専門学校が開設された。その後、四年制女子大学開設構想から二年制女子短大に方針転換され1950年の短大開設に至っている<sup>2</sup>。Aは母方の祖父が学問に熱心で子どもの教育に力をいれていたというが、当時、四大進学を考えていたというのはこういう青山学院の教育環境にあったからこそで、一般には珍しかったのではないだろう



か。一方、東京、大手町に近い気象庁の官舎で育ったEは、戦争の影響で東京と千葉で何度か転校している。女学校5年と新制高校に1年、その後進学を希望しながらも母親の反対でかなわず、1年間の「ストライキ」を経て、2年間であればということで短大英文科に入学している。そのため2期生であるがAとは同年齢である。

進学の強い希望をもち反対する母親を説得したE、国文を学びたいという理由で四大ではなく短大を選んだA。戦後まもない時期、進学はもちろんのこと、何を学ぶかについても明確な意志をもっていた二人の話の聞いたことは貴重だった。女性が高等教育を受けることが可能になった時代に、その受け皿として青短が誕生したことの意味をあらためて実感する機会になった。

この二人の4・5年後に入学したG（S32卒）は、林野庁に勤める父親の転勤により6回ほど転校を経験している。高校は自然豊かな木曾谷にあり、1学年150人中進学は5～6人、就職が当たり前で、G自身、卒業したら銀行にでもと思っていたという。父親が東京出身で、「自分はテニスばかりでゴボウのように真っ黒だったため、少し垢抜けるよう東京に行くのが良いと父に言われた。父が学生時代、渋谷に下宿していて青山の学生の雰囲気を見ていたことから青山にとまった」と述べている。

一方、北海道出身のH（S35卒）は「1学年250人のうち、女性の進学はわずか、進学の場合もほとんどが短大だった、女子が東京にということは考えられず、自分は大学に行きたいと思っていたが札幌ぐらいだろうと思っていた」と述べている。両親が娘を東京に進学させたいと考え、仕事の関係でよく上京していた父親が東京の知人に相談し、青短を勧められたという。妹二人も青山に進学している（一人は短大、もう一人は四大）。

二人に共通するのは本人が大学や東京への進学を考えていなかったのに対して、親の思い、東京との関わりがあって青短に入学しているという点だろう。他の支部の調査でも明らかだが、東京に出ること自体は親が勧めたり賛成するものの、2年であればという条件付きであることがほとんどである。また兄弟姉妹の人数が多かった当時、兄や弟は四年制だが女子は短大とされたり、本人も家庭の経済状況を慮ってそれを自覚するという話を聞くことが多かった。

## 2. 学科の選択

学科の選択は親の勧めまたはその他の理由というケース（G、H、J）と、本人の希望によるケース（A、B、C、D、E、F、I）に分かれる。年代による違いはなく、前者のケースの3名はいずれも家政科で、東京への進学自体が親の意思によるという特徴がある。また出身は大垣、木曾、北海道深川である。後者のケースの出身が東京、静岡、豊橋であることから地域差もあったと考えられる。

### 1) 親の勧めまたはその他の理由によるケース

G（S32卒）の母親が「結婚して家庭に入るのには家政科がいい」と言ったように、当時、家政科への入学者の多くは親の考え・勧めがあり、それに従ったと考えられる。家政科イコール料理や裁縫というイメージが親の世代にあったことがよくわかる。しかし青短の家政科には化学や物理といった授業があり、J（S40卒）はそれらが苦手であることを実家でこぼしていたところ、母親から落第した夢を見たと言われたというエピソードを紹介している。

またH（S35卒）は「英語が好きで英文科も受験したが、田舎で外国人を見たことがなかったため、試験の時、ネイティブの先生が前に立ったら頭が真っ白になって気がついたら試験が終わっていた。数学も好きだったので家政科を受験した。自分の失敗を糧に妹二人は英文科に入学した」と語っており、数学を得意とする受験生が家政科を選択したという傾向もあった。一方、Gは「英語もやってみたかったが東京に比べて遅れているのではと自信がない面もあった」と述べていることから、地域差が影響したともいえる。Gが家政科受験のため、高3の夏休みに帰省中の京大生から数学の指導を受けたのも、数学という科目自体に対する不安とともに東京との差を意識したのかもしれない。

### 2) 本人の希望によるケース

本人の希望によるケースのうち国文科は3名いる。F（S32卒）は「英和ではカナダからの宣教師がいて、英語教育には力をいれて英会話の時間も多かったので大学では古典を学びたいと思った（読書が趣味だった）、短大は国文科に行こうと友達と相談した」と述べている。当時、中高に外国人教員がいたのはミッション系の私立ならではだろうが、北海道深川の出身であるHの入試の失敗エピソードと対照的である。A（S27卒）は10歳で長唄、三味線を始め、歌舞伎への関心が国文科を選んだ理由であった。もう1名のI（S38卒）は、「高2の担任が志賀直哉に傾倒していて自分も本を読むのが好きだった、青短には素晴らしい先生がいると聞いていた」ことが選択理由だったという。

英文科も3名で、東京出身、13歳で終戦を迎えたE（S28卒）は、「当時、世の中のあらゆるところが英語、英語になった。これからは英語を知らなければ。英語を勉強したい」と英文科選択の理由を述べている。B（S32卒）は前述のとおり当初進学を考えていなかったが、高2の終わり頃、スチューデントに憧れて急に英語の勉強を始め、英文科だったら青山と考えた。C（S39卒）は「英語が好きだった」という理由であるが、英文科のB、C、Eには、卒業後に英語教育など語学に関わる活動をしているという共通点がある。これについては第9節で述べる。

児童教育科が開設されたのは開学後12年経った1962（S37）年であったこともあり、本稿10名の内では、D（S39卒）1名のみである。前述のとおり、幼児教育に関心をもっていたところちょうど児童教育科ができたということを知って短大に進路を変更した。「短大がいいかと（英和の）先生に確認されたが、嬉しかった」と述べている。

ちなみに教養科が開設されたのは1966 (S41) 年であり、今回のプロジェクトの対象に教養科の卒業生は含まれない。東海支部の対象者の学科別人数が3・3・3・1名だったのは、開設年を考えると偶然だったがバランスが取れていたことになる。

### 3. 家族関係の影響

#### 1) 親の希望・選択

他の支部も同様だが、この時代は進路決定に家族関係が影響していることが多い。短大以前の中高選択でも、青山学院女子高等部出身のAが「母親が青山学院に入学を許可されて、入学するばかりになっていたのに、当時、父親の転勤で止むなく鹿児島第一高女に入学した。そこで子どもにはぜひ青山学院に入れたいとの希望があったので、当然のごとく青山に入り、高等部、さらに短大へと進学し、短大1期卒となった。妹も女子高等部」と語っている。B (S32卒) は4人姉妹が全て静岡英和で、親が子どもに自由にさせてくれたという。同じ静岡英和に清水市から通ったF (S32卒) は、「新制中学ができたばかりで公立中学内が落ち着かなく、父が情操教育のために5人きょうだいのうち兄と私を静岡に出した。私の下は6歳離れており、公立中学も軌道にのり落ち着いてきたので3人の弟・妹は公立中学、県立高校、四年制大学に進んだ。5人きょうだいのうち短大は私だけ」と述べている。D (S39卒) の父親は「明治の最後の人だがとてもモダン、自分にはキリスト教の教育はできないので、娘をミッション系に入れたいと考えて雙葉にと言っていた」が、Dは校風の違いから自分で英和を志望したという。

東京の大学に入れたいという両親の希望があったH (S35卒) は「母親が6人姉弟の長女で母親代わりとして育ち、弟たちは医学部や法学部に進学したのに自分は小学校だけだった悲しみから、子どもには男女平等に教育を受けさせたいという思いを持っていた。父親も高等教育を受けていない」と語っている。自分が受けられなかった教育を子どもにはという親の強い思いが、北海道の内陸部から娘を東京に送り出す力となっている。それに応えた娘の学生生活、卒業後の進路についてはまた後で紹介する。

一方、親が東京出身で娘を東京に出すことに抵抗がなかったり、東京に出ることを勧めたというケースの内、Fは両親とも東京出身で母親が当時珍しく共立女子大専門学校(当時)を卒業している。I (S38卒) は「東京で生まれ父親の郷里の豊橋に疎開。父は戦後、東京に帰るつもりだったが、妹が二人生まれたり、自分(I)が肺炎になって、当時日本で使用されるようになったばかりのペニシリンにお金を使ったなどの理由で帰れなかった」と語っている。G (S32卒) は前述の通り東京出身の父親が青短を選んでいる。またGは母親から「クリスチャンスクールだから、人生で何かあったとき拠り所になる、宗教的な雰囲気のところはいいのでは、と夫婦で話した」と聞いている。

母親に進学を反対されたケースはE (S28卒) のみで、父親の反対があったとは聞いていない。母親に女性の生き方に対する規範意識が強かったのは、おそらく自らが幸せで

あったことから、その規範の中で生きることが娘の幸せになると考えてのことかもしれない。

## 2) きょうだい関係の影響

長女であることが進路選択に影響したのはC (S39卒)で「父から四年制なら静岡大、東京に出るなら短大と言われ、東京に憧れもあり、妹弟のことを考えて短大に」と述べている。一方、「兄が就職して東京にいたので出してくれた」というJ (S40卒)や東工大生の兄がいたFのように男兄弟の存在が東京行きのハードルを下げたケースがある。またIが兄によって進路を変えることになったのは前述の通りである。「兄がまさかの浪人、1年ずれて寮に入るようになったため計画が狂った父が青短を勧めた。担任に相談したら青短ならいいのでは言われ、父も大変だと思ったので決めた」と語っている。

## 3) 親の職業

父親の学歴・職業としては、他支部で医者が多いという報告もあったが、本稿の10名の内、確認した中にはいなかった。代わりに国家公務員が多いといえるだろう。Eの父親は一高、東大から気象庁、Gの父親は東大から林野庁、Fの父親は「水産大を卒業。役人だったが缶詰会社を起業した、水産庁だったと思う」とのことである。Jの父親は勤め人だったとのことだが、B、Hは経営者である。進路選択の理由には家庭の経済状況を慮ったという発言もあったが、いずれにしても2年間とはいえ、地方から東京の私立に送り出すことができるのは一定以上の経済レベルであったことは間違いない。

## 4. 卒業後の進路

### 1) 自宅暮らしの場合

卒業後の進路は出身が東京と地方で違いがみられる。昭和20年代卒業の東京の2名は「女子が勤めるのは世の中の親にとってさほど重要なことではなかった時代」A (S27卒)、「あの頃、親の世代にとっては結婚前の女性が働くということは考えられなかった。でも時代は変わった。自分も社会の一員、選挙権もあるし、社会を見たい」E (S28卒)と、働きたいという思いを持って行動に移している。Aは「国立国語研究所 (方言学の研究所)に勤めたいと思い、両親は反対したので黙って願書を出したが、運悪く自分の留守中に書類が届いて試験を受けることができなかつた」と実現しなかつたが、その後、長年にわたって三味線を教える仕事をしている。Eは「母親に1年間だけ働きたいと許可をもらって三菱銀行の本店審査部に就職。日銀と三菱に父の一高時代の友人がいてどちらがいいか尋ねられ、丸の内がいいと言って三菱に。当時は就職が難しい時代でコネがないと就職できないと言われていた」と語っている。

当時 (その後もかなり最近までその傾向はあったが)、女子の採用は自宅か親族宅通勤



が条件だった。G (S32卒)は父親が林野庁に戻り2年次から自宅暮らしだったことから、当時、青短からは毎年数人入社していたという和光に就職している。「何かしなくちゃと思って周囲より遅かったが求人掲示を見に行ったら、ソニーのトランジスタラジオが出た頃でよく売れて面白かった」が、「通勤1時間以内ということで辞めるはめになり、勤めたのは10ヶ月くらい。『お嫁に行くことになったら辞めていただきます』という具合だった」と語っている。せっかく就職できたものの、やはり女性が働き続けるのは難しい時代だった。

## 2) 地方出身者が出身地以外で就職したケース

I (S38卒)も自宅通勤の条件に阻まれていたが、豊橋に戻りたくないと思っていたところ、住宅提供という求人がある応募した。「日清紡績の工場で働く女性のための通信制高校の教師職で、教職はとっていなかったが大阪で研修を受け、四大卒に混じって20歳で高校生に国語を教えた」そうで、勤務地は名古屋だった。教職をとっていなかったのは「先生になりたくないと思っていた」からだったが、「地方出身の生徒の親が様子を知りたいというので出張して親と話したり、地方から出てきて働きながら学んでいる生徒たちが素晴らしい、私はずっとこれで生きたい、と青山の時の先生に書き送った」というくらい、この仕事に熱心に取り組んだ。余談だが、この手紙に心配した先生が紹介した相手とその後結婚している。

もう一人、自宅通勤条件の壁を打ち破ったのはH (S35卒)である。「東京に残りたかったが2年で帰された。ゼミの大西(セチ)先生に東京で働きたいと伝えていたら、半年後に短大職員の空きが出て声がかかった」とのこと。人柄はもちろんのこと、学生時代、「2年間出してもらうのに親が大変だったのはわかっているので真面目に一生懸命勉強した」ことが評価されていたのだろう。「自宅通勤の人と変わらずできるか確認され、できますと答えたが学生時代と同じだけ仕送りがないとやれなかった。両親も学校ならいいと言って東京に出してくれたが、母親に四年制大学と同じくらいかかったと言われた」と語っている。学生部に勤務し、「加藤楸邨先生、荒牧(鉄雄)先生、西島(正)先生らが事務所によく来てくださり、荒牧先生、西島先生はご自宅にも呼んでくださった。当時、職員は短大の卒業生のみで、その後、男性も入った」という。退職後も職員同士の集まりが続いたということからも、当時の事務室のアットホームな雰囲気が窺われる。

またHは教職をとっているがその理由について、「田舎に帰ったら、先生ができれば楽しいと思って、授業が多くて大変だったがとった。田舎には他に仕事がありませんでした」と述べている。当時の進学組に教育学部が多かった理由は、地方では女性の職業の選択が限られていたことだったが、青短でも教職課程履修の理由となっている。ちなみにHの妹は青短卒業後、札幌で就職したのち、シオン寮の飯久保澄寮監から声がかかり寮監補佐として勤めたそうである。

### 3) 地方出身者が地元で就職したケース

地元に戻って就職したのはB (S32卒)で、スチュワーデスに憧れて英文科に入学したものの、当時、筆記試験に数学があり難しくて受からず、もう一つの志望だったアナウンサーになるべく静岡放送に入社している。「入社2年目、静岡放送がNHKに次いでテレビ放送を始め、天気予報を最初に担当した」と述べている。D (S39卒)は「東京の幼稚園に勤めることになっていたところ、静岡に帰って音楽教室に応募するという同級生の話を聞いた途端に帰りたいとなり、自分もその音楽教室に就職することに。第二次ベビーブームで次々と音楽教室ができていた時代、子どもに手解きをする仕事だった」とのこと。しかし「その夏に日本文化交流会の企画による50日間のヨーロッパユースラリーに参加したいということになり、就職先に辞退を申し出たところ、とても良い企画に参加されるので帰ったらまた来てくださいと言われた。そういう時代だった」と語っている。

C (S39卒)もやはり東京で就職しなかったものの、自宅通勤条件のため地元で就職することになった。「情報がない時代で大変だった。冬休み帰省時、高校の進路指導の先生から浜松の塗装会社を紹介されて、社長秘書として採用された」という。「当時、就職は半分くらいだったか。同じ高校からの青短卒業生は袋井の中学で英語の先生になった。東京の人はスチュワーデスや商社が多かった」と述べている。

### 4) 仕事に就かない選択・就く選択

就職しなかったのはF (S32卒)とJ (S40卒)の2名である。Fは清水市に戻り、兄は東京で就職していたが、下に3人(妹弟)いたので家の手伝いをしながら、料理、洋裁、和裁、お花、お茶を習ったという。Jは明治生まれの父親が「女の子が稼いで男の人を馬鹿にするようになっちゃいけないという古い考えで、就職してはいけないと言われた」そう、大垣に戻ってやはりお茶やお花を習ったと述べている。学生時代のアルバイト先で就職という話もあったが、部屋を借りて生活するのは不十分な給料の額だった、地方から来た人は帰って洋裁学校や料理学校に行く人が多かったという。

このJが昭和40年卒で、本稿の調査対象の中で最も若い世代であることを考えると、昭和27年卒の1期生から10数年、女性の進路に対する社会の意識はあまり大きく変化していないといえるだろうか。その中でも10名中8名が、結婚のためにすぐ退職するなど短期間のケースが多かったとはいえ、何らかの形で仕事に就くという進路を選んでいる。東海支部という、比較的東京に近い支部の特徴もあるのかもしれないが、やはり一人一人の「何かをしたい」「社会を知りたい」という思いの強さがこの数字に表れているのではないだろうか。

## 5. 授業・行事

授業と行事については、印象に残っていることを学科別に紹介する。調査では、つい先



日のことのように授業や先生の思い出を楽しそうに話す姿が見られた。また複数名の調査を同時間、同会場で行ったので、他の卒業生の話から思い出して後で追加されるといったケースもあった。互いの話に触発されたり補足し合う、共感が発話を促すという効果は、長い時間順番を待たせることは対象者の負担になるかという懸念もあったが、この聞き取り方法のメリットといえるだろう。

## 1) 国文科

A (S27卒): 漢和辞典をつくった漢文の大家・諸橋轍次先生など有名な先生がいらしたが当時は知らず、後で驚いた。

F (S32卒): 担任が加藤楸邨先生、温かい人柄で俳句が好きになった。諸橋轍次先生が授業を受け持ってください、目が悪かったので歩きながらポンと肩を叩いて指名されるためみんないつ叩かれるかと……、思い出に残っている。

I (S38卒): 授業は本当に全部良く楽しかった。川瀬一馬先生の花伝書の授業は素晴らしかった。馬越(宮)先生の源氏のゼミで卒業論文は「柏木の巻」。夏休み、豊橋で図書館に通いつめた。先生から「あなたたちは論文を書いても本当に学問の入り口の入り口、学者になれとは言わないがもし学問する人と結婚したら手助けできるよ」と言われたことが、その後に学者との結婚を決心させた。

入学してすぐ「奥の細道研究旅行」(北陸の巻と東北の巻)があり、私たちは北陸だった。作文のクラスがあって発表したり、書道も素晴らしい先生がいた。2年間にしては本当に色々なことを学んだ。

## 2) 英文科

E (S28卒): クラス担任は荒牧先生。後半は後に四大の学長になられた保坂栄一先生(西洋史)。英文講読でオスカー・ワイルドがレディング監獄で書いた*De Profundis* (『獄中記』)が印象的だった。当時、individualism 個人主義について考えをめぐらせた。今でも時に手に取る本。英文専攻は卒業論文がなかったが、夏休みに1冊読んでレポートを書くようにと言われた。

B (S32卒): 菊地(裕)先生のフレンチレヴューション、6人ぐらいしか受講者がいなくて身近に先生を感じた。時事英語の松宮(薫子)先生の授業のために、前日、渋谷の駅まで駆け降りて英字新聞を購入して勉強した。西島先生によるD・H・ロレンスの*Sons and Lovers*をよく覚えている。高校で英語をちょっと勉強したくらいでは長編小説を読むのは難しかったが、短大ではこんなことも学べるのだと、それだけで楽しくて、勉強させていただいた。

B (S32卒)・C (S39卒): 英文科だが教養科目として履修した川瀬一馬先生の花伝書の授業の印象が強い。

C (S39卒): 町野(静雄)先生の英語購読、アメリカから来られたサッチャー(Thacher

Juliana)先生、松宮先生、菊地先生が印象に残っている。

### 3) 家政科

G (S32卒): 調理実習は楽しみだった。西洋料理の大西先生。台所の手伝いもしたことがなかったので珍しかった。料理の基礎を教えてもらった。

H (S35卒): 大西先生の西洋料理のゼミで、先生とは親しくさせていただいた。修学旅行のようなもの(学科の旅行ではなく)があり、九州、熊本、長崎、四国など全部参加した。一番の思い出は学長の向坊(長英)先生と富士登山をしたこと。バス1~2台で。5合目、8合目で宿泊。ご来光を見ながらみんなで讚美歌を歌ったことは忘れられない。教職もとって母校で教育実習を行った。当時、家政科は保健体育の教職もとれた。保健の授業は放課後だった。教職をとったのはほんのわずかで10人もいたか。

J (S40卒): 和裁、西洋料理の大西先生、中華料理、阿部(幸子)先生の化学は洗剤、繊維について。島崎(通夫)先生、深谷(浩)先生。住居学もあった。授業がびっしりで忙しかった。秋に3泊4日の東北旅行に参加し、自分には行かなかったが夏には北海道旅行も。春に9泊10日ぐらいで九州を一周したのも楽しかった。

勉強を究めるといふより教養を身につけるといふものだった。体育の多和(はる)先生が「選手になったり記録が伸びるわけじゃない、結婚してご主人と楽しめるテニス、ボウリングとかスキーとか、そういうのをやりましょう」とおっしゃって、一生楽しめるなと思った。

### 4) 児童教育科

D (S39卒): ここはすぐに役立つ教育はしません、幼児の時から本物を学ばせる、教えることが大切と教わった。幸田(三郎)学長がすごく力を入れて、一流の先生を集めましたとおっしゃって、見るのも聞くのも、嬉しかった。児童文学の講師、瀬田貞二先生のお宅に押しかけたが歓迎してくださった。「自然」の柳宗民先生は素晴らしい先生だった。美術の掛井五郎先生は静岡教会との関係もあり、ザックバランで「先生だから」という隔てがなかった。音楽の高橋好子先生のゼミメンバーでおうちにもお邪魔した。1期生だったからか、そういう思い出があって忘れられない。

## 6. 授業外の活動・経験

本節も個々の発言を紹介する。演劇鑑賞、オラトリオソサエティやギター、山登りなど、学生時代の経験が、卒業後の生涯学習、趣味、教会活動などにつながっているケースも多い。授業で忙しい2年間であったが、課外でも時間を惜しんで生き生きと活動し、また時には自己沈潜ともいえるような時間もあった。新劇観劇、学生企画のダンスパーティなど、当時の流行が窺い知れるもの、また地方出身者ならではの「デパートハイキング」といっ

た言葉も登場し興味深く話を伺った。

### 1) クラブ活動・課外活動

- A (S27卒): 歌舞伎研究会に入っていて、英語の授業がお休みと聞くと学校の前から都電に乗って歌舞伎座まで一幕見によく出かけた。あるとき帰ってきたら休講ではなく先生に怒られ、英語は一生懸命やっていたのにその学期は評価がAからCに下がってしまった。学校の思い出はいろいろあるが、歌舞伎のことがいちばんの思い出。
- B (S32卒): 英和の中学3年間バスケット部だったが、短大に入って勧誘を受けバスケット部に。短大は部員が3人しかいなくて大学と一緒に活動し、関東女子大学リーグで3位になったことも。慶応と3位決定戦をやって、新聞のスポーツ欄に自分の名前と得点数が載ったと知り急いで買いに行った。体育館はないので、都電で神保町の岸体育館に通っていた。
- I (S38卒): オラトリオソサエティに入っていて楽しかった。追分寮の修養会も大好きだった。聖書の話もあったがメディテーションとか夢のような時間だった。結構参加人数がいた。
- C (S39卒): ESSに入っていて、真鶴で合宿した。
- D (S39卒): 姉も妹も青短という友人から、お姉さんが入っていたオラトリオソサエティに誘われた。英和ではハレルヤコーラスぐらいは歌ったが、「メサイヤ」の全曲は歌っていなかったもので、嬉しかった。
- J (S40卒): 四大と一緒にギターマンドリン部に参加し、厚生年金会館でコンサートも。2~3泊の合宿が夏は千葉の海、冬は箱根であり楽しかった。寮に入れず国立の父の親戚の家から通っていたが、ギターを持ってラッシュの中央線に乗るのが大変で、学生部で探した祐天寺の下宿に引っ越した。

### 2) 余暇・趣味

- E (S28卒): 通学の都電が神保町で乗り換えだったので、本屋街は散歩エリアだった。新劇が盛んな頃で劇団民藝が一橋講堂を使っていたのでよく観た。
- F (S32卒): Gと一緒にデパートハイキング。Gが2年目に寮を出て一緒に行動しなくなってから、別の寮の友人とダンスを習うようになった。寮内ではダンスを習うのが流行していた。
- G (S32卒): デパートが嬉しくて東横百貨店によく行った。日曜日、礼拝に出て、寮のお弁当は部屋で食べて、渋谷あたりでぶらぶらして帰るのが関の山。他の人はダンスパーティに行っていたが自分は行かなかった。
- H (S35卒): 寮の友達、他大学の男子学生と一緒に山登りもした。
- I (S38卒): 歌舞伎、文楽も観に行った。休講の時は渋谷の映画館(文化会館)にすっ飛んで行った。

C (S 39卒): 休講時、友人と青山墓地で散歩したり。休日、渋谷駅の別々の改札口で待っていて会えないことがあった。

J (S 40卒): ダンスパーティに参加、そんな時じゃないとプリンスホテルに行けないので。人気バンドの演奏があった。

## 7. 寮生活

女子が地方から東京に進学するのにあたり、寮の存在は大きい。寮があるというのが、両親が青短を選んだ理由と述べたG (S 32卒)のように、多くの場合、親にとって大学選択の条件になる。本稿の対象者の内、東京出身の2名を除く8名中、5名がシオン寮(金王寮)に入寮している。それ以外の3名は、入寮を希望しながら「当時は住宅難で申し込みに行った時はもう入れなかった」J (S 40卒)、「寮はクリスチャン系の高校から入ると思い込んでいたため、父親が下宿を決めた」C (S 39卒)、「(推薦入試で寮に入れたのに)母親が6時の門限では自分が行っても一緒に食事もできないと言って、知人のお宅に下宿した」D (S 39卒)という理由である。Iが「合格して一緒に寮を見に行った兄から、規律が厳しく修道院みたいなところと言われた」と語っている。Dのように厳しい規則に躊躇する家庭もあったのだろう。また「寮に入るのは入学するより大変だった」H (S 35卒)というように、寮が人気で入れなかったという話は他の支部の調査でも何度か聞いた。

### 1) 寮監の思い出、教員との関わり

「特に記憶に残っていること」という質問に寮の思い出を話すケースが多かったのは、親元を離れて共同生活を送るという経験が、18歳の多感な女子学生にとって、やはり相当強烈な印象を与えたということを表しているのだろう。

その中でも、何と言っても母親代わりとなる寮監の思い出が強く残っているようで、感謝する言葉が多く聞かれた。教育寮であったことから教師の役割も担う寮監は時に厳しく、しかし優しく学生たちを見守った。「自分は第一寮(金王町)で川尻(知恵)先生。すごく影響を受けた。素晴らしい先生で親は安心していた」B (S 32卒)、「寮の先生が立派な方で飯久保先生がよかった。尊敬していた。そういう先生、仲間に触れられたのが一番よかった」G (S 32卒)、「学校は勉強の場だが寮は家庭的な雰囲気。飯久保先生が特に気を配られていたのかも。両親が訪ねてくると歓迎してくれた。具合が悪くなった友人のお母さんが看病で1週間泊まった時も、先生が食事も出してくださって家庭的に面倒を見てくれた」F (S 32卒)、「寮の友達と他の大学の男の子達もグループになって山登りに行ったが、飯久保先生も『ダメ』とはおっしゃらなかった。『明日、どここの山に行きます』と全部先生に報告した」H (S 35卒)といった思い出が語られた。

夕拝や行事では先生方とも近く接する。短大の教員がしっかりと関わったことが学生に及ぼした影響も大きい。「夕拝で讚美歌、心に残っている」G (S 32卒)、「毎週、学長先

生(向坊先生)、学生部長先生(西島先生、荒牧先生)がいらしてお話ししてくださった。毎日夕食の後にお祈りがあった」H(S35卒)、「夕拝があって、毎週先生方がお話に来てくださった」I(S38卒)、「クリスマス会の招待状を向坊先生の学長室に届けたのが良い思い出」B(S32卒)、「寮は色々な行事(クリスマス、イースター)をみんなで力を合わせて、劇の練習をしたり楽しかった」I(S38卒)。

## 2) 門限にまつわるエピソード

寮の門限は当初6時だった。「高校ではテニスで県大会まで出たが、短大ではしなかった。時間的に短く寮の門限も6時だったし、友達と交わるだけで嬉しくて」G(S32卒)、「門限が6時だったのでダンスを習いにはよく行ったが、実際のパーティには2・3回しか行かなかった」F(S32卒)、「青短の近くに手芸学校があって通いたかったが6時の門限を守れずダメだった」H(S35卒)が、I(S38卒)の時は門限が7時になっている。

門限は厳しく、「母から寮の先生は大変、迷惑をかけないようにと言われていたので門限は守った」G(S32卒)が、中には、「飯久保先生の部屋が1号室。2号室の方で、遅れて帰って来て窓から入ろうとして間違えて先生の部屋を開けちゃったという寮生がいた」F(S32卒)、「夜、寮監の飯久保先生が部屋を回って『みなさんお揃いですか』とドアをノックした。中には遅くなって、外の垣根を越えて帰寮という人もいて、揃っていると嘘をつくのが辛かった。ドアを開けられることはなくありがたかった」H(S35卒)といった、おもわず笑ってしまう話も出た。

## 3) 生活の思い出

「食事も美味しかった」I(S38卒)し、お昼のお弁当も出ていた。「寮はお弁当が出た。田舎では肉なんか食べなかったが、トンカツとか出て、体が弱かったのがすっかり太ってしまった」H(S35卒)。しかし「1年までお弁当があったが、みんなで、学食で食事がしたいと運動をしてお弁当をやめてもらった」I(S38卒)とのこと。学生の要望によって短大に学食(学生ホール)ができたのはIが入学する1年前、1960(S35)年である<sup>3</sup>。Iは「私の学年は割合そういう(学校に対して主張する)人がいた」と述べており、当時の学生気質を感じさせる興味深いエピソードである。

掃除当番や洗濯など、自宅を出て初めて経験することも多かった。「寮の部屋ごと、聖書(聖句)を読んで、讃美歌を歌う当番があった」F(S32卒)、「お掃除はすごく大変だった。実家にいるときは自分でそんなに掃除することはなかったのに、朝起きるなり窓から廊下から全部。部屋の火鉢の炭をもらいに行った」I(S38卒)、「洗濯板で洗濯して屋上に干した。東横線のプラットホームが下の方に見えて、都会に来たんだと感慨深かった。天気の良いと富士山が見えて、向こうがふるさとなんだと思った」B(S32卒)、「洗濯は順番待ちになってしまうので朝4時台に起きて洗濯した。寒いのは慣れているので」H(S35卒)といった思い出も語られた。



#### 4) 寮の意義の大きさ

「本当の親友は寮の仲間」I (S38卒)、「寮の暮らしは時間が厳しかったが自由だった。楽しかった。気ままに育ったので4人の生活で我慢しなくてはということ学んだ。与えられた仕事(掃除当番、配膳)もあったが」F (S32卒)というように、地方出身者にとって寮監との、また寮生どうしの交わりがどれだけ彼らの人格形成に影響を及ぼしたか計り知れない。

東京出身のE (S28卒)が「入学して自身に変化があったか」という質問に対して「影響あったと思うが、(同席していたIから「地方から出てきた人とは違う?」という問いかけがあり)寮の話聞いていて普通の生活と随分違う、寮生活じゃないと……」と答えている。本調査で、寮の話になると対象者の熱量が一気に上がることを度々経験した。もちろん卒業生全体に対する寮経験者の割合を考えれば一部であるとはいえ、短大の教育を振り返るにあたって、やはり寮の意義の大きさを重視する必要があるだろう。

## 8. キリスト教

10名中、青山学院と静岡英和あわせて4名がミッションスクール出身である。B (S32卒)は中3で洗礼を受けており、一緒に英和から青山に入学した5名はFも含め、皆、入学時には洗礼を受けていた。D (S39卒)は結婚後、家業の薬局を任されて忙しさで教会から離れていたが、学生の時オラトリオソサエティで活動していたことから、聖歌隊への参加をきっかけに55歳で教会に戻ったという。一方、青山学院女子高等部出身のA (S27卒)が小さい頃から日曜学校に通っていたのは「母親がそういうところに子どもを行かせるのが良いと思っていた」ためでクリスチャンホームではなかった。しかし、「中学に入って母親と一緒に教会に通った。弟は初等部から暁星に通い、カトリック信者」というように、キリスト教に近い家庭環境だった。それでも青短に入学して変化があり、「高校まではそう感じなかったが、短大に2年いた中で人様に親切にする、困った方は助けなければという精神を授けられた」という。洗礼を受けていて、「キリスト教を学んで、自分本位に考えていたことが、相手の気持ちを考えられるようになったかなと思う」と語っている。

I (S38卒)の母親もキリスト教に関心があったものの「やはりあの当時はなかなかね」というようにクリスチャンになるころまではいかなかった。Iは小学生の間、日曜学校に通っていたが、中高では離れていたため短大に入学して讃美歌を歌ったりすることがとても嬉しかったという。「高校時代は本の読みすぎで虚無的、暗い性格、生意気だったが、ミッションスクールから来た方たちがみなさん天真爛漫で、田舎の公立高校にはいないタイプ。自分もすぐに馴染んで、性格が明るくなり、高校の同級生にびっくりされた」と語っている。「青短に入って価値観、生き方も変わった。パッと燃えて受洗するタイプではなかった。受洗できたら(委ねてしまえば)楽だろうなと思ったが、うちは仏教だし」と当時はそこでとどまったが、今は教会の活動に熱心に参加し2021年に受洗をしたという。

第3節で記したようにクリスチャンスクールが人生の依り所になるのではと両親が話し合ったG (S32卒)は、「入学して変化は」という問いに対して、「礼拝が大きな変化。聖書に初めて触れ、讃美歌は良いなあと。キリスト教が底流にある」と答えている。H (S35卒)は「礼拝も毎日10時からP S講堂であったが休んだことはない。ボロボロの讃美歌集が証拠」といって持参した讃美歌集を見せてくれた。C (S39卒)は「(入学までは)キリスト教に縁のない生活だったが毎日礼拝に参加、讃美歌に触れて、話を聞くのが楽しみだった。自分で感じたものが大きかった」と語っている。礼拝欠席者が多くなり、義務化された礼拝行事「アッセンブリー・アワー (A・H)」が設けられたのは1958 (S33)年だが、学生に不評で1962年の『短大新聞』には「腐敗したアッセンブリーアワー」という論説が載り、A・Hは1963 (S38)年4月に廃止されている<sup>4</sup>。当時のそういう状況からすると義務ではなかった礼拝に毎日参加した二人は少数派だったのかもしれない。しかし、Cは「義務ではなかったがかなりみんな行った」と述べている。G、H、Iのように寮生活でキリスト教に接する学生は多かったと思われるが、寮生ではなくともキリスト教に基づく教育の影響を受けたCのような学生もいたということを知る機会になった。

## 9. 卒業後の社会活動・ボランティア・生涯学習

短大同窓会が卒業生の交流に加えて「生涯教育」「ボランティア」を活動の柱にして発足していることから、本研究ではこの点に関して調査している。卒業後、結婚によって一旦途絶えた学びが、子育てを終えてから復活した親の介護で中断するなど、女性の生涯学習はライフサイクルに左右される。結婚による環境の変化も女性の方が大きい、それによってさまざまな出会いが生まれる。きっかけが受動的な要因であってもそれを能動的に生かしている。

卒業年の順に紹介していく。若い時から継続している趣味もあれば、50・60という年齢になって始めた新たな学びもある。持ち続けてきた関心や思いを何十年も経って実現させている者もいる。習得したことが仕事にもなり、同時にそれを生かしたボランティア活動も行ない、またそこから新しい学びが始まるといった学びの循環が発生しているケースもある。同窓会活動の一環や教会活動でボランティアを継続している者もいる。いずれも何歳になっても何かをしたいという気持ちを持ち続けていることに心から感服する。

A (S27卒)：三味線教室を2、3もって教えていた。初めは長唄だったが、結婚して静岡に来てからは、民謡が盛んなので人を楽しませるのには民謡が良いと思って習い、資格も取った。デイサービスで地方の民謡を演奏して喜ばれた。介護施設を1週間に1回か2回、お弟子さんたちとまわったり、民謡の教室を作ったりして奉仕してきた(コロナ禍のため中断)。太鼓、日本舞踊も習った。芸能が好き。三味線のために人生の半分が終わったようなもの。

E (S28卒): 実用としての英語を話せるようになりたかった。(結婚後) 当時、名古屋にアメリカ人がかなり住んでいたのので、5人ぐらい集まって英会話を教えてもらった。夫の仕事で1年間、イギリスに。1984年から日本語セミナーで学び、日本語教師として1987年から5年間、県のプログラムで中国残留孤児に教えた。勉強中はボランティアで残留孤児だけでなく中国語話者に日本語を教えた。

青短のタイ人留学生が、夏休みにシオン寮が閉寮している間にホームステイするのを引き受けて楽しかった。

B (S32卒): いまだに寝る前に必ず30~40分、英語を勉強している。夫が亡くなり子どもも独立し自分は何をしたら良いのかと考えた時、外国人の日本語教育の仕事を知って講座を受け、13年間、74歳まで日本語学校の先生を勤めた。60歳でインターンシッププログラムに応募して半年間イギリスで日本文化を紹介したことも。

静岡県立美術館のボランティア(ギャラリートーク)を50歳から10年間行い、55歳頃、静岡大学の社会人枠で日本美術史や西洋美術史を学んだ。

F (S32卒): 岐阜に住むようになってネイティブの英語を習う機会があり、英和時代に学んでいたことが懐かしくて、英語を学び返して15年間。外国旅行にも大いに役立った。また外国人に日本語を教える会にも参加した。

夫の会社の子会社がパソコンを売り始めたことから購入。60歳頃で女性が少なかったが岐阜市で研修を受け、市内のパソコン教室で10年間サポーターを勤めた。刈谷市に移転してからはボランティアでお年寄りや障がい者にパソコンを教えたりしている。夫が55歳になった頃に山のセミナーを受け友達と一緒に山登りを始めた。200山記念のホームページを自分で作って、今は旅行記になっている。短大時代に楽しんだ登山が基本になった。

G (S32卒): 住まいの近くに素晴らしい先生がいて、伝統工芸の人形作りを何十年かやっている(70歳ぐらいまで)。桐の粉をお米の糊で煉って形を作り胡粉で仕上げ、染め上げた和紙を貼る。日本工芸会の展示会に出品(同会のWebサイトで確認したところ、「桐塑布紙貼」という技法で掲載されている)。

東海支部の活動として愛光園(重度身障児の通園施設)のボランティア活動に長く携わった。活動は終了したが、今でも新聞を送ってくる。ここを開設した自由学園出身、クリスチャンの皿井寿子さんの人柄に響くものがあった。(身障者に会って)初めの頃はショックだったが、目が開けたというか、意識が変わった。

H (S35卒): 社宅に住んでいた時、子ども向けに習字を教えにきていた先生から書道を学んだ。大人では自分ともうひとり。知多に住んで40年間、子ども向けに書道教室を開いた。多い時は120人ぐらい。週2日の書道教室の日以外は夫の単身赴任先に行き、そちらで手本を書いて、また戻って2日間は教室をという生活を10年くらい続け、名古屋市内に移転するまで教室は続けた。

婦人之友社の「友の会」<sup>5</sup>知多支部に14年間入っていて、家計簿の発表や、当番でお

菓子を作る(200個マドレーヌを焼いたことも)など。また東海支部の愛光園ボランティア活動で、車椅子用の座布団づくり担当を続けてきた。

I (S38卒): いちばん下の子どもが中学生になった時、ちょうど募集があり、日本語のセミナーに(1984・85年、Eと一緒に)。YWCAの依頼で、プライベートで2年間、その後日本語学校で60歳まで週に3回ぐらい、日本語を教えた。その後は名古屋市立大学で留学生に教えている。日本語のおかげでアメリカやアジアに多くの知人ができ、長い付き合いが続いている。ずっと英語を勉強していたので、夫の仕事でペンシルベニアに1年2ヶ月間住んで帰国してからはボランティア通訳もした。

音楽、オペラが好きで、名古屋は劇場が近いので演奏会にしょっちゅう行けるのが生きがいになっている。

C (S39卒): 短大で教職はとったが先生になる気はなかった。30歳(3人目の子が3歳)で全国組織の英語教育団体に入り、10~20人前後、自宅で週に2~3回子どもに教えた。多い時は40~50人で部屋を借りたことも。CDを使った手遊び、劇遊びなどで、自分の子どもにやらせたいと思ったので。30年間続けた。その後、地域でお年寄りの集まりの手伝いをしている。民生委員を1期務めた。

D (S39卒): 一緒に青短に進学しオラトリオソサエティに参加した友人姉妹とは、80歳を迎えた現在も、所属している静岡教会の聖歌隊と一緒に活動している。静岡教会には50年続いている目の不自由な方への朗読ボランティア(虹の会)があり、世話役をしている。教会がNHKの近くにあり、アナウンサーを講師に呼んで勉強した。現在は月に1回、SBS静岡放送局のOGのアナウンサーの指導を受けている。コロナのため奉仕は現在休会。「光の家」という施設で年2回、読書週間の時に読み聞かせ、交流の時を持っている。

J (S40卒): ウクレレを10年ほどやっている。学生時代、ギターをやっていたのでギターをと思ったが大きいので。

## 10. 人生にとって青短とは

聞き取りの最後の質問は「自分の人生にとって青短とは」である。「(学生時代に)青短はどんな場であったか」という質問の回答も含めて共通する内容ごとにまとめた。

**自分の核・基礎:**「何かあった時に青山の短大のことを思うと、いろいろなことが自分の心の中で納得できたり解決できる」A (S27卒)、「人生の基礎ができた」B (S32卒)、「自分をつくったところ。人生の核、中心になるもの」I (S38卒)。

**信仰:**「神様を信じるのが安心につながるかということを学んでいる」C (S39卒)、「教会に戻ったことで自分の人生がリセットされた。その基礎は英和、青山の教育」D (S39卒)。



**人との出会い**：「お礼拝、あの経験。人生からあの2年を抜いたら考えられない。いろいろな方に出会えて」E (S28卒)、「良い先生に恵まれた」F (S32卒)、「友達の輪が広がり、物事を考える上でのベースができた」G (S32卒)、「高校の友達とは違って心から親しくなれ、日本各地の出身の友ができた」I (S38卒)、「友達に恵まれた。4人の友達とは卒業以来60年も交流が続いている」C (S39卒)、「良い先生と友達。たった2年なのに」D (S39卒)。

**過ごした時間**：「中高一貫の6年間に比べて短かった。もうちょっと学びたかった」F (S32卒)、「2年間は短かった」G (S32卒)、「楽しくて楽しくて、その一語だった」H (S35卒)、「すごく貴重な時間だった」C (S39卒)、「大切な時間だった」J (S40卒)。

**やはり寮**：「寮生活で生涯の友人を得た。楽しかった」F (S32卒)、「寮の生活は素晴らしかった」H (S35卒)。

**誇り**：「自分の時代は履歴書に青短英文卒と書くのが誇りだった」B (S32卒)、「ささやかな誇り。青山って胸張って言える」J (S40卒)。

**そして感謝**：「一番大事なところ。(自分を青短に導いた)母親に感謝している」A (S27卒)、「両親に感謝、英和の先生に感謝」D (S39卒)。

## おわりに

本プロジェクトの聞き取り調査は、1年目の2021年度、コロナ禍の影響で前期の予定が変更になって後期にずれ込み、筆者が担当した静岡市での調査からスタートした。その結果、聞き取りのおひとり目が短大の1期生、かつ短大の前身、青山学院女子高等部の出身という方になった。短大創設の歴史を体現するといえる方からこのプロジェクトが始まったことに、不思議な偶然を感じた。そのことを知った初めの軽い驚きが、聞き取りを進めるうちに大きくなっていったのを覚えている。

詳しくはおっしゃらなかったが、戦争中にキリスト教を基盤とする学校に学んだことで大変な経験をされている。それにも関わらず、むしろそれゆえか、進学に対する明確な意思をもち、卒業後も自分の生き方を貫いていらっしゃる。昭和20年代当時、これほど精神的にも経済的にも自立していた女性がいたということは想像を超えていた。

さらに90歳になろうという年齢で1年前まで三味線による奉仕活動を続けていらしたそうで、「今が一番幸せ」という言葉をごく当たり前のように口にされている。怪我で身体的には不自由をされているにも関わらず、年齢からくる制約といった社会通念や諦念とは無縁の軽やかさに、聞き取りを終える頃には驚きが感嘆に変わっていた。短大の歴史の1ページ目にこういう卒業生がいらっしゃるということを知り、卒業生の生き方を伝える本研究の意義をあらためて認識し、背筋が伸びる思いをした。

こういうスタートを切れたことに心から感謝し、第2期のプロジェクトにも取り組んでいる。結びがおひとりの具体例の披露となってしまったことをご容赦いただきたい。



- 1 『青山学院女子短期大学六十五年史 - 資料編』. 青山学院女子短期大学, 2018, p.847
- 2 小林瑞乃. 青山学院女子短期大学70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」vol.2「青短の誕生と発展」パネル. 青山学院女子短期大学, 2019.
- 3 『青山学院女子短期大学六十五年史 - 通史編』. 青山学院女子短期大学, 2016, p.136-137.
- 4 同上 p.93-94.
- 5 「家庭生活を出発点として、社会に広く女性の力を及ぼして行こうと、家事会計、子どもの教育、健康、その他すべての家庭生活の充実向上を、協力して研究し、励ましあって実行を務める友の会」 引用元：“全国友の会について”. 全国友の会. <https://www.zentomo.jp/about/>, (参照2023-08-16).



# 青山学院女子短期大学同窓会関西支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1953 (昭和28) 年から1965 (昭和40) 年卒まで

西山 利佳

## はじめに

本稿は関西支部の卒業生3名からの聞き取りのまとめになる。関西支部では2022年、関西支部の取りまとめによる調査を行った。

調査対象となった卒業生の卒業年、学科、在住県は次のとおりである。A (昭和28年英文科卒・兵庫県)、B (昭和40年国文科卒・兵庫県)、C (昭和40年家政科卒・兵庫県)。Aは大阪市内で、B・Cは神戸市内で同席の上、B、Cの順で各々聞き取りを行った。Aは小林瑞乃を主な聞き手として、河見誠、西山が、B・Cは西山が主な聞き手となり、小林と共に聞き取りを行った。AとB・Cではちょうど一回り世代が違い、また、わずか3名の調査となるため、普遍性を見出すより、個別事例の整理になることをあらかじめお断りしておく。以下、聞き取り対象者に事前に伝えておいた質問項目に従ってまとめていくが、節タイトルは質問項目の表現そのままではない。また、順を追って問うていくものの、当然ながらそこから思い出されることが、問いを離れて展開していくので一問一答の記述式アンケートのようなわけにはいかない。行きつ戻りつしながら話されたことを、改めて当初の問いの枠に整理しなおしてまとめることになる。なお、聞き取り対象者は「青短」という略称は口にせず、3名共に基本的に「青山」と呼んでいたが、発言の引用以外は「青短」と記載していく。

## 聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	出身県
A	1953 (昭和28)	英文	島根
B	1965 (昭和40)	国文	神奈川
C	1965 (昭和40)	家政	神奈川

## 1. 出身高校と女子の進路選択

青短2期生であるAさん (1953年英文科卒) は、戦後の学制改革の過渡期に中高生時代を送られている。そのため、入学時は高等女学校だったが卒業時は共学の島根県立松江高

等学校となっていた。「教科書があっても、ないような時代」、新制大学も入学願書を出せば通るような過渡期だった。女子も主に進学した印象を持っているとのことだった。

Aさんはもともと大阪の豊中で生まれ育ち、戦時中父親の仕事の関係で松江に移ってきていたためいずれは帰りたいと思っていた。そして、「都会に帰るんだったら、東京に出てみたい」と考えていたところ、聖路加出身の保健室の若い先生が青山学院を「すごくおしゃれな学校よ」「生徒さんはみんな垢抜けしてる」と勧めてくれたのが青短受験のきっかけという。松江高校の進学クラスにいたのだが、そこから「青学」(青短)を受けたのは二人だった。出ても関西どまりが多かったというし、妹がひとりいるふたり姉妹という家庭環境から考えると、家を離れることに家族の反対があったのではないかと懸念されたが、「リベラリスト」の父が「自由にしていいよ」と言ってくれたとのことだった。青短に合格したら「もういいわ」と思い、他大は受験しなかったという。学科は「青学だったら英文科かなあ」と思い、英文科を自ら選んだということだった。

Bさん(1965年国文科卒)の出身校は神奈川県立小田原城内高等学校(2004年、県立小田原高等学校と統合)。進学校として有名な女子高で9クラス中5クラスが進学コースで、進学コースでないクラスでも短大やドレスメーカー学院や文化服装学院などに1クラス50人中40人ぐらいは進学していたと記憶しているとのことだった。四年制大学にも津田塾大学、お茶の水女子大学、慶応、早稲田といった難関校に10人ぐらいは行っている。東京教育大にも3人ぐら進んだ。また、「フェリス塾」と言われていたくらいフェリス女学院に多数進学していたという。

Bさんは、4人きょうだいの長女で、下に妹ひとり、弟ふたりがいたため「おまえは短大にしてくれ」「四年制に行くんだったら、横浜国大だったら良い」と父親に言われ青短のみを受験し他大は一切受けなかったという。父親は自身が神奈川師範出だったので「横国なら」と言ったのかもしれないとのことだった。肝心のなぜ青短を選んだのかという問いに対する直接的な言葉を引き出すことはできなかった。ただ「正解でした」のひとことで、青短を受験し合格したことが全面的に肯定されていることが強く伝わってきた。青短在学が前提となって、話が弾んでいったのでそこに立ち戻れなかったというのが実情である。

国文科選択については、はっきりと自覚した理由が語られた。小学生時代、「ちっちゃい田舎の小学校」の図書館の本を全部読んでしまい、読みたい本がなくなったので徒歩3分ほどだった母親の実家の子ども部屋に残っていた、母たちが子どもの頃に読んだ本までこもって読むほど本好きだったという。体が弱かったこともあって、そのように屋内で本を読んで過ごす時間が長かったという背景は大きいですが、そのエピソードの前に語られたことが非常に印象的だった。英文科ということも考えたが「英文と一生付き合うわけじゃないだろう」と。また、別の話題の中で「国文科っていうのを選んだのも、たぶん、一生ずっと生きていくにあたって、いろいろな形で役に立つんじゃないかと思いました」と語り、「家政科みたいに、簡単にお友達にもすぐにブラウスを縫ってくれた子もいて、そういう

役に立ち方もあると思うのですけど」と、実益的なものではない次元で人生に「役立つ」、「一生付き合う」と考えていることが、深く教養の価値をとらえておられる姿として印象深かった。

なお、当時は小田急線の急行を使えば小田原から1時間10分で新宿まで行けたとのこと、女の子が下宿なんてとんでもないという時代で、自身も特に下宿したいという考えもなかったため自宅通学だった。

Cさん(1965年家政科卒)もBさん同様神奈川県出身で、自宅から通学していた。出身校は都内の私立中高一貫校普連土学園<sup>1</sup>。アメリカのクエーカー教徒が日本の女子教育のために資金を出して作られた学校で、ここには、母親の友人の娘さんが通っていていい学校だと言われて中学から入ったとのこと。ご家庭はクリスチャンホームではなく、ミッション系の学校に進学しようとして青短を選んだわけではないという。もとは四大の薬学部に行くつもりで勉強していたが、仲の良い友人が青短を受験するというので願書を取りに行くのに付き合っ、家政科が化学で受験できることを知り軽い気持ちで受験したら、受かってしまったのだという。母親からは「受かったんなら、青山でいいんじゃないの」と言われ、四大薬学部を受けることもなく入学を決めたとのことだった。「安易に入ってしまった。でも後悔してません。すごく楽しかったです」と語られた。

## 2. 青短に入って感じた自身の変化

Aさんがこの問いに対して話されたのは、クエーカーのクラスメイトのことだった。Aさん自身はすでにプロテスタントの教会で洗礼を受けていたが、クラスにクリスチャンがあまりいない中、内村鑑三の弟子の関根正雄が東大の教室を使って開いていた公開講座に誘われた際その中にいたひとりで、質素で飾り気のない人が、アメリカ文学史の授業のとき先生の誤りを正したことがあった。その後、京王線の国領にある「国領憩いの家」<sup>2</sup>で開かれていた聖書を読む会や修養会などで時間を共にし、卒業後も家族ぐるみで付き合う「一生の宝」だと語られた。おそらく、カルチャーショックも伴った強烈な出会いと、意気投合し生涯のつきあいとなったその友人との出会いが、Aさんの人生を画するものと認識されているから、その友人のことを熱をもって語られたのだろう。

Bさんは、女子校だったからか、「ずーっと、ひとつの学生時代」という感じで変わらなかったように思うが、ただ行動も友だちも豊かになったと話された。

Cさんは、中高一貫のミッション系女子校の普連土学園出であるため、なおのこと「延長の感じ」で変わったことと言えば、土日は休みだったのが土曜日にも授業があるというぐらいだが、とにかく楽しかった、納得がいく学びで知識が広がったと振り返られた。

この問いに対して直接的で簡潔な回答が得られない場合の回答の傾向が、わずか3名であるがその語り方から見て取れるかもしれない。ひとつは、Aさんのようにその後続く大きな出会いを語る場合、もうひとつはBさん、Cさんのように問われるから強いて言う



ならという感じで、とにかく楽しかったと語る場合である。私たち聞き手は青短に入る前のことも背景として問いに入れていたが、聞き取り対象者の方々はこの機会に青短時代を振り返っているのです、どうしてもそこが起点としての振り返りになるので、この問いが答えにくいという面もあるのかもしれない。

### 3. 学生生活の思い出

事前に伝えてあるQ3は「特に記憶に残っていることについて教えてください（先生、友人、ゼミ、授業、礼拝※、学校生活、学生活動、寮、その他）※学生時代の基督教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響。」というものである。以下、「3-1 学業」で、教員や授業などを、「3-2 学業以外」でサークル活動やアドグルなどを、「3-3 学外での生活」で寮生活や短大の関係以外の場での活動を、「3-4 基督教教育関連」で宗教関連のエピソードを、そして「3-5 その他」で特に在学中に東京オリンピックを経験したB・C両氏のエピソードをまとめたい。これらも、例えば学内の友人関係で参加した学外の活動など、項目別に切り分けられるものではないので便宜的な部分がどうしても出てしまうことをお許しいただきたい。

#### 3-1 学業

Aさん（昭和28年英文科卒）の場合：実にたくさんの具体的なエピソードを話してくださった。以下、上がった教員の名前とエピソードを列挙する。

- ・荒牧鉄雄先生<sup>3</sup>いきなり「皆さん行ったことありますか？ ストラトフォード・アポン・エイボン」（シェイクスピアの生誕地）と聞いたりなさる。授業が楽しかった。ホイットマンの『草の葉』も一部分読んだ。
- ・西島正先生<sup>4</sup>テキストだった『幸福の探求—アビシニアの王子ラセラスの物語』（だと思われる）が「退屈でダメだわ」といった学生がいて、そのせいか2年目のテキストは『ウィンダミア卿夫人の扇』（オスカー・ワイルド）という喜劇でそれは楽しかった。
- ・菊地裕先生<sup>5</sup>桂冠詩人テニスの詩を2年間授業された。'Tis better to have loved and lost, than never to have loved at all.（「愛して失うのは、愛さなかったことに勝る」）＝Aさんの言葉を覚えておけと言われた。その発音が「すごくきれいだった」という。
- ・桜田佐（たすく）先生<sup>6</sup>ドーデの「最後の授業」を何べんも眼鏡をはずして涙を拭きながら、占領下の日本もひとつ間違えばどうなっていたかわからない！と授業された。
- ・川瀬一馬先生<sup>7</sup>国文科ではなかったが「花伝書」の授業を受けた。全然わからなかったが、振り返れば「あんな立派な人を教授に迎え」ていたことをすごいことだと思う。

Aさんの卒業と入れ違いに着任した加藤楸邨先生に関しても、ちょうど俳句に興味を持ち始めた頃、加藤先生の着任を知り「お金があったら」「楸邨さんの時間だけ」青山に受講しに行きたいなあと「ほんとに地団太踏んだことがあった」と語られた。

70年ほど前の授業をこれほど鮮明に覚えておられることに驚嘆したが、それは学んだ時の知的高揚感と、おそらくその後の人生でも繰り返し反芻されてきたことの表れではないだろうか。

#### Bさん（昭和40年国文科卒）の場合：

- ・馬越宮先生<sup>8</sup>の源氏物語を選択し、「須磨の巻」で原稿用紙50枚ほどの卒論を書いた。提出が10月だったので半年の間、集中して取り組んだ。馬越先生からAの評価もいただき、「私の宝物で、今でも大事にしている」。
- ・加藤楸邨先生<sup>9</sup>の存在を知っていたら選択していただろう。

Bさんは、のちに三人の子どもの母親になってからPTAの役員を務めるが、その中学のPTA主催で源氏物語講読会という講座があり、そのテキストが短大時代に使っていた池田亀鑑のテキスト<sup>10</sup>だった。「もうそういう形で、どこかで2年間学んだようなことが、なんとなく生きてるっていう感じ」だと語られた。また、卒論で取り組んだ「須磨」の近くに住むことになろうとは思ってもみなかったことで、そこにも運命的なものを感じ、青短での学びが人生と深く結びついていることを強く意識されていると感じた。まさに、国文科を選んだ「一生付き合える」「人生の役に立つ」という理由が、証明されているようである。

#### Cさん（昭和40年家政科卒）の場合：

聞き手側は、もともと薬学部に進みたいと考えていたCさんなので、化学実験などもやっていた家政科に入って理系の勉強に満足されたのではないかと考えていたが、それはあまりなかった、家庭生活には役に立ったのではないかという反応だった。そこで挙げられたのが、栄養学の西田寿美先生<sup>11</sup>に「にんべん」に紹介してもらい、大学祭で出汁に関するグループ発表を行った体験である。のちに、関西に住むことになり出汁の知識があったことがとても役に立ったと思っているとのことだった。その他幅の広い知識と友を得られたと思うと振り返られた。

### 3-2 学業以外（サークル、アドバイザーグループなど）

Aさんは寮生で、キリスト教関係での人間関係や活動の話が多かったので、3-3、3-4項にまとめる。

Bさん、Cさんはともにテニス部だった。Bさんは中高通してテニスをやっていたためいちばんの経験者で部長も務めた。レギュラー選手として日本各地への遠征試合や合宿、そして、遠征資金やコーチ代などの資金稼ぎのためにダンスパーティーも開いたという。学生生活の「半分以上テニスが主体」だったというBさんは、当時のお写真も見せてくださり、はつらつとした笑顔が青春のすべてを物語っているようだった。ちなみに、慶応大学のテニス部のレギュラーだった方と2年の時に交際が始まり、のち、結婚されている。

片やCさんは、テニスコートの横を通ったとき「楽しそうだった」という理由で未経験ながら入部し、合宿や練習を重ね、試合に出ることもなかったが上達し良い運動になったと振り返られた。

テニス部の合宿のほかに、アドバイザーグループの旅行や希望者を募った九州旅行（Cさん）が楽しい思い出として語られた。

Bさんが青木孝先生<sup>12</sup>のアドバイザーグループで伊豆に一泊旅行した時のエピソードは興味深い。青木先生が参加学生に向かって、青短に来たのは「やっぱり、青短卒というレッテルが欲しいからじゃないか」と言われたという。Bさんは、そんなことは考えたこともなかったそうで「私は私だから」というような気持ちを持った記憶があるという。しかし、挑発的に感じるこの言葉にBさん含め反感を覚えることはなく、当時の青短の世間的な評価の高さを「そういうものなのか」と素直に受け入れたと語られた。青木先生の真意は確かめるべくもないが、強い印象を残している様子から、非常にラディカルな問いかけだったのではないかと思われる。

### 3-3 学外での生活

Aさんの場合：

天沼二丁目にあった「青山寮」が大きな屋敷を二分したもので、隣は角川グループ創業者角川源義氏の住まいだった。そのため息子の角川春樹氏が黒い帽子、マント、高下駄姿で電話を借りに寮の玄関に入ってきていた。一軒の家に複数の電話を引けない時代だった。寮は1、2階各2部屋で、1部屋にふたり。賄の女性の方がいておいしい食事、昼食のお弁当も出してもらっていた。卒業までその寮にいた。大学の敷地内にあったという「モンベル」「どんぐり」という喫茶店のこと、阿佐ヶ谷駅から青山寮までの途中で食べた35円ラーメン、ララ物資でもらった古着の話など70年前の東京の様子を垣間見ることができた。

### 3-4 キリスト教教育関連

Aさんの場合：

Aさんは高校時代に受洗し、大村勇先生の日本キリスト教団阿佐ヶ谷教会に通っていた。短大でキリスト教に出会ったわけではないが、2節で既述したように、「一生の宝」となったクエーカーの友人（普連土学園卒）の存在はとても大きいものだったとわかる。学校帰りも彼女の家（聖公会のクリスチャンホーム）に寄って遊んでから帰寮していたという。その友人と「国領憩いの家」や青山学院沓掛学荘、YWCA宗教部などの行事と一緒に参加していたという。

キリスト教倫理の気賀重躬（けがしげみ）<sup>13</sup>先生が週に一回夕礼拝に来られて、聖書の輪読をしていた。その際関西出身のAさんのアクセントでは「神」が「紙」になっていると笑われた経験を語られた。

大島青松園（せいしょうえん）という国立療養所の中に住いがあったクラスメイトがいたことと、学生YMCAのサークル活動に参加していた1年上の卒業生が長島愛生園の医官と結婚した縁で愛生園の隣の島の光明園家族教会の牧師や信徒との交流がその後生涯を通して続いている。

以上のように、Aさんの日常には常に宗教活動があった。

Bさんは、「青山学院に来たからには」参加しなくてはと考えていた宗教合宿に卒業間際に参加し、掛井五郎先生<sup>14</sup>といろいろと語り合ったそうだ。具体的に何を話したかは覚えていないが、宗教合宿ではあるが宗教の話というより「人間としての生き方についてのお話」だったように記憶しているとのこと。礼拝にも出ていたし一度聖歌隊で歌いたいという気持ちもあったというが、なにしろテニスで忙しかったので時間がなかったようだ。

Cさんは短大の礼拝に熱心に出ていたわけではなかったとのことだった。

### 3-5 その他

Bさん、Cさんは共に1965年3月に卒業されている。つまり、2年生の時に東京オリンピックを身近に経験されている。Bさんによると1年の時は都電があって、15円くらいで日比谷公園や目白の学習院とか遠くまで行けてとても便利だった。ところが2年になるとそれが一切なくなって、青山通りが今の広さになったという。オリンピック開会式の10月10日は学校も休みで記念すべき日に「一生記憶に残るようなことをしよう」とテニス部の副部長とマネージャーと3人で東京タワーに上って望遠鏡で点火している聖火台を見たという。

Cさんは教育実習がオリンピック開催期間と重なり、しかも実習先が原宿中学で学校から聖火台が見えていたという。生徒と、付き添いの先生方が観戦に行ってしまったりでまともに実習もできず、生徒たちは自習が多く、数学等ほかの教科のお手伝いをし、実習はオリンピックと共に終了したとのことである。教職課程は必須ではなかったがそういう制度があるなら中学校の二種免許ぐらいとっておこうと取得したが、実習をして自分には向かないと思ったという。

時代の大きな変化の中で、若い女性が自分のペースは崩さずに面白がっているように感じる。

## 4. 在学時、青短は自身にとってどんな場所だったか

Aさんは、「解放感」があったと語られた。「自己実現ができもしないのに、できるような感じ」と。「解放感っていうものはもう、ほんとに、ほんとに気持ちがいいね」と語られた。Bさんは短大はものすごく忙しかったが、「ほんとに楽しかった。テストを受けることも、卒論書くのも楽しかった」と語り、Cさんは「居心地のいい場所」と語られ、宗教的にも、ひとりひとりが自分の心と向き合って考えそれを発表するという普連土学園で

慣れ親しんできて身についたものが青短でも違和感なく居心地よかったということだった。

いずれも語られる内容や語り口から伝わってくる印象そのまま、短大時代いかにのびのびと心身の翼を広げていたかということがよくわかる気がする。

## 5. 卒業後の進路、ボランティア活動など

### 5-1 卒業後の進路

3人共に、卒業後就職し、その後結婚で離職し実家を離れあらたな場所で生活をスタートされている。

Aさんは、1953年という時代に聞き手が思い込んでいたイメージとは違い、最初から卒業後働くことを考えていたということがまず印象的だった。当時、英文タイプの国家試験を受けるための「商業英語」という科目があり、大変なので受講生も多くはなかったそうだが、Aさんは「短大って、即戦力だから、それはやっとなかなかと困る」と思って履修したという。それでなくても、青短の卒業生は東京はもちろんのこと関西でも引く手あまただったのだが、「商業英語」を取っている人は「もうほんとに引っ張りだこ」だったという。Aさんの実家は松江から大阪の豊中に戻っていたので、Aさんも卒業後は豊中に戻り、父親の勤め先の系列で三和銀行に入り外国為替の部署に配属になったという。女性が「蔑視じゃないかもしれないけれど、低く見られた時代だから」有能な人はたくさんいたが、男性との待遇には差を感じていたという。まだそろばんの時代、残業に次ぐ残業、大晦日など紅白など見たこともない残業だったのに、女子社員はその足で美容室へ行って髪を整え着物を着て、金融機関同士の互礼会に出なくてはならない。「あれはすごく酷い話だったわ」と銀行員時代を振り返られた。所属していた豊中教会の手伝いを頼まれたこともあり、4、5年で銀行を退社された。その後、豊中教会の関係者により東京神学大学在学中の男性が紹介され、その方の卒業を待って、Aさん29歳の時、結婚。牧師となった夫の最初の赴任先福島県三春町へ移る。さまざまなストレスで体調を崩すことも多かったが、そんなときもクエーカーの友人が支えになってくれていたという。三春に8年、兵庫県相生に39年。夫の引退後神戸に移り今に至る。

Bさん曰く、高校の良妻賢母教育の影響からか卒業後何になろうという考えが全くなかったし、大学2年になってもテニスの試合であちこち飛び回っているうちに2学期（後期？）も進んだ頃になり「そうだ就職しないといけないだ」と気づいたという。心配した叔父の紹介で学校事務の仕事につき、1年ぐらい働いて実家で花嫁修業（もともとやっていたお茶、料理学校受講）に入った。交際相手の卒業を待ち、Bさん23歳の時結婚。以降、お連れ合いの実家がある兵庫県在住となる。

Cさんのご両親は、短大進学の時同様卒業後の進路についても、結婚についても、口を出すことはなかったという。そして、ご本人も、「遊んでいるより」「どっかあるかしら」



というぐらいの構えで父親に相談したらここでよければと橋渡ししてくれたのが都内の積水スポンジ工業で、そこに2年間勤めて辞めたとのこと。ご両親は結婚についても干渉しないのだが、親戚や父親の友人など周りが見合い話を持ってきていた。父親の仕事関係の方から紹介された人と26歳で結婚。当時はみんな結婚するものと思っていたから当然という感じであまり深く考えなかったという。

## 5-2 ボランティア活動など社会活動について

Aさんは、教会に出入りする人たちの姿を見て、まだ作業所などない時代に精神障害者の居場所づくりが必要だと考えて、保健所と協力して、最初は相生教会の一部屋で、紙袋の口ひもを通す仕事と、農家の有志の協力を得て、荒地を借りてサツマイモを収穫し現金化した。それから、倉庫を借りて、本格的に作業所の業務を開始し、相生での精神障害者の自立を目指した。その陰には相生教会の協力によるケーキ作り他の手作りバザーや、パソコンによる事務会計処理等、得がたい援助があった。結婚前の豊中教会の手伝いも含め、教会の運営を長きにわたり支えてこられた。

Bさんが33歳の時に、短大同窓会の関西支部ができ、「ほんとうにうれしかった」という。義父を見送り介護を終えた後、関西支部役員会に入り、その後支部長を6年間勤め積極的に同窓生をつなぐ役割を果たされた。お子さん3人が中学に在学した通算8年間のうち5年間PTA役員として新聞を作ったり、ある時は壁紙の張替えまで、まさしくボランティア活動と言えるが、同時に自身の学びの場でもあったということは先にも書いた通りである。そのお子さんたちの学校が公立ではなかったため、近隣との付き合いが希薄で、地域のために少しは動きたいと考えたBさんは、60歳前ぐらいから民生委員の協力者のようなところに13年間身を置いた。その後民生委員になったが、時を同じくして「一般社団法人茶道裏千家淡交会神戸第一支部」の幹事から常任幹事となり、仕事も増えたため民生委員は引いたとのことだった。この幹事の仕事もボランティアである。

Cさんは非常にひょうひょうと話される方だったが聞いていくと30代で親の会社を継ぐことになった長男の嫁として、住んだこともない関西で、義母、そして、義父の介護を18年間なさっている。その間4人の子どもを育て、PTA役員はずっとやっていたという。強がる風情などみじんもなく、まさに柳に雪折れなしという印象を持った。

さて、BさんとCさんは同学年でしかも同じテニス部に所属していて結婚後は共に兵庫県内に住んでいたのだが、付き合いが続いていたわけではないのだという。同窓会関西支部の第一回総会から参加してきたBさんは、Cさんに声掛けはしていたそうだが、義父母の介護と4人の子育てで忙しかったCさんは同窓会行事に出てくることはなかった。しかし、1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災がお二人の交流の再開のきっかけとなった。Cさんの自宅は地震で全壊したのだという。それを聞きつけたBさんから電話があり、Cさんは翌年から同窓会活動に参加するようになり、すぐに会計担当を引き受け、10年ぐらい会計を担ったという。震災時関西支部の副部長だったBさんは、同窓会名簿をもとに支

部会員全員に安否確認のハガキを出したことなど、当時の同窓会の動きを語ってくださった。

結婚を機に、実家から離れ、友達も知り合いもない初めての場所で子育てし生きてきた女性たちが、青短の同窓生であることでつながりなおし、支え合う、まさにシスターフッドの力を見た思いがする。

## 6. (今振り返って) 自身の人生にとって青短とはどのような存在か

Aさんは「故郷（ふるさと）みたいな感じ」「ほんとに懐かしい、宝物」「あんな豊かな時代があったから、どんなに苦勞してもいいわと思うぐらいよい時代だった」と語られた。

Bさんは、人生に彩を加えられる豊かな時を過ごしたのではないか、その後PTAの役員も、短大同窓会の関西支部長もためらいなく引き受けた、そういう姿勢につながったかもしれないと振り返った。

Cさんは「原点」と答えられ、在学中の2年間だけでなくその後も含めて感謝の念を述べられた。同窓会活動に参加し始めてからは約30年間、講演会などにも積極的に参加され、その資料やメモも持参して学んだ内容を語ってくださったので、在学中だけでない人間関係と学びの継続を含めて「青短」なのだろう。

言葉は違ったが、一様に今につながる、今の自分を支える存在としてとらえていると理解してよいだろう。

## おわりに

私的な感想になってしまうが、まとめを担当したお3人に限らず、本プロジェクトを通して、(表現に語弊があるかもしれないが)「高齢の女性」に対するイメージが色鮮やかに広々と広がるのを実感している。それは翻れば私自身が持ち合わせていた女性観の貧しさの証でもある。ただ、その女性観が長年日本社会が持ってきた貧しさでもあったら、本プロジェクトは青短の女子教育を考察するだけでなく、豊かな女性観の提案にもなっているのかもしれない。また、奇しくも3人中ふたりが直接、間接にクエーカーの普連土学園とのかかわりがあったことは興味深い。青短の卒業生がどこかで同じように誰彼に影響を与えているであろうことも想像された。

結婚により夫の仕事の関係で新たなコミュニティに飛び込まねばならなかった女性たちが、それまでの人生と分断されることなく自分でいられるための核として青短が意味づけられ、また、あらたな場所で続く人生を支える人脈にもなっていることを意義深く受け止めたいと思う。

注

1) 「普連土学園は、1887年（明治20年）、アメリカ・フィラデルフィアのキリスト教フレンド派（クエーカー）に属する婦人伝道会の人々によって女子教育を目的として創立されました。これは当時、アメリカに留学中だった新渡戸稲造と内村鑑三が助言したもので、以後130余年にわたってキリスト教による人格形成を教育基盤としています。なお、本学は日本においてフレンド主義に基づいて設立されている唯一の学校です。

校名の「普連土」という漢字は、津田塾大学の創立者 津田梅子の父、津田仙によって「普（あまね）く世界の土地に連なる」ように、すなわち「この地上の普遍、有用の物事を学ぶ学校」であるようにという願いを込めて考案されました。」普連土学園中学校・高等学校WEBサイト<https://www.friends.ac.jp/about/index.html>「学園沿革」より（2024年1月10日閲覧）

2) 「1926年 国領憩いの家 青年女子の精神・体育の向上と職業婦人の休養のために、緑濃い地に白と緑の調和よき洋館が新築され寄付された。」東京YWCAの沿革と歴史<https://www.tokyo.ywca.or.jp/about/history.html>（2023年9月4日閲覧）

3) 荒牧鉄雄 英文学者・英語教育者。青山学院女子短期大学名誉教授。青短英文学科専任期間：1951年4月～69年3月。1951年～1971年在任。

4) 西島正 青短英文学科専任期間：1950年4月～1966年3月。のちに高等部校長。

5) 菊地裕 青短英文学科専任期間：1950年4月～1980年3月。

6) 桜田佐 フランス語兼任講師：1950年～1960年。

7) 川瀬一馬 青短国文学科専任期間：1950年4月～1974年3月。

8) 馬越宮 青短国文学科専任期間：1950年4月～1970年3月。

9) 加藤楸邨 俳人。本名加藤健雄。青短国文学科専任期間：1950年4月～1974年3月。

10) 池田亀鑑校注〈日本古典全書〉『源氏物語』朝日新聞社、1955年。

11) 西田寿美 青短家政学科専任期間：1961年4月～1976年3月。

12) 青木孝 青短国文学科専任期間：1957年4月～1982年3月。

13) 気賀重躬 キリスト教神学者、牧師。1956年1月より青山学院大学学長。

14) 掛井五郎 青短専任期間：児童教育学科1962年4月～、芸術学科1989年4月～1996年3月。



# 青山学院女子短期大学四国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ - 1956 (昭和31) 年から1965 (昭和40) 年卒まで

河見 誠

## はじめに

聞き取り調査プロジェクト第一期報告のコンセプトに従い、本稿では、主として2021年そして2022年においてもなされた、四国在住の1956 (S31) 年3月卒から1965 (S40) 年3月卒までの卒業生、すなわち昭和30年代に学生生活を送った卒業生10名からの聞き取りをまとめる。他の地方では昭和20年代卒の卒業生からの聞き取りも行っているが、四国ではその世代には聞き取りができなかった。しかしちょうど昭和30年代全体をカバーする対象者となった<sup>1</sup>。

聞き取りを行っていく中で、昭和30年代前半と後半で、女子の進学とそれを取り巻く社会の状況がかなり変化しているように思われた。そのため、冒頭の第1章と第2章に関しては、Iグループ=昭和35年(1960年3月)卒までとIIグループ=昭和40年(1965年3月)卒まで、に分けて整理してみる。第3章以下では二つの世代に共通するところも多いので、それほど明確には分けることなく論述を進める。

Iグループは3名、IIグループは7名で、人数は均等ではないが、世代分けを優先させることとする。昭和30年代前半の卒業生インタビュー数は他の地域を合わせるとかなりの数になるので、本稿で見いだされる特徴は、それらと照らし合わせてさらに検証することが可能であろう。

## 調査協力者一覧

記号	卒業年	学科	居住地	グループ
A	1956 (S31) 年	英文	徳島	I
B	1957 (S32) 年	家政	愛媛	I
C	1958 (S33) 年	家政	香川	I
D	1961 (S36) 年	英文	愛媛	II
E	1961 (S36) 年	家政	徳島	II
F	1961 (S36) 年	家政	徳島	II
G	1962 (S37) 年	家政	徳島	II
H	1961 (S36) 年	国文	高知	II
I	1962 (S37) 年	英文	高知	II
J	1965 (S40) 年	家政	徳島	II



## 1. 出身高校と女子の進路選択

出身高校は、IグループIIグループいずれも地域の進学校であり、その点での隔たりはない。

Iグループの出身高校はA城東高校（徳島）B松山東高校（愛媛）、C観音寺第一高校（香川）である。なお、城東高校の前身は1902年創立の徳島県立徳島高等女学校（女子師範併置）だった。観音寺第一高校は大平元首相も出た高校である。

B（松山東高校）によると、高校卒業後の女子の進路はお勤めか洋裁学校であったという。自身も、高校で初の青短合格者ということで、同級生には青短不合格で他大学進学者もいた。C（観音寺第一高校）の場合、女子の3分の1が香川大学に進学し、その他でも関西が多かった。そして教員になりたい人が進学していたとのことである。昭和30年代前半の四国では、高等教育への進学は多数派ではなく、「女子の四年制進学は地元での教員がメインであった」（A城東高校）という状況と言えよう。逆に言えば、その状況の中で、地元ではなく関西を越えて東京に、教養教育を旨とする青短に進学した卒業生は、特別な存在であったと言えそうである。

IIグループの昭和30年代後半になると状況が変化してくる。聞き取りからは女子についても進学がむしろ過半となってきたことが窺われた。但しD（松山南高校）によると、男子は早稲田などを目指し大阪に行かないが、女子は東京に行かない傾向があったという。J（城東高校）は父親（徳島出身）の転勤で東京都立高校から城東高校（高校2年時）に転校してきたが、（謙遜も含まれると思うが）この成績ではついていけないと言われ、その後必死に勉強して青短に入ったと言う。そして、当時高卒で就職する人もいたが、進学先としては地元の徳島大学に行く人がほとんどであり、東京の大学に行く人は1割ぐらい、同級で青短に入った人はあとひとりだけであった。徳島で育て外に出たことない人には、東京ひとり暮らしはちょっと怖いでしょうね、と述べている。

これに対しHとI（土佐高校）の場合は若干異なる。土佐高校は大学進学が前提であり、Hは東京しか考えていなかった。Iの同級生には津田塾やお茶大など四大希望者が多かった。ただし、Hによると県立高校に通っていたら地元志望だったかも知れず、この傾向は私立の中高一貫校である土佐高校の特徴と言う。

このようにIIグループが高校を卒業する頃は、女子の高等教育進学が拡充を見せた時代であるが、しかし四国では（私立の土佐高校のようなケースを除いて）兄弟姉妹でも男は東京四大、女は地元という傾向があったと言える。そして後で出てくるように、東京なら2年、寮でなければ駄目という縛りも、Iの時代よりは緩やかになりつつも、なお一般的であったようである。これにはもちろん家庭の経済事情も影響しているようだが、それでも兄弟と姉妹で優先順位があった。この点はまた後（第4章、第5章）で度々出てくる話である。

## 2. 学科の選択

Iグループの時代には、将来のため（結婚し家庭を持つことを前提として）家政に行くことが望ましい、親も家政なら短大進学と上京を認めるという風潮が窺われる。

B（1957 [S32] 年卒・家政）は国文学が好きだったが、短大には2年しかいないし結婚していちばんいいのが家政と勧められて受験した。東京に出ることに関しては、青短はしっかりしている、いい大学であるから認められたとのことであるが、それが許された背景には後述第3章の母親の思い、そして（恐らくは母親を通しての）父親の理解もあった。

これに対しC（1958 [S33] 年卒・家政）の場合、4歳年上の姉が英語を学びたいということで既に青短英文科（第9章で後述するように、救世軍女子寮で生活）に進んでおり、中学の時から優しい姉と同じところに行きたいと思っていたことが青短を選んだ動機であった。そして女子は家政という理由ではなく、受験科目に数学があり、理屈が分かればできるから数学が好きだったので家政を受験したと述べている。但し周りを見ると、「家政なら出してやる」という親が多かったという。Cの家庭では、明治生まれの父親が村でただひとり早稲田大学を出ていて、子どもには一度東京の空気を吸ってこい、という考えがあったらしい。

A（1956 [S31] 年卒・英文）は高校を卒業しても「もう少し何かを学びたい」という気持ちがあって、それをしっかり見つけるための前段階として、進学をしたかったという。そのため「東京に行きたい」と思っていた。母が早くに亡くなり父方実家の祖父母に育てられたが、祖父に教育権があり、四年制は駄目ということで短大進学となった。けれども家政は嫌だということで英文を選択した、という強い意志を持った方である。もっとも（本人の言では）英語が得意であったわけではなく、課外グループで教わっていた先生（城南高校）が青山学院出身で、英文なら青山と勧められたという。

これに対しIIグループの時代では、少なくとも聞き取りの中では、家政なら認めるという話は出てこなくなる。I IIの時代ともに、後述のように結婚を前提にしたうえで卒業後の進路が考えられていく傾向に変わりはないが、それが学科選択に直接的に結びつけられることは、それほど強くなかったようである。

D（1961 [S36] 年卒・英文）は、（東京に出ることも含めて）周囲に「時代は変わった」と言われ、英文がいいということで進学した。家政進学の場合も、様々な進路の中から結果的に青短家政科を選ぶという話になってくる。E（1961 [S36] 年卒・家政）は最初四年制の美術大学を目指し、また高校の先生には徳島大学薬学部を薦められたが、結果として青短家政科に入る。G（1962 [S37] 年卒・家政）は関西の薬科大学を目指すのが友人の勧めで青短を受験した。数学の配点が高いのが家政科にした理由という（親は東京なら2年、関西なら4年という条件であった）。

なお、ここで述べておく必要があると思うが、青短家政科のカリキュラムは当時でも、いわゆる良妻賢母教育でなく、生活科学を通した教養教育を目指したものであった。この点が地方出身の家政科卒業生に大きな影響・変化を与えたことは後述の通りである（第6章以下）。

### 3. 母親の影響

東京の短大に行くという進路決定において、母親（さらには祖母）の影響が語られることも多かった。そのいくつかを列挙しておく。

I グループ世代のBの母親は、優秀で薬学部に行きたかったが姉妹の3人目ということで、姉を嫁に出す方が優先であり、進学することができず残念だったとよく話していたという。第2章で書いたように、この母の思いが、父の「行きたいなら行くか」（東京へ、そして青短へ）という言葉に結びついたのでないかと推測できる。

Aは、婦人会館の建物を作るため、徳島出身の財界人のところへ寄付集めに回るため上京してきた、当時徳島県婦人会長をしていた母方の祖母の思い出を語ってくださった（シオン寮でのハプニング、鞆持ちについて回ったこと）。師範学校を出て家業の旅館を経営していた方で、「一流の人と出会いなさい」とよく言われたという。これも推測であるが、自立心をしっかり持っておられるAに、女性の生き方として直接間接に影響を与えたのではないだろうか。

II グループ世代のDの進路は、直接に母親の影響を受けている。次のように具体的に語ってくださった。明治43年生まれ松山出身の母は実践女学校高等部専攻科の家政科を出ていた。当時女子高等教育を受けた者は非常に少なかった。上京してということになるとさらに稀であろう。その母と高校の担任が、行くなら青短の英文だと勧めてくれたという。祖母は理解があつて女も勉強しなければいかんという考えを持っていた。そして学費のため田んぼを一枚売った祖父は偉かった。その母もまた九人きょうだいのいちばん上で弟妹の面倒も見、バスケットボールの選手もし、勉強もできて、考えられないくらい偉かった。卒業後実践女学校高等部の教員になり、その後体調を崩して故郷に戻ったが、その母の経験があつて進学が理解された。卒業後Dは地元に戻ったが、公務員となり定年まで働く。仕事を決めるのも母の意見によった、という（第5章で後述）。戦前の女子の進学の状況、そしてそのことが娘に与える影響の大きさがよくわかるお話であった。

またEは高校に下宿から通ったのであるが、これは城東高校が元徳島高等女学校であり母親が行きたかったが行けなかったためということである。女子教育への道筋を母親の願いが開いていったと言うことができよう。

もう一つの例を記しておこう。Iは青短の他は受験する気はなかった。それは母も祖母もクリスチャンであったことによる。祖母は奄美大島出身で京城（現ソウル）に行ったが

夫が亡くなり、母を連れて帰って鹿児島で母子で生活した。母は東京へ出て日赤看護婦となり、リオデジャネイロ丸（外国客船）の看護婦として世界中を回った。短大に入ってから高まって今も続いている自身の外国への関心（後述第12章）にもまた、母や祖母の影響があるかも知れないと述べている。

#### 4. 長女の制約

さて興味深いことに、長女だから短大に行った、という話が何回も出てきた。

Hは2歳下に妹がいたので短大しか行かせられないと言われ、短大を選んで青短を受験した。Iは青短に行きたくて第一志望で入学したが、妹が下にいたので短大にしたというところもあり、妹は四大に行ったという。Fは、親は短大にしろとは言わなかったが、二年ごとに妹が2人いたので一度は県外に出たいと思い、東京で短大を探した。兄弟間において男優先（後述でも時々出てくる）、そして妹優先、という順位があったようである。

なお、高校までの家事への関わり方については、世代に関わりなく様々であった。

#### 5. 卒業後の進路

I II両グループとも、昭和30年代を通して変わらないところは、地元に戻り、結婚することが前提（多くはお見合いによる配偶者選択）とされていたことである。就職、特に東京で就職することは例外であり、働くとしても短期であった。

I世代のC（1958 [S33] 年卒）によると、当時は結婚が当たり前で就職はダメであった。就職した者はいたが教師ぐらいであり、同級生もほとんど就職していない。姉妹は全員お見合いで結婚した。家庭を持ってほしいというのが親の願いであって、仲人が次々訪ねてくる。断ってよいが、断ってばかりいると悪口を言われるのだそうだ。

そのような状況の中で、できるだけ東京に残りたいという思いを実現した者もいた。B（1957 [S32] 年卒）によると、やはり同級生で就職した者はほとんどいなかった。東京在住者（実家通い）は和光などに就職したり、寮生でも中学教員になった人はいる。しかしその中で自身は、1年だけ自分の思い通りにしたいと、下宿して早稲田の聴講生で国文に1年間通った。

A（1956 [S31] 年卒）によると、地方の人はほとんど地元に戻った。ただ、広島出身で東京でシチズンに就職して社長秘書になった人がいる（60歳の時出席した東京でのクラス会でクラスメートに聞いた。在学中に席が近く、同じ方面の出身ということもありよく話をしていた方だったので、素晴らしいと思った）。地元の山形放送に就職した人もいる。またスチュワーデスは女性の憧れだったが、短大事務室に掲示されていた「容姿端麗、身長160センチ以上」という条件を、自分の身長が足らなかったことで覚えている。自身は虎ノ門タイピスト学校に通うことが許され、紅露みつという徳島選出の女性参議院議員の



もとに置いていただいた。その後は就職しないで徳島に帰った。戻って仕事をしたいと思いい、放送局を受けたが音声テストで声が合わないと言われた。また中学校の英語教員試験に合格したが（育ててくれた）祖母がダメといい、お茶、お花、習い事をし、結婚に至る。自立して生きていくというほどの自信はなかった（ので納得している）が、ただ先生にしる何にしる（今周りを見てみると）職業を持って勤め終えた人には信念、自信があるように思う、と振り返っておられる（これは卒業後の活動〔後述第11章〕を通しての所感）。

後に見るように、ご自身は（他の卒業生と同様）論理明晰で学びの意欲が強く生涯学習を続け、そしてまさに信念と自信を持って活躍されている方であるが、職業の観点からはある種の不完全燃焼感があるのかも知れない。

Ⅱグループの昭和30年代後半の世代になって、東京に残ることや就職に関して若干緩やかになった感もあるが、しかしそれは家庭によってであり、やはり地元に戻って結婚することが基本であった。

F（1961〔S36〕年卒）は卒業後もう2年残りたいと親に願ったが、帰ってこいと言われた。お茶、お花、洋裁、料理と花嫁修業を行った。家に縛られていた、友達が家に来たとき「東京の時と感じがちょっと違う」と言われたと回想している。J（1965〔S40〕年卒）は東京で就職したかったが、父親が卒業前の二月に亡くなったので母親が絶対帰ってこいということで、父親の関係のある地元の企業（東邦レーヨン）に就職した。3歳違いの兄がひとりいて日大に進学しており、東京では兄と一緒に一部屋借りて住んでいたが、兄は自衛隊の整備士として就職していたため、自分には帰ってくるようにとの母の強い希望だった。父親が早逝したという事情もあり、母は父の死後、徳島大学の学生相手の下宿屋を建てていた。なお、東京での就職活動はしなかったが、はじめは東京で就職したいという思いがあり、求人票が貼られているのを見ていて、楽観的で（東京で）どこかに入れると思っていた。

実際東京で就職したH（1961〔S36〕年卒）によると、東京出身の同級生は就職していった。求人はあったが都内が多かった。そのため高校の友人は皆帰って地元の銀行などに就職した。結局寮生の多くも地元に戻った。高知に戻ったら結婚しろということだから、自身は卒業後東京にいたくて2年間仕事をした（叔父の知り合いの方のコネで赤坂見附にあった日産自動車の販売会社に就職）。

I（1962〔S37〕年卒）は地元に戻り、四国銀行（高知が本店）の外為に勤務し2年半ぐらい働いた。その間、お見合いをしないかという話はあった。

D（1961〔S36〕年卒）は、東京で就職は可能だったと思うが、妹や親のこともあり松山に戻ったという。当時は銀行でも30歳で退職する。東京出身者は就職も多かった。和光などが多かったように思う。地方出身者は出身地に戻って就職した。周囲に家事手伝いはいなかったように思う。結婚してから働いた方がいいと思っていたため、自身は公務員（松山市）となった。母（上述第3章）は男女で様々な差別はあるから結婚しても働いた



方がいと勧めていた。結婚してもできる仕事、男女差別のないところは公務員か教員かであったが、教員は大変だと、経験した母の意見もあって公務員になった。公務員として定年まで働いたが、子育てとの両立は大変だったとおっしゃっていた。

E (1961 [S36] 年卒) は元々美術に関心があったため、桑沢デザインスクールの試験を受けて入った。年齢はバラバラでいろんな人がいて、学生運動に走っている人もいた。経済成長、学生運動と、るつぼの時代だった。しかし2年行くはずが実家倒産のため一年で帰ることになった(弟はその代わりに大学に行った)。

因みに、Eは、学生時代からお見合いさせられていたという。Gは2年生のお正月に結婚が決まっていた。短大の2年間は一生懸命学んだ、また思い切り楽しんだという、どなたからも伝わってくるエネルギーと達成感は、多かれ少なかれこのような時間的限定感がその一因であるのかも知れない。

## 6. 授業

以上、昭和30年代の卒業生の進学・進路の状況を、社会背景を念頭に置きながら整理してみた。次に、そのような背景のもとに入学した青短の2年間はどのようなものであり、どのような影響・変化を与えるものであったか、見てみることにしよう。

まず、当時の授業や行事の情報は貴重であると思われるので、こちらは学科別に列挙しておく。

- ・国文科：H (1961 [S36] 年卒) によると、1年生の5月頃に「奥の細道を巡る旅」(2クラス全部の学科による研究旅行)があった<sup>2</sup>。そこで皆がすごく仲良くなった。クラスもよい雰囲気であった。自分はもともと国文に必ずしも強い関心があったわけではなかったが、川瀬一馬先生の授業はすごく興味が引かれるものであった。2年生になったら何人かずつ自宅に招いてくれた。諸橋徹次先生も面白かった。担任の青木孝先生も印象に残っている。四国から来ていたので珍しがってくれた。加藤楸邨先生の授業では俳句を作った。馬越宮先生の古典の授業も楽しいものだった。毎日5時間必ず授業があり、ノートを取るのに必死だった。できることは何でもやっておこうと、教職も履修した。

家政科のB (1957 [S32] 年卒) からも(国文学が好きだったためであろう)川瀬一馬先生の名前が出てきた。また一般教育で俳句を学んだことを覚えている。そして万葉の勉強や源氏の講読を今でもしているという。

- ・英文科：A (1956 [S31] 年卒) によると、英文購読アランポーの授業は大変だったが面白かった。折角青山に来たのだからと、院長の豊田実先生のシェークスピアの授業も聴講にいった。金王町には短大女子寮、大学女子寮、宣教師館があり、オーラル・イングリッシュのベイリー先生が向こうから来たとき避けて逃げてしまった学生時代を反省

している。

D（1961〔S36〕年卒）によると、丁度中軽井沢寮ができた頃であった。アテネフランセに通っている人がいた。フランス語の先生が優しかった。ゼミは松山正男先生で、教職過程を履修した。今でも英語の勉強を続けている。

I（1962〔S37〕年卒）によると、西島正先生の授業は難しかった。外国人の先生もいた。小田島嘉久先生（キリスト教学）も覚えている。一通りの英語の勉強をしたので今でも片言は分かる。

・家政科：C（1958〔S33〕年卒）によると授業はびっしり、土曜日もあった。家政科では料理が好きで勉強より楽しみであった。もうひとりと競争して授業でいちばん早かった（桂剥きなど）。しかし「シチューは時間ギリギリまで煮込むですよ」といわれギャフンとなった。これは大西セチ先生の授業でのエピソードである。島崎先生のもと卒論「寮食の合理化」をシオン寮生とともに5人で書いた。2年生の秋に北海道への旅行があった（学生部主催旅行の一つ）<sup>3</sup>。教科書は全部残っている。

E（1961〔S36〕年卒）は調理実習で生きた鯉を掴んだり、鳩の胸に詰め物をしたことを覚えている。短大全体での講演も行われた。その中には犬養道子さんもいて、自分の意見が言える女性だと思い印象に残っている。女性が講演することが珍しかったように思う。ペギー葉山さん、坂本九さんのお話も聞いた。

F（1961〔S36〕年卒）は、授業の中では前に行く自信がなかったので、お皿洗い、野菜洗いをしていた。（Cと同じく）北海道への修学旅行に行った。また中軽井沢寮でEと一緒にいたコーラス部の合宿をした。英語の弁論大会に入賞した人の祝賀会で、コーラスをプリンスホテルで行ったことがある。（Eによると、青山学院85周年では中高大生と賛美歌の奉仕をした。）

G（1962〔S37〕年卒）によると、何と言っても西洋料理の大西セチ先生である。結婚してからもずっと先生の本を、ボロボロになるまで参考にした。1限に代返をお願いしたこともあった。友人に感謝。

J（1965〔S40〕年卒）もやはり大西先生の調理実習が印象に残っている。いちばん美味しかったのはプリン。ドロドロになってしまったが、火加減を教えてもらい、自分で作ったプリンが美味しかった。下宿では作ったことはなく、学校の設備あってこそであった。被服のまつり縫いは今でも役に立っている。

以上に加えて、青短において授業全体を通して貫かれた精神が何であったかを示す例として、Eの在学中と卒業後の話を挙げておきたい。

Eは在学中も美術から離れずクロッキーの教室、日大芸術学部の友人と日本舞踊のお稽古など、授業以外にも積極的に外に出ていた。アドグルの今井千枝子先生は「短大を足がかりにして将来に向かいなさい」と指導してくださった。青短の精神は「自由にしたいこ

とをきちっとしなさい」というものと受け止めて、いろんなことに挑戦した。

Eは卒業後デザインスクールに所属した(上述第5章)。短い一年であったが、その経験は非常に濃密なものであったという。その間美術館(日本画に初めて出会った)や先生のお家に行ったり楽しいアルバイトもした。地下鉄ショーウィンドウの入れ替えや、当時たくさんできた大使館の歓迎手書きパネルにも携わった。小澤征爾氏の将来の奥様がショーの時にファッションモデルとしていらっしやったり、すごい人たちがいた(この聞き取り調査時、Fの下宿の妹さんがその方の個人的なドレスを作っており、Fもその仮縫いのお手伝いをしたということが聞き取り調査の時に偶然にも分かり、互いに驚いたことであった)。そして、デザイナーで生きていくところまでは行かず楽しんでいたが、宗教は別にして桑沢デザインの気質と青山の気質は同じところがあると思った、と回想している。これは青短の教育が、(筆者である私自身もまた、度々先輩教員から聞かされた言葉であるが)「本物に出合うこと」、そして「人間として自由に豊かに生きること」、を当時から旨としていたことと通じた、ということだろう。

## 7. 地方出身者にとっての青短

さて当時、地方から上京した者たちの目に、青短はどのように映ったか。また東京在住の同級生、特に高等部出身者はどのような印象であったか。

Hによると、青短は派手なイメージがあったけれども入ったら地味でよかった。ホッとした。田舎者でもついていけるなというのが第一印象であった。入ってから建物の雰囲気がとても好きになった。(この点は直近までの青短生と変わりのないところである。)

ただ方言では躊躇を感じたようである。最初の授業が始まる時(標準語のアクセントが分からないので)隣の人へのイントネーションをよく聞いてからしゃべった。土佐弁は恥ずかしくてしゃべることはできなかった。Iは、英語の時間発表したら、東京出身の人に「あなた英語にも方言があるのね」と言われ恥ずかしかった。高校では英会話などもなかった、と経験を語ってくれた。

自宅生、特に青学高等部出身学生は、他の学生と異なる雰囲気を持っているという印象だったようである。Cは高等部から来る人たちは神々しかった、憧れに似た気持ちがあり、言葉もアクセントが違ってて垢抜けているように見えた、という。Aも、高等部出身の方が輝いて見えた。テニスウェア、ジャケット、など雰囲気が違う。(大木金次郎先生のお嬢様もいた。)また他にもキリスト教の学校からいらした方の英語の発音がきれいだった、と振り返っている。Gも、自宅生、特に高等部出身学生の洋服のセンスが素晴らしく目立っていた。自分も銀座の三愛に行って同じ綺麗な色(真っ黄色)のセーターを買った、という。

## 8. 授業外の活動・経験

この時代の学生は土曜日まで授業があり、また寮生活をしている場合門限がある中でも、様々な経験を積んでいることがわかる。これも主な例を列挙してみよう。

・博物館、演奏会、観劇等は多くの方の思い出となっている。

A（1956〔S31〕年卒）：寮の友人と、その頃珍しかった来日音楽家の演奏を聞きに行ったり、美術館博物館庭園巡りをした。徳島ではできない経験だった。

B（1957〔S32〕年卒）：友達と観た映画のことを話したり、民藝の「アンネの日記」の舞台を観て帰ってからアンネの真似をしたりした。また寮企画の観劇会があり、年に2回歌舞伎鑑賞があった。3階の席であるが、歌舞伎座に行くなど自分ではできないので、花道は見えなくても声をかけるなど、貴重な機会だった。行きは地下鉄、帰りは都電でゆっくり帰り、歌舞伎座前から和光を通過して渋谷へ、銀座の夜を見て帰った。（Aも寮企画の歌舞伎観劇会が度々あったことに、とても感謝していると述べている。）

H（1961〔S36〕年卒）：東急文化会館の映画によく行った。仕送りの遣り繰りが大変だったけれど楽しかった。

・渋谷、新宿に出かけたことも多く話題に上がった。

C（1958〔S33〕年卒）：外食によく出かけた。東横地下の食品売り場で大福10円。美味しかった。家族には「死ぬときには大福餅を食べさせて」と言っている。ケーキもあったけれど贅沢品だった。

G（1962〔S37〕年卒）：周りのことすべてに好奇心を持った。アシベホールによく行った。1階坂本九、2階シャンソン、4階タンゴ、藤沢嵐子、菅原洋一。4階がいちばん安かった。歌声喫茶とかクラシック喫茶店などにも通った。上野に来たイギリス、ロシアのバレエ団なども見に行った。

・クラブや同好会の合宿、友達との旅行の話も数多く語られた。またⅡの世代からはダンスパーティー、そしてアルバイトが話題に上がった。例えば新聞のアンケート、デパートのおもちゃ売り場、印刷会社での段ボール点検、ルーブル美術館展覧会（楽しくて、卒業後にパリまで見に行った）等々。

その他にも日常生活において、満員電車での通学が大変で傘が柄だけになって降りることもあった、という話も出てきた。

・社会的出来事としては入学式の時の美智子妃のパレード（S34年4月10日）、そして学生運動（樺美智子の事件、安保闘争）の時代であったことも語られた。

## 9. 寮生活

地方出身者の住居としてはシオン寮、シオン寮以外のキリスト教の寮、(寮の選抜に落ちて) 賄い付きの下宿、親戚の家、兄弟姉妹と生活などである。紙面の制約もあり、ここでは当時の学則に「人格完成教育のために重要な役割」を果たすと掲げられたシオン寮を中心に述べることにする。シオン寮は青短閉学の最後までキリスト教に基づいた教育寮として維持されたが、そのスタートとなる金王町時代のシオン寮がどのような状況であり、そこにおいて当時の学生が何を学んだかを見てみよう。

A (1956 [S31] 年卒) : 入学一年目は通常は2年生1人1年生2人の3人が同室だったが、寮の都合で1年生4人同室となったので、同じシオン寮のクラスメイト2人を合わせて6人で、(上述第8章のように) 毎週末よく行動した。(生涯の友としてお付き合いさせていただいているが、今は半分の3人になってしまった。)

シオン寮では自立を学んだ。人前でもものが言えるようになった。食事前のお祈りや夕食後礼拝の時間において80名の前で交代で司会をし、聖書からの引用も考えなければならない。

それまでは洗濯をしたことも台所に入ったこともなかったが、何から何まで自分ですることとなった。その意味でも教育された場である。食事の手伝いや盛り付けも当番制であった。マヨネーズを手作りしたのは初めてだった。お皿洗いも順番で行う。皿を割ってしまったことがあったが、川尻知恵先生(第一寮寮監)が「気になさらなくてよいですよ。洗ってくださるから割れるのだから」と声をかけてくださった。自宅であればけがをしなかったかといわれる位だが、キリスト教的いたわりが忘れられない感動になった。

全国から集まった方々と、お国ぶりの違い、食べ物の違いなど話し合い楽しかった。また寮には明らかに年上の人もいた。社会に出たのち教育を受ける必要性を感じて入学した方々と推察していた。

B (1957 [S32] 年卒) : 寮がある学校でなければ受験はダメであった。シオン寮には入れない人もいたし、嫌な人は出て行くこともあった。2年生になって入ってきた人もいる。授業は午後4時半位までで、部活や用事は申請すれば認められた。午後6時門限で10時消灯。「だから十分勉強できなかった」とおっしゃっており、当時の学生の勉学意欲の高さが窺われた<sup>4</sup>。

第二寮で飯久保澄先生が寮監だった。1年間同じ部屋で8畳間を4人で過ごしたのは今まで経験のないことだった(家庭以外で共に生活するという体験をした)。昼はお弁当が用意される。「お洗い」という当番があり、100人以上の皿洗いをした。4人で分担交代してやったが、家事をやったことがない自分にはこれまでにない経験だった。

日曜日の朝にベルが鳴る。それは礼拝に行きなさいという合図。生活のすべてがベルで、食事も掃除もビーという高い音で知らされる。夕方7時のベルで礼拝が始まる。当番制で部屋ごとに担当し、賛美歌、聖書の好きな箇所を決めて朗読、祈祷の時をもつ。教会は最



初はみんな熱心に探して行った。

日々の生活の中で寮にいてよかったのは、父母や姉妹の幸せを、とお祈りすること。故郷にいます父母・・・と必ず夕食の祈りの時に親のことを思い出すのでそれはよかった。聖書を読む習慣がついて、聖句を覚えることができた。今でもマタイ伝「明日のことを思い煩うな。一日の苦労は一日にて足れり。」を、くよくよせずに、と自分に言い聞かせている。また夕拝の時には先生が来ていろんな話をしてくださった。

I（1962〔S37〕年卒）：第一寮だった。川尻知恵先生は優しくて神様みたいだった。自分のことは二の次で、本当にキリスト教の精神そのものだった。礼拝に行っていないのがバレたことがあり、「ダメですよ」と一緒に風呂に入ったとき怒られたことを懐かしく思い出す。いろんな先生が来て話をなされた。第二寮と合同で説教があった。

同じ部屋の人に非常に恵まれた。北海道と広島と佐賀出身で、今でも交流が続いている。「シオン寮の会」で卒寮生の集いがある。寮は楽しかった。歌舞伎、箱根、軽井沢といろんな思い出がある。年に数回は教会にも行った。今も時々行く。そして賛美歌は今も歌う。入寮者は推薦も多かったようである。洗礼を受けた人も2名いた。

当時、キリスト教の寮は他にもあり、C（1958〔S33〕年卒）は救世軍の女子寮に入った。神宮通りにあり、準学寮で学校の紹介だった。東京女子大と青短半分ずつ位だった。姉妹4人短大に進学し、同じ寮に入っている（4歳年上の三女の姉〔上述第2章〕）に続いて自身を含めた妹3人が上京し、この姉とCが青短、あと2人が成城大学短期大学部に入学）。六畳に3人であった。寮ではボランティアが日常生活の中にあり、老人ホームを慰問し賛美歌を歌ったり、社会鍋をしたりした。寮長の秋元先生は、子どものように接してくれた。寮の友達は宝物である。

シオン寮を希望したが駄目だったので賄い付きの下宿に入ったという人も、この中で3名いる（D、F、H）。DとHは2年生の時にたまたま一緒の下宿となり、今までつながっている。

## 10. キリスト教信仰に基づいた教育

女子専門学校の伝統を受け継ぎ「基督教の精神に従って女子の教育に専念する」ことを学則第1条に掲げて青短は発足した。この教育理念が当時どのような展開をみせていたか、その一端を見てみよう。

上記のI（第3章）のようにクリスチャンの家庭で育てられた者や、キリスト教を具体的に身近に感じている者もいた。Dは松山には近所に教会があり、抵抗はなかったという。そして明治生まれで実践女学校専攻科に進学した母（第3章）が、牧師宅に下宿していて

賛美歌は知っていた。またEは小さいときに教会に行き、英語を学んだりしたことがある。また高校時下宿していたお宅が時々教会に行っていた

しかしそれまでキリスト教にほとんど触れたことのない者も多かった。そのような者たちに青短のキリスト教信仰に基づく教育はどのように受け止められ、どのような影響を与えたか。

J：びっくりしたのは入学式が礼拝形式だったこと。賛美歌で始まり、ああこれが青山、キリスト教学校なんだと。キリスト教学にもびっくりした。

F：教会には子どもの時も行っていたことがなかった。礼拝が素晴らしいと感じ、進んで出席していた。祈り、賛美歌、お話を聞くのが良かった。

H：自分には柔軟性があると思うので違和感なくキリスト教も受けとめた。礼拝堂には毎日行っていた。これは聞いとかなきゃいかんと、ほとんどサボらなかった。聞いていて面白かった。それまで仏教以外知らなかった。自然に受け入れて楽しんでた。キリスト教学の時間が興味深かった。

B：必修のキリスト教学は自分にはすごく良かった。哲学が入っていて面白かった。松山には教会があり、(仏教よりも)抵抗感はなかった。

C：家は真言宗でキリスト教は身近でなかったが、青短で(そして救世軍の寮生活を通して)ボランティア精神を培った。

以上のように聞き取りでは肯定的な受け止め方が多かったが、しかし次のような体験談も伺った。Aはこれまでキリスト教に触れることは全然なかった。強制されるようで最初は嫌だった。向坊学長の講演は難解で理解できなかった。もてなしをしている人よりもお話を聞く方がなぜよいのか(マルタとマリアの話。ルカによる福音書第10章第38節以下)。しかし反発する前によく知らなければと思って、山形出身の友人とキリスト教を理解するために、信濃町のSCF(学生キリスト教友愛会)に通った。キリスト教徒との出会いにも大きな影響を与えられた。私にはなかった考え方を教わり、視野を拡げてくれた。

「自己主張が強い方で」とおっしゃっていたが、納得しないままうやむやにしないという、「自己確立」した姿勢を持っておられたということである。青短はそのような姿勢、すなわち自立・自律心を「よし」として肯定し成長させてくれる場であったと言えるのではないか。何より、このような形で60年以上前の聖書の講話内容を今でも鮮明に覚えていること自体、メッセージを受ける側も送る側もあつぱれと言えるであろう。生きた言葉による交流がなされていた証左である。

## 11. 卒業後の社会活動・ボランティア・生涯学習

ここまで昭和30年代の卒業生の進学・進路状況(の社会背景)、学生生活(において与えられた教育)を見てきた。最後に、二年間というとても短い期間での「愛と奉仕に生き

る人物を育てる」という教育の目的が、卒業後どのように実現されていったか、確認してみよう。その中で、青山学院における女子教育から何を「継承・発展していく」べき未来に向けた資産として受け取ることができるか、展望する。

聞き取りでは、社会活動、ボランティア、生涯学習（これは短大同窓会の目的でもある）という切り口でお話を伺った。

- ・卒業後の社会活動として、「国際ソロプチミスト」の活動に携わっている者が複数名いることは（A、C、I）、四国に特徴的なことであろう。これはオークランド発祥の、女性の生活と地位を向上させるための奉仕活動を行うボランティア団体であり、会費とともにコンサートやバザー等の収益金を福祉施設等に献金し、また女性への様々な支援や学資援助等を行っている。Cは地域の支部に長く携わり、パソコンを使ったパンフレット作成も行っている。青山出身者も多く、偶然会って驚くことがある、そしてこの活動もキリスト教の精神が基になっているので、祈りの気持ちを持って活動している、という。
- ・またE、F、Gは日本画を習い今も趣味として楽しんでいる。同窓会仲間徳島女流美術の活動をしていた時期もある。Gは長年絵画で多くの人のお世話になったので、今、お返しの気持ちで事務局をしたり、県内公募展の審査をしたりしている。絵は病院などに寄贈している。Eも病院のギャラリーに寄贈し、また展示にあたり作家への依頼や連絡を担うボランティアをしている。以前訪問した聖路加病院ではギャラリー、祈りの部屋などが充実していたことを記憶していて、絵を通して患者や家族を支え、ノートに記載された感想文を通じた対話を続けているということである。Eによると在学中は短大生とあまり遊びに行けなかったが、卒業後、青短の友達の付き合い方は素晴らしい。いちばん体力のない人に合わせて行動する、と話されていた。この精神を自ら具体的な活動としてあらわしているのがギャラリーのボランティアなのであろう。なおFは長年民生委員を務め公民館活動をしている。
- ・多彩な才能を活かして複数の領域でボランティアをしている者もいる。（国文学に必ずしも関心があったわけではないが国文科に進んだ）Hは、NHK高知放送局の朗読をやっていた人に誘われ、40歳頃から朗読ボランティアを35年以上続けている。高校時代放送部や演劇部にいたので興味はあったという。デイサービスに訪問することもあり、盲学校の場合は希望に従い絵本とか中高生用のものを読む。文学館のカルチャーサポーターに登録して年に1回ホールで朗読もしている。そうこうしているうち、デイサービスにおいて習字を習いたいという声があり、これも10年以上教えにいった。書道は小さい頃習っていた。加えて高知に帰ってから学研の算国教室を開いていたが、その時知り合った先生に誘われて通信の「文化書道」を習っていたのですぐに引き受けた。今は保

育園年長組の硬筆指導もしている。今いちばん楽しいことである。短大の授業でも書道の時間に友達に上手だねと言われた。県庁の退職者会から書道クラブをやりたいと言われてそこにも行っている。他にもシルバー人材センターで「生きがい高知」という広報の編集委員を6年間続け、日舞も35年以上続けている（若柳流）。

「自信がなくても引き受ける方である」とおっしゃるように持ち前の積極性の賜物であるが、その積極性を開花させているのは、出会った環境の中で自分を活かしていく「しなやかに生きる」人間力、そしてしっかりとした「本物」を基礎としたときに自由に展開される応用力であると言える。この人間力、応用力の育成が青短の教養教育の目指すスタイルの一つであり、実際に多くの卒業生は自らの生き方を通してそのことを証している。

- ・ I は、ソロプチミストのボランティアをするとともに、外国への興味関心を広げ続けた人生であるという。中国からのホームステイ受け入れ（当該学生は西安で日本語教師になっている）を契機にし、短大同窓生の住んでいるタイやベトナム、JICAで働いている友達の息子がいるヨルダンやシリアへと、世界各地を訪問している。そして四十歳頃から自らインドネシアのバティック展示会を始めて継続しているという。

Cも30年間の国際ソロプチミストのボランティア以前から47年にわたり細川流盆石を継続し、ミラノやアイスランドで展示実演を行ってきた。「人間力」「応用力」は、「継続力」と「行動力」を生み出すと言えよう。継続し行動する中で、新たな発見と出会いが生まれ、活動の世界がさらに多様に広がっていく。そのような人生の「良循環」をここに見ることができるように思われる。

- ・ 継続力は、生涯学習でも発揮されている。Aは子どもが独立したあと、外に出ることにして、運動教室、徳島大学開放講座、英語圏から来日した人々による英会話教室、と様々な学びに取り組んだ。英会話教室は現在も続いている。講師は2、3年おきに変わるが、国は様々である。色々な国から来日した講師との出会いも代えがたいものであるけれども、そこで高卒で英語堪能で、さらに貪欲に勉強の機会を得ようとしている方との出会いがあった。継続は出会いを産み、出会いを通して自らの姿勢を問い直す機会になっている。だからさらに継続されていく。このように生涯「学習」を、生涯の「教養教育」に転換していく力を、青短卒業生は学生時代に陶冶されていると言えるのではないだろうか。

Aはボランティアは特にしていないと謙虚に述べるが、市の婦人会で会長をなさっていた。また他の卒業生の中にも、民生委員や調停委員など、現在地域において喫緊に求められているボランティアをなさっている方が数多くいる。「地の塩、世の光」は身近なところで求められているのである。

また趣味の世界でも愛と奉仕の精神が展開される。Jはテニスを40歳ぐらいから始



め、定年退職後かなり頻繁に行うようになった。試合が好きで全国大会出場、毎年世界大会（世界テニス連盟 I T F が主催する年齢別試合）にも参加するようになったが、ボランティアとしては徳島県テニス協会の試合本部を手伝っている。これも受け身に終わらず、ボランティアとリーダーシップ（サーバント・リーダーシップ）を身近なところで発揮している例である。

・そもそも同窓会活動自体がボランティア活動の典型である。それが単なる親睦活動ではないことは別の論考で述べたが<sup>5</sup>、地方において短大同窓会の企画を通じた奉仕活動もなされている。Dは職場で沢山出る使用済み切手を、職場の同僚に手伝ってもらいながら整理し、同窓会へ送っていたという。そもそも短大同窓会地方支部それ自体も、自発的に自分たちで作りに上げていったものである。聞き取り調査の世代は丁度、同窓会四国支部、各県部会の立ち上げに尽力し、維持発展させてきた世代である。

・そしてこの時期の卒業生が今生み出そうとしている新たな社会貢献の可能性について、触れておきたい。Jが同窓会に参加するようになったのはこの数年だという。そして次のようなことを語ってくださった。明石大橋の鉄塔の上に登る企画があったので参加したら楽しかった。青短の人は皆優しく、初めて参加してもすごく親しくしてくださった。人との触れ合いって面白い。この年齢になると亡くなったり病気で友人が減っていくけれど、新しい友達ができたと、思った。今日も（聞き取り調査のこと）隣に座った方と話をしていたら、同じ高校と知ってびっくりした。

この経験は現代日本社会にとって重要なことを示唆しているように思われる。つまり、人間関係の希薄、地域コミュニティの衰退が深刻な問題になっている現在、地縁、血縁とはまた違った多世代にわたる関係づくりの可能性を、同窓会は有しているということである。今まで同窓会のいくつかの会議で、ことあるごとに、同窓会適齢期があるということが話題になった。卒業してすぐではなくて、子育てが一段落した頃の時期にまた学びたくなる、つながりたくなるという趣旨である。しかし現在の時代状況においてはさらに、このような「同窓会適齢期」のいわば「第2期」を意識して、このボランティア共同体を形成していくことも一つの方向性であり、新たな社会貢献になるのではないかと思われる。

## 12. 人生にとって青短とは

上記の他に、結婚、家庭のことなどたくさんのお話を伺ったが、書き切ることができず残念である。それらの総括として、最後に「人生にとって青短とは」という質問に対する答えで締めくくろう。「(学生時代に) 青短はどんな場であったか」という質問に対する答えとかなり重なり合っていたので、それらも含んだ形で列挙する。



- A：華やかな時代、夢の多い時代を作ってもらった。人間、社会人として自信を付けてくださった。シオン寮では自立を学んだ。自宅から通っていたら自立ができなかっただろう。
- B：国文学がすごく好きだったが家政を受験した。しかし教職も取り頑張って勉強し、家庭を持った者としてとてもよかったと思える。寮の共同生活、100人以上のお皿を洗う当番、夕食時に父母や姉妹の幸せを祈ることも、とてもよかったことである。寮生活を含め私にとって「ためになった」時代、場所である。
- C：「誇り」である。自由にさせてもらったし、「自由な精神」を与えてもらった。子育てもその精神でやってきた。引け目を感じることなく自信を持って青山を出た。東大に対してもこっちのほうがいい。
- D：一言で言えば「楽」（これは家庭の重荷がとれて楽になったことと、楽しかったという2つの意味があると思われる）。自分の好きのようにしていられた。自由の中で多くのことを学んだ。「心の拠り所」である。
- E：呼吸するのに全開であった。青短・家政ということに固まらずに、全体の空気を吸い取った。凝り固まってしまうということが青短。
- F：いちばん自由で楽しい時代だった。青短は東京では世間に認められていると感じられた。積極的になっていったのはそこにもよる。
- G：二度とない青春。自由な生活であった。前に踏み出す勇気、積極性ができたと思う。一流のものに触れることができた。
- H：クラスで仲良くなった人と夏休みを利用してその人の地元に旅行した。授業が終わったら喫茶店でおしゃべり。行くところがなければ下宿に来ておしゃべり。派手な遊びはしないけど自由を満喫した。一生の「友達」を得た。短大の友達とは今でも続いている。
- I：心の友達を得られたところ。そしてシオン寮の生活がいちばん、本当に楽しかった。青春そのものであった。（同級生で夫となる方との）雨の日のデートで宮益坂から6時の寮の門限ギリギリに走って帰ったのを覚えている。
- J：新しいことをやりたくてフィギュアスケート部に入った。品川リンクで大学生と一緒に部活をして楽しかった。短大と四大別というイメージではなく、ひっくるめて青学であった。勉強に縛られることもなく好きなこともでき友達もいて、18歳から20歳まで人生でいちばん楽しかったとき。

以上のように多様な内容であるが、青短での学生生活がアイデンティティ形成にどのように関わったかという観点から見ると「自信」と「自由」を、昭和30年代の卒業生共通のキーワードとして取り出すことができよう。

## おわりに

次の世代である昭和40年代の聞き取りの中で、四国在住のある卒業生は、この世代の先輩方は「錚錚たるメンバーである。青短のイメージそのもの」と述べている。思うに、「錚錚たるメンバー」であるのは、単に同窓会を立ち上げた世代だからというだけでない。上京することも高等教育を受けることも、また（均等法の遙か前の時代で）働くことや結婚についても制約の中でありながら、青短で学ぶことを求め、その学びを精一杯に全うした姿。卒業後は家庭や子育てに苦勞し（ある者は働きながら、ある者は「家」の枠組みの中で苦勞し）、しばらくすると、まだ介護システムも整っていない中で義理の親も含めて介護をしながら、その中でも学びや社会活動を続けてきた姿。しかも常に一貫して明るく積極的に楽しみながら活動し活躍している姿。この「生き方の総体」を見て「錚錚たるメンバー」という一言が出てきたのだと思う。この生き方を別の言葉で表現すると、まさにスクーンメーカー伝のタイトルである「しなやかに夢を生きる」ということではないだろうか<sup>6</sup>。現在の私たちの生き方はどうであろうか。女性も男性も、若者も年配の者も、青短が輩出した人生の先輩から学ぶこと、「継承・発展していく」べきことは今たくさんあると思われてならない。

- 1 1956（昭和31）年卒の方は1954（昭和29）年4月入学だが昭和31年3月卒、1965（昭和40）年卒の方は1963（昭和38）年4月入学なので、いずれも昭和30年代経験者ということになる。聞き取り対象者の卒業年を厳密に指定して依頼することは無理であるため、四国において、ちょうどこのように昭和30年代の最初から最後までを含めることができたのは偶然である。
- 2 『青山学院女子短期大学の歩み』青山学院女子短期大学、1975年、109頁参照。
- 3 上掲209頁参照。なお、Aによると、昭和31年卒の時代もABクラス全員の北海道への卒業旅行があったという。
- 4 なお、当時一畳1000円といわれていたが、寮費は月4000円（食費3000円、雑費ペーパー代1000円、三食付き）、授業料は20000円位だったという。
- 5 拙稿「大学の教育目的につながる生涯教育のあり方—青山学院女子短期大学同窓会の取組—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第29号、2021年、227-247頁。
- 6 棚村恵子『しなやかに夢を生きる—青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯—』青山学院、2004年。

# 青山学院女子短期大学同窓会九州支部卒業生 聞き取り調査のまとめ

## -1955 (昭和30) 年から1964 (昭和39) 年卒まで

後藤 千織

### はじめに

本稿は、青山学院女子短期大学同窓会九州支部に所属する、1955 (昭和30) 年3月卒～1964 (昭和39) 年3月卒の卒業生10名の聞き取りから、昭和20年代末から昭和30年代にかけての青短での学生生活の詳細や、青短での学びが卒業後の歩みに与えた影響を明らかにし、青山学院における女子教育の歴史的意義を考察する。インタビューー10名全員が九州出身で、学科構成は文科国文専攻 (国文科) 2名、文科英文専攻 (英文科) 3名、家政科5名である。人選は同窓会各地方支部に依頼したため、同窓会活動に積極的に関わっていらっしゃる方や、支部の会合に出席されたことがある方が中心となる<sup>1</sup>。聞き取り調査は、2022年2月、5月、10月、2023年5月に福岡、長崎、熊本、鹿児島、宮崎で実施した。

本稿では、インタビューの質問項目に沿って、語りを紹介しながら分析を加えていく。

### 聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	出身地
A	1955 (昭和30)	英文	宮崎
B	1956 (昭和31)	家政	大分
C	1958 (昭和33)	英文	福岡
D	1958 (昭和33)	国文	大分
E	1959 (昭和34)	家政	福岡
F	1960 (昭和35)	家政	鹿児島
G	1963 (昭和38)	家政	鹿児島
H	1964 (昭和39)	英文	熊本
I	1964 (昭和39)	家政	熊本
J	1964 (昭和39)	国文	佐賀

### 1. なぜ青短に進学しましたか? (どのような理由で選択したのか等)

#### <首都圏の親族ネットワークと東京への憧れ>

青短に進学したきっかけを、本人の家庭環境に注目してみると、Fを除く9名に首

都圏に親族のネットワークがあった。兄が東京の大学に進学した (D, G, H)、姉が東京の短大に通っていた (B, J)、姉が東京に嫁ぐことが決まっていた (C) というように兄や姉が東京に住んでいる場合もあれば、親が東京や神奈川の出身であったり (A, E)、従兄弟が東京の大学に通っているという場合もある (I)。首都圏に住む親族の存在は、東京への憧れを掻き立てたようだ。特に、姉や兄が東京で進学していることは、東京の大学を目指すインセンティブになり、Gは「兄がもう中学から (東京に) 出ていたから、『当然私も行ける』とは思った」と言い、姉が東京の服飾系短大に通ったJも、まずは東京と決めて大学を探す感じだったという。「母が物凄く東京に帰りたがっていて『私をお嫁に出せば、自分は東京に行ける』と思っていたらしい」(E) というように、親が東京への強い帰属意識を持っていて、東京での進学を娘に熱心に勧めるケースもあった。

### <家庭の教育観>

両親や祖父母が女子高等教育に対してどのような意見を持っていたのかも、青短進学に大きな影響を与えている。女子が高等教育に進学することに対する両親や祖父母の考え方は、四年制大学／短期大学、東京で進学／地元で進学という軸を踏まえ、4つに分類できる。

#### ①女子の高等教育自体に反対：母親の説得が功を奏して短大に

AとFの家庭では女子が高等教育に進むこと自体に反対の声が強かったが、どちらも母親の説得で短大に進学することが認められた。説得のポイントは、Aの場合は短大で寮があること、Fの場合は短大で寮があることに加えて家政学科があることだった。

- ・ 最初は「進学しないで良い」「女の子は勉強しないで良い」って父親に言われて。母親はどちらかと言えば「出来るとこまでやらせてあげたい」っていう考えだったんです。それで色々話してるうちに、「短大なら良いよ」「寮があるなら良いよ」ということで許可を得ました (A)。
- ・ 私達の頃の鹿児島は「女の子は、あんまり勉強なんかせんでもよい」という雰囲気でした。「四大は無理だ」と言われていました。高校時代から青山に行きたくて憧れていました。母がうまくやってくれたんだと思います。「短大なら良いよ」「家政学部だったら良いよ」と。「寮に入らなきゃ入れてやらない」っておじいちゃんが言うので、寮に入れて頂きました (F)。

#### ②短大なら良い、東京の短大でも

2つ目は女子の高等教育は短大ならば良い、という意見である。兄、弟、妹の年子の4人兄弟だったEの場合、男の子は四年制大学に進むことが当然視されていたが、「女の子は短大で我慢しろ。そうじゃないと家の経済はもたないぞ」と父親に言われ、やむなく短大にした。Dの場合は、「女性はなるべくなら地元にて欲しい」という両親の願いがあったが、「女だから短大だったら行っても良い」ということで、短大を選ぶことで地元を出て青短に行くことが許された。Gの家庭でも「女は教育がどうの」という空気もあったが、「4年は長すぎるけど、青山ぐらいだったら良いよ」と、寮があったこともあり、短大進

学を許された。このように、経済的制約から女性が四年制大学を諦めざるを得ない風潮があった一方、短大を選択することで地元を出て、2年ではあるが高等教育を受けることが可能になった。

### ③四年制大学に行って良いが、東京に出るなら2年

3つ目は、地元の大学であれば、女性の四年制大学進学に否定的ではないというパターンである。Iが東京に出たいと告げると、「青山の方で、4年はちょっと長すぎるから、短大はどうか?」「熊本だったら4年の大学に行って良いけれども、東京だったら2年で帰って来るように」と父親に厳しく言われ、地元の県立女子大学にも願書を出すことも求められた。

### ④東京の短大を肯定的に捉える

4つ目は、東京の短大に行くことを、親が肯定的に捉えているパターンである。Hは石油関係の会社を営んでいた父親から東京での進学をむしろ勧められたと言い、「東京に行け」「熊本から出てもっと広い社会を見てこい」と、当時としては進んだ考え方を持っていたと回想する。4人姉妹だったCの家族も、「東京にひとりぐらい出て良いだろう」と、Cが東京で進学することに反対ではなかった。BとIの母親は、女性がいずれ結婚する運命にあるという観点から、東京の大学で学ぶ意義を見出し、「お嫁入り道具の一つ」(B)、「色んな経験」ができる場所(I)として捉えている。

- ・ 「母が(青短を)選んでくれたんだな」、「行かせてくれたんだな」と思いますね。その頃はお嫁入り道具って言ったら、タンスだの、目に見える物質的な物だったと思うんですよ。けれども、母も先生をしていましたので、あの学校に行くことが「お嫁入り道具の一つ」って言いましたよ。その言葉が耳を離れません。物質的な目に見える物じゃなくて、「勉強することが」と母が言ったことが、今でも思い出される。母は凄かった。今思えば、「凄いな。そういう感覚だったんだな」と思って感心しています(B)。
- ・ 母は「行きなさい」っていう感じでした。「女の子はね、どこに嫁ぐか分からないから、色んな所で何でも経験しなさい」って。やっぱり、ぬくぬくとしている訳じゃないでしょ。色んな環境の所に行く訳だから、「色んな経験をして過ごしなさい」って(I)。

### <キリスト教とのつながり：家族、親戚、知人、学校>

家族、親戚、重要な知人、通った学校を通じてキリスト教との繋がりがあったことも、青短を選択した背景にある。Eは生まれた育った家がクリスチャンホームだったので、キリスト教系の大学を希望しており、中高も福岡女学院だった。BとIは親戚がキリスト教と密接な関係があり、Bの父親の親戚の教会は中渋谷教会で、Iの叔母は同志社女子大卒の英語の教員で、熱心なクリスチャンだった。Hの場合、父親の古い友人に津田塾を卒業したクリスチャンがおり、父親が「娘を東京の大学にやりたいと思っているけど、どこが良いかな」と相談した際、「青山学院が今とても評判が良いよ」と勧められたという。C



の家庭はクリスチャンホームではないが、中高が福岡女学院で、当時はエリザベス・J・クラーク先生がいらした(C)。

### <キリスト教系の東京の短大でも青山を選んだ理由>

以上のように、首都圏の親族のネットワーク、東京での大学生活への憧れ、家庭の教育観、キリスト教とのつながりといった条件が様々なかたちで組み合わさり、東京の短大へと進む道が開かれた。しかし、なぜ東京のキリスト教系の短期大学のなかでも、青山学院女子短期大学が選ばれたのだろうか。

#### ①寮がしっかりしている

青短は「寮がしっかりしていること」が評価されたようだ。Eの家庭では、大学進学にあたり短大であることに加え、「寮がしっかりしていることと、下宿とか親戚に預けるのは絶対しない。寮に入るということが条件」であった。そのため、Eは入試の面接でも、向坊学長に「私、いくら試験に通っても、寮に入れなかったら、ここの学校には入れないんです」と伝えたという。また、「熊本じゃなくて、どうせ大学に行くんだったら、東京の大学に行け」と、東京で学ぶことを肯定的に捉えていたHの父でも、大学に寮があることは大前提だった。

#### ②青山学院の知名度

昭和30年代の九州でも青山学院の知名度が高かったことが窺われる。宮崎のAは父親に「どうせ出るんなら、ちゃんとした大学に行きなさい」と言われたと言い、家庭で青短は名門校として認識されていたという。鹿児島島のFは、「青山」というと「日本の中でも広やかな感じの学院」というイメージを持っており、銀杏並木にも憧れていた。佐賀のJは『蛭雪時代』を読んで青短を知り、短大で一番いいのは東京女子と青短と判断した。Gは鹿児島島の進学校(鶴丸)で学び、女子が東京に出るのは珍しかったが、同期で4名が青短に進学した。

#### ③「女の子だったら青山」というジェンダー化されたイメージ

キリスト教系の大学、中でも特に青山が女子高等教育の場としては相応しいというイメージが普及していたことを示すエピソードもあった。「女は教育がどうの」と女子高等教育にそれほど積極的ではないGの家庭も、「やっぱり青山だったら、まあ良いよね」という意見を持っていた。Gはその理由を「勉強一生懸命じゃなくて、女性としての、クリスチャンっていうのもあったんですかねえ。ガジガジの勉強じゃなくて、ソフトな感じで。国立の大学よりは」と推察する。Hの兄は慶応に通っていたが、父親の知人のクリスチャン女性は、「やっぱり女の子は、青山が良いですよ」と青山、恵泉、フェリス等のキリスト教系の学校を紹介した。Iの従兄弟も慶応に通っていたが、「青山は良いよ」「女の子だったら行ったら良いよ」という意見で、熱心なクリスチャンだったIの叔母もミッション系を勧めていた。他に、短大案内では青短の学費が他に比べて安かったという証言もある(C)。

### <学科選択理由>

次に、学科を選択した理由を、①文科国文専攻（国文科）と文科英文専攻（英文科）、②家政科の2つに分けて見ていく。①の場合は、国文は「英語が出来なかったから。高校時代、国語が大得意だった」(D)、「もうちょっと国語を勉強したかった」(J)、英文は「英文学を学びたかった」(A)、「まず数学ができない。英語が好きだったんですね。これからは何をしても英語の時代になるんじゃないかな」(C)、「英語が好きだったし、一番得意な科目だったので迷わず英文科に」(H)といたように、高校時代に得意あるいは好きだった科目や学びたいことを基準に選んでいる。②の家政科の場合は、「社会科が苦手で、数学に自信があった」(E)というように、受験科目を基準に本人の意向で学科選択をしている場合もあるが、時代風潮や家族の意向を踏まえて家政学科を選択したケースもある。

- ・ 女の人は結婚したらお嫁に行くって風潮でしたから。「英文科に行って何するの」っていうような。もともとそれに興味はなかったので、すんなりと家政科の道に(G)。
- ・ 英語とかが苦手だったこともあったかもしれませんが、家政科が無難って感じ。母が「家庭的な女子に」ってことだったんですかね(I)。

### <当時の周囲の進学状況>

当時は女子の高等教育進学率が高くなく、1960年の時点で大学（学部）への女子の進学率は2.5%、短期大学（本科）への女子の進学率は3.0%であった<sup>2</sup>。今回の聞き取り調査からも、進学校でも女子の高等教育進学は当たり前の選択ではなかったことが窺える。

- ・ 進学したのは半分くらい、ほとんどが九州内。熊大と女子大が多かった。東京の大学に行く人は1割いたか(H、熊本県立第一高等学校、当時は女子校)。
- ・ 旧制佐賀中と佐賀高等女学校が合併した高校で、女子の進路は1/3進学、1/3就職、1/3お稽古事。教師や医者を目指す場合は四年制で、地元・東京どちらもあり。短大の場合は「九州に残れ」が多く、福岡や長崎の短大へ(J、県立佐賀高校)。

Aが通った宮崎県立大宮高校では、男子が東大や一橋など東京の大学に進学することがあっても、女子は地元や九州内の県立短大や四年制大学が多かったという。女子の東京行きはまだ珍しく、大分の国東高校に通ったDは、東京行きは自分一人だったという。このように、女子の東京の大学への進学は決して一般的ではなかった。東京の進学先は、I（熊本県立第一高等学校）の周辺では女子短期大学（共立、実践、昭和）、A（宮崎県立大宮高校）の周辺では女子短期大学（昭和、東京）や四年制女子大学（日本女子大）などだった。

## 2. 入学して変化はありましたか？

### <移動の大変さ>

東京への移動の大変さを語る声も多かった。鹿児島県のFは、鶴丸高校2名、甲南高校2名で特急霧島で30時間かけて受験に向かった。受験は難しく、1名ずつ受かったようだ。大分のBも上京が「とにかく死に物狂い」だったと回想する。まず別府まで行き、別府から船で神戸に行き、神戸から大阪へ、大阪から東京行きの急行や特急に乗り継ぐという旅程だったので、青山学院だけでなく東京の大学に通う人が別府から船で10人ぐらい一緒になって移動した。

### <入学時の気持ち：自立した気分、東京への戸惑い>

銀杏並木に憧れていたFは、「入学した」と思って正面の門から入り、「図書館に続くイチョウ並木が、今でもありありと忘れられない思い出」だという。

- ・ とても嬉しかったことと、「よし真面目に勉強してやるぞ」って思ったんです。本当のおのほりさんだったので。とっても自立した様な気分になったのを覚えております。外国人の先生がいらっしゃったので、鹿児島は田舎でしたから、とても凄くおしゃれな学校に来たって感じがしました。ここの中に毎日来られると思ったら、とても嬉しかったです (F)。

九州から出たばかりの頃は、東京で暮らすことへの気負いやカルチャーショックもあったようだ。

- ・ 「田舎っぺ」って言われるのが嫌で、東京に行く3日ぐらい前にパーマをかけたんです。そうしたら、地方から来た人、あるいは県立から来た人は皆、まだストレート。ただ目立っていたのは、やっぱり高等部のグループ。4～5人が必ずクラスにいたから (C)。
- ・ 何しろ熊本から出た瞬間、もうビックリですね。やっぱり東京の町のカルチャーショックが凄かった。しばらくは身動き出来ないみたいで、寮の先輩達に暇な時は近くの色々な所に連れてって頂いたのを覚えています (I)。

## 3. 特に記憶に残っていることを教えてください (先生、友人、ゼミ、授業、礼拝、学校生活、学生活動、寮、その他)

### <寮生活>

希望者すべてがシオン寮に入寮できたわけではなく、川崎市にある二子玉川寮 (準寮) や神宮通りの救世軍青年女子寮で生活した方 (A、J) もいた。寮の種類を問わず、生涯続く交流が友人だけでなく、先生との間にも築かれた。

### \*金王寮（シオン寮）での生活

女子専門学校の学生寮4つは1945年の空襲で全焼したため、短大生向けの学生寮の建設が急務となり、1951年5月に金王町（現・渋谷2丁目）に金王寮が完成した。1952年2月にシオン寮と改名され、1954年12月に第二寮が完成した<sup>3</sup>。

#### 先生の思い出

第一寮の川尻知恵先生、第二寮の飯久保澄先生、大林きよ子先生との様々なエピソードが語られた。寮生達が憧れる佇まい、優しく見守るだけでなく時に厳しく叱る姿勢が垣間見られる。

- ・ 寮（第一寮）は、人としての佇まい、考え方を非常に学べた場所でした。私は川尻先生をとっても尊敬していきまして、とっても美しい日本語、言葉をお話しになる先生だったんです。厳しい内容でも優しく素敵にお話しくださる先生。「あ、こういう風な人になりたいな」とこっそり思っていて、先生の物腰とか、佇まいとかを、身に付けようと思っていて見えていました。とっても素敵な先生で、目をつぶれば目に浮かぶ様な、ふっくらとして、白い割烹着を着て、「いつ眠られるのかしら」って言うぐらい、学生のことを思っていて下さっているのが分かりました。厳しい方でした、とっても。みなさんにお優しくお話し、皆さんにきちんと教育されて「ダメなものはダメ」っておっしゃる方でしたので、それが凄く良かった（F）。
- ・ 第二寮：飯久保先生はいつもニコニコなさって、しっかりしてらして、お優しく、教養にあふれた方でしたね。飯久保先生の笑顔を忘れられません（D）
- ・ 第二寮：先生の前でたまたま、朝食を食べる時があったんですよ。ピーマンが食べられなかったんです。ピーマンを1つ、お皿の端っこに私が置くもんだから、先生が「Hさん、ピーマンも食べましょうね」。あれは、こたえましたね。だから、それから出来るだけピーマンを食べなきゃと思って、ピーマンも食べられるようになりましたね。大林先生は寛大だったんですけど、飯久保先生は厳しかったですね。優しい口調で、厳しいことをおっしゃる（H）。

#### 暮らしの思い出：当番、門限、部屋での生活

##### ①当番：様々な当番があり、実家ではあまりやったことのない作業を担った

- ・ お掃除当番は、トイレは1人静かにやれば出来るので、朝そーっとして、（部活に）出かけて、それでも出来ない所はお部屋の人に頼んだ（G）。
- ・ 家ではそんなにやったことのない、お風呂も石炭で自分達で沸かしたり。お当番が必ずあるので、お風呂沸かしお当番、お皿洗いお当番、お電話当番とか。火鉢だから火も起こさなくちゃいけないから「炭を持って来なさい」と先輩が言ったら、炭カゴがあるので炭を取りに行ったり。洗濯機なんかないから洗濯板で洗面所で洗ったり（I）。

##### ②門限

- ・ みんなそろって協議して、門限を8時にしてほしいと先生に申し込んだ（C）。

- ・ 馬術部で帰りが遅くなる時は、四大の男性部員の方がちゃんと玄関まで送って、飯久保先生に「帰って来ました」って品物みたいに。「ちゃんと送らないと、あそこの飯久保先生はうるさいから」って (G)。

### ③部屋での交流

- ・ 第二寮：面白いことばかりでした。礼拝が終わって、みんな部屋に引き上げますでしょ。どこの部屋も皆お茶の時間になるんですよ。ポットでお湯を沸かすと、ヒューズが飛ぶんですよ、みんな一斉にお湯を沸かすから (H)。
- ・ 冬はね、火鉢があるんですよ。小さいお鍋を貸してもらって、火鉢でおでん作ったりとか。家政科の人が「鰹節を授業で使って、その残りがあるから、出汁を取ろう」って。色々材料を簡単に出来るものを買ってきて、おでんを作って夜食に食べましたよ (H)。

### ④夕拝

- ・ 向坊先生が寮にいらっしゃって、食堂にみんな集まってお話を聞く。嫌味がなくて、非常に心穏やかというか、気持ちの良い時間でしたね (D)。
- ・ 夕拝は、週1回は (一寮と二寮と合同で) 短大の宗教の先生がいらしてお話があった (I)。

### ⑤共同生活、友人関係：全国各地から来た多様な人々と出会うことで、視野を広げ、異なる人々と共生する方法を学んだ。方言が飛び交う、安心できる環境だった。

- ・ 福岡の学校に居た時は、言葉も九州弁ではなく東京の言葉を使っていたりしたし、何となくちょっと威張っている所があったんだと思うんです。ところが東京に行ってみて寮に入ったら、みなさん私よりハイレベルで、ほんとうに素敵な方ばかりだったので、凄く自分としては謙虚になれたんじゃないかな? 「ああ素晴らしい人達が、周りにはいくらでもいらっしゃるんだ」って思いでした (E)。
- ・ 8畳のほんと狭くて、考えられないような所に4人で生活して、それこそ県も違うし、性格も色んな違う方達と仲良く暮らしていかなきゃ。お部屋替があつて、半年に1回やっていたから、色んな方と、違う方とお友達になる (I)。
- ・ 寮は九州出身の方が多かったですよ。(学校では) 熊本弁を喋らないけど、寮に帰れば、バンバン飛び交います。なんかもう何でも通じましたから (H)。

### ⑥都会の生活に触れる

- ・ 遊びたい一心で、とにかく日曜日になると、聖書を抱えて飯久保先生に「行ってきまーす」って教会に行くふりして「銀座教会」に (D)。
- ・ 寮に入って歓迎会で歌舞伎を見に行っただんです。寮で夕食にお弁当を作って貰って、お弁当もって都電で。歌舞伎をみて、帰りにちょっとお茶飲んで帰れるんです (I)。

### \*二子玉川寮

佐賀出身のJは、シオン寮に入れなかったのので、川崎市にある二子玉川寮 (準寮) に暮らすことになり、最初は「ちょっとがっかり」したが、全員で20名で、上級生にもとても



よくしてもらったという。礼拝はなく、寮生は青短生のみだった。今でもつながりがあり、寮の先生と一つ下の学生と一緒に、九州を旅行したこともある。

#### \* 神宮通りの救世軍の青年女子寮

宮崎出身のAもシオン寮に入れず、神宮通りにあった救世軍の青年女子寮<sup>4</sup>に入った。朝、お祈りがあり、夕拝は順番で担当者が決まって、上級生が讃美歌を選んでいて。金曜日の夕拝は、救世軍の士官学校の礼拝堂であり、寮の秋元春馨先生のご主人がチャプレンだった。学期ごとに部屋替えがあり、1年後期の4人部屋のメンバーとは現在でも交流がある。また、秋元先生とは卒業後も交流があった。お里帰りでは、秋元先生によって礼拝が行われ、その後楽しい食事会になった。お里帰りには、各地から各年代が集まる。

#### < 授業・授業 >

青短では、1957年度からクラス担任制度に代わって、アドバイザー制度が採用された。1年次はクラス担任があるが、2年次はアドバイザー・グループに入る。アドグルはゼミ形式で、卒業単位にはならないが、テキストの輪読や論文作成指導をしていた。しかし、数年後には登録方法やクラス担任制度との関係をめぐって意見が出され、再び制度改革がなされた<sup>5</sup>。インタビューでは、印象に残った先生や授業について自由に語っていただいた。

#### \* 文科国文専攻 (国文科)

国文科は、「国文学とあわせて日本文化・東洋文化について広く深い理解を得られるようなカリキュラム編成」を目指しており、1955年度から「国文特別演習並論文」を新設した。また、開学当初から学校行事として「研究旅行」を実施した点も特徴的である。当初は2年次のみ、57年度から新たに1年次にも実施するようになった。1年生は「奥の細道研究旅行」で、2年生は関西の山を登りながら、鴨長明の遺跡をたどった。2年次の研究旅行には54年度から桂離宮・修学院離宮の拝観も加わったが、62年度からは拝観先の事情で人数制限を設けるようになった<sup>6</sup>。

Jは先生方が素晴らしく、「日本を代表する先生方」だったと表現し、「お会いするだけでうれしかった」という。DとJからは、印象に残った教員として加藤楸邨先生、川瀬一馬先生、馬越宮先生、諸橋轍次先生、中野博雄先生の名前が上がった。Dは花伝書の川瀬一馬先生は「独特な雰囲気」があったといい、自分は詩を書くのが好きなのに、「なぜ加藤楸邨先生のゼミに入らなかっただろう」と振り返る。Jは教員にかけられた言葉を今も記憶している。井原西鶴について書いた卒論に「まとまっているけど足りない」とコメントされ、卒業に際してはアドグルの川瀬一馬先生から「まだ緒についただけ、卒業ではありません」と言葉をかけられたという。

教室外の学びとしては、「研究旅行」だけでなく、馬越宮先生の授業では能を観に行くこともあったと言い、Jはこれらの経験を「地方ではできなかったこと」と振り返る。研究旅行に加えて、Dは入学時に由比ガ浜に行ったと記憶しており、他の専攻に比べて全員

での旅行が多いことが、クラス会の活発さに繋がっていると考えられる。39年卒のJのクラスは、北海道から東京まで順番で幹事をしてきて、近年でもクラス会に15名くらい集まっていた。

#### \* 文科英文専攻 (英文科)

英会話の授業は、聞き取るのが初めてだったが、だんだん慣れてきたように感じた(H)。

教員の記憶は、Aは西島正先生のシェイクスピア論評が面白く、音楽や芸術に造詣が深く、雑談が印象に残っているという。アドグルもあり、Hは町野静雄先生のアドグルで親睦のために一泊旅行に行った。

英文科は英会話や英文学だけでなく、文化に触れる機会も多くあった。クッキングという英語での授業では、クリスマスに宣教師館のキッチンでキッシュを作った(A)。Cは教員宅での食事会で、ホストとホステスの役割を学んだ。

国文科の教員による授業の記憶も語られた。Cは川瀬一馬先生の講義を聞き、「良い先生がおられるんだなあ」と青短の良さを感じたという。川瀬先生の授業がきっかけで、お話を習い、能楽や狂言にも関心を広げていった(C)。

Cは中学2級の教員免許も取得した。教職の授業が楽しく、教育実習は近くの中学校に行き、生徒が寮に来て芝生で遊んだ記憶が残っている(C)。

#### \* 家政科

調理の授業では、大西セチ先生や野村万千代先生との思い出が語られ、Fは「お出汁とか、切り方とかは、やっぱりその時身に付いたところもあるかな」と、料理の基本を学んだと振り返る。苺を水にポンと投げ入れて洗うという方法が記憶に残っている(F, G)。また、大西セチ先生の授業で、夏休み中に何か料理を自分で練習してきて、それを発表するという宿題があり、スコッチエッグという「すごくお洒落なもの」を家で毎日作ったという思い出もあった(I)。

Bは島崎通夫先生の化学の授業が難しかったと回想する。島崎先生のアドグルだったIによると、「物静かな先生」で、冷凍食品は現在では当たり前だが、当時はまず「冷凍にする」ことを研究していた。「今思えば素晴らしかった。もうちょっと勉強しとけば良かった」と振り返る。洗濯・繊維・染物の阿部幸子先生はIの担任で、とても優しい先生だったと回想する。

裁縫の宿題は、地方出身者にとっては、「家族がそばにいないので本当に難儀」(F)だった。Eは五百蔵幸先生の洋裁(伊東式立体裁断)に興味があったが、寮でミシンが使えないために提出が遅れ、それがとても悔しかったという。その悔しさから、学校を出て福岡に戻ってから、伊東茂平連盟校で伊東式裁断を初めからやり直した(E)。

家政科は56年度に「家政特別研究」を設置した<sup>7</sup>。Eは家政特別研究をとおして、生涯の友を得て、指導の大西セチ先生とも卒業後も続く関係を築いた。

・ 大西先生は、怖いけどすごく良い先生で特別研究をご指導いただいた。先生が山がお

好きで、ご一緒したことはないけれど、「自分が年をとって登れなくなった時には、自分の山の計画書を楽しみにひもといていく」と言われたのが忘れられない。卒業後も何度もお目にかかって、お宅まで伺ったりして、とても怖い先生でしたけれどもお慕いさせていただきました。特研のテーマに「フランス料理の7つの基本ソースについて」があったんですが、これを4人1グループで研究しなきゃいけない時に、寮が一緒で家政科が一緒で、なんとなく仲の良い4人がグループでやったんですよ。その4人が未だに続いています。年に1回は必ず会います。今はコロナで会えないから、週に1回ぐらいは電話で安否確認をしています (E)。

EとIは中学の教員免許をとった。

### <友人>

入学当初は、メイクやファッションの違いに気後れした経験もあった。Hは入学式の際に、高等部出身者が「大人っぽくて。スーツをバシッと着こなして、お化粧品して、ヒールを履いて。もうね、ビックリしました」と語る。Fも家政学科だからか、お洒落な人が多いと感じ、最初は少し気後れしていたが、すぐに打ち解けて友達がたくさん出来たそうだ。

今回のインタビュー対象者は全員が寮生だったので、クラスの友達よりも寮の友達の方が関係が深いという意見が多く、卒業後も関係性が続いている。

- ・ 寮のお友達とは、未だにクラスの友達よりも関係が深いです。ついこの前も、懐かしく東京の方が電話かけてくれて。お隣の部屋だったし楽しかったです (B)。
- ・ 東京の方とお友達になりたかったけれど、ほとんどが寮のお友達。東京の方はなんとなく近寄りがたかったですね (D)。

### <礼拝・キリスト教との出会い>

#### \*礼拝

寮での礼拝があるからか、熱心に短大の礼拝に通ったという声は少なかった<sup>8</sup>。讃美歌やオルガンが礼拝に通う一つのきっかけだった。Hは初めの頃は日曜日に青山学院の礼拝に出ていた。Jは「讃美歌を歌うと気持ちがいいから行こう」と同級生に誘われて礼拝に通った。Aは、本部の礼拝堂のオルガニストが奥田耕天<sup>9</sup>だったため、オルガン演奏を聞きたくて礼拝に行ったという。

短大の礼拝ではなく、寮の周囲の教会に通っていた方もいる。Fの祖父は仏教徒だったが、「正しく生きること、弱い人を救うこと、自分だけを救うのではない」という点では共通していると考え、渋谷の教会によく通い、聖歌隊にも入った。Bは親戚の教会（中渋谷教会）に最初に寮のお友達と行った時のことを鮮明に覚えているという。Bは後に中渋谷教会で受洗する。

- ・ 「人間は神の形を模した空洞を持って生まれてきた」っておっしゃったの。「神の形を

しているから、その空洞は趣味でもお金でも旅行でも、埋めることはできない」って。「神の形だから、神しかその空洞を埋めることができない」。それがもう第一印象でした。東京に行って、それがもう感動だったんです (B)。

#### \*キリスト教・キリスト教学との初めての出会い

キリスト教に触れるのが初めての経験で「カルチャーショック」を感じた方もいるが、オルガンや歌うことを通じて、キリスト教に親しんでいったようだ。Hは聖書を開いたこともなく、讃美歌を歌うのも初めてで、「人を愛する」といった言葉も初めて聞いたが、もともと歌うことが好きだったため、オラトリオに入った。Gは寮の食事の前に讃美歌とお祈りがあって、オルガンが弾かれて、「乙女チック」な気分になったという。Jはキリスト教に初めて触れたが、「キリスト教という学校のバックボーンがあったことがすごかった」と振り返り、礼拝や讃美歌が頭にちゃんと残っているという。

神やキリスト教の教えについて、寮や教室でディスカッションをした経験も語られた。

- ・ とにかく4人で頭をつきあせて、9時消灯になるとなかなか眠れないので、色々話す訳ですけど、その時によく出ていたのが不思議に神様の話です。私はその時に2年生で、1年生の人が洗礼を受けて。「神様はどこにいらっしゃるの?」とか、一生懸命みんなで話し合う訳です。その人が一生懸命答えるんですけど、いくら聞いても分からない。分からないうちに、ある日突然、彼女が「あ、そうだ。あなた、あそこにあるチューリップの赤色は誰がつけたの?」って聞いたんです。その時、私もハッとして「ああ、なるほど〜」という思いで、初めて神様を身近に感じたといえますか、神様が何か少し分かった気がしましたね (D)。
- ・ 「キリスト教学」があるのにびっくりして「学問で、授業でやるんだ」と思って。色々お話を聞いたりして、休み時間はお友達で丸くなってディスカッションでした。「どう思う?」「ちょっとおかしいと思う」。だいたい決まった人達でしたけど、結構な人数でやっていました。クリスチャンの方もいれば、私みたいにクリスチャンじゃない方もいる。でも私は、元々興味があって、畏れるものが欲しかったんです、自分の中に。小さい頃からちょっとそういう傾向があって、中学の頃からか、日曜に教会に行っていました。全体的に言うと私の実家は仏教でしたが、お寺の仏教のお話をきくと、(キリスト教と)同じなんですよね、中身が (F)。

#### <部活動>

短大の部活動としては、テニス部、音楽部、国劇班、美術部での体験が語られた。美術部は展覧会に出品したり (A)、音楽クラブは追分寮で合宿をしたり (F)、国劇班は歌舞伎を見に行ったり (J)と充実した活動を行っていたが、バレーボールのように人数が必要な部活は短大では成立しないことがあり、Eは運動部があまり出来なかったのは残念だと語る。

四大の部活動は、オラトリオ、馬術部、バレーボール部の様子を伺った。オラトリオは、



短大生も大学の音楽室で一緒に活動し、清里での夏合宿を経て、メサイアを東京文化会館や日比谷公会堂で公演した（H, I）。大学のバレーボール部では、短大生は2年間であるためレギュラーはとれなかったが、球拾い役で同志社や東北学院との定期戦にも連れて行って貰った（E）。Gは馬術部に入ったが、毎朝綱島で練習があり、宮益坂を駆け上がって短大に着くと出欠確認が終わっていたため、誰かしらが代返してくれた。「皆様のおかげで卒業出来ました」と、クラス会でも伝えているという。祖母（お花の先生）に「女の子はこうあるべき」と言われて育ってきたので、馬術部への入部はそういったジェンダー規範に対する「爆発」だったのではとGは考えている。

青山学院内の部活動ではないが、FはKAY合唱団に入った。音楽の授業の担当だった奥田耕天先生から声をかけられ、ほとんど強制的にKAY合唱団に入ったという。12月の定期演奏会（日比谷公会堂）の際に、東京フィルハーモニーの伴奏で一流のソリストとメサイアを歌ったのは、「天のお恵みと思うぐらいの出来事」だったと回想する。

#### <学生生活>

出会いの場として当時流行っていたのは、ダンスパーティである。Hによれば、男性との出会いはダンスパーティぐらいで、パーティの情報は寮の先輩から回ってきた。会話をした人から「電話番号を教えてください」と言われ、寮に電話がかかって来ることもあったが、寮の先生が張り付いて話を聞いていたので、プライバシーはなかった（H）。また、ダンスパーティは部活の資金集めの手段でもあった（G）。

観劇やスポーツ観戦、東京巡りも楽しんだ。休講を活用して渋谷や銀座に行ったり（H）、六大学野球を見に行ったり（C）、有名な外国のオーケストラや音楽家のコンサートにお小遣いを費やしたり（F）、東京でしか味わえないものに積極的に触れたようだ。Jは、青短は「価値観の同じような人々と気持ちよく付き合える」環境で、「勉強もするが、観たいものは一緒に見に行き、旅行にもちょっと行く」生活が送れたという。アルバイトは寮の門限もあり、一般的ではなかったようで、デパートのお歳暮の伝票書き（I）、区役所で市場調査関連（J）といった内容で、回数も1～2回のみだった。

#### 4. 当時の自分にとっての青短とは？

今回のインタビュー対象者は全員が九州出身であったため、青短での学びは東京での生活と結びつけて捉えられており、地元にとどまっていた経験することができなかった「新しい世界」、一流のものに触れる機会として記憶されている。

- ・ 新しい世界が広がりましたし、お昼休みは楽しみでした。シェイクスピアガーデンという、キャンパスの中に広い芝生の所があって、宣教師館がポツンポツンって綺麗なお家が建って、真ん中がずっとなだらかな起伏の芝生になっていて、ところどころ薔薇が植えてあり、素敵だった。お昼にそこでお弁当を食べていた（A）。



- ・ とにかく田舎から都会に出て行って、楽しい (B)。
- ・ 東京に出てきて、寮が嬉しい場 (D)。
- ・ 「鹿児島でずっと暮らしていたら、経験出来ないようなことを沢山経験させて貰ったなあ」と思います。良いことだけじゃなくて、寮で集団生活をするということも含めて、悲しいこと、寂しいこと、思うようにならないことも含めて、「全てのことが、ほんとに私の為になってるんだな」って自信を持って申し上げることが出来ます。(F)。
- ・ 「ああ、こんなところで学べて幸せだな」って思いがありましたね。「熊本から出てきて良かったな」って。2年間だったけど、ああ良かったっていう思いです。地元で4年間行くより (I)。
- ・ 楽しくて良かった。勉強もそこそこしたし、お付き合いも今でも続いている。とにかく先生、美術館など一流のものに触れられた (J)。

多様な友達との出会いの場でもあり、Gは「色々な友達、お姉さんがいっぱいできた」と振り返る。同級生でも「しょうがないわね」とお姉さんみたいだったそうだ。

青短で楽しそうに学ぶ姿は、家族にも深い印象を与えた。楽しそうに青短に通うHの姿を見て、Hの父は「みんな青山に行け」と言っていたそうで、Hの3人の妹全員が青山に通った (児童教育科、国文科、四大の英文科)。

## 5. 卒業後の進路

### <進学：専門学校、専攻科>

Eは卒業して帰郷した後、伊東式立体裁断の学校に入った。寮のミシンが使えず、五百蔵先生の洋裁の授業でスカート提出が間に合わず、「ペケがついた」ことが悔しかったという。この経験は後にEの人生を支えることになる。Hは専攻科に進んだ。その当時は人数が少なく、色々珍しい体験ができた。ある時は、東大から教えに来ていた先生が、「あなたたち寮にいるんだったら、クリスマスは僕の家にいっちゃい」と自宅に招待してくれた。イギリスに留学の経験のある先生で、奥様がイギリスの家庭料理を出してくれた。

### <就職状況と就職に対する思い>

1956 (昭和31)年卒のBは、当時は「就職なんて、これっぽっちも考えなかった」と語る。「何をしたいのか分からない、でも残りたい」(D)というように、4名(D, G, I, J)は東京に残って働きたいという思いを抱いていたが、実際に東京で就職できたのはGだけである。地方出身の女子が東京で就職することは、自宅からの通勤しか認めない企業の慣習と家庭の意向の双方により困難だった。Jは本が好きなので出版社に勤めたかったがうまくいかず、他の会社は受けずに佐賀に帰った。Gは新聞の求人で見つけた日立造船の庶務課を受けたところ、同郷の先輩の目に止まり、採用され秘書課に配属された。Gの

兄が東京で就職しており、兄と暮らす家から通うことができた点も就職でプラスに作用したのかもしれない。Gは同期（立教卒・四年制）の女性が辞めるまで、4年間働いた。

CとHは帰郷して働きたいと考えていた。Cは中学校の英語の教員を目指し、中学校の教員免許を取得し、英語の試験を受けて採用も決まった。しかし、1年後ぐらいに結婚が決まっており、教員を1年きりでするのは良くないので辞退した。その代わり2年間は家業を手伝って結婚した。Hは熊本に帰ってどこかで就職したいと思っていたが、父に「就職なんかしなくて良い」「家にいて、母親の手伝いをしろ」と言われ、お稽古事をしつつ母の手伝いをした。

### <花嫁修行>

東京で就職・結婚をした方（G, A）以外は、「早く嫁に行きなさい」「すぐ帰ってきなさい」という家族からの圧力もあり（I）、帰郷して実家の手伝いや「花嫁修行」をした。卒業後、Bは臼杵に帰り、編み物に行ったりしていたが、「つまらなくて、つまらなくて。東京に出て行った時に、（寮の）川尻先生の所に相談に行ったりしたのかも」と記憶する。Eも2年間、就職はしないで、料理学校、洋裁学校、お茶、お花など10数個の習い事をしてきた。Hは「就職したかったかな」とも思いつつも、お稽古事をやりつつ、忙しい母の手伝いも悪くないかなと思っていた。Jは家業の毛糸の販売、母の編み物教室を手伝っていた。

### <結婚>

高校や短大時代に知り合った人と結婚した2名以外は、お見合いや親族の紹介で結婚した。当時は、ボーイフレンドとのお付き合いと結婚は別で、「結婚はお見合いが安心」という感覚が強かった。Dは短大2年の夏休みに、親に「ちょっと会いに行ってみないか」と言われたのが見合いの場だった。結局その人と結婚したが、「日本一の夫」だったという。Hは、「結婚相手を自分で探すなんていうことが、絶対にあり得ない。自分から結婚相手を探そうなんてことは思ってなかったんです、大学で探そうなんてことは、もう全然」と当時の感覚を語る。お見合いする時点で、「結婚して良い」相手だった。Gもお見合いが安心だと感じており、Iも「ダンスパーティと結婚は別」という認識だった。

### <結婚後の仕事>

結婚後は専業主婦になった方が多いが、AとEは家計を支えるために、外で仕事をした。Aは実家に帰ってこいと言われ、一時帰郷したが、2年間の文通の末、短大時代に会った人と結婚した。家計を支えるために本田技研の下請けで働き、係長、課長にまでなった。夫の母親が子どもの面倒をみてくれて、出張もした。子どもには可哀想なことをしたかも、という思いがあるという。Eは卒業3年後に結婚をして東京で暮らしていたが、東京オリンピックの1週間前に夫を亡くし、結婚生活は2年もなかった。福岡に戻り、仕事を求め

て母校を訪ねたが、中高一貫校は高校の授業も教える必要があり、短大で得た教員免許が役に立たなかった。困っていると、伊東茂平の洋裁学校の院長が「あなたは作図は教えられるから、夜間部の先生になりなさい」と言ってくださり、4年半くらい洋裁学校の夜間部の先生として働いた。その後は、洋装店を営んだり、九州中のデパートやミシン屋で東洋紡の型紙のグレーディング（補正）の指導をやった。短大の五百蔵先生の授業で出会った洋裁（伊東式立体裁断）が、Eさんの人生を支えた。55歳で再婚するまで洋裁の仕事を続けた。

家業を支えた方々もいる。Jは家業の毛糸と編み物教室を引き継いだ。戦後は内職が多く、編み機や毛糸を売って勢いがあったという。今は手編みを教えているが、編み物を通じて、ものがない時代から溢れる時代まで「時代の移り変わり」を感じている。Fは医師の夫に「君は人として生まれて、家事だけをして一生過ごすのか。そんなこと勿体ないじゃないか。仕事、手伝ってくれ」と言われ、仕事に引っ張り出された。子どももまだ小さくとても大変だったが、今思えば「主人と一緒に歩いてきた道」だと感じている。Fの夫は60歳で社会福祉法人と医療法人を立ち上げ、喜入町に特養をつくった。社会福祉法人を「地域のもの」と捉え、機械化で黒字化し、国内外から視察がくるといふ。中学生などのボランティアも積極的に受け入れている。

## 6. 生涯学習、ボランティア活動

「愛と奉仕に生きる人物を育てる」という青短の教育理念が、卒業生の人生にどのような影響を与えたのか、生涯学習、同窓会活動、ボランティア活動のお話を伺った。

### <生涯学習>

卒業後、仕事、家事、育児、介護の合間をぬって学び続けるだけでなく、コンクール出場、自費出版、教室といったかたちで発信もしている。

- ・ 仕事を辞めてパステルの講座に通った。再々銀座で高校時代の友人と二人展を開いたが、必ず短大時代の友人たちが大勢駆けつけてくれて、嬉しかった（A）。
- ・ 俳句の勉強をずっとしているうちに、ある日突然、朝起きたら、歌が、詩が、ポッポポッと出てくる。合計5日間ぐらい止まらず、お料理もできなかつた。夫に「そういう時は書きゃ良いんだ」と言われ、書いたら詩集が1冊できた。教会の牧師先生と兄達にも「自費出版するべきだ」と言われて、出版したら書店でベスト1になった（D）。
- ・ 幼稚園で子どもに手がかからないようになってから、高校の同窓生が主体となって作った合唱団に入り、全国大会にも出ている。練習は週に1～2回。全国大会でいろんな日本の素晴らしいホールで歌う機会があった（H）。
- ・ 医者のお夫の仕事、お夫の父母の介護があったが、看取った後にコーラスを再開した（I）。
- ・ 編み物を続けた。職業でもあり、生涯教育でもある。今はボランティアに近く、おしゃ

べりする場を作っている。佐賀新聞社の文化サークルで編み物を少人数になったが教えている。すごい作品を作るより、生きがいとして編み物を楽しんでいる (J)。

#### <同窓会：地方支部を作る、活動を組織>

今回お話を伺った皆さんは、短大の同窓会活動に積極的に関わってこられたので、地方支部・県部会の設立の経緯や、活動内容についてお話を伺った。九州支部設立の際には名簿作りが大変で (B)、最初は福岡を中心に活動していたが、支部総会を沖縄以外の各県で持ち回ることになって、県部会がよく発達したという (E)。Fは青短の同窓会を「自分の実家の様な同窓会」と表現する。恥ずかしいことでも嫌なことでも、相談したらみんなが答えてくれて、「それで随分助かりました」と言われるという。

また、同窓会は学びの場でもある。Eは登山部を作り、鹿児島県の県部会では勉強会も開いている。

- ・ 同窓会の総会の時に「趣味は山登りです。毎月登っています」と言ったら、「良かったら、山登りに連れて行って」と10人ぐらい集まって、青山会という会を作って、それがもう三十何年になる。そうこうしているうちに、青山だけでなく、東女、津田、お茶の水、福岡女子大と色んな人達が入ってきて、「せいざんかい」という風に名前を途中で変えて今でも続いている (E)
- ・ 多和先生から「卒業生がいっぱいいるから作りなさい」と言われ、県部会を始めた。その後、県部会長を引き受け、自宅でバザーを行い、売り上げは活動に用いた。新納先生の勉強会もやった。次々と若い世代が部会長を引き受け、楽しい県部会が続いている (G)。

#### <ボランティア活動>

卒業生は、病院や施設での洗濯物整理、病院等での歌唱、バザー開催、いのちの電話の相談員、民生委員、更生保護の婦人会への参加、遊歩道の花壇作り、中学の授業のコーディネーター、選挙の手伝い、社会福祉法人・医療法人の運営、市の合併運動など様々な活動に従事している。活動のきっかけは、家族や地域の人々からの働きかけのほか、自分が新聞で得た情報の場合もあり、自ら情報を収集して活動を広げる積極的な姿勢が窺われる。Aの場合は、ボランティアが寮の先生や友人たちとの交流の場ともなっている。

- ・ 寮の寮長先生が救世軍の恵泉ホームに入られて、そこでボランティアをしました。リネン室の整理で、私たちが40代の時に先生が会津から帰ってみえた時に、「こういう仕事があるから、しない？」って言われて、「じゃ、やりましょ」って始めて。「毎週やれるわ。もう子どもがだいぶ手が離れたから」と言ってたんですけど、先生の方で「それは無理ですよ。月1回にきなさい。そうしたら長続きするから」と言われて。月1回ずっと、仕事しながら休んでも行ったり、40代から85ぐらいまで。ボランティアと言っても、洗濯物を部屋で一生懸命たたみながら、手よりも口の方が一生懸命働



いている感じ。最初の頃は、子どもの進学のこと、結婚のこと、夫のことがあって、その年代によって話題がどんどん変わって行って、みんなの様子も良く分かる。悩みも聞いて貰うし、愚痴を言ったりなんかしてね。ロビーに私の絵を飾ってくださったり (A)。

Gは、青短で朝5時から部活で綱島に通った経験が「何かしたい」という気持ちにつながっており、卒業後もがんばっている周囲の青短生の姿にも感銘を受けているという。

## 7. 今振り返って、ご自身にとって「青短」とは

### <クリスチャンになったきっかけ>

最後に、現在の視点から青短での学びが人生に与えた影響を伺った。3名は、青短が自分や周囲の友人がクリスチャンとして生きるきっかけの一つとなったと述べる。キリスト教に基づく寮 (シオン寮、救世軍の寮) で生活し、寮で礼拝や讃美歌に日常的に接したことや、寮生や教員が受洗するプロセスに接したことが影響していると考えられる。

- ・ 2年の時に、多和はる先生が入信なさって、ホームルームの時にそういうお話をしてくださって、入信した記念にみんなに『ハイデルベルク信仰問答』という小冊子を下さったのを覚えています。讃美歌を歌うのも好きだし、説教を聞くのも好きで、聖書も読むのも面白いと思います。結婚後、埼玉和光教会で受洗し、今は宮崎教会の礼拝と水曜日の祈る会に必ず出席しています (A)。
- ・ あの頃は、私達は寮にいましたから、寮の先輩も何人か洗礼を受けられた方がいました。山手教会に行ったら。私は結局、そういう風に導かれて、白杵に帰っても教会に行きました。教会の日曜学校の子ども達にお話ししたり教えたりと、そんな時代もありましたね。考えたら、そこ (青短) に行ったことが、教会に繋がって、クリスチャンになって、未だに教会のご奉仕とか (B)。
- ・ (今でも親交がある) 4人のお友達が、青山に入って初めてキリスト教を知ったけど、みんな卒業してから教会生活をそれぞれ続けて、全員クリスチャンになっていて素晴らしい。とても熱心。千葉のお友達は、ご主人が今とっても (体調が) 悪いけど、教会の礼拝に出ることで救われていると言っている。2年間の間で、学校の礼拝はあまり出てなかったように思いますけど、寮で培われたものは、一生教会生活というかたちで役にたったのかなあと思っています。私自身は中学の2年の時に洗礼を受けています。父がクリスチャンでしたから (E)。

Fはクリスチャンではないが、青短でキリスト教に触れたことで、「人生の核になるようなもの」を学べたという。

- ・ たった2年間でしたが、色々な意味で勉強になりました。(学校の雰囲気) 学生を大事に教育、見守りして下さったな、という思いが残っております。ミッションだということもあるんでしょうけど、宗教の時間でも「物事、それは、あなたに対する計



らいなんだ」とよく仰っていました。だから「そういう意味で受け止めなさい」ということを学んだと思います。物凄く苦しいことがあっても「それは、あなたのためなんですよ」って基本的な理念を学んだのが青山だった様な気が致します (F)。

#### <人間教育の場>

Fは諦めない心や「みんなで一緒に幸せになりましょう」というプラス思考を、Gは何を言われても貫く精神を青短で養ったと振り返る。Jの言葉を借りれば、青短が「人間教育の場」として卒業生の人生に作用したと捉えられる。

- ・ 「私の人生において、こういう人間を作って頂いた基本は青短だ」と思っております。もう絶対にあきらめない。そして絶対に大丈夫って言う気持ちで、何十年も前から出来ていて、「そのように生きていきたい」と今も思っております。青短魂はプラス思考です。プラス思考で頑張る心、力です。心が強いことです。「みんなで一緒に幸せになりましょう」という所があるじゃないですか、青山って。自分が幸せでないと人も幸せにはなれませんから (F)。
- ・ 私を見て「全くこの人頑固だから」といつも言うんです。朝起きて(部活に)行くのでも、行き始めたら何を言われても貫くと。(中略)ポイントに立った時に、(神様が)スッとこっちを向いて、「こっちの道が良い」と向かせてくれた。やっぱり、神様がいたんじゃないかなって (G)。
- ・ (青短は)「よかった」の一言。(このような)人間教育が必要だと思う。今の若者はダメという育てなかった自分たちの責任と言われそうだが、道徳教育というと堅苦しいが、(青山のような)人間教育が必要 (J)。

#### <友人>

青短での生活はたった2年ではあったが、卒業後もお互いを気にかけて、共に旅行をしたりする「生涯の友」を得ることができたという声も多い。友人だけでなく、寮の先生とも卒業後もお付き合いがあった方もいる。

- ・ 友達を得られたことも大きい。それから(救世軍の)秋元先生との出会いも大きいかもしれません。(シェイクスピアガーデンでいつもお食事していたクラスの友達)私が会社を辞めてからは、毎年箱根に旅行していました。お友達がやっぱり一番だったかしらね。ずっと人生長い間、付き合ってくださったから (A)。
- ・ 短大で学んだ洋裁と親友、同窓会で得た山登りが一生の宝 (E)。
- ・ 友達とつながっていることが大きい。たった2年なのに。同窓会に出た後は、みんないい気持ちだったという。寮で2年間同室で生涯の友とも言える人を、今年3月に亡くした。さみしい思い。立派な人だった。短大時代5人グループで、自宅通い以外の3人で近場のあちこちに一泊で出かけた。その友人は、佐賀の水害の時、熊本地震のおり、真っ先に電話をくれた (J)。

### <青山で学んだことが誇りに>

Hは、全国的に知名度の高い青山学院で学んだことが、自信や「心の拠り所」になったと語る。Dも青山学院全体の環境を肯定的に評価するが、「男子は四大、女子は短大」というジェンダー化された教育観ゆえに四大に通えなかった無念さを今も抱いている。

- ・ 2年でしたけど、全然今までの友達とも違うし、青山という全体が良かった。「青短を出て良かった」って思いがあるでしょうね。私は本当は四年制に行きたかったんです。四年制に行きたかったけど女だから「2年で良ければ行かせてあげよう」っていうことで行きましたから。だから（娘は）四年制に行かせたんですよね。それが正直な気持ちです（D）。
- ・ 心の拠り所で、自信がついた。世間的にも「青山を卒業している」って言ったら、周囲の方達がそういう目で見下さる（H）。
- ・ やっぱり素晴らしい。2年間だけれど密度があった。学ぶことが多かった。母が良く離してくれたと思って。全て学びました（I）。

### <人生のターニングポイント>

- ・ 「第二の人生の始まり」。第一は（福岡）女学院（C）。

### おわりに

本稿は1950年代から1960年代半ばにかけて青山学院女子短期大学で学んだ九州出身の卒業生10名の語りから、青短における女子教育の意義を考察した。戦前の日本では、女子の高等教育の機会が著しく制限されていた。戦後は高等教育でも「女子教育刷新」が図られたが、旧制高等教育機関の新制度移行に伴う「暫定的措置」として短期大学が設置され、「男子は四大、女子は短大」というジェンダーで二層化した高等教育制度が発達していく。10名の九州出身の卒業生の語りは、短期大学制度の導入と女子教育機関化が「女子の高等教育は2年で十分」という意識を生み出した一方で、短期大学がより多くの女性に高等教育へのアクセスを与えたこともまた確かであることを示している。

青短での学びは2年という短い期間ではあったが、「日本を代表する先生方」が揃う環境で高等教育を受け、東京という大都会で「一流のもの」や多様性に触れ、生涯を共に歩む友人を得る機会となった。現在も生涯学習、ボランティア活動、同窓会活動などをおして、それぞれのかたちで「愛と奉仕」に生きる卒業生の姿を辿ることができた。

- 1 時間の都合により、Cさんのインタビューが途中までしか実施できなかったことをお詫びいたします。
- 2 過年度高卒者等を含む。文部科学省「学校基本調査 年次統計 総括表4進学率（昭和23年～）」[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat\\_infid=000031852304](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000031852304)（2024年2月26日取得）。
- 3 青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会編『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（青山学院女子短期大学、2016年）、62-64頁。
- 4 女子専門学校の学生寮が1945年の空襲で全焼した後、寮生は民家を借りて分宿したり、外部の寮にお世話になったりしていた。その一つが、救世軍女子寮だった。『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、62頁。
- 5 『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、91-93頁。
- 6 『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、55, 123頁。
- 7 『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、56頁。
- 8 学院内で短大の礼拝出席率が一番低かったため、短大は1958年度からアッセンブリー・アワーを設け、参加を義務付けた。『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、93-94頁。
- 9 青山学院大学名誉教授。パイプオルガン独奏者として活躍。恵泉女学園、青山学院、YMCAからなるKAY合唱団を組織した。青山学院礼拝堂でのパイプオルガンを使用した音楽礼拝は、1952年秋から1955年3月まで実施されていた。『青山学院女子短期大学 六十五年史一通史編』（前掲注3）、444頁。



# 青山学院高等部出身短大卒業生 聞き取り調査のまとめ

## －1959（昭和34）年から1964（昭和39）年卒まで

山田 美穂子

### はじめに

青短同窓会の会員の中でも高等部卒業生の占める位置は特殊であるかもしれない。彼女らの多くは比較的高学歴の両親と兄弟姉妹を持ち、必ずしも裕福な環境とは限らないが、女子教育を重要視する、いわゆる教育資本の豊かな家庭環境に育った。また異文化や宗教に比較的寛容である東京という都市の地の利を得て、キリスト教をはじめとする特定の宗教教育にもそれほど違和感を抱かずに、むしろ積極的にミッションスクールを選択した人が多い。実際インタビューを受けて頂いたこの6人の卒業生のうち、実家が仏教の寺院である人が2名、親がクリスチャンの人は1名、家は仏教だが母方にクリスチャンの知り合いがいた人が2名という宗教との親和性の高さは、地方出身者の家庭環境と大きく違う点であると思われる。

彼女ら当時の高等部卒業生の多くは青山学院高等部から大学もしくは短大へと進学したが、いずれに進んだ場合も「青山学院」への帰属意識が強いのが特徴である。短大を選択した場合、入学後は地方からの学生の中でマイノリティ側になるわけだが、彼女らはかえって地方出身の多くの学生たちにとっての一種の憧憬の的となったことはまちがいない。地方支部の卒業生への聞き取り調査報告からはそうした非対称的な関係性をうかがい知ることができる。

この報告書では6名（昭和34年卒1名、昭和36年卒1名、昭和39年卒4名）の高等部卒業生への対面インタビューを通じて得られた当時の短大教育の感触と、若い頃の彼女たちの目を通して見た東京と地方出身者との共通点や差異を概観する。そのことは戦後新生した青短の創成期に満ちていた教育者と学生との熱意や好奇心を再現することとなり、また高度経済成長期のとばりに立っていた東京に多くの有能な人材を輩出した、青山学院女子短期大学の歴史的意義を記録することにもなるだろう。

以下では質問項目別に6名の卒業生（本文ではプライバシー保護の観点から、それぞれ対応するアルファベットで表記する）の回答内容をまとめ、最後に考察を添える。



氏名	卒業年	学科	出身地／居住地
A	1959（昭和34）	家政	港区／船橋市
B	1961（昭和36）	国文	杉並区
C	1964（昭和39）	国文	板橋区
D	1964（昭和39）	児童教育	世田谷区
E	1964（昭和39）	児童教育	世田谷区
F	1964（昭和39）	英文	流山市

## 1. なぜ「青短」に進学したか（どのような理由で選択したのか）

a. Aさんの祖父は浄土宗大本山のひとつ増上寺にも出仕する高僧で、内村鑑三と交流のある人物であった。父は仏教の宣教師で満州やハワイへの活動に従事していたため、Aさんご本人は父の秘書となることを期待されていた。「お寺の娘」として華道・茶道・琴などの習い事を網羅し、短大卒業までには、全て名取の資格を取っていた。芝増上寺や実家寺院のある牛込周辺には神社も多く存在し、宗教を越えた精神的なコミュニティがあった。Aさんの祖父は「心根があれば何の宗教でも」よいとのポリシーがあり、当時実家の隣にあった牛込教会から毎日きこえてくる讃美歌に惹かれていたAさんに「頭を垂れる対象があるのは良いこと」と隣のキリスト教の教会に通うことを勧めた。5歳のとき空襲で牛込一帯は全焼し、実家の寺も牛込教会も消失したが、それまでの2年間通った牛込教会の真鍋頼一牧師が、のちに青山学院の理事長となられたのもご縁であった。

中3のとき父が急逝し、弔問にいらした真鍋先生と10年ぶりに再会した。近況を問われ新宿の戸山高校を受験予定である旨お話すると、「戸山高校を狙えるレベルなら青山学院も受けてみたら」と勧めてくださり、急きょ青山の高等部の受験を決めた。大学進学の際、兄二人（住職）は別として第二人には学費がかかることで母が悩んでいるのを見て、自分は四年制大学ではなく、当時「花の短大」と言われた青短への進学を決めた。また、もう父の秘書にならないのであれば英語は必要なく、むしろ生活のために家政が重要であると家政科を選択した。青山の四大は当時無試験だったが短大は入学試験があったこともプライドを高める効用があった。向坊学長の魅力も大きかったことは間違いない。

b. Bさんは両親がクリスチャンで、特に父が熱心な信者だった。実家は吉祥寺だが父が結婚前に都心に住んでいたことがあり、その縁でメソジスト系の銀座教会（1890年設立）に通う。両親とも当教会の吉岡誠明牧師から洗礼を受けており、結婚式もここで行われた。Bさんは4人兄弟姉妹で、そのうちBさんを含めた3人は母の勧めで青山の中等部に入学した（弟は慶應義塾の中等部に入学）。父は熱心な信者であるにも関わらず子どもの誰にも洗礼は受けさせていない。

姉は大学に進学したので自分も行くと思っていたが、高等部在学中に東急文化会館に「田中千代服飾専門学校」東京校舎ができた（1960年）ことが進路に大きく影響を与える。母が器用で服を全部自分で縫っていたため、Bさんもおしゃれに興味があった。田中千代

は当時の皇后の衣装相談役を務めたデザイナーで、その夫は田中薫子爵であり、服飾専門学校（1951年設立）の本拠地である兵庫県芦屋の「お嬢様が通う学校」に憧れた。姉は青山の大学（英文科）に行ったが、自分ひとりあえず短大には行き、その後田中千代服飾専門学校に通うという将来設計を立てる。進学にあたり、裁縫が主ではない家政科には行くことは考えず、ファッションに興味はあるものの勉強は苦手であったBさんは、文章を書くことは好きだったことから短大の国文科を選択した。当時短大に進学する人数は少なく、内部生はだいたい大学の方に行っていた印象を持つ。

c. Cさんは青山高等部の進路指導の際に「6歳から習っている日舞を続けたい」「日本文化を学びたい」と希望したところ、教授陣が素晴らしいという理由で青短を勧められ受験に至った。確かに当時の国文科には加藤楸邨（1954～74年）、川瀬一馬（1950～74年）、諸橋轍次（『大漢和辞典』編纂で1960年に文化勲章を受賞）などの錚々たる教師陣がいた。

家庭的には3人姉妹で、Cさんが青山高等部から青短、妹さんは一人が東京女学館から短大へ、もう一人は音大へ進んでいる。当時は高等部から青短へ進学する友人は多かった。自宅が九段下で、当時渋谷～水天宮を通っていた都電を利用しやすかったこともある。家は浄土宗だが、母の知り合いでクリスチャンである人が青短を勧めたことも影響した。

d. Dさんは当時の女子生徒の進路として大勢を占めていた「短大→就職→結婚」に沿って短大へ行くことは決めていたようである。親は大学でも良いと言っていたが、高等部のクラスからは短大進学が半数、次が大学・就職・高卒（勉強はもう十分なので家にいる）という分布だった。短大進学者では英文科志望者の数が多かった。しかしDさんは高等部時代に得意な科目が音楽・美術・体育だったことから当時開設したてだった児童教育に決めた。母には「やがては（大学の）英文科へ行かせる」つもりで青山中等部に入れたのに、と言われたとのことである。当時青山学院大学では理系の学科はまだなく、1962年にフランス文学科が創設されたばかりで、英米文学科と教育学科がメインであった。

e. Eさんの場合は、家庭における親の啓かれた教育観が進路に明らかに影響している。まだ中学受験する家が少なかった当時、建築関係の仕事についていた父の「後に残せるのは教育だけだから」というポリシーもあり、小5・6の時に塾に通い中学受験をして青山に入学した。両親とも、兄が国立の小学校から国立大に進んだのと比べても「トータルだと青山に行っても学費は同じ」との寛容な考え方であった。

短大に進学を決めたのは、姉が青短英文科卒で結婚をし、自分も同じような将来を想像したからとのこと。とくに中高においては礼拝は毎日守られるが、短大では参加は自由になることを知り、その自由さに憧れた。受験科目の関係で、苦手な数学のない児童教育を受けることにした。面接官は幸田三郎学長、高等部の担任は物理の綿引先生で、綿引は後にさゆり会（校友会の女子短期大学部会）の会長となった。

f. Fさんは、もともと都立志望だったが試しに受験したところ両方合格し、ブレザーの制服（1960年に制定）と立地に魅力を感じて青山高等部を選んだという経緯がある。中学の英語（ESS）の顧問が青山の英米文学科の出身で憧れもあった。宗教は不問で

あったことも入学のハードルを下げたという。

短大に進路を決めたのは高等部で習った先生が青短に移籍したことが大きく、当時は大学よりも短大の方が偏差値は高かったことも決め手となった。バスケットボール部に所属していたため日々の練習や合宿で忙しく他大学を受験することは難しかった。なお高等部から男子は他の大学へ行くのが普通で、Fさんのクラスでも慶応義塾大学に行く生徒が数人いた。女子は青山へ行く割合が高かった。

## 2. 青短に入学して何か自分に変化があったか。あるとすればどんなところか。 何か影響があったとしたらどんなことか。

a. Aさんにとっては向坊学長の「花嫁学校だと思われている短大だが、そうした日本の社会を見返すべく頑張ろう」という言葉が強いインパクトを持って迫ったとのこと、それがその後の彼女を支える動機となったことは想像に難くない。

家政科では料理と裁縫はもちろんのこと、「頭のいい家庭婦人を作る」「科学する学科だ」と化学と物理も厳しく教えられ、それが栄養計算などに役立った。就職活動の際には、まだ短大への就職募集が少ない頃だったので向坊学長自ら「私もできるだけ会社回りをしてみる」と熱意を示されたことが大変嬉しかった。青短ではこうした熱心な教育者に囲まれ、何でも駄目と思わずやってみることに、また五感を働かせ、寡黙にならずよくしゃべることが人間関係の構築には大事であると学んだ。

学生生活の面では、高等部では卓球部に入っていたが短大では習い事に忙しくサークル活動には参加しなかった。

b. Bさんは高等部と短大時代では大きく環境や雰囲気が変わったと思ったという。大学に進学した人とは構内で挨拶はするものの、つき合う友人グループが変わってしまった。青短の素晴らしさの根底にあるのは誇りである、と思われる。当時の国文の教師陣は世間的には高名な人が多かったにもかかわらず、加藤楸邨や諸橋轍次は穏やかでおっとりした人柄で何があっても叱ることがなかった。Bさんたち学生も授業中はまじめであった。ゼミは川瀬一馬を選んだ。授業では論語が面白く、後に教科書を開いたところ漢詩を書きつけた紙切れが出てきたほど熱心に授業を受けていたことが偲ばれた。

c. Cさんにもっとも大きな影響を与えたのは加藤楸邨ゼミに入ったことであった。高等部から入学して加藤ゼミに入った学生はCさんひとりで、他は地方からの学生であった。加藤の薫陶で俳句作りを始め、ゼミ旅行では二句選ばれたことが大きな印象を残している。また彼のアドバイザー・グループ（青山では「アドグル」の呼称で知られる教員と学生の交流単位）にも参加し、アドグル生20名で緑ヶ丘の先生宅を頻りに訪れ、千代子夫人にもお世話になった。加藤ゼミでは卒論制作があり、芭蕉をテーマに書いた。後にゼミ卒業生であるCさんの結婚式に加藤楸邨が出席し、「空の青きたりていよ白牡丹」の句を披露している。加藤にとっても印象的な教え子であったことが想像できる。

d. Dさんには児童教育という新しい学科の若い教員が青短の最大の魅力で、自主的に勉強するようになったという。先のCさんの例を見てもわかるように、英文・国文の教員は旧制女子高等部の流れからきた著名だが高齢の人が多かったのである。それに比べて児童教育科一期目の教員の年齢はフレッシュさがあった。例えば幸田学長は30代、掛井五郎は20代、高橋好子は30代で着任2年目、瀬田貞二がやっと40代である。当時は各教員用の部屋がなく、ピアノ室の奥の部屋に教員がたむろしており、学生も自由出入りという自由な雰囲気だったことは重要な記憶であると思われる。

また林三平の「2年で散り散りはもったいない。卒業生からの情報も引き続き欲しい」という発言にインスピレーションを得て、「さゆり会」と並行して児童教育科独自の同窓会に当たる「童友会」(1964年～)を立ち上げたことは青短に入学して受けた教育の最大の果実であると思われる。10年後の1974年に設立された「短大同窓会」に合流するよう促されたが童友会は解消せず「学科会」を設けることにし、さらにその10年後には全学科で「学科会」が立ち上がった。この児童教育科の学科会の活躍は目覚ましく、ときの同窓会会長に「他の学科に良い影響を与えた」と言わしめているほどの成功を取めたのである。

e. Eさんは、自分の意識としては高等部から短大へ進んでも特に心持は変わらず、テニスに打ち込んでいたとのことである。しかし在学中には気づけなかったが、「素敵な大人」に出会ったことがその後の人生に大きな影響を与えたと思われる。短大の教員の発言はインパクトが強く、記憶に残っているものが多い。掛井や瀬田が繰り返し伝えた「こどもに本物を」というメッセージはその後の指針になっている。

「世界は大変なのに君たちはなぜそこに座っているのか?」といった挑発的な発言も辞さなかった掛井先生には当時は反発も感じていた。また、「きちんと保育や芸術理論を習いたい」と新しい児童教育科の教養主義に反発する学生もいたことは否めない。林三平先生[1964年11月刊行の『青短紀要』に掲載論文「改訂幼稚園要領の特質」あり]による『母と子の世界』(シモーヌ・ファビアン著、今野一雄訳、1963; 原題 *Nous, les parents... : recit*, 1960)の紹介があり、卒業後も折に触れ「行動の表面だけでなく奥を考える」という教えを思い出すという。

f. Fさんは高等部でバスケットボール部の部活に明け暮れた反動から、短大ではのんびりしたいと願うサークル等には入らなかった。高等部からは通学環境なども変わらず、受験をしていないためのんびりしていた。

授業は70分が7時間あったと記憶する。高等部では帰りにお腹がすき過ぎ練習後渋谷で甘味を食べに寄るなど青春を謳歌した記憶もあるが、短大では授業が長いため帰りが遅く、遊ばずバイトもせずじまいであった。家の近所で英語の家庭教師をした程度である。母の実家は仏教の寺であったが、短大で礼拝には真面目に出席していた。キリスト教の礼拝は印象的で心が落ち着くのを感じてはいたが、若くて教条などへの反発もあり受洗には至らず。



### 3. 特に記憶に残っていること (先生、友人、ゼミ、授業、礼拝、学校生活、学生活動、寮、その他)、 学生時代のキリスト教教育・礼拝の様子と、卒業後に与えた影響。

(高等部卒業生のみ対象の質問：地方出身の同級生に対する (当時の) 印象は。距離感があったか。そしてどんな交流をしたか。)

a. Aさんは「青短につながるきっかけを得た人はラッキーである」と痛感したという。短大卒業式の謝恩会で友人5人とともに琴 (『千鳥』) を演奏したのは良い思い出である。地方出身の同級生に対しては、お金持ちが多いという印象をもったとのこと。シオン寮生については、洋服の数が多という印象をもった。寮生は電車ではなく徒歩通学なので、おしゃれな当時流行りの膨らんだスカートで登校していたのである。それに対して高等部からの内部生は、青短が世間一般に言われているような華美で裕福な人の花嫁学校であると思われたくないと、内心苦々しく思っていた記憶があるという、Aさんの非常に率直な発言があったことは貴重な記録となる。とはいえ、確かに東京出身の高等部生には、歌手の淡谷のり子を母に持つ同級生など、有名人の子女が多く、華やかな雰囲気があったのも確かである。

b. Bさんは、短大の記憶の大部分を占めるものとして教師陣の素晴らしさをあげている。やはり諸橋轍次、加藤楸邨、川瀬一馬の名前が挙がる。諸橋は授業でひとりひとり当ててゆくが、優しくかった。このたび教科書を久々に開いたところ多くの箇所赤線がひいてあり、熱心に授業を受けていたことがわかる。川瀬ゼミでは、卒論のテーマに『花伝書』を選び、毎日図書館に行き筆写していた。川瀬は静かな人柄で冗談などは言われないが親身で、卒業の際にはBさんを自宅に招き世田谷名物の稲荷寿司を振る舞われたという。馬越には源氏物語を教わった。

加藤楸邨のクラスでは1年生の6月に一週間ほどの北陸旅行があった。実際は芭蕉の名跡を訪ねたのだが、勉強不足でただの旅行としか考えていなかったとのこと。この時初めて益子から新潟へ出て日本海側をバスで旅行した。父から「4月に入学金を払ったところなのに、もうそんな大きな旅行に行くのか」と驚かれたものである。しかしこの旅行のおかげで5人の後まで長く続く友人グループができた。2年次には卒業旅行で京都に行った。長谷寺、永平寺を訪ねたのが強く心に残っている。先の友人らとともに東尋坊にも行った。

他に学生生活においては、大学部に階段教室があって勉強しにいった記憶がある。また友人の代返をしたこともあるが、自分で教えるようになってからは代返はバレルものだと気が付いた。部活は入っていなかった。短大での礼拝の記憶はあまりなく、銀座教会にはときおり行っていた。アルバイトは明治生まれの母のもとでは許されなかった。当時はアルバイトとは経済的に困窮した人がやるもの、というイメージがあったとのこと。必要な人には短大が斡旋していたように記憶している。その業種はデパートでのお中元・お歳暮



の販売バイトが一般的であった。

地方出身者については、当時の青短には地方のエリート家庭のお嬢さんばかりが来ている、という印象だった。クラスに東京出身者は10人未満で、Bさんたち5人が「幅を利かせていた」が、あとは北海道から九州まで、おとなしいお嬢さんばかりであったとのこと。彼女たちから見ればBさんら5人は「東京の人は派手でうるさくて、勉強もしないのに笑ってばかりいる」と思われていたであろうという率直な回想あり。全員国文科で、3人は高等部から、二人は有名な女学校からであった。64年間途切れず仲良くしており、年2回は会っている。その間結婚して子どもが生まれ、ベビーカーもない時代に赤ん坊を抱っこして電車に乗り友人の家に行ったほどの親しい絆で結ばれている。短大がその初期から、必然的に高学歴女性となる卒業生たちに「女性同士の絆」という貴重な財産を授けたひとつの証と言えるだろう。

卒業後は定期的に短大のクラス会を開催し、20名ほど集まっていた。場所は青山校友会館あるいは水戸や九州などの地方で行われた。クラスメートの喜寿にはお祝いの会を設けていたが、地方の方がその都度東京まで出向くのは大変であろうと、2年のうち一度校友会館に来られる人だけだと決めた。ちょうどコロナ禍に入る前まで行っていた。一方Bさんら高等部出身者を含む東京出身の5人の喜寿のお祝いの会は帝国ホテルで開かれ、25人ほどの参加があったという。シオン寮生との交流は、旅行の折には仲良くなった程度と希薄である様子がうかがえる。

c. Cさんの学生生活にまつわる思い出は東京の地の利を享受した、いわゆる華やかな都会の私立大学のイメージに合致する。昼は主に学食でとり、帰り路に友人たちと「千果園」というフルーツパーラーに寄っている。また中高の続きで（短大にもあったのだが）学院大学の方の演劇部に入部して、ここでの活動が主な生活になった。「四年制だと部内に年上の男子学生がいて威厳を感じた」という。地方出身の友人は各地方出身者用の下宿に住むか、あるいはシオン寮に住んでいた。当時シオン寮の近くを高速道路が建設中であったことが印象的だとのこと、これは1964年開催の東京オリンピックをひかえて東京の風景が変貌する最中の貴重な証言である。

キリスト教との関わりに関しては中等部でのキリスト教との出会いが大きく、その後も聖書を持ち歩き続けた。2011年、夫の兄が東日本大震災の津波で亡くなったことを契機に富士見町教会で受洗し、現在は同教会の婦人会会長を務めている。

d. Dさんの学生生活にまつわる記憶に残っていることは、旧短大校舎が木造二階建てであったことで、現在の大学図書館あたりに建っていたものである。Dさんは入学式に私鉄のストで参加できなかったことも印象に残っているようで、地方出身者は地元から親がかりで式に参加していたとのこと、東京出身者のセレモニーに対する一種の気楽さが見て取れるかもしれない。

印象に残る教員は、まず瀬田貞二で、授業のたびにザックから絵本を取り出し、「いいでしょう？」と得意げに紹介された。英語の押韻まで丁寧に解説される良心的な先生だっ

だが5～6年で体調を悪くされた。「卒業しても勉強は続けてほしい」という瀬田の言葉はその後のDさんの人生の指針の一つになっている。掛井五郎には油絵を習い、対象をよく見ることを繰り返し強調されたのが印象的。園芸家・園芸評論家の柳宗民（民藝運動の創始者柳宗悦の三男）は、母親の影響だそうだが畑に花を植えるのが習慣だった。いつも何かを持ち運んでいるので、ポケットがいつもばんばんに膨らんでいた。

地方出身者に対する当時の印象は、緊張感をもって過ごしていることが感じられる、ということだった。高等部からの内部進学者の数は70名中5名であるにも関わらず、多数派である地方出身者のほうが緊張していたとは一見不思議だが、地方出身の友人は「親戚の家に住み、方言が出ないよう話し言葉に気を遣っていた」と回想していたそうである。シオン寮生は当時あまり周囲にいなかったため、東京の自宅生であるDさんはあまりその存在を感じていなかったとのことで、後年栗坪学長時代に同窓会の講座の会場としてシオン寮を使用してもらい、その折に卒業生の中にシオン寮愛が強いことを初めて認識したとのこと。

e. Eさんの学生生活に関する記憶はまずテニスに打ち込んだことで、のんきな学生だったと回想する。印象的だった教員は瀬田貞二で、彼は太平洋戦争のとき衛生兵だった経験から、深い反省をもって戦争の起きない世を目指し、後進を育てる決意から平凡社の『児童百科事典』（1951年刊行）を編集したことはよく知られている。多くの卒業生と同じくEさんにとっても、瀬田の「こどものために本物を」、掛井の「こどもの芽を摘むのは大人」といった言葉は、子どもと対する時、考える時の核となっている。キリスト教保育の小田島もよく話を覚えている。Eさんの実家の宗教は仏教なので「青山はキリスト教を強制されないのがよかった」「宗教教育を受けることは大事」と親の宗教教育観が強く影響しているのが分かる。Eさん本人としては、キリスト教が絶対神信仰なのが疑問で受洗にいたらなかった。本人はきわめて感覚的にだが、と添えておられたが、父親がなくなったときにはイエス様よりお釈迦様、父と同じところへ行くかな、と教会より寺へと気持ちが傾いた。

地方出身者については、Eさんの目には雰囲気の違いが見て取れたようで、高等部から短大に進学した人は高校生のとくと気分が変わらない人が多いのに対して、地方出身者の中にはそれが気に障ることもあっただろうと洞察力のあるコメントをしている。シオン寮生については、当時はあまり学生間で交流がなかったとのことである。

f. Fさんの学生生活をめぐる印象は教員にまつわるものが多い。アドグルは短大で人気の荒牧鉄雄のところに入った。15～6名ずつ自宅へ招いてもらい、夫人の手作りサンドイッチを庭でいただいた。また堂賀島への泊まり付き観光旅行にも連れていってもらった思い出がある。他にはジュリア・サッチャー先生、松宮先生が印象に残った先生で、教員と一緒に北海道旅行に行き、青函連絡船の船底で船酔いした記憶がある。

地方出身者については、勉強に意欲的なのが非常に新鮮に感じられ、自分たち高等部からの内部進学組に比べて精神が大人であるように感じられたという。

#### 4. あなたにとって青短とはどんな場だったか

a. Aさんは青短を人生のすべて、と表現している。教育熱心な教員との出会いを筆頭に、自分より若い世代との交流があり、タテのつながりがその後の人生を豊かにした。卒業後も校友会で大学英文科の卒業生（2年年上）との交流を通して、院長に対しても理路整然と主張でき、母として自分の娘からも敬意を表される、青山学院の先輩方の偉大さを知るようになったという。

b. Bさんにとって青短はいわば次のステップへの通過点であったが、青春を楽しむ場であったのは間違いない。昼休みはボーイフレンドと会い、友人の交際相手も来て会ったこともあった。中高等部時代のつながりが短大に入っても存在していた。

また、地方出身者と初めて出会う場でもあった。方言を使う人や、お嬢様のような裕福な家庭の「お嬢様」もいて東京出身の生徒が大多数を占めていた高等部とはまったく異なる多様性を知る機会であった。若者らしく、方言の真似をしたり互いにあだ名をつけたりしたこともあった。

c. Cさんは青短の環境を学業と課外活動の両面で実り多いものとしたことが顕著である。女性だけの環境を魅力だと感じたという。中等部の藤村先生に聖書を学び、テストのための暗記が厳しかったことを覚えている。中等部内にあったJunior Churchという黒光りする建物の中での礼拝に参加し、土曜日は休みだったので日曜日には教会へ楽しく通った。

なにより青短時代は日舞に打ち込んだときでもあった。当時日舞を習う学生は多く、クラスでも4人いたという。Cさん自身は高等部1年のときに名取となった。

d. Dさんにとって青短は勉強以外にも様々なことを吸収する場だった。たとえば大学水泳部で2年間「飛び込み」競技に明け暮れたが、1964年の東京オリンピック前でもあり、そうしたハイレベルな選手たちと同じプールで泳げた興奮は今も忘れられないという。

e. Eさんにとっては、青短は高等部の続き、といった心持ちの場で、引き続きテニスに打ち込む日々であった。素敵なお先生方と置いていながら当時は受け身一方であったことが悔やまれると非常に率直に述べられている。

f. Fさんは青短を「生涯の良いお友達を得た場所」と定義している。卒業後56年たった今でも15～6名の友人がいる。地方の人も多く、今回のインタビューの下準備に彼女らに青短の思い出を聞いてみたところ、「こうした卒業生調査を実施してくれる青短は素晴らしい」との感想が多かったとのことである。みなお互いに習い事をしており、Fさん自身は早くに夫を亡くした50代から観世流の謡を習っている。これはカルチャーセンターでの一日入学をきっかけに始めたものとのこと。青大の親友と結婚している師匠もおり、青山のつながりが周りに多い。

## 5. 卒業後の進路について、どのように決めたか

a. Aさんは青短を卒業後よい企業に就職したが、当時は就職するのは経済的に「困っている人」で、Aさんも実家は牛込城址に建つ寺院であるが中3で父を亡くし、経済的な自立と母の支援を願っての就職であった。富士電機（当時ジーマスと提携。本社は東京丸の内）の秘書として採用されたが、短大卒が採用されたのはAさんが初めてだったとのことで、当時の青短の社会評価の高さが知れる。

Aさんにとってこの就職は、会社にキャリアをつけてもらうという快感があった。会社の費用でYWCA主催の各種資格をとらせてもらった。午後6時には退社を許可され、お茶の水のタイプ学校へ通わせてもらい、社長秘書室にタイプライターを購入してもらえた。当時タイプライターは高価で、アメリカからの輸入品が主だったことを考えると会社側の経済的余裕とAさんへの期待の高さがうかがえる。

Aさんの家政科での学びも役立っていることは興味深い。労使交渉で疲れている社長におにぎり等を作って出し喜ばれたことが印象的だという。その他、社長への人事あっせん活動、社長の依頼による社内での「お婿さん候補」社員リストの作成、またAさん自身も高級老舗料亭である紀尾井町福田屋でのお見合いをするなど「短大卒社員ライフ」を満喫したのだった。雇用機会均等法施行後のいまでは神話とも言える明快な性的役割分担を身をもって実践したAさんだが、歴史的観点から見れば、高度経済成長期を目前に、その後の日本社会に広く浸透した短大卒女子社員のキャリアコースに先鞭をつけてくれた、短大卒業生全体にとっての恩人と言えるだろう。

b. Bさんは青短を卒業後、3年間田中千代服飾専門学校に通い、本科・師範科・専門科を修了し、教員としても働いた。合計5年いたことになるが、とにかくおしゃれがしたかったとのこと。アメリカ・ヨーロッパから伝わるファッション熱を反映した、この時代特有の卒業生の若々しい一面をよく伝えている。

友人5人グループのうち、ひとり卒業後すぐに結婚した。当時は25歳までが婚期と考えられていた。それぞれ服部時計店、旭化成、もうひとり父親の縁故で日本ゼオンに就職した。学校の就職案内を使った者はひとりだけで、多くは縁故就職だった。就職して1年ぐらいは勤めたと思われる。

Bさんは父が不動産業に携わっており、三井不動産日本橋室町の地名を聞いていたので、地の利を得て三井生命東京支社に応募し就職した。最初は子育てで時間の制限もあったが、度胸と怖いもの知らずのところがあり、営業で三井系の企業を担当した際、直接一番の上司に挨拶に行つて有名になるなど大いに活躍した。指導主任に選ばれ、最後は所長にまで昇進し27年間働いた。

青短は良いところだった、とBさんは回想している。同じような環境出身の学生たちの質が均一だったせいだろうが、人を疑うことのない環境で、人間関係で痛い目にも遭わず、いじめもなく、世の中はこんなものだと考えていた。実社会に出て初めて、ひねくれた物



の見方をする人や仕事のことで妬む、あるいはひがむ人に出会った。青山ではそういったことが一切ない、一種の桃源郷であったということがうかがえる。

青山学院を出たことによって自信がついており、他人が何を言っても構わない、自分は何も悪いことをしたわけではないのだと考えて行動できた。Bさんの父は「人は信じなさい。神様は必ず見ている」と言うのが口癖であったとのこと。夜も「ありがとうございます」と感謝の言葉を口にする習慣が身についていた。

c. Cさんの印象では卒業後就職する人はまだ少なく、友人の中からスチュワーデスの第1・2号が出たという時代だった。他の就職先としては銀座和光、銀行の一般職が多かった。Cさん自身は卒業後、御茶ノ水美術学院（美大専門の予備校）で絵のレッスンを受けていたところ、その知人の勧めで広告会社の秘書になった。

その後は日舞の生徒をとって過ごした。短大時代に入部していた大学の演劇部では、ロシア演劇、シェイクスピア作品、フランスの古典演劇（マリヴォー作品など）、フランスの現代もの（『泥棒達の舞踏会』）などを手掛けることができ、充実した創作活動を行った。

1968年5月に医者男性と結婚、1967～68年には一時プラハに住んだ。帰国後は夫が仕事や研究のために家に不在で、そのため、妻が専業主婦となって家と夫の世話をするという当時の典型的な結婚生活ではなかったかもしれないが、かえって日舞に打ち込めた時代であったとも言えるだろう。

d. Dさんは卒業後、白金幼稚園に就職を決めた。これも瀬田・掛井の影響が大きかった。林三平先生も心配してくださったとのこと。Dさんの母は愛育病院の婦長だったので就職を探す際に縁故も提示されたが、自立したく断った。児童教育科ながら、幼稚園に就職したのは友人7人中2人と少ないのが事実である（後に幼稚園保育に関わった人は多い）。当時は銀座和光など普通の企業に就職する人が多かった。幼稚園に就職はしたものの、当時は残業も当然のように多く、仕事と家庭を両立できるような社会環境ではなかったため、結婚を機に仕事は辞める。結婚相手は小学校以来通っていた教会で知り合った6歳年上の男性であった（職業は会社員であった）。当時は教会がいわゆる青年会の役割を果たしており、男女の出会いの場として機能していた。二人とも実家が近く、そのまま同じ場所に住み続けたため教会にも70年以上通い続けたことになる。Dさんはこのことを「幸い」と感謝の念をもって表現している。

e. Eさんは児童教育科を卒業したからといって特に幼稚園に就職するとは決めていなかったと語る。それは当時の世間の「児童教育科ということは子どもが好きなのね」と決めつける雰囲気反発を覚えていたためだった。最終的には当初就職が内定していた幼稚園を断り、林三平の紹介先のキリスト教保育ではない幼稚園に就職した。結婚はその園長の甥である男性とすることとなり、会社員であったその夫の転勤に合わせて大阪から東京、名古屋へと転居。子どもが小4時に東京に戻ったのを機に定住する。

f. Fさんの卒業後の進路は当時の青短卒業生のひとつのひな型と言えるだろう。いずれも慶応義塾大学に通う兄と弟に女子はFさんひとり、という構成でのんびりしていた



が、叔母の紹介で東京海上日動火災保険株式会社に就職。その年は青短からの女子社員が新入社員総数の中で最多だった。東京オリンピック開催の年で、皇居近くでランチをとり、仕事中最寄りの銀行にて1000円の記念硬貨との引き換えを初日に出来る機会も得た思い出がある。当時ボーナスは年3～4回あった。主な仕事としては自動車保険の原資の作成でデータを数字化してパンチに回し、そのデータを計算機に読み込ませて統計表を作る作業を行っていた [パンチカードシステムを使った磁気計算機（第2世代）（メインはIBM製）は集積回路を用いた電子計算機（第3世代）が登場する前に大型データ処理に使われていたもので、1970年代以降、急速に電子式コンピュータへと置き換わった。Fさんの東京海上でのパンチ式システム作業の話は第2・第3世代コンピュータが共存していた時代の貴重な証言である]。丸ビルから国立市へ一時移転した時期があり、このときベテラン社員が大量に辞めたため比較的若い人が昇進したという痛快なエピソードがあった。Fさんは5年勤めた後、結婚を機に退職し、夫の転勤によって流山市に移住し40年ほど住むことになる。

## 6. 同窓会の二本柱「生涯教育」「ボランティア」に関する補足

a. Aさんは計16年間校友会などに参加し、伊藤徳子氏など代々の同窓会長を補佐するなど、青短の同窓会に長年熱心に奉仕された。80代になった今は連れ合いの認知症が始まる年代であり、同窓会の仲間と普段うちに秘めていることの多い介護ケアや自身の身の処し方の悩みを分かち合い話し合えることは大変な恵みである。短大がなくなっても同窓会の活動は続くのであり、これからも同窓会の成果を内外に伝えてゆくことを使命と考えておられる。またAさんは昨年（2022年）、オンラインで河見誠教授の講演を聴講し、コロナ前に実施された学生との海外スタディ・ツアーや20～30代の卒業生の様子を垣間見ることができた。こうしたオンライン利用によって外出の難しい子育て世代やシニアのつながりが可能になる点、海外スタディ・ツアーのシニア版があれば継続的な学びと交流が可能になる点に期待している旨を逆提案して下さりさえした。その生涯学び続けるという熱意には、草創期の青短が生み出した、高等教育を受けた女性のロールモデルを見る気がする。

b. Bさんは当時の大企業におけるキャリア女性のひとつのロールモデルとも言える存在で、生命保険会社の所長にまでなったため仕事が忙しく、短大バザーなどの同窓会活動に加わったのは60歳過ぎてからだった（高等部の同窓会幹事は10年ほど務めている）。

c. Cさんのボランティア活動の原点は高等部のとき、クワイヤーで山谷を訪問したことだという。クワイヤーでは当時病院訪問も行っていた。生涯教育の点では、2005年あたりから6年間、国文学科会の会長を務めた。当時の幸田学長の「2年間の短い教育期間ゆえに生涯教育としての同窓会（学科会）を大切にすること」という励ましがCさんの行動規範に大きく影響したと述べている。

d. Dさんは卒業後も何かの形で社会に関わりたいと願い、子育て中はPTA、食品公害が社会問題になった〔例：1968年カネミ油症事件など〕ときは生協を立ち上げ、教会にも通い続けた。この教会は、自宅近くの教会付属の幼稚園に祖父と両親の意向で入れられたもので、その後も教会学校で育ち、青山の中等部・高等部での毎日の礼拝で信仰を養われ中等部2年次のクリスマスにこの教会で受洗している。生協を退いたタイミングで短大の同窓会に誘われ引き受けた（1990年代～）。同時期に校友会副会長も務め、同窓会会長を辞めた後は教会での奉仕を中心に現在まで生活している。自身と夫の両親計4人と夫の介護も経験した。公的・私的生活にわたって超人的な活動ぶりと思われるが、幸田先生の「置かれた場所で最善を尽くす」という言葉を心の支えとしてきたとのことである。

e. EさんはDさんの依頼に応じて同窓会2期目に書記を務めた。同窓会運営委員をやるかたわら、37歳のとき児童教育科2期生の後輩からの情報で関わることになった自主保育施設「こぐま園」（心臓病児のための保育）の保育士になった。この保育園は病児を保育園・幼稚園に預かってもらえない当時の多くの母親の念願に応えたものであり、美濃部都知事（1967～79）の時代に補助金を獲得している。この「こぐま園」は渋谷区の集会所を借りているのに利用者には区民がいない等のクレームがつき閉園の危機にも遭ったが、Eさんら保育士・父母会・後援会会員らが署名活動を展開して乗り切った。今年で創立50周年を迎え、週2回（月曜と木曜）開園している。79歳の現在42年目になる。

童友会の幹事は46年目となる。中軽井沢親睦会・学科会の学習会の世話役を「せっかく始めたことを止めるのはもったいない」との思いから長く務めることになった。こうした点を他の同窓生からは有難く、頼もしく思われているとの感触が同行された友人からの発言に感じられた。

f. Fさんにとってのボランティアはまず、青短同窓会への参加である。2000年から同窓会の運営委員になり4年間務めた。Kさんと一緒にボランティア係、主にバザー係を請け負い、後に大人気を博した「手作りの会」を立ち上げたのもFさんで、バザーで売る製品の制作・販売・基金分配を行った。その年青山祭での売り上げ総額が200万円を越し、青短やあしなが育英会、CCWA（里親として）、福祉協議会などに寄付できたことが大きな誇りとなっている。その後同窓会のバザー委員長を2年務めた。四国支部（高知）の総会にも出席して歓待され、金毘羅歌舞伎の貴重なチケットと卒業生の先輩の旅館への宿泊を手配してもらったことが良い思い出で、「短大卒業生はファミリーだ」と感激した。

他には「いのちの電話」やフィリピンの子どもの経済支援も数年に渡って行った。生涯教育の点では謡を続けている。

## 7. (今振り返って) 自分の人生にとって「青短」とは

a. Aさんは青山学院女子短期大学につながる事が出来た「お導き」に感謝している。後に青山キャンパスに近い住宅地・南平台にマンションを購入し、長女が初等部から中等

部まで青山学院に通うことになった。毎週日曜日に彼女が通っていた聖ヶ丘教会の山北宣久牧師が、30年後青山学院院長となり、同窓会活動を通じて思いがけず再会する幸運に恵まれたことも青山学院の不思議なお導きだと感じている。同窓会活動の中で、青短前身の女子専門学校同窓会さゆり会（2008年解散）の運営委員とお話する機会があった。「私たちは女子高等師範学校と同じレベルだったのに短大に格下げされて悔しい」「女学校をつくられたスクーンメーカー先生の正統な後継者は（男女共学の四大ではなく）短大の私たちの方なのに」と憤慨しきりの様子に先輩方の強い気概を感じつつ圧倒された。

b. Bさんにとって青短とは生涯続く友人関係の基礎を築いた場所であった。短大に馴染んでもいない入学したての頃の研修旅行と卒業旅行とがあって出会った友人たちとは卒業後64年たった今でも強く結ばれており、みんな明るく元気な人々である。

c. Cさんにとって青短とはまず加藤楸邨との出会いの場である。青山で学んだことは「頼まれれば必ず助けるべし」という指針であった。そのため常に人から頼られる人生であったが、「根拠のない楽道家」（国文学科会委員、会長時代のCさんの人物評であるとのこと）でいられた。それは青短で加藤先生が初めての俳句を褒めてくれ、人間として先生と同等の人間と認められたという深い自己肯定の経験が根底にあるからであろうか。また、その後も同じ「芸」をする者同士として語り掛けてくれ、「能天気でもよし」と存在のすべてを肯定されたことが一生の宝となった。1992年の加藤楸邨記念館オープン時には記念に「虚空の雪」を披露できたことが良い思い出であると述懐している。

2010～11年には、校友会中央支部に日本の伝統芸能を発信する「緑伝会」を立ち上げる。これは校友を動員して芝居を実際に観に国立劇場に連れてゆくのが主な活動の組織で、伝統芸能に縁がある生徒・学生が多い青学に相応しい活動である。その他「歌舞伎体操」を考案し、YouTubeで発信するなど、高齢者の健康維持、気分転換に資する活動を行ってきた。

また特筆すべきはコロナ禍のさなかにあった2020年に、東京オリンピック開催にちなんで「輪五の舞」を創作、日舞・中国舞踊・スペイン舞踊・韓国舞踊・現代舞踊を融合させた創作舞踊活動団体 Peace by Dance を田中いづみ（モダンダンス）と共に創設したことだ〔2020年1月には練馬文化センターで発足公演、2023年1月にはシアターX（カイ）で「生命の樹」の公演を行った。また2023年11月には徳島で文化庁助成公演を行った〕。

d. Dさんにとって青短とは、自分の核になる部分を形作り、「きちんと自分の前を見ること」を学んだところである。

e. Eさんにとっての優先順位は1番目が病児保育の「こぐま園」、2番目が青短の同窓会の仕事、という発言からも青短の占める高い位置がうかがえるだろう。どんなことであれ「出来ないことを出来るようにしたい」という強い思いがあるのは青短で学んで以来であるとのことで、これは児童教育科創設当時の教員の面目躍如である。さまざまな局面での困難にも関わらずEさんを支えてきたのは「子どもに少しでも良い環境を残してあげたい」という気持ちからだというのが、ここにも「子どもにこそ本物を」といった児童教育

科の教育指針が響いているように思う。また、長く保育に携わってきた中で、母親の性質が変わってきたように感じるとのこと。かつては子の不利益に対して母親はしっかり戦う存在だったが、今の母親は情報過多で不安な人が多く、精神的に脆くなっている、とのEさんの観察である。

f. Fさんにとっては、青短は多くの人生の友を得た「ふるさと」であると感じられている。青短に娘を行かせた家庭環境や要素に目を向けると、Fさんの母は世田谷区弦巻の実相院という曹洞宗の寺院の長女であり、自身は共立学園専修科（鳩山薫教授に師事）出身であった。当時は女中もいたが長女である母は手伝いを厳しく言いつけられ、手伝いを怠れば本を読んでも叱られたという。Fさんの父は文部省務めの経済博士で、5か国語を話すことの出来る優秀な人物であった。

## 8. まとめ

a. Aさんの増上寺の高僧でもある祖父の「心根があれば何の宗教でも」という言葉に象徴されるように、当時の都心には宗教を越えたコミュニティがあったことを証明する貴重なインタビューである。また裕福な地方出身者の華やかな服装を見て「花嫁学校と思われたくない」「一緒にされたくない」という誇り高さが感じられ、都心の高等部出身ならではの生き生きとした女学生の心意気がうかがえた。同時にインタビューを行ったFさんとも5歳の年齢の差にかかわらず尊敬と親しみを抱き合う関係が見え、当時の青短卒業生同士が、多様な背景にもかかわらず創設初期の熱意に満ちた女子高等教育をうけた者という共通項で結ばれたシスターフッドの貴重な場を形成してきたことが理解された。こうした方が華やかなお人柄と豊かな人間関係を惜しみなく青短の同窓活動に注いでくださり感謝するとともに、多くの卒業生から家族ぐるみでの愛情を注いでいただける青山学院という存在をこれからも、短大閉学如何に関わらず大事に伝えてゆく責任を痛感させられる。

b. Bさんは中等部から青山学院で過ごし、高等部とのつながりが強い。青山では「みんな同じような環境の人だったから人を疑うことがなかった」という言葉が、その若く人生経験が浅い時期ゆえの純粹さで印象的である。とはいえ、当時はまだ珍しかった育児とキャリアの両立のご苦労があったはずであるが、青山で培われた他者を信頼する性格や自分を頼む強い精神、神を信心する父の教えなどが見事に融合し、自分に正直になるためには苦境をも辞さない純粹な性格の基盤となったと思われる。クラスの多数派を占める地方出身者に対しても「地方の人＝お嬢様」といった比較的素朴で単純な印象を持ったにすぎず、在学中は旅行中をのぞけば積極的に交流することはなかった様子である。一方でコロナ禍まではクラス会が定期的開催され、クラス全体の繋がりは近年まで保たれていたことがわかり貴重な証言が得られた。

c. Cさんは教育や宗教に関して自由な考え方を持つ両親のもと、青学の中高等部時代から渋谷へ通い、短大での学びと四年制大学でのサークル活動と社交を謳歌し、卒業後は



当時珍しい高給の就職をする。多くの場合卒業後即結婚を求められる地方出身の卒業生とは異なる、典型的な東京の都市部出身者という印象を受ける。ただし、その後の人生においては、医者妻でも経済的に苦労があったなどのエピソードもありながら、その時々で周囲の人を無償で癒し助ける包容力が非常に印象的である。日舞の舞踊家というアーティストとして精進してゆく意志は主婦としての生活の空疎さに逆に支えられた、と気負わずさらりと語るあたりは、彼女の個人的資質も大きいと思われるが、短大以前に中等部で出会っていたキリスト教と、短大で確かな教養の基礎を築いた、という自己肯定感が大きな精神的支柱になっていることは明らかに思われた。

d. Dさんのような同窓会会長まで務めた短大愛の強い人物を生み出すにはどのような要素の出会いがあったのか、大変興味深いインタビューであった。Dさんの場合それは、比較的裕福で母親も婦長というケア仕事に従事し、結婚後も社会とつながる仕事に就くのがあたりまえ、と感じさせる家庭の雰囲気特徴的で、そこに青短の児童教育科第1期目の教員たちの熱意が強く働きかけた、幸せな巡りあわせによる教育の果実だと言ってよいのではないか。家庭を回すかたわら生協の立ち上げや、同窓会学科会の前身である童友会の設立と運営をこなすなど、大変な組織力と実行力を備えておられることがうかがえるが、その大変さを感じさせないのんびりとした温かい口ぶりに惹きつけられ、協調してくれる友人が多くいることをうかがわせた。

e. Eさんは、同日の午前にインタビューしたDさんのご友人ということで、午後に分けてお話を伺ったが、時折お互いに記憶を確かめ合う様子が微笑ましく、高等部以来の信頼関係の厚さを感じさせた。批判精神も旺盛な方で、幼児教育におけるキリスト教教育には反発したものの、児童教育学科の教員の熱意に応え、とくに掛井先生・瀬田先生の「子どもに本物を」という思想に大きく影響を受け、その精神的果実を見事に実らせた後半生である。Dさんの生協活動と同じく、病児保育も60～70年代当時には非常に新しい概念だったと思われ、この立ち上げ運動もまた驚くべき組織力と行動力が求められたはずで、この時期の児童教育科卒業生の社会貢献度の高さは特筆すべきものと思われる。

f. Fさんの人生は端的に言って、当時の青短の英文科卒業生のひとつの社会的イメージを見事に具現化したものに見える。東京オリンピックの年に花形の企業であった大手保険会社への就職、経済高度成長期ならではの華やかな勤め先での活躍、また結婚後も同窓会活動に積極的に関わりボランティア事業部委員長を務められるなど、まさにこうした先輩の存在こそが青短の社会的ステータスを高めたのみならず、女子大生の可能性、女子社員の実力の価値を社会に周知せしめたものであった。

## おわりに

これら6人の高等部出身短大卒業生への聞き取り調査を通じて痛感されたが、いまだ教育の価値よりも結婚の成否が重視された当時において女子でも高等教育を受けられたの



は、彼女らの両親の教育方針が大きいことは間違いない。戦後の第二の創成期にあった青短を支えた教育資本の重みについて、あらためて思いを巡らせる契機となる今回のインタビューであった。卒業生個々人の人生においても、青短での交友関係は一生続く精神的にも濃い交わりであったことが印象的である。



## 総論

### 第1期聞き取り調査(1952-1965年卒)を終えて

小林 瑞乃

7支部と高等部出身者について7人が分担執筆した「卒業生聞き取り調査のまとめ」を受けて、本稿ではその成果や指摘を踏まえつつ、全体を概観して見出し得た傾向や分析・考察した結果についてまとめる。1950年に開学した青山学院女子短期大学創成期の卒業生として、今回の聞き取り調査の全対象者を年代別に記したものが、下の一覧である。以下、出身高校と進路選択、学業、学内外の活動・経験、キリスト教主義教育と学寮の役割、卒業後の進路及び社会的活動・ボランティア・生涯学習と、5つに分けて論じていく。

#### <年代別聞き取り対象者数一覧>

卒業年	国文	英文	家政	児童教育	計(卒業年別)
1952(昭和27)	1		3		4
1953(昭和28)		3			3
1954(昭和29)					0
1955(昭和30)	1	1			2
1956(昭和31)		2	1		3
1957(昭和32)	1	1	2		4
1958(昭和33)	3	1	2		6
1959(昭和34)			2(1)		2(1)
1960(昭和35)		1	2		3
1961(昭和36)	4(1)	2	3		9(1)
1962(昭和37)		1	3		4
1963(昭和38)	2		2		4
1964(昭和39)	3(1)	3(1)	1	2(2)	9(4)
1965(昭和40)	1		3		4
計(学科別)	16(2)	15(1)	24(1)	2(2)	57(6):総計63

※ ( )内は高等部出身者数

#### 1. 出身高校と進路選択

ここでは、高等部出身者を除く今回の調査対象者の出身高校や進学状況、進路決定の要因などについて見ていきたい。

## 1.1 出身高校

まず出身校については、私立・公立を問わず概して地元の進学校が多く、例えば大平正芳元首相の出身校である香川県立観音寺第一高等学校はじめ鳥根県立松江高等学校など政財界人を多数輩出する名高い伝統校も確認できる。また高校内では、四大受験を目指す進学組に在籍しているケースが多かった。しかしそこでもほとんどが、男子は東大や一橋など東京の大学進学を目指し、女子は地元周辺の短大・四大への進学が多数を占めるといって、ジェンダー格差の強い進路環境に置かれていた。これが第一の特徴である。

当時は女子の高等教育進学率が低く、1960年の時点で大学(学部)への女子の進学率は2.5% (男子13.7%)、短期大学(本科)への女子の進学率は3.0%、1965年は女子の大学進学率 4.6% (男子20.7%)、短大への進学率 6.7%であった<sup>1</sup>。つまり社会全体でみれば高等教育への女子の進学自体が少数派であり、女子生徒の場合の進学先としては主に教員志望者が地元の大学(教育学部)を目指すことはあっても、地元を離れて東京・青短への進学を目指し入学した者は限られていたのである。例えば、青短受験者が2人だけだったこと(関西A)、東京行きは自分1人だけだった(九州D)などの証言が示すように、青短進学は特別な事例といえるのであった。

第二に、河見や輪島が論じているように、今回の聞き取り調査から1960年頃を区切りとして女子の進学と社会状況に変化が感じられることである。1961年には「女子学生亡国論」が世間を騒がせたように、女子の大学進学に増加傾向が見られた。四国の事例にみる中高一貫の進学校である土佐高等学校では東京の大学への進学は当然の前提であって、津田塾大学やお茶の水女子大学など四大への進学希望者が多かったという状況も生じていた。

しかし、進学におけるジェンダー格差は家庭内にもあって、兄弟姉妹がいる家庭では男子は東京の四大、女子は地元にとり傾向があり、兄弟と姉妹とでの優先順位や選択肢の限定が生じていた。それは地方に限ったことではなく、例えば関西Bの学んだ神奈川県立の有名女子高校では土佐高同様に津田塾やお茶大、慶応、早稲田といった難関校への合格者が多く、フェリス女学院に多数進学するような環境であったが、妹1人弟2人のいる長女であるために短大にするよう父親に言われて青短のみを受験したという。もちろん、男女や生まれ順など問題なく教育を受けさせたいと考えた両親の例もあるが、家庭の経済的事情なども背景に、長女であるがゆえに自身は短大に進学し妹は四大へというケースはよく見られ、男性優先、妹優先といった暗黙の了解を本人も当然のことと受け入れて進路選択に影響を与えていた。また、そうした社会通念が一般的な時代であったともいえるだろう。これが、第三の特徴である。

## 1.2 青短進学の原因

だが、青短への進路選択は、むしろ子女にとっての最良の教育環境であるとして積極的な理由から選ばれていたことも明らかとなった。その点について、以下で見ておきたい。

### (1) 父母の教育経験と教育観

今回の調査で全体として共通していたのは、青短進学を可能にした第一の要因に両親や祖父母の女子高等教育への考え方や父母自身の教育経験が大きく影響していたことである。特に祖父・父の持つ女子高等教育への理解や考え方が子女の将来の選択を左右する場合が多く見られた。

進学に反対する父親を母親が説得して入学が認められたというケースがある一方、父親の積極的な後押しとその影響についても多数確認できた。当時としては「進歩的な」「リベラリスト」の父の理解は大きかった。その象徴的なケースが四国Cであり、明治生まれの父は村で唯一早稲田大学を卒業した人物で、Cの姉が既に青短英文に進んだように子どもたちには一度東京の空気を吸ってこいという考えで東京進学の背中を押す理解者であった。今回の調査では父親の学歴について詳しく確認していないのだが、インタビューの内容からみると全体的に大学卒が多いと推測される<sup>2</sup>。

また、母親からの影響も極めて強かったことが様々な形で確認された。例えば四国Bの母は、学業優秀で薬学部への進学を望んでいたが姉妹への配慮から断念した経験を持つ。東京の大学進学に理解のあった東海Hの母は、弟たちは医学部や法学部に進学したのだが長女の自分は小学校卒であるという悲しみから男女平等の教育に強い思いがあり、父親もまた高等教育を受けていなかった。他方、東海Fは両親が東京出身で、母親は共立女子専門学校卒業生であった。また、四国Dの母(明治43年生まれ)は戦前に松山から実践女学校高等部専攻科に進み、そのまま母校高等部の教員となっている。祖父母の理解があって女性の進路が強く制限されていた時代に高等教育を受け、自らの人生を生き抜いてきた母の存在は大きかったという。このように親世代の教育経験の影響としては、高等教育を受けた自身の経験による理解とともに、進学を希望しても果たせなかった無念や男尊女卑の社会の辛さを知る母世代の苦勞・苦悩もまた、娘の高等教育を実現する強い後押しとなっていたのである。

### (2) 青山への高評価

次に顕著であったのは、両親や親戚、教師など周囲の人々の青山学院の女子教育に対する強い信頼や高評価が決め手となっていることである。その評価には、キリスト教という精神的支柱と女子教育を担ってきた歴史的成果という二つの要因が相まっているように思われる。

まず、青山=ミッションスクールであることへの評価についてである。例えば、東海Dの明治生まれの父親はミッション系の学校で教育を受けさせたいという考えであり、Dはミッション系中高一貫校の静岡英和から青短に進学した。また、仏教の家庭であってもキリスト教女子教育には肯定的である事例も見られた。さらに、青短以外は眼中になかった四国Iにとっては、祖母・母がクリスチャンであることの影響が強かった。また九州Eもクリスチャンホームで中高は福岡女学院であり、九州Iは叔母が同志社女子大卒の英語教



師でクリスチャンであった。このように家族や親族、知人、中高の出身校などによるキリスト教への繋がりや信頼も進学を後押しするものであった。その代表的な事例が北海道Eであり、女専を卒業した長姉、家政科1期生だった次姉、そしてEも迷いなく青短進学を選んだのであり、娘たちの進学先青山学院に対する父親の信頼も絶大であった。また後述のように教育寮の存在は、父母が進学を認める要件として非常に重要な意味を持っていたのである。

以上のように、キリスト教に基づく教育への信頼やその効果を期待する家庭の子女によって積極的に進学先として選ばれていた事例が明らかとなった。

第二に、女子教育の担い手としての青山学院の来歴とその成果に対する親・親戚・教師などからの高評価がある。例えば第1期卒業生である東海Aの場合は祖父が学問に熱心で、青山学院女子高等部に通っていた。Aの母親は青山学院入学の予定であったが父の転勤で鹿児島第一高女に入学せざるをえず、子どもは青山学院にとの強い希望を持っていた。東北Kの母は家庭科の教師で「青短の家政科は日本一だから」と言っていたという。東北Jの母は姪が青山の高等部で東京なら青山という考えから姉がまず青山へ進学し、女性も手に職や資格を持つべきという考えであった。東海Gは、父親が東京出身で学生時代に渋谷に下宿し「青山の学生の雰囲気」を見ていてのことだった。よく上京する父親が知人に青短を勧められた場合や、身近にいる教師が青山学院出身であったこと、恵泉女学園普通部や津田塾専門学校など名門女子高等教育機関を卒業した叔母たちから強く勧められたことなども要因となっていた。

こうした事例は枚挙にいとまなく、短大創設以前に既に全国的に確立していた青山学院の女子教育に対する高い評価を裏付けている。進学先としての青短は、少なくとも1950年代半ばには知名度が高く名門校と認識されており、共立・実践・昭和の各短大は「滑り止め」と考えられていて東京女子短大と青短が最有力の志望校としてランキングの上位にあったことなども示された。また実際に青短を不合格になったが四大に合格した状況も生じていた。

振り返ってみれば、戦後直後より、青山学院女子専門部は1946年4月「青山学院女子専門学校」と改称して教育を再開し、英語科も復活した。この年の入学志願者は高等女学部からの進学者を除いて、英語科319名（合格者22名、14.5倍）、国語科96名（同38名、2.5倍）、家政科411名（同52名、7.9倍）、家事専修科197名（同39名、5.1倍）に達した<sup>3</sup>。焦土の荒廃、建物焼失などものともせず、これだけの数に上ったのは、戦争によって教育機会を失っていた女子生徒たちがどれほど学問や知識獲得の機会に飢えていたか、女子高等教育をどれほど待ち望んでいたかの表れとみてよいだろう。戦後の再開直後から熱意ある女子に希望される進路先であり、入学後の学力水準も高く「意欲にあふれた生徒たちの成績は、当然のことながらすばらしかった」と記録されている<sup>4</sup>。明治・大正・昭和と続く青山学院の教育に対する高い評価が定着していたのだといえよう。

こうした状況のもと、姉など身近な存在が青短在学または卒業生である場合には本人が

青短を志望先として確定する強い要因となった。帰省の度に寮の話や寮友が遊びに来ていたことなど、実際に話を聞く機会も重要なきっかけとなった。こうした事例からは、高校生にとって目の前の青短生とその学生生活に心惹かれ自分も進学したいと思わせるだけの「魅力」があったことを示唆している。また家庭においては、姉が進学して楽しそうにする様子から教育的効果を目の当たりにして、その信頼はますます確固たるものとなり、姉妹全てが青短卒というだけでなく、嫁ぎ先にも影響を及ぼし義妹も青短に進学したり、親子二代青短卒といった事例なども生み出していくことになる。先輩の活躍も憧れとなっており、卒業生の増加とともに社会的な影響力を増していった可能性も高い。

表1にみるように当時の入学志願者の倍率は年によって多少変動するものの常に高く、1950年に447名だった入学志願者は1951年1,150名（定員の約3.8倍）、1952年1,807名（定員の約5.5倍）、約10年後の1963年には4,793名（定員の約10.7倍）であった。この時代の女子の高等教育機関への進学者が社会全体としてみればまだ少数派であったことを踏まえれば実に驚くべき数字である。さらに表3から明らかなように、入学者の割合は東京と関東で多数を占めており、各地域からそれぞれ入学した者は少数である。このように、地方出身者は激しい競争を勝ち抜いて入学を果たしたといえるのである。

以上を概括すると、地方出身の進学者の多くは地元に進学校に学び、各家庭の教育に関する価値意識は高く、概して経済的にも豊かな社会階層の上位に位置する家庭の子女として上京・進学が可能な条件にあった。さらに、自らの学力によって合格を勝ち取った優秀な学生たちであった。

### 1.3 学科の選択

学科に関しては親や教師の勧めの影響もあるが、概して本人の好きな科目や得意分野、学びたいことを踏まえて選択されている場合が多い。例えば、短大創設直後の入学者である東海Aは国文科に進んだが、青山学院女子高等部から進路選択する際に青山学院（四大）には希望する国文科がなかったため短大国文科を選択したのであった。また、自分の人生にとってよい影響を得られるだろうといった、教養主義的な観点からの理由も見られた。

英文科の場合には、これからは英語を学ぶべきという明確な目的意識やステューデントへの憧れなど時代状況を反映した選択なども見られた。また、青短英文を卒業して活躍する高校の先輩への憧れ、英語といえば青山、青山なら四大よりも短大のほうが人気が高いといった理由からの選択など、「英語の青山」のブランド力を示す事例なども確認できた。

家政科の場合には、将来結婚して家庭を持つことを前提に女子の進路が考えられていた当時の風潮にあって、青短の家政科なら進学・上京を認めるという親の強い意向にそって選択されたケースも散見された。その一方で、受験に数学があることや化学や物理への興味、理系が得意であるといった自分自身の判断や意志によって選んでいた事例も多数見られた。

児童教育科の場合は、新設の際の学科案内のパンフレットに見るように、科目の中には体育、音楽、図画工作などもあり、その名の通り幼児教育だけに特化せず広く学べるため

に様々な関心を持つ高校生たちの目に新鮮に映っていたようである。

さて、先述のようにミッションスクール青短の来歴とその成果に対する評価は高かったが、それは勉学にばかり励むよりもっと和らいだ感じでよいという、そうした意味で女子高等教育に相応しいとする感覚とも無関係ではなかった。この点に注目し、進路先としての青短に対する様々な語りから『女の子だったら青山』というジェンダー化されたイメージが普及していたとする後藤の指摘は重要である。青短には親や世間から「花嫁学校」といったイメージが持たれていたようであるが、実際は違っていた。そうした周囲のレッテルをよそに、短大内では学生の主体形成の基盤となるような高度で緊密な授業が展開されていたのである。

## 2. 学業

ここでは聞き取りで語られた授業のエピソードから学生たちがどれほど真摯に授業に向き合っていたかを確認するとともに、各学科の教育理念なども視野に入れてまとめていきたい。

国文科では、川瀬一馬、諸橋轍次、加藤楸邨という名だたる碩学によるハイレベルな授業に圧倒されながらも、必死で取り組む様子が伝わる数々のエピソードが挙げられている。輪島や菅野が論じているように、当時の学生にとっては興味深いものではあっても十分な理解には至らないこともあり、卒業後それなりの年月をかけて理解されていくこともあった。学生時代に受けた薫陶が卒業後の探求心となって現在まで学び続ける種となったといえるのである。

多くの卒業生が口にした「研究旅行」は、宮内庁から許可を得て一般には困難だった桂・修学院二離宮の拝観という貴重な体験などもできた川瀬らが引率する関西への研究旅行と、加藤が中心となって指導した「奥の細道研究旅行」とがあって<sup>5</sup>、どちらも学生らの記憶に強く残るものであった。

国文科の指導理念には、第一に国文学のみならず「日本文化・東洋文化について広く深い理解を得させること」とあり、そのために「すぐれた研究者を得ること」が急務だと馬越宮が尽力し、開学時までに川瀬や諸橋など「斯界の權威の招聘」を実現させていたのである。「学生は必ずしも学者になるとは限らないが、ほんものの学問とはどういうものかを理解させたい」というのが、「当時よく言われ、また耳にすることばであった」という<sup>6</sup>。

指導理念の第二としては「創作指導を重視して情操豊かな人間を育成すること」とあり、「俳句創作」や「短歌創作」、論理的表現力強化のための「作文」などが置かれ、「表現」の教育も重要視していた<sup>7</sup>。短歌や俳句を褒められたというエピソードの背景には、こうした理念があったといえるのである。1955年度からは「国文特別演習並論文」によって卒業論文作成が課されることとなり、短時間での指導で困難を伴いながらも十分に指導して障害を乗り越えてきたという。こうした理念のもとに展開された授業から学生たちはよく

学び、「ほんものの学問」をそれぞれの人生に応用・発展させていくのである。

英文科の卒業生からは使用した具体的なテキスト名を挙げて語る内容からも当時の授業に対する熱心な取り組みの様子をはじめ、せっかく青山に来たのだからと豊田実院長のシェークスピアの授業を聴講したり、授業のため英字新聞を購入して勉強していたり、短大ESSの活動、外国人教師との交流など、各人各様に英語三昧であったことがよく伝わってきた。

英文科の場合は、通常大学の4年間で行われる英語の教育内容を2年間で効果的に教えるため自主学習が可能なものは省くなどカリキュラムが工夫され、「作文会話などの力の基礎」にある読書力をつけることに「最重点」が置かれた。英語講読はじめ英作文、外国人教師によるオーラル・イングリッシュ、英語音声学など、また自国の言語の文化理解のために国文講読を必修とした<sup>8</sup>。「このころ学生は粒揃いでよく勉強したので」授業の効果もあがり、「就職試験を受けに行くと」青短生は「ほかの四年制大学と学力において少しも遜色がない」と会社の人事担当者に評されていたという<sup>9</sup>。多くの卒業生が、ここで体得した英語力を土台として現在に至るまで継続的に学び続けているのである。

家政科の場合は、大西セチのダイナミックな調理実習などが強く記憶され、テキストとして使われた大西の『欧風料理の基礎』は結婚後も役立ったこと、教える立場に立った卒業生が家庭科の授業でも用いて好評だったというエピソードもあった。また、栄養学を専門とする島崎通夫は、冷凍食品が登場する以前に食品冷凍化の研究をしていたことなどからも、学生が最先端の知見に触れていたことがわかる。また、授業での悔しい思いが卒業後の学び直しのきっかけとなり地元で学んだ伊東式立体裁断が予想外の人生展開につながったケース、授業で褒められた図面をもとに自宅の設計を行ったことなど、短大での学びがその後の人生に及ぼす影響の強さを知ることができた。

家政科では1956年度から「家政特別研究」が実施され、教員1人が十数名を指導して研究プランや文献調査、「実験実習、成果の検討と発表」など「自主的な勉学に取り組む」ため「勉学意欲に応じてある程度専門的知識の体得も可能」であった<sup>10</sup>。実験の多い家政科では教員と学生の接点が多く、それが特徴でもあって、きめ細かな指導がなされていたという。家政科のカリキュラムは世間の思うような良妻賢母教育ではなかった。ここでの学びから生涯の友と出会い、大西や野村万千代など指導教員と卒業後も長く続く関係となったこと、他大学の食物科に編入学して学びを深めたケースもあった。

児童教育科では、「幼児の成長を見守り、子どものためのよりよき文化的、社会的環境をつくり出すことのできる基礎的な力の育成と、人間的成長の土台を養うことを重視する方針」が採られ、教育課程の特質としては「学問芸術の基礎を養うことに重点を置く工夫」や「自由な意見の発表、相互の批判検討などの態度や技術の基本を培うことが意図された」。また「幼児教育特別研究」では「各自が一つの課題を選び、グループによって一年間の課題研究」を行い、「問題意識の熟成と研究方法の探求」に比重が置かれた<sup>11</sup>。その理念について、すぐに役立つ教育ではなく「幼児の時から本物を学ばせる、教えることが



大切」と伝え、学生たちもそれを受け止めていた。幼稚園教諭資格の取得は可能であるがそれに留まらない幅の広いカリキュラム展開で、高橋好子、掛井五郎、林三平、瀬田貞二など個性的な教員による授業が記憶されている。児童教育科第1期生の高等部Dが童友会を設立・運営したり、北海道Hが東京での長年の勤務を終えて郷里で「児童文学を学ぶ会」を立ち上げるなど、ここにも年月をかけて結実する学びの形を見ることができる。

どの学科にも共通して言えるのは、「一流のもの」「本物」との出会いを通して深い人間形成がなされるようにという願いがあることである。こうした根本的精神によってそれぞれの教育理念とカリキュラム展開が企図されて、学生が主体的能動的に学ぶことが要求されていたのである。

卒業生の記憶には、学問の深遠さに触れた感激が深く刻まれている。何かを知ることの喜び、精一杯取り組むことで感じた充実感、成長するためにより深く学びたいという欲求など、自分自身の人間形成の土壌となったという実感がある。このような日々の努力が基点となって、生涯にわたって学んでいく基本姿勢が身についていった。高度な内容の意味が後々になって氷解した時の喜びもまた格別で、さらなる学びへと誘うものとなっていた。

### 3. 学内外の活動・経験

この時代は土曜日まで授業があり寮生活の門限などもあるなかで、短大・四大の部活や同好会など様々な活動に取り組んでいた。その旺盛な活動に垣間見えるのは、自分の意思だけで選択できる自由の謳歌と解放感である。例えば、馬術部では早朝練習があり、厳しい寮生活でよく活動ができたものと驚かされるが、祖母に「女の子はこうあるべき」と言われて育ってきたため、馬術部入部はいわばジェンダー規範に対する「爆発」だったのでとは考えているというエピソードなどが印象的である。部活の合宿だけでなく、友人との旅行など共に過ごす時間を思い切り楽しんで互いの絆を深めた記憶も多い。

その他、美術館や博物館、演奏会、映画、演劇、歌舞伎や文楽、歌声喫茶、神保町書店街、六大学野球観戦などそれぞれの興味に応じた楽しみや、学生企画のダンスパーティなどといった当時の流行、「デパートハイキング」など地方出身者らしい行動も見られた。アルバイトは寮の門限もあってそれほど多くはないが体験談はある。語られた思い出には、思う存分満喫した青春時代の輝きがある。

著名な外国オーケストラや音楽家のコンサートがあると知ると出かけたり、東京でしか味わえないものに積極的に触れようとする姿勢は顕著である。価値観が同じような友人と気持ちよく付き合える環境の中で、勉強はもちろんだが観たいものを一緒に見たり旅行に行ったりと、仕送りを遣り繰りしたということだが、今東京でできることをみておこう、やりたいことをしようという好奇心やエネルギーに溢れている。

東京での生活が2年間と限定されていた地方出身者にとっては一つでも多くの社会的文化的体験をしておきたいとの思いが強く、自分の成長のために必要だと認識されていたこ



との現われのように思われる。

#### 4. キリスト教主義教育と学寮の役割

先述のように両親が青短を子女の進学先として決定する重要な要因として学寮があることは極めて重要であった。日本で初となる新幹線（東京－新大阪間の東海道新幹線）が開通したのは1964年10月であり、現在とは異なって東京に出るまでには多大な時間と費用を要した。それだけに、東京での子女を支える生活基盤として寮の存在は親を安心させたはずである。

開校時に掲げられた学則第53条では寄宿寮は「人格完成教育のために重要な役割」を果たしキリスト教主義の環境の中で「心身の修養と団体生活の訓練を受けることができる」とされた。しかし、戦時下の空襲で校内にあった寮が焼失したため、戦後は様々な個所に20～30数名が分宿していたという<sup>12</sup>。

その主な学寮は、以前からの「菊名寮」から移り寮監川尻知恵と20数名の寮生が間借りした東洋英和女学院の「青楓寮」、民家を借り入れた「青山寮」（杉並区天沼：寮監白石ふさ、寮生30名）や「中根寮」（目黒区中根町）、「救世軍青年女子寮」（渋谷区神宮通：寮監秋元春馨）などである。この他、川崎市にある二子玉川寮や短大の推薦で桜新町の元軍人宅（通称「コッペ寮」）に青短生5人で寄宿したという事例などは『青山学院女子短期大学の歩み』など短大史の資料にもほとんど記載がなく、当時の寮生活に関する貴重な証言である。また、学寮以外では、賄い付きの下宿や兄弟姉妹、親戚との同居等の事例が見られた。

住宅難の時代とはいえ学寮の人気が高かったのは、このような目的で短大が管轄する教育寮であったからだろう。寮生は比較的裕福な家庭の子女が多く、経済的理由以上に生活環境による教育的効果が期待され、消灯時間や門限その他の厳格な規律ある環境のもとで学生同士が集団生活を送ることで子女の成長が期待されていたのだろう。

1951年5月、ようやく「金王寮」（1952年「シオン寮」と改称、定員69名、寮監川尻知恵）が完成した。しかし、地方出身者の入寮希望者増加に対処できず、「入寮できないために入学を断念する者さえあらわれる状況」であったため、1954年「シオン第二寮」（定員115名）が開設された<sup>13</sup>。1957年制定のシオン寮の規則では「キリスト教の精神に基づいて共同生活を行い、人格の向上に努めること」が目的とされている<sup>14</sup>。

学寮と寮生活に関して第一に重要なことは、寮監たちの人間的魅力が極めて大きな影響を与えていたことである。シオン寮の第一寮寮監川尻知恵、第二寮寮監飯久保澄、救世軍の秋元春馨については、卒業以後の人生に至るまで影響を及ぼしている。

ここでは、特にその代表的な人物として川尻について少し触れておきたい。川尻は1900年牧師の父三谷雅之助、母小梅の長女として札幌に生まれ、1917年広島女学院高等女学部で学んだ後1919年同女学院師範科を卒業、さらに1920年同女学院研究科を卒業した後、神戸女学院でピアノを学んだ。1922年から1932年までランバス女学院（聖和短期大学：2024

年2月現在)で器楽の指導にあたり、1932年5月牧師であった川尻正脩(当時青山学院中学部長)と結婚し、同時に川尻の3人の子の母となった。1935年から青山学院女子神学部寮監、1943年4月より青山学院女子専門部寮監となり、以後1965年3月まで青短学寮の寮監を務めた<sup>15</sup>。こうした経歴からは、高等教育機関で学び続けた向学心の強さや、自身も指導の任に当たり、音楽の専門性にも優れていたことが分かる。このような人となりであるがゆえに、寮生を理解して才能を見出し伸ばしていくことが可能であったのだと思われる。

川尻ら寮監は一人一人の個性をしっかりと受け止めて、細やかな配慮や愛情を持って接する、厳しくも優しい在り方はまさしくキリスト教精神の体現者であり、他者への献身とは何たるかを身をもって示していた。慈愛に満ちた理想的人間像として、寮生らは深い敬意を持ってその姿を見つめていた。後年に至るまで続く、卒寮生の尊敬と感謝の念には実に深いものがある。感化力の強さは、スクリーンメーカーを想起させる。

第二に、自己形成のただ中の多感な時期に親元を離れ寮での集団生活を通じて自己変革がなされたこと、自分自身と向き合う内面的成長の場であったと自覚されていることである。

まず、集団生活を経験したことの重要性である。その寮生活は多くの場合が八畳1部屋に4人の共同生活で週末も行動を共にして、半年に1度部屋替えがあった。全国から集まった、風習や生活習慣などの異なる者同士が交流する中で、様々な違いを持つ寮生と仲良く暮らす方法、他者との共生感覚を身につけていった。教室では恥ずかしい思いをしても、ここでは各地の方言が飛び交っていて安心できる居場所であり、自分よりレベルが高いと感じる寮生にも接していた。虚無的な暗い性格だったが明るく変わったという自己変化や、価値観や生き方、物の見方を変える力があったともいう。

同じ年代の者同士丸ごと見せ合う日常の中で他者の素晴らしさに接し自身を省みる謙虚さや励みとなり、より成長したいと願う向上心を掻き立てて切磋琢磨する場ともなっていた。ここで得た友人が人生の宝、生涯の友となったケースが多い。他者と共に過ごす中で自己を省みてお互いの成長を支え合った仲間であればこそ、心からの深い信頼を寄せられたのである。

これまでほとんどしたことのない食事の手伝いや盛り付け、約100人分の皿洗い、掃除、洗濯、風呂沸かしの当番など生活全般を持ち回りで行うことで、何でも自分でする習慣がついていく。毎日の生活の中では楽しいことばかりでなく寂しさや悲しみ、苦しいことや思うようにならないこともあれば、自分の意見をはっきり言うことや何かの決断が必要なこともあっただろう。大勢の寮生を前にして食前の祈りや礼拝の司会、讃美歌や聖書の朗読、祈祷などを担当し、人前に入る経験を積むことで積極性や自立心を養っていき、自分では無自覚だった資質が開花していく契機にもなった。

またシオン寮では歌舞伎座鑑賞の機会が設けられていたが、銀座への行き帰りや歌舞伎の魅力などあらゆることが珍しく地方では得難い文化などにも触れて、東京ならではの楽しく貴重な体験として多くの記憶に深く残っていた。

シオン寮では「自立を学んだ」という証言が多いことも頷けるが、言うなれば、人の中

でよりよく生きるための基本姿勢を身につけていったのだといえるだろう。学生それぞれにとって、愛と奉仕の精神を学び実践する場として機能していたのである。

寮生活だけでなく、授業、宗教活動その他、青短はキリスト教に触れる機会が非常に多かった。そうした環境ゆえに、クリスチャンホームやキリスト教が身近であった者に限らず、全く縁のなかった学生たちにも影響を与えていた。寮の夕拝で教員から聞く講話やキリスト教学の時間などは、聞いていて面白かったと記憶に残っていたり、父母や姉妹、家族のために祈ること、聖書を読む習慣が身につけてその聖句が人生の支えになったというケースもある。礼拝そのものがカルチャーショックであったという場合もあるが、寮生たちはそれぞれ興味をもって短大の礼拝だけでなく週末には周辺の教会に通ったり、説教に感動したり、讃美歌を歌ったりオルガン演奏に魅力を感じたり、教会の聖歌隊に入っただけの活動などもある。特にオラトリオ・ソサエティ(KAY)の体験は強烈だったという。実家が仏教であっても教えの内容に普遍性を感じて抵抗なく受け止められていた。部活で多忙でも礼拝には出席し、「青山学院に来たからには」と卒業間際に宗教合宿に参加して、教員と人間としての生き方について語り合ったという思い出もある。

在学中にクリスチャンとなるきっかけとなったり、長い年月を経て受洗するケースのようにここで形成された精神的な基盤がのちに信仰や人生を支えることになった場合もある。クリスチャン同士の出会いは互いの信仰を高めることとなって生涯を通じる絆を結び、この親友の存在が支えとなって困難な事態を乗り越えてきたという事例も見られた。

学内には義務的な礼拝行事への反発もあったようだが、クリスチャンであるなしに関わらず、キリスト教の教えによって人と積極的に関わり人生を前向きに生きる力となったという声が多かった。当初は強制的なことは嫌で話も難解でよくわからなかったが、反発するよりもまずは理解しようとSCF(学生キリスト教友愛会)に通い、それまで知らなかった考え方や人物を知って視野が広がったという経験談もあった。

キリスト教に触れることは自分自身を見つめる機会となり、内面的な修養が精神的基盤を確かにしていく様子も見られた。地方出身者にとっての青短は寮生活と学内の授業や礼拝など宗教活動が好循環となって、人間を支える普遍的な精神性として自然な形で受け止められていたようである。

キリスト教の教えを一つの軸として、自分ならどうするのか、どう考えるのかといった自問自答の機会となり、その積み重ねからどんな場合にもどんな制約があろうともよりよい選択を自力で成して自己と人生を開拓する力となったのではなかろうか。それぞれの卒業後をみれば、それは明らかのように思われる。

## 5. 卒業後の進路及び社会活動・ボランティア・生涯学習

この世代は女子の高等教育進学自体が少数派であり、短大卒業後には地元に戻って結婚するのが当たり前の社会的通念で、それを前提として進学が許されていた。表4の「卒業

者の進路動向」にもそれが映し出されている。本人が望んでいたとしても就職活動は難しく、もし働けたとしても1～2年であった。このような事情から、その進路は、短大を卒業して20代前半で結婚、専業主婦になるといった単純なイメージで見られがちである。もちろん実際に主婦となった卒業生が多数であるが、しかしその内実は決して一括りにはできず、各々の人生の展開の豊かさには想像を超えるものがある。ここでは、卒業後半世紀以上が過ぎて明らかにされた、そうした人生展開の意味を考えていく。

第一に、結婚後の多様な就労形態が確認できたことである。例えば、企業・組織の管理職、また公務員や中学校教師などが代表的な事例で、英文科の卒業生は様々な形で英語教師をしているが、他学科の場合にも様々な契機で教師の経験をしているケースが見られた。中途採用で働き始めた事例もある。

第二に、夫との協働という形での社会貢献についてである。卒業生には地方の名士の妻となったものが多く、例えば政治家として国政に従事した人物や地方の銀行を立ち上げた人物など政財界で活躍する夫を支えたケースがある。また、今回の聞き取り調査では医師の妻が多く（自ら准看護師の資格を取得したケースもある）、父・兄弟・子など家族が医師である場合も散見された。開業医の夫とともに地域医療に貢献し、夫が特別養護老人ホームなど社会福祉法人・医療法人を設立するとその組織的發展や事業運営の推進力となって尽力している事例もある。

第三に、趣味やボランティア活動などに継続して参加しているケースが極めて多いことである。女性は結婚、出産・育児、介護などに追われて自由な時間を持ってないことが多いのだが、短大時代の多忙さに鍛えられたのだろうか、その活動は実に多様・多彩であり、それぞれのライフサイクルにあってできる形で続けられているところに特徴がある。

今その活動を大まかにまとめると、一つには趣味や技芸を通じて人生を楽しみ、自己研鑽を積んでいるケースである（茶道、謡曲、民謡、三味線、日本舞踊、伝統工芸、スポーツ、合唱・コーラス、絵画や音楽など）。

二つ目が、高齢者や障がい者、女性、子どものほか社会的マイノリティへの奉仕活動など社会福祉的なボランティアに従事しているケースである（病院や福祉施設での奉仕、病児保育施設の活動、いのちの電話の相談員、国際奉仕団体、ボランティア団体の活動、個人的な朗読ボランティア、教会の奉仕活動など）。

三つ目が、短大で学んだことを基礎に自身の強みを活かした社会・文化活動に尽力しているケースである（英語教室の講師、通訳ボランティア、国際交流、ホームステイの受け入れ、パソコン教室、日本語教師、書道教室など）。

四つ目に、PTAや婦人会会長、公民館活動、民生委員など地域で求められる重要な役割を担っているケースである。

当然のことながらこれらは厳密な区分ではなく複合的なものであって、また一人で多くを担っている場合も多い。自分の生きがいとしてだけでなく、他者に自分の専門的スキルを伝授するボランティアや職業などが生涯学習の活動手段になっているケースも見られた。



このような女性の多様な人生展開については、経済的自立やキャリアアップなどの指標ではとらえきれないためジェンダー研究などではあまり注目されてこなかったように思われるが、こうした多様な働き方、社会貢献・社会活動は人と人との関わりを深めて互いに成長する機会であり、地域を支援し活性化させる意味でも重要なものであり、決して軽視すべきではないだろう。

河見が指摘するように、「そもそも同窓会活動自体がボランティア活動の典型」であった。単なる親睦活動ではなく奉仕活動と学習の場として、様々な勉強会を通して知識を得て教養を深める機会を提供している<sup>16</sup>。調査対象者には初代会長や役員も多く、同窓会の各支部の発展を推進してきたのである。

同窓会による被災者支援が再会のきっかけとなったり、転勤族の妻にとっては精神的な支えともなり、悩みを分かちあったり、恥じることも遠慮もなく相談をして先輩の実体験からライフコースの意味を学ぶ場ともなっている。

卒業後のあらゆる活動には、どんな環境にあっても自分を活かして主体的に人生を展開する力、奉仕の精神が息づいている。青山学院女子教育の目指す人間力がその生き方に結実しているのを見る思いがする。

## おわりに

最後に、本調査から見出し得た青山学院の女子教育の意義についてまとめていく。

戦後の教育改革によって女子の高等教育が可能となり、青山学院では大学化の具体的なプランが検討された。青山学院女子専門学校においても共学大学化や女子大学化が構想されていたが、学院の財政的な理由によって大学化を断念せざるをえない結果となった<sup>17</sup>。その後も度々四年制大学化は議論されていたが、実現には至らなかった。青短はその前史を含め、二度の苦難に見舞われた。一つは、東京女子大学を新設するためキリスト教主義学校が組織的に統合されることになり、1920年、開学以来日本の女子教育を推進してきた英文専門科廃止を余儀なくされたこと<sup>18</sup>、二つ目がこの四年制大学実現断念である。

しかし、四大化の模索は、教育方針や理念にも無関係ではなかった。四年制大学に並ぶ教育内容とともに、それを2年間で凝縮して教授するための創意工夫がなされていたのは既に見た通りである。当時の学生たちは皆優秀でよく学び、教師の指導からできる限りの知識教養を得たいと必死に努力を積み重ねた。2年間の学生生活で培った学問に向き合う基本姿勢は卒業後も長く続き、広く職業や社会奉仕活動に活かされていた。学問の深遠な世界に触れたことは、卒業後も「もっと学びたい」といった欲求を深めることとなった。卒業生が主体的に開設した同窓会はその受け皿となり、日々成長を目指す向上心が日常における生涯学習の起動力となった。

他方、学内の教育的な創意工夫と優秀な卒業生の実績は、「女子は短大で十分」といった世評を強めることにもなったといえるのだが、より大きなスパンで見れば、女子高等教



育が当然のこととなりさらに男女差のない進学状況への針路を開いていくことになる。

多くの卒業生の心の底には、青短進学が許されたことに感謝しつつも、「できればもっと学びたかった」「本当は四大に進学したかった」という正直な思いがあった。進路・職業選択が制限されていた時代にあつて、それぞれの内面には断念した経験の痛みを抱えていて、自身の子女には四大進学を勧めたというケースもある。このように自らの教育経験や教育観が次の世代の教育環境をよりよいものにしたいという願いや自由な将来への道を開くための一つの力となつて、ジェンダー化された教育観は少しずつ影響力を失っていくことになつたのだと思われる。

それにしても、短大で培つた人間としての基本姿勢とその後の人生展開から学ぶことは何と多いことであろうか。

本調査のQ6の設問は、今振り返つて各々の人生にとって「青短」のもつ意味を考察するためのものであつた。これに対する回答からは等身大の学生生活の記憶を見た。概括すると、大都会東京で、地元にはいたままでは得られなかつた「新しい世界」を知り、「一流のもの」に触れ、たった2年とは思えないほど密度の濃い学生生活から自由な精神や自立を学び、自信もついて積極的になり、前に踏み出す勇気を得た。忙しかつたがテストや卒論など何でも楽しかつたというように、多くのことを学んでできるかぎりのことをやつたという充実感に満ちている。青山を卒業した「誇り」も、世間的な評価だけでなく自らの努力に裏打ちされてきたことであろう。

さらに、2年間で得た果実がどのようにその後の人生を励まし支えたのか知ることができる貴重な言葉の数々があつた。まず第一に、「自立」「自由」「解放感」といった言葉に象徴されるように、自己形成過程において青短の担つた重要な役割である。第二に、「心の友」「一生の友達」を得たところというように、豊かな人間関係形成の場であつたことである。第三に、「青短魂」の表現にも込められているように、諦めない心、何を言われても貫く精神、どんなことも乗り越えようとする姿勢など、「人間教育の場」として機能したことである。そして第四に、「心の拠り所」「原点」といった言葉に見るように、自分の在り方を肯定し、卒業後の人生を支えてきた精神的意義である。

一見すると置かれた環境に流されるか見えながら、それぞれが自身の内面に自分であるための固有の価値基軸を打ち立ててきたのである。

本聞き取り調査による対象者のライフヒストリーから明らかとなつたのは、第一に女性の生き方の多様性とその豊かさであつた。多くの女性にとって就職とその継続が難しかつた時代状況においても働き続けた卒業生らの奮闘努力は、次の世代の働きやすい環境を作ることに大きく寄与したはずである。

第二に、女性のライフサイクルにおいて社会奉仕の諸活動が幅広く実践されてきたことである。それは「専業主婦」という言葉から想像される単純なイメージには収まらない多様なものであり、各支部の同窓会があることで、家庭内では家事育児に追われる時期があつてもいつでも主体的に学び社会的活動に参加できる環境が整えられていたのである。

これらは、今後の大学教育のあり方にも示唆を与えているように思われる。

教養教育を特徴とする本短大に学んだ卒業生は、どんな立場であっても自己を生き、自分の人生を開拓し、強い絆で結ばれている。それぞれが可能な形で「愛と奉仕」に生き「覚醒した」人間として生きてきたことは一人一人の語りの中に実証されている。ここに集積できた大切な記録は、私たちの貴重な共有財産である。

【注】

- 1 「学校基本調査」(文部科学省)年次統計「進学率(1948年～)」参照。この数値は過年度高卒者等を含むものである。<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040> (2024年1月7日確認)
- 2 青短初となる卒業生調査報告書(1965年刊行)によれば、父親の学歴は旧制専門学校・新制大学以上の高等教育卒業者が53%、中等学校卒業生27%と合わせて80%、母親は旧女専など高等教育卒業生11%、高等女学校等の中等学校卒業生72%と合わせて83%であり、当時の社会状況からみると両親は「きわめて高学歴な階層で占められている」と論じられている(青山学院女子短期大学六十五年史編纂委員会編『青山学院女子短期大学 六十五年史-通史編』青山学院女子短期大学、2016年、110~112頁)
- 3 青山学院女子短期大学編集・発行『青山学院女子短期大学の歩み』1975年、24頁。
- 4 同上25頁。
- 5 同上109頁。
- 6 同上106頁。
- 7 同上107~109頁。
- 8 同上110~112頁。
- 9 同上114頁。
- 10 同上117~118頁。
- 11 同上126頁。
- 12 同上53~54頁。
- 13 同上54~57頁。
- 14 青山学院女子短期大学総合文化研究所編集・発行『シオン寮半世紀の歩み』2004年、173頁。シオン寮については加納孝代「思い出の中のシオン寮-女子大学の教育寮での二年間-」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第10巻、2002年12月、125~138頁)などの成果がある。
- 15 『川尻知恵先生追悼文集』(青山学院女子短期大学シオン第1寮同窓会、1979年)掲載「故人略歴」参照。
- 16 同窓会に関する研究には河見誠「大学の教育目的につながる生涯教育のあり方-青山学院女子短期大学同窓会の取組-」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第29号、2021年、227~247頁)がある。
- 17 前掲『青山学院女子短期大学の歩み』37~40頁。
- 18 同上15~16頁。

表1 入学定員・志願者・合格者一覧

年度	国文科			英文科			家政科			児童教育科			計			
	定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者	定員	志願者	合格者	
25	1950	50	59	53	100	220	130	100	168	94				250	447	277
26	1951	50	138	76	150	545	172	100	467	115				300	1,150	363
27	1952	80	375	91	150	756	158	100	676	92				330	1,807	341
28	1953	80	376	106	150	660	160	100	433	120				330	1,469	386
29	1954	100	557	117	150	897	168	100	547	115				350	2,001	400
30	1955	100	312	127	150	457	178	100	407	112				350	1,176	417
31	1956	100	457	126	200	755	227	100	345	111				400	1,557	464
32	1957	100	535	126	200	1,019	243	100	456	110				400	2,010	479
33	1958	100	566	113	200	1,083	230	100	408	115				400	2,057	458
34	1959	100	757	122	200	1,450	220	100	558	115				400	2,765	457
35	1960	100	768	178	200	1,329	316	100	570	142				400	2,667	636
36	1961	100	639	171	200	1,575	285	100	479	142				400	2,693	598
37	1962	100	934	191	200	1,737	284	100	566	146	50	593	65	450	3,834	686
38	1963	100	1,257	185	200	1,979	289	100	904	142	50	653	62	450	4,793	678
39	1964	100	948	183	200	1,467	292	100	381	146	50	525	63	450	3,321	690
40	1965	100	1,426	192	200	2,265	309	100	678	156	50	736	64	450	5,105	721

注：志願者・合格者には推薦入学者は含まない。  
 (『青山学院女子短期大学の歩み』1975年 320～321頁より作成)

表2 内部進学者一覧

年度	国文科	英文科	家政科	児童教育科	計	
25	1950	19	47	34		100
26	1951	7	13	20		40
27	1952	12	30	29		71
28	1953	8	36	16		60
29	1954	11	30	16		57
30	1955	6	17	17		40
31	1956	5	35	11		51
32	1957	2	17	18		37
33	1958	16	31	27		74
34	1959	7	33	12		52
35	1960	8	20	11		39
36	1961	5	28	4		37
37	1962	2	29	12	5	48
38	1963	6	15	6	4	31
39	1964	5	22	2	4	33
40	1965	5	29	3	3	40

注：1950（昭和25）年度は別科からの入学者を含む。  
 (『青山学院女子短期大学の歩み』325頁より作成)

表3 出身地域別入学者数

年度	学科 地域	国文科										英文科											
		東京	関東	北海道	東北	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	計	東京	関東	北海道	東北	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	計
25	1950	40	16	0	5	4	2	1	0	0	0	68	106	33	5	7	9	2	2	0	4	0	168
26	1951	37	23	1	7	7	1	0	2	3	0	81	94	56	3	8	11	1	3	3	5	0	184
27	1952	46	20	1	6	20	2	5	1	1	0	102	87	49	2	4	17	4	6	3	6	1	179
28	1953	51	30	1	7	14	3	3	1	5	0	115	106	38	1	6	27	4	4	3	8	1	198
29	1954	55	24	4	11	21	3	1	4	3	0	126	87	50	2	7	18	4	7	8	13	0	196
30	1955	48	21	7	8	23	5	4	2	13	0	131	71	52	3	9	31	2	10	1	14	0	193
31	1956	42	30	6	7	23	6	4	2	10	0	130	120	51	3	14	33	5	12	5	18	0	261
32	1957	43	22	3	17	8	3	8	1	17	0	122	112	56	3	22	34	7	9	4	13	0	260
33	1958	47	22	2	5	21	3	8	6	9	0	123	107	64	2	15	32	3	25	7	7	0	262
34	1959	36	23	4	4	30	0	10	8	10	0	125	106	59	7	16	27	6	12	8	15	0	256
35	1960	51	49	4	12	29	6	10	2	22	0	185	134	68	7	12	46	4	18	17	23	0	329
36	1961	56	40	6	7	32	6	6	5	16	0	174	128	66	9	14	43	6	20	14	21	0	321
37	1962	48	43	8	9	36	6	13	3	19	0	185	118	70	6	9	57	3	14	20	19	0	316
38	1963	55	44	4	8	36	5	6	3	19	0	180	108	68	7	11	41	5	19	7	27	0	293
39	1964	69	46	4	7	29	1	6	7	18	0	187	125	91	5	15	44	8	16	9	19	0	332
40	1965	54	66	2	12	32	2	5	8	15	0	196	119	101	4	19	46	7	5	5	17	1	324

(『青山学院女子短期大学の歩み』334～335頁より作成)

家政科											児童教育科											合計	
東京	関東	北海道	東北	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	計	東京	関東	北海道	東北	中部	近畿	中国	四国	九州	その他	計		
66	25	5	8	10	0	1	0	5	1	121													357
60	35	0	8	21	2	4	1	5	0	136													401
59	29	2	5	12	0	5	1	6	0	119													400
59	29	0	5	20	2	3	4	15	0	137													450
49	25	3	5	23	4	9	3	10	0	131													453
49	22	2	4	24	3	5	8	12	0	129													453
36	32	1	7	22	3	8	5	7	0	121													512
48	22	2	7	10	5	10	4	17	0	125													507
50	27	6	4	14	6	10	7	16	0	140													525
45	18	3	9	21	3	9	7	12	0	127													508
45	29	5	10	28	2	15	5	13	0	152													666
43	36	2	14	22	2	9	4	15	0	147													642
44	28	3	8	34	3	9	5	23	0	156	39	9	2	1	10	3	1	1	4	0	70	727	
37	35	0	3	34	3	8	7	13	0	140	34	12	1	4	10	0	2	0	4	0	67	680	
37	34	2	7	35	4	6	7	13	0	145	44	16	0	3	4	0	2	0	2	1	72	736	
43	38	0	10	28	1	9	6	15	0	150	28	15	0	0	13	2	3	3	5	1	70	740	



表4 卒業者の進路動向

卒業年	国文科				英文科				家政科				児童教育科				専攻科				全学								
	卒業者数	就職決定者数	進学者数	家事その他	卒業者数	就職決定者数	進学者数	家事その他	卒業者数	就職決定者数	進学者数	家事その他	卒業者数	就職決定者数	進学者数	家事その他	卒業者数	就職決定者数	進学者数	家事その他	卒業者・修了者総数	就職者の比率	進学者の比率	家事その他の比率					
27	1952	62	17	22	23	137	48	27	62	107	15	11	81												306	26.1	19.6	54.3	
28	1953	70	23	8	39	165	71	33	61	130	24	12	94													365	32.3	14.5	53.2
29	1954	100	21	8	71	169	64	20	85	117	21	17	79													386	27.4	11.7	60.9
30	1955	105	29	15	61	184	65	37	82	133	21	29	83													422	27.3	19.2	53.5
31	1956	118	36	10	72	190	98	16	76	124	20	17	87													432	35.6	10.0	54.4
32	1957	124	32	10	82	183	81	15	87	128	31	15	82													435	33.1	9.2	57.7
33	1958	127	23	-	-	247	105	-	-	119	25	-	-													493	31.0	-	-
34	1959	117	35	13	69	248	129	22	97	121	27	10	84													486	39.3	9.3	51.4
35	1960	122	52	18	52	253	150	24	79	136	41	21	74													511	47.6	12.3	40.1
36	1961	123	52	14	57	246	149	31	66	125	45	35	45													494	49.8	16.2	34.0
37	1962	182	80	22	80	320	188	37	95	148	62	21	65													650	50.8	12.3	36.9
38	1963	171	81	23	67	315	211	48	56	147	63	28	56													633	56.1	15.6	28.3
39	1964	184	104	29	51	311	219	36	56	155	66	28	61	69	45	7	17	52	15	0	37	771	58.2	13.0	28.8				
40	1965	179	95	23	61	290	193	32	65	137	81	15	41	64	47	7	10	46	16	0	30	716	60.3	10.8	28.9				

注：卒業者数は3月卒業者。就職決定者は卒業年の4月現在の状況を示す。家事その他には就職未決定者で待機中の者を含む。(『青山学院女子短期大学の歩み』328～329頁より作成)

本研究プロジェクト調査一覧

支部	卒業年	学科	調査日		場所	聞き手
北海道	1952 (S27)	家政	2021年	10月31日	北海道札幌市	菅野幸恵・輪島達郎
	1959 (S34)	家政	〃	〃	〃	〃
	1955 (S30)	国文	〃	11月1日	〃	〃
	1964 (S39)	児童教育	〃	〃	〃	〃
	1952 (S27)	家政	2022年	7月2日	北海道旭川市	河見誠・菅野幸恵
1953 (S28)	英文	〃	〃	〃	〃	
東北	1956 (S31)	英文	2021年	11月28日	福島県郡山市	河見誠・趙慶姫・西山利佳
	1958 (S33)	家政	〃	〃	〃	〃
	1958 (S33)	国文	〃	〃	〃	〃
	1963 (S38)	家政	〃	〃	〃	〃
	1958 (S33)	国文	2022年	3月12日	秋田県秋田市	河見誠・吉岡康子
	1962 (S37)	家政	〃	3月13日	青森県青森市	〃
	1961 (S36)	家政	〃	3月14日	宮城県仙台市	〃
	1961 (S36)	国文	〃	〃	〃	〃
	1961 (S36)	英文	〃	3月15日	山形県上市市	〃
	1963 (S38)	国文	〃	〃	〃	〃
	1952 (S27)	家政	〃	5月28日	秋田県秋田市	吉岡康子
	1960 (S35)	英文	〃	5月31日	青森県青森市	〃
	1961 (S36)	国文	〃	7月9日	宮城県仙台市	後藤千織・菅野幸恵
	1964 (S39)	国文	〃	7月10日	〃	〃
東海	1952 (S27)	国文	2021年	10月16日	静岡県静岡市	河見誠・趙慶姫・吉岡康子
	1957 (S32)	英文	〃	〃	〃	〃
	1964 (S39)	児童教育	〃	〃	〃	〃
	1953 (S28)	英文	〃	10月23日	愛知県名古屋市	〃
	1960 (S35)	家政	〃	〃	〃	〃
	1963 (S38)	国文	〃	〃	〃	〃
	1957 (S32)	家政	2022年	6月17日	愛知県名古屋市	河見誠・菅野幸恵
	1957 (S32)	国文	〃	〃	〃	〃
	1965 (S40)	家政	〃	〃	〃	〃
1964 (S39)	英文	〃	6月18日	静岡県静岡市	〃	
関西	1953 (S28)	英文	2022年	6月4日	大阪府大阪市	河見誠・小林瑞乃・西山利佳
	1965 (S40)	国文	〃	6月5日	兵庫県神戸市	小林瑞乃・西山利佳
	1965 (S40)	家政	〃	〃	〃	〃
中国	1961 (S36)	国文	2022年	6月11日	山口県山口市	後藤千織・輪島達郎
	1962 (S37)	家政	〃	〃	〃	〃
	1964 (S39)	国文	〃	〃	〃	〃
	1964 (S39)	英文	〃	6月12日	〃	〃
四国	1957 (S32)	家政	2022年	2月19日	愛媛県松山市	河見誠・小林瑞乃
	1961 (S36)	英文	〃	〃	〃	〃
	1961 (S36)	国文	〃	2月20日	高知県高知市	〃
	1962 (S37)	英文	〃	〃	〃	〃
	1958 (S33)	家政	〃	2月21日	香川県高松市	〃
	1956 (S31)	英文	〃	2月22日	徳島県徳島市	〃
	1961 (S36)	家政	〃	〃	〃	〃
	1961 (S36)	家政	〃	〃	〃	〃
	1962 (S37)	家政	〃	〃	〃	〃
1965 (S40)	家政	〃	6月12日	高知県高知市	趙慶姫・西山利佳	

九州	1956 (S31)	家政	2022年	2月15日	福岡県福岡市	河見誠・後藤千織・菅野幸恵
	1959 (S34)	家政	〃	〃	〃	〃
	1958 (S33)	国文	〃	5月30日	福岡県福岡市	小林瑞乃・趙慶姫
	1958 (S33)	英文	〃	〃	〃	〃
	1964 (S39)	英文	〃	10月28日	熊本県熊本市	〃
	1964 (S39)	家政	〃	〃	〃	〃
	1960 (S35)	家政	〃	10月29日	鹿児島県鹿児島市	〃
	1963 (S38)	家政	〃	〃	〃	〃
	1955 (S30)	英文	〃	10月30日	宮崎県宮崎市	〃
1964 (S39)	国文	2023年	5月28日	鹿児島県鹿児島市	河見誠・吉岡康子	
高等部	1961 (S36)	国文	2022年	10月20日	東京都杉並区	後藤千織・吉岡康子
	1964 (S39)	国文	〃	10月21日	東京都渋谷区	小林瑞乃・菅野幸恵・山田美穂子
	1964 (S39)	児童教育	〃	〃	〃	河見誠・菅野幸恵・山田美穂子
	1964 (S39)	児童教育	〃	〃	〃	〃
	1959 (S34)	家政	〃	10月24日	〃	河見誠・後藤千織・西山利佳・山田美穂子
	1964 (S39)	英文	〃	〃	〃	〃

執筆者（掲載順）

小林 瑞乃 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 准教授

輪島 達郎 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 准教授

菅野 幸恵 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授

趙 慶姫 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授

西山 利佳 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 准教授

河見 誠 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授

後藤 千織 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 准教授

山田 美穂子 青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授

---

青山学院大学  
ジェンダー研究センター年報 第3号

2024年3月15日 発行

編集発行：青山学院大学附置  
スクーンメーカー記念 ジェンダー研究センター  
センター長 申 恵丰  
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

印刷：株式会社双文社

---







Aoyama Gakuin University  
Schoonmaker Memorial Center for Gender Studies



地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院スクール・モットー